
コカミ

一次関数

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コカミ

【Nコード】

N6275D

【作者名】

一次関数

【あらすじ】

知らないおっさんに変な液でドロドロにされる夢を見た中学生、大平アツシ。彼は一体何者だったのか。その真実が冒頭でいきなり暴露される伏線なんてあったもんじゃないギャグコメディー。月一ペースで更新しています。

コカミ 序章（前書き）

セリフだらけのつたない文ですが、笑っていただければ幸いです。

コカミ 序章

「何これ？ 体、ドロドロして気持ち悪い……」

あなたは神や悪魔なんかを信じるか？

僕はそういうのをまったく信じない。そんなのを認めてしまったら、運命が存在するということを認めてしまうことになるからだ。全てが運命に動かされているのなら、僕らの努力は全て無駄になってしまう。

僕の名前は大平敦^{おおひらあつし}。某有名私立中学校に通っている。普通の授業を受け、母はいないがそれなりに普通の生活を送っている。ビジュアルもいたって普通である。

ウチの親父は神社の神主をしていて、僕の学費を払うために毎日臭い汗がでるほど頑張っている。メタボリック気味な体に、少し薄くなった頭。ただ声は高い。神様は信じないが、親父は嫌いじゃない。

今日は僕が中学生になってから1年。明日からは2年生になる。春休み最後の日。

その日は嫌な夢を見た。20代後半の知らないおっさんに変な液でドロドロにされる夢。

全身ドロドロになったところで目覚ましに救われた。8時、明日から学校もある。あまり遅くに起きるのもどうかと思う。開かない目を水で無理やりこじ開けた。目の前の鏡には、真っ直ぐに降りたしやれっ気のない髪形の僕が映っていた。髪の毛が真っ直ぐすぎるのが僕の悩みの一つだ。親父が朝食を作ってくれているようだ。所々

に煙草の焼け跡がある畳に腰をおろす。今日の朝食は納豆と味噌汁だ。

納豆をかき混ぜながらふと考えた。今日もいつもと同じ普通の日だ。親父と僕と20代後半の知らないおっさんと3人でちゃぶ台を囲む、いつもと同じ……。

「だ、誰だあんた！」

推定175センチの体、少し茶色がり、所々はねている黒髪。プーマのジャージを装着中。まさに謎のおっさんである。そのおっさんは納豆をかき混ぜながら答えた。

「え、何？ お父さんから聞いてないの？」

親父は男と目を合わせて軽くうなずくと話し始めた。

「すまんすまん。昨日のうちに話そうと思ってたんだけどな。この人は今日からうちに居候することになった神田林次郎丸さんだ」かんだはやしじろうまる

「なんでそんな大事なこと言わなかったんだよ！ それにあなたも居候する身でしょ！ なんで僕に挨拶もなしにナチュラルに納豆をかき混ぜてるんですか！」

神田林という人物はまだ納豆をかきませ続けている。

「次郎丸でいいよ。これから兄弟みたいなもんなんだから」

「こら、お前神田林さんに失礼だろ！！ 謝りなさい！」

「ちよ、どつちかって言ったら常識無いのそつちじゃん！　なんでこつちの方が悪者みたいになってんのさ」

次郎丸（と呼ぶことにしよう）は少し微笑んで言った。改めて見ると、そこまでおっさん、という感じではなかった。プーマのジャージがそう思わせたのだろうか。決して汚らしくない。特に美形というわけではないけれど、何だか芸能人のようなオーラを感じる。

「いいですよ、お父さん。こつという激しいツツコミは一家に一人必要ですって」

親父は息を切らしていた。気を落ち着けているようだ。

「いやあ、すいませんね、神田林さん。でもね、実は私も朝からこんなに激しいツツコミができる息子は自慢なんですよ」

まったく嬉しくないお世辞ありがとう。なんとなく自体は呑み込めてきたがどうしても一つふに落ちない点がある。

「親父、この人って一体誰なの？」

親父は2、3秒考え込んだ。

「大きく言えば……神？」

僕の生活から普通が消え去った瞬間だった。

「ちよ、親父何言ってるんだよ、神？」

親父は少し自慢げな顔をした。

「よし、簡単に説明するからよく聞け。お前はいつも神なんていないと言ってるだろ？ でもな、実際は結構アブノーマルに神って存在するんだよ。うちの神社は恵比寿様を祭ってるのは知っているな？」

一度『お父さんの仕事』という題で作文を書いたときに聞いた覚えがある。

「ああ、確かそうだったっけ」

「この人は、次に恵比寿様を襲名する候補の一人なんだ。神様の一つ下の位。小神こかみなんだ。聞いたこと無いだろうけどな」

僕は次郎丸を数秒間見つめた。親父、と呼びかけて続けた。

「洗脳されてない？」

「お前はお父さんが洗脳なんてされると思っているのか？ お父さんは意思強いぞ。心のガード堅いぞ」

次郎丸は納豆を一口食べると唇に糸が引いたままで話し始めた。

「神になるには人間界で生活をしなければならぬ。一人の人間と契約を交わして、そいつと24時間行動を共にしながらな。だから俺はついでにこの家に居候させてもらうことにした」

神の存在は信じたくないが、親父が嘘をついているとも思えない。本当にこいつは神・いや、小神なのであろうか。

「まだいまいち信じられないんだけど……。神なら何か人間にできないことをやってみてよ」

次郎丸はまかせろ、と言うと立ち上がった。

「お父さん、ちょっとこっち来てください」

親父は不思議そうな顔をして次郎丸に近寄った。

「いくぞ。今からお前の父親をロリコンにする」

「え？ おい、何いってんだアンタ!!」

次郎丸は僕が今まで聞いたことのない様な何かをしゃべりだした。

「おい、待て！ もし僕が知らないだけで元からロリコンだったらどうするんだ！ 証明にならないって！」

親父は今までに見たこともないような笑顔を見せた。

「安心しろ、私は母さん一筋だ」

「なんでそんなに余裕なんだよ！ 今からロリコンにされるんだぞ！ わかってんのか！」

親父の体がセロファンをかぶせた電球をつけたときのような淡い光を放った。

……親父はどうなったのであろうか？

「アッシ……」

親父は流れる小川のような声で言った。

「今度うちの巫女のバイトに小学生を集めようと思ってるんだが…」

「親父iiiiiiii!?!?!」

親父は確かにロリコンになってしまったようだ。僕は次郎丸に言った。

「わかった、信用する。親父を元にもどしてくれ」

「いや、小学生の巫女ってちょっと気になるからしばらくこのままにしないか?」

「いやあんたもロリコンかよ!」

次郎丸を説得すること20分。彼はようやく親父を元にもどした。

「ふう。父さんあやうく母さんを裏切るところだったよ」

母さんが死んでから3年。なおも彼女を愛し続ける父親というのは美しいものだ。

さて、次郎丸は本当に小神のようだがなぜうちに居候することにしたのだろうか?彼は契約した人間と24時間行動を共にしなければならぬようだ。

僕は次郎丸を見つめて言った。

「そういえば、一体誰と契約するんですか？」

「え？ もうしてるけど」

予想外の答えだ。もう契約を済ましているのなら、それはこの家の人間ということになる。

……妙な記憶が蘇る。

「次郎丸さん、契約ってどうやるんですか？」

「結構大変でな、神が自分の力で作り出したローションでその相手をドロドロにするんだ」

僕の今日見た夢は……。次郎丸は笑顔で言った。

「これからよろしくな、アツシ」

契約されていたのは僕だったのか！

「ちょ、なんてことしてるんですか！ 何であんたは初対面で話をしたこともない中学生をローションでドロドロにしてるんですか！」

次郎丸は大丈夫だと言った。

「24時間行動をともにするといってもお前も中学生だし色々とはら、あるだろ？ 寝るときは違う部屋で寝るからさ」

「違う！ そんな所を心配してるんじゃない！ 24時間行動を共にするってところです！ 明日から学校始まるんですよ！どうする

んですか！」

次郎丸はまた大丈夫だと言った。

「その辺はほら、俺小神だからなんとするって」

どこからそんな自信がわいてくるのかはわからないが親父をロリコンにした男だ。学校もあの謎の言語でどうにかするのかもしれない。とにかく今日一日をどうにかしよう。これからこの男と一緒に生活しなければいけないようだし。

次郎丸は朝食を食べ終わるとまっすぐトイレに向かった。

「親父、なんであの人は親父と契約しなかったんだ？」

「いや、何言ってるんだお前。お父さんが24時間も神田林さんと一緒にいてみる。お父さんは未亡人なわけだし、ついに男に手を出したと思われるじゃないか。だから断ったんだ」

なぜ親父には拒否権があつて僕にはないのかは謎だが、契約されてしまつてからウダウダ言つても仕方がない。僕は残った味噌汁を飲み干すと自分の部屋に向かった。

僕の部屋は2階にある。うちの階段はかなり急で今までに僕は3回落ちたことがある。今ではバルトーク、弦楽四重奏のテンポぐらいで上ることができる。(今日テレビでやっていたのをちょっと使つてみたかっただけだ)

僕は携帯を取り出し、電話帳から一人の男を素早く探しだした。瀬

田守は僕の一番の友達だ。

僕はメールが嫌いであつねに用は電話で済ませる。着信音が8回鳴つた。

「もしもし、アツシ？ 何だよ、こんな朝早くに」

彼は今まで寝ていたようだ。声がかすれている。

「マモル、今日遊ぼうって言ったのキャンセルさせてくれる？」

「どうしたんだよ、お前がドタキャンなんて珍しいな」

「ちょっと家に大事なお客さんが来てるんだ」

小神に契約させられて今後のことを考えたいからなんて口が裂けても言えない。

「まあいいけど。じゃあ今日はほかの子と遊ぶよ」

「ごめんな、マモル」

電源ボタンを押し、電話を切った。さて、これからどうしたらいいのか。とりあえずだらしな性格のままなので着替えることにした。パジャマ代わりにしているスウェットを脱ぎ、ジーパンにTシャツ、まだ肌寒いのでそこに白いパーカを重ねた。するとノックもなしにドアが開いた。

「アツシ、俺下着忘れたんだけど貸してくれない？」

「ちょっと、ノックぐらいして下さいよ」

次郎丸は首をかしげた。

「なんだよ、男同士なんだから見られて困ることもねえだろ。ていうか下着貸してくんない？」

「……いやです」

「なんだ、お前も大人ぶってる割にはまだまだ思春期真っ最中だな今日会ったばかりの男にそんなこと言われたくもない。」

「次郎丸さん、これからどうするんですか？」

「え？何が」

僕は手まねきのジエスチャイをして次郎丸を床に座らせた。

「明日の学校もそうだし、ウチで生活することもです」

次郎丸は首を縦に三回ふった。

「いやいや、それもそうなんだけど、パンツ貸してくんない？」

「あんた今パンツしか頭にないのか」

「いやいや大丈夫。昼飯のことも考えてる」

「何が大丈夫なんだよ！ ていうか今さっき朝食食べたばっかじゃん！ 気早いよ！」

まったくこの人は。今は何を言っても無駄なようだ。僕はダンスから少し大きめのパンツを取り出した。

「この前サイズ間違えて買ったやつありますから、それはいて下さい。もう話はいいです」

次郎丸はパンツを受け取ると、口元をわずかににゆるめた。

「おお、悪いな。まあ今日は心配するな。お前が外に出ない限りは俺は外に出ないし。」

なるほど、それなら安心だ。今日は親戚が来たとても思ってた気楽に過ごそう。本当に大変なのは明日の始業式からなのだから。

その日は天気用図記号ではと表わされるような快晴であった。今年度から新二年生になるわけだがどうも僕には先輩意識が持ちきれないらしい。普段学校に行くときよりも10分遅く起きた。すぐに学ランに着替え食パンを牛乳で流し込む。軽いカバンを持ち靴紐を結んだ。

「じゃあ昼には帰ってくるから」

親父は神社のはき掃除をしていた。

「忘れ物無いか？」

「大丈夫だよ」

僕はなぜかダークグレーの背広を着ている次郎丸と家を出る。56段ある石階段を降りながら僕と契約した小神は言った。

「まあ今日は学校初日なわけだし、キチンと正装しないとな」

確かにあまり汚い格好で校門を一緒にくぐってほしくない。

「でもホントに今日はどうするんですか？ 正装してくれるのはありがたいですけど」

「まあ楽しみにしとけ、驚かないように気をつけるよ」

何か驚くようなことをしようというのかこの男は。昨日から思っていたがこいつはまったく腹が読めない。今何を考えているのだろうか。

校門前には生徒たちがパラパラと集まり始めている。入学式は明日なのでいつもより生徒が少ない。

「じゃあ俺ちよつと別行動とるから」

「え？ 僕と24時間一緒にいるんじゃないんですか？」

「半径200メートル以内なら平気なんだよ。多分な」

「いやいや、憶測じゃないですか。それでなんかあったらどうするんですか」

次郎丸は僕の言葉を無視してどこかへ行ってしまった。一体何をしようというのだ。

次郎丸と別れるとマモルが僕の方へと走ってきた。

「おはよう、アツシ。さっきの人誰？」

「え？ いや、別になんでもないよ」

我知らずを通してしまった。勢いあまって彼が小神であると言ってしまうしうだったからだ。

「あゝそう？ならいいんだけど。ていうか今年も同じクラスなの知ってる？」

「何言ってるんだよ、この学校3年間クラス変わらないんだぞ？」

「え、マジで！ 全然知らなかったよ」

相変わらずの天然だ。この男が将来プロ野球選手になるとはこのときは思いもしなかった。それはもつと未来の話。

体育館には生徒が並んでいた。これから始業式だ。僕ら2年4組は右から4列目。

その列の後ろから数えて7番目に僕がいる。マイクテストが体育館中に響き渡る。

「あゝ、ただいまマイクテスト中。テスト中。お前ら、静かにしろ」

少し眠そうな先生の言葉。壇上にマイクを持った校長が上がった。誰も真剣に聞かないことは分かっているのに長く話す校長も大変だ。いや、真剣に聞いていないことすらわかっていないのか？どちらにせよ生徒たちは疲れる。

「えゝこれから、新任の先生の紹介をしたいと思います」

今年は5人の新教師がやってくるそうだ。となりの女子の会話から

抜粋。

「え、一人目は……」

その時体育館のスピーカから謎の音が響きだした。その謎の声に周りの生徒はもちろん先生たちも何が起きているのかわからないようだった。ただひとり僕を残して。

「これ…次郎丸の変な呪文……」

謎の言葉が聞こえなくなると、館内の空気に不思議な一体感が生まれた。奴は何をしたのだろう。

「え、一人目は、神田林次郎丸先生です」

な、何！？ 次郎丸だと！ まさか、さっきの言葉はこのために……！！

「え、さきほどご紹介いただきました、神田林 次郎丸です。これから2年生の保健体育を教えていくことになります。よろしくお願ひします」

そしてなぜよりによって保健体育なんだ！！ 趣味か！ 趣味なのか！？

次郎丸の衝撃的すぎる登場に僕は残りの先生の紹介をまったく聞いていなかった。

彼は確かに僕を驚かせた。有言実行。

これからどうするのかと思ったら教師になるとは。やはりあいつの腹は読めない。というか、読めてたまるか。

始業式が終わるとすぐ教室へ戻った。教室はワックスがかけられていて不自然に光り輝いている。僕の席は廊下側の前から三番目だった。僕の席から二列飛ばしたその先には大野由利である。白い肌と長い黒髪の対比が妙に美しく見えた。後ろの席からマモルが蚊にでも話しかけるような小さな声で言った。

「アツシ残念だったな。ユリちゃんと隣になれなくて」

「うるさい」

その時、教室の引き戸が音を立て開いた。担任の最中先生だ。

「はい、みんな久しぶりだな。今年度からはな、前の副担任の大前田山先生が異動になったから、みんな始業式で見たと思うが神田林先生がこのクラスの副担任になる」

そうなのだ。あのあとまた謎の言葉を次郎丸が放ち、なぜかうちのクラスの副担任となったのだ。

「じゃ、神田林先生、お願いします」

次郎丸は教室へはいつてくるとチヨークを手に取り黒板にお世辞にもきれいとはいえない字で神田林 次郎丸と書いた。

「え、はじめまして。神田林次郎丸です。握力66キロあります。保健体育を教えていきますが、体育の方よりは保健の方をバックアップしたいと考えていますのでよろしく」

よくわからない自己紹介をしたあと、お調子者の木田が手を上げた。

「神田林先生。なんで名前のところに が描いてあるんですか？」

「俺は保健だけでなく、つのだ ひろもバックアップしてるからだ。こいつは本当に大丈夫なんだろうか。早くも「あいつ馬鹿じゃね？」という空気が流れている。」

「家はそこの大平君のところに居候させてもらってます。なんか先生に用がある人は大平君とこに来い」

クラスの人間から一瞬すごい量の視線が飛んできた。勘弁してくれ。マモルが言った。

「あの朝お前といた人じゃねえの？」

一緒に住んでいるとまで言われて嘘はつけない。

「ああ。そう。あの朝昨日からうちに居候してるんだ」

「なんだよ、それ。なんか漫画みたいだな」

「相手はネコ型ロボットでもかわいい女の子でもないけどな」

その時、自分の話をしようと最中先生は次郎丸を軽く押しのけて教卓の前を奪った。次郎丸は一瞬不服そうな顔をし、なぜか体制を低くした。そのまま最中先生の腹部に鋭い蹴り！最中先生は格好悪い声を出し、窓側の壁に張り付いた。

「ちよ、何やってんですか次郎丸さん！ 先生泡ふいてるじゃない

ですか！」

「いや、だって話してるのに急に押されたからムカついちゃって」

「だからって後ろ回し蹴りはないでしょう!!」

「……あゝわかったよ!」

次郎丸はうんざりした顔で言うと、例の謎の言葉を発した。何回も聞いているがいまだにうまく聞き取れない。最中先生の腕がぴくりと動く。

「あれ? 私は何を…?」

「最中先生低血圧じゃないすか? 急にボタンですもん」

「あゝそうなのか。おかしいなあ、この前医者に高血圧だって怒られたんだけどなあ」

いいのか、それで? 次郎丸。本当に小神というのは何でもありで、このあとも三回ほど謎の言葉が放たれた。そのたびに教室の空気はころころと変わる。なかなか厄介な男だが、僕は最強の味方を手に入れたといってもいいかもしれない。

たくさんのプリントが配られた。内容は全て親向けで僕らが読むようなものではない。これからの予算の使い方など、知ったことではない。時間は午前11時20分。もうそろそろ終業のベルが鳴るころだ。そう考えていると、ちょうど聞きなれた電子音が響いた。

「よし、じゃあみんなまた明日から頑張ろうな。委員長」

「スタンダッププリーズ。礼」

さようなら、とは到底聞こえない次郎丸の謎の言葉のようなあいさつがされた。

僕は気合を入れた。そして一人の少女に歩み寄った。

「ユ、ユリちゃん」

「あ、アツシ君、久しぶりだね」

はあはあはあ、まずい、息が荒くなってきている。息臭いとか思われたら終わりだ。

「う、うん。あのさ、今日一緒に帰ら……」

その時であった。

「おい、アツシー、帰るぞ！ 早くしないといいとも始まるぞ！」

次郎丸！？ なぜこんな時に。

「アツシ君いいの？ 呼んでるけど」

「え？ いやいいんだよ、あいつは。それより」

「アツシー、聞いてんのかお前！ 早くしないとばらすぞ、あれのこと……！」

あれのこと？ 一体何を言ってるんだ？ 何を知っているというん

だ、あいつは！

「アツシの机の右下の引き出しに入ってるノートにはー！！」

「次郎丸さんー！！ 帰ろうかー！！」

僕は仕方なくユリちゃんに手を振った。なぜあいつがあれの事を知ってるんだ。周りからあれってなんだろうという空気が漂っているのを感じる。まったくこいつは。

「次郎丸さん、なんで知ってるんですか？ あれのこと」

「なんでって、一昨日の晩ローションでドロドロにするついでにあさってたら見つけたんだよ」

「あなたは僕をローションまみれにするだけでなくそんなこともしてたんですか！！」

なんて大人だ。僕はあまりにむなしき気分になり早足で家に帰った。途中何人かにバイバイと言われた気がしたが、あまり覚えていない。いつもの石階段をのぼり、家の引き戸を引いた。靴を乱暴に脱ぎ捨て、リビングに行くとき親父がビリーズブートキャンプ応用プログラムをしていた。

「親父昼間から何やってんだよ」

「ちよつと黙ってる！ カウント聞こえないだろ！！」

「お父さん元気だな、ビリーズブートキャンプなんてあの歳じゃあなかなか出来ねえよ」

親父は息を切らしながら言った。

「ていうかこれビリー休みすぎじゃないか？ ……ほら！ まだだぞ！ 絶対お父さんの方が頑張ってるね！」

「何言ってるんだよ親父、ビリーも頑張ってるんだよ」

次郎丸はいつの間にかジャージを着ている。

「ちょ、いつ着替えたんですか」

次郎丸は僕の言葉を無視して親父と一緒にブートキャンプに入隊した。

「お父さん、これ結構きついな！」

「次郎丸さん、いいともはいいんですか？ 僕はそのために秘密をばらされそうになったって言うのに」

次郎丸は目を見開いた。思い出したようだ。

「お父さん！！ そんなんやってる場合じゃねえよ！ いいとも！ いいとも始まるって！」

「えっ、だってもうすぐ終わる……あああ！ なんて電源切るの！」

次郎丸はお昼休みにウキウキでワッチングを始めた。こいつは居候ではあるがうちは神社で神様は大事にするわけで。お互い均衡と抑制をはかっている。いや、どちらかと言えばこちらが負けているか。

次郎丸はジャージ姿のままでもいいともを見ている。親父はその辺で自分の想像力をフルに生かしたバーチャルブートキャンプの真っ最中である。僕は昼食までの間少し勉強することにした。休み明けテストがあるからだ。僕はいつもの急な階段を上った。部屋の中は少しちらかつていた。僕は椅子に座り机の上のものを簡単に片づけ、社会のワークを開いた。社会は得意科目ではあるが、そのためにいつも後に回しがちである。ワークを3ページほど進むと親父が部屋をノックしてきた。

「アツシー、入って大丈夫か？」

「うん、別にいいけど」

「本当か？ 気とか使わなくていいんだぞ。本当はお父さん臭いから入ってくんなどか思ってるんじゃないのか？ いや、それならそれでいいんだ。お父さんも嫌がるお前に無理やりどうこうしようという気はないから」

「親父、それ加害妄想だよ。自分の想像だけで話進めるのやめてよ」「そうだよな、やっぱりお父さんそういうところが駄目なんだよな。こんなんじやお前の父だと胸を張って言えないな。すまんなあ〜こんなダメ親父で」

「もういいから部屋はいるのなら入ってよ。なんか僕が悪いことしてる気分だよ」

ドアがゆっくりと開き、なぜかカメラを持っている親父は言った。

「アツシー、この辺の小学校で女子児童が多いのはどこかなあ？」

「次郎丸さーん！！ あんたまた親父をロリコンにしたのか！！！」

次郎丸の笑いを含んだ声がりびングから聞こえてきた。

「今度はとことん自分を嫌いなロリコンにしてみたんだー。どうだ？」

「どうもごうもねえよ！ なんか前より犯罪者に近くなったんだけどー！」

「……成功だな」

「何がどう成功なんだよ！ 大失敗だよ！ さっさと元に戻せよ！」

次郎丸は笑いを含んだ声から怒り声になった。

「じゃあ何だよ！ お前は何コンだったら許してくれるんだよ！」

「なんで逆ギレ！？ しかも選択肢にコンプレックス抱えてないの
ないのかよ！」

「わかったよ！ 連れてこい！ 元に戻すから！！！」

僕は親父の手を引いた。僕は素早く階段を降りる。

「ちょ、アツシ、怖い！ この階段急なんだから！ お父さん慣れてないんだから！」

僕は何度か親父が足を踏み外しているのを無視してそのまま引きずった。

「次郎丸さん！　なんで親父をこんな風にしちゃうんですか！」

階段を引きずられアザだらけの親父を差し出した。

「いや、お前もなんでこんな風にしてるんだよ。結構お前もめちゃくちゃだよ？」

次郎丸はいつもの謎の言葉を発した。なんとなく音が聞き取れるようになってきた。ベーコンという言葉を連続して言っている感じだ。親父はやわらかな光を放った。

「親父、大丈夫か？」

「ちょ……さつきから聞いてたら。一番の被害者はこっちだということをお忘れてないか？」

僕はタンスの上にある救急箱を背伸びしてとった。中から湿布を取り出した救急箱をタンスの上に戻す。

「親父、湿布貼るからうつ伏せになって」

素直にうつ伏せになった親父の服をずらし、湿布を3枚貼った。親父はゆっくり立ち上がり台所へ向かった。

「今から昼飯作るから、もうあんまりうるさくしないでくれよ。神田林さんも」

うるさくなるのは次郎丸のせいなんだが、そこは何も言わず昼食を待つことにした。そういえばさつきからお腹が鳴っている。今日の昼食は一体何だろうか？

気がつけばもう13時を回っている。さて、今日の昼食は……。なんだこれは？言葉では非常に表わしづらいのだが、黒いスープのようなものに、肉……のような物が入っている。匂いは非常に悪い。親父は何を作ったのか。

「親父……何これ？」

親父は自慢げに鼻を鳴らした。

「まあ食ってみる。絶対おいしいから」

そこまで言うのならきつとおいしいのであろう。見た目はかなり悪いが。僕ははしで軽くその黒い何かに触れた。ぶよぶよしている。おそらく肉だ。器を両手で支え、スープをゆっくりと口へ運んだ。……まずくはない。想像していた味よりは随分まだ。

「親父、これ何なの？」

親父は少し間を置いてを涼しい声で言った。

「ディヌグアンだ」

ディヌ……44歳にもなって何をわけのわからないことを言っているのだ。ウチの親父は。

「知らないか？知らないだろう」

親父はさつきよりも更に間を置いた。

「これはな、豚の……」

次郎丸が割って入った。

「豚の臓物を豚の血で煮込んだやつだよな？」

「おお、よく知ってますね！」

次郎丸は少し微笑んだ。ほめられたのがうれしいんだ。わかりやすい男。

「ま、一応神候補の一人だからな」

この会話で料理の正体が判明した。ディヌグアン。普段食事を残すことはないが、今日は特別だ。こんなどこかの儀式でしか食べないような昼食があつてたまるか。ここは日本だ。

昼食を食べながら（白ご飯のみ）考えていた。一昨日からこの家にやってきた20代後半の男は一体何をするためにここに来たのだろうか。神になるためとは言っていたが具体的に何をするのかは全く知らされていない。どこぞやの政治家じゃないんだから、きちんとマニフェストを立ててもらわないと。

次郎丸が何をするのか、それを知ったのはもう少し後の話だ。

第1章 球技大会だ

次郎丸がうちに住み着いてから、早くも2週間が過ぎようとしている。最初の頃は何かとドタバタしていたが、最近は次郎丸も落ち着きを見せている。あの謎の言葉もここ数日聞いていない。(僕は謎の言葉を勝手にベーコンの歌と呼んでいる)
今日も僕は次期神候補の男と家を出た。

「ん？ アツシ何で体操服なんだよ」

次郎丸は最近学校にも慣れ、今ではジャージで出勤している。プーマの赤いラインが入ったやつだ。

「次郎丸さん、あんた保健体育の教師なんだから覚えといて下さいよ。今日は球技大会の日じゃないですか」

そうなのだ。今日は年2回の学年行事、球技大会があるのだ。

「あゝなんか他の先生も言ってたな。また、めんどくさい季節になったって」

「ちょっと、教師の裏側をそんな赤裸々に語らないでくださいよ」
次郎丸はこぶしをポキポキと鳴らした。まるでジャイアンだ。

「はっは。腕が鳴るな、おい。モンスターボール大会だっけか？」

「何ですかそれ、みんなでゲームボーイ持ち寄って通信対戦するんじゃないですか。ドッチボールですよ」

「じゃあま、同じクラスなんだし頑張ろうぜ、ゴールデンボール大会」

「あんた思春期がみんな下ネタ好きだと思ってませんか？」

校門の前にマモルが立っていた。僕を待っていたのだ。マモルは運動神経がいいので、こういう行事では特にテンションが上がる。あいつは昔からそうである。僕を見つけるなり100mを12秒台で走る俊足でこちらへやってきた。

「おはよう、アツシ！ おはようございます、神田林先生！」

朝っぱらからよく走る元気があるものだ。僕は朝っぱらからよくつかむ元気があるけれど。僕は言った。

「おはよう、マモル。えらく気合い入ってるな」

マモルは全力で走ってきたが息一つ切らしていない。

「ああ。去年は、1組の尺沢ちさくにバレーでやられたからな。今日リベンジだ」

尺沢……。確か中学2年生にして身長190cmの大男だ。次郎丸が腕を組んだまま言った。

「あの俺よりでかい冷蔵庫みたいな奴か。あいつ保健の授業だけ無駄にテンション高いから嫌いなんだよな」

人を嫌いになる理由がこのように簡単でいいのだろうか？ 哀れな

尺沢。

「だったら頑張って1組に勝ちましょうよ、次郎丸さん」

なんといつても今日は2年生最初のイベントである。どうせなら勝ちたいものだ。

午前9時、体育委員長による開会式である。体育委員長は列の中から体を小さくして出てきた。壇上にゆったり上がる体育委員長は、僕が人生の内で見ただけでもないような垂れ目であった。

「えー今年から僕たちも2年生です。ドッジボールなんてやってられねえよと思ってる人たちもいるでしょう。ですが、学校側も僕たち生徒の楽しみとしてこんなやつてもやらなくてもいいような行事を下さっています。本当言うと僕はこんなことやるくらいなら勉強した方がいいと思ってるんですが、まあ先生たちがやるというので、こんなことに反発して内申下げられても困るので、しかたなくこうしています。では皆さん、今日は有意義な大会にしましょう。」

周りのテンションをとことん奪い去ったこの体育委員長はこのあと体育倉庫で次郎丸にマスコミが喜びそうな制裁をくわえられるわけだが、僕には関係のないことだ。今日はきつちり楽しもうと思う。

僕たちのクラスは1試合目である。2年生全7クラスでトーナメント方式だ。男女別トーナメントなのでユリちゃんの姿を見ることはできない。ちっ。1組は去年の2回の球技大会で共に優勝しているため、シード権が与えられている。尺沢とは決勝で対することになる。まるで少年漫画のような展開だ。その主人公はマモルといったところか。

マモルは少し声を張って言った。

「よし、今日は勝とう、みんな！」

うんうん。青春である。みんなこついうのを待ち望んでいるのだ。

「よし、お前ら。今日は担任と副担任も一緒に参加するんだ。相手がおっさんだろうとおぼはんだらうとガンガン当てて行けよ。正直うちの担任は役に立たねえ。その分俺が2倍あてるから。自分がヒーローになろうとか思ってたんじゃないぞ。ボールとつたら俺かマモルに渡せ」

次郎丸のこの言葉にクラスの間は一瞬初めて死神を見た夜神総一郎のような顔をした。普通の副担任ならこんなことは言わない。だが、みんな何故かそれなりに納得しているのはこの男の言葉に何らかの特別な力を感じるからだらう。（実際マモルか次郎丸が投げた方が確実だ）

初戦の相手は7組である。メンツを見る限り特別強そうなのはいない。なんとかかなりそうだ。

4組VS7組

開会式から15分後。ゲーム開始の笛が鳴った。ジャンプボールにより、最初は7組のボールからスタートだ。最初ボールは紙飛行機のようにゆるやかに宙を何度も通り過ぎた。外野と内野がパスを繰り返す。

「おらー！ 勝負しろ7組！ ビビってんのか！」

次郎丸の汚いヤジが飛んだその時であった。外野からまっすぐ次郎

丸めがけてボールが投げられた。鋭いキレのある球だ。

「あ、次郎丸さん！」

思わず声が出ていた。次郎丸は少し右側にステップを踏みボールの正面に立つと胸のあたりでしっかりとボールをキャッチした。

「はっはっは！ 中学生がなめてんじゃねえぞ！」

この人に心配は無用のようだ。

「覚悟しろよ、このゆとり世代！」

次郎丸は今度は前にステップを踏んだ。鞭のようにしなる右腕。踏み込む左足。本気の顔。小神という名の発射台から一発の弾丸が放たれた。いや、弾丸なんて言葉は似合わない。あれは波動砲だ。

「ぐはっ！！」

鈍い音とともに一人の男子生徒が倒れこんだ。

「よっしや！！」

次郎丸のテンションとはまったく逆の静かで不気味な空気が流れた。7組の担任、乙女埼先生おとめさき（43）がおびえている。そりゃそうである。球技大会が始まって最初にやられた人間が腹部をおさえ、白目をむいているのだから。

「次郎丸さん……」

僕は言った。次郎丸は少年のようなつぶらな瞳で返す。

「ん、何？」

「ベーコンの歌をお願いします。記憶の改ざんとあの子の治療です」
次郎丸は首をかしげた。

「馬鹿野郎、お前小神をなんだと思ってんだよ。そんなこと出来るわけねえだろ！！」

「ええええええええ」

何だこいつ、ホント役に立たないな。

「今まで散々やってきたじゃないですか！」

「あれとこれとはまたケースが違う」

「今回はどういうケースなんですか？」

次郎丸はしばらく沈黙したあとこう言った。

「今回はこの後のドッジボールに体力を温存するケースぎゅこばっ
！！！」

気づくと僕は彼に渾身の右ストレートを放っていた。

「ちっちとっして下れな」

「いや、あの〜そうっすよね！ 体力とか言ってらんないっすよね！」

次郎丸はベーコンの歌を始めた。今日のはいつもより少し長い。7組の少年Aは何事のなかったように立ち上がり、彼が静かに外野に出ると周りの不気味な空気が先ほどの明るい空気に変わった。僕は次郎丸に耳打ちで力を抑えるように伝えた。そしてもうひとつ、マモルを主体に攻撃を組み立てることをだ。それなら全て安心である。

しかし、それでも我が4組は強かった。圧倒的である。7組を3分で全滅させてしまった。次の対戦相手は何組になるだろうか？

ドッチボール
校内学年別球技大会もいよいよ中盤である。我らが4組は後々大物になっていくマモルと、内臓をぶちまけるような強烈波動砲の次郎丸の活躍により1回戦を軽々突破したわけである。

そして、この物語の語り手である僕、大平アツシは狙われもせず、ボールに触りもせず、体育館内に漂う空気のようなだ。エアーマンと呼んでくれ。2回戦位はもう少し活躍したいものである。

さて、気になる他のクラスの結果であるが、なぜかライバルとこちらが勝手に認識している1組はシードなので関係ない。その1組と当たるのは5組との激戦を勝ち抜いた3組である。そして、このクラスが僕たちと対戦することになる2組だ。テンションだけ高い6組を倒し勝ちあがってきたのだ。

次郎丸とマモルはすでに1組しか眼中にないようだ。さつきも二人で1組の偵察に行っていた。1組は試合もしないのに何の偵察に行つたのかと聞いたら、

「考えてみるよ、もしもお前がパティシエだとするだろ？ 近くにライバルパティシエが店を開くことになったら、つい見ちまうだろ、その建設予定地。それと一緒にだ」

よくわからない例えで丸めこまれてしまった。不覚。

10分間の休憩の後、ついに2回戦が始まった。僕らは2試合目なのでまずは1組の試合を観察である。僕たちは体育館のステージの端に座った。

「次郎丸さん、いよいよ1組の試合ですね」

次郎丸は思ったほどテンションが上がっていないようだ。ジャージのファスナーを全開にして歯磨きをしている。

「ちょ、どこで歯磨いてるんですか！ …… ああほら歯磨き粉が落ちますって……汚な！」

「お前なあ、誰だつて唾液は出てるんだよ。人のもんだけ汚いみたいに言つてんじゃねえぞ。じゃあなにか？ お前の唾液は聖水だとそう言いたいのか？」

「いや、聖水だともっと汚いもの想像しますから」

僕たちがいつもの調子で話をしている間に1組の試合が始まった。1組は強かった。小回りの利く、鼠矛ねずぼこ。下手投げのトリックプレイヤー、鳥栗とりくり。そしてなにより尺沢の長身から放たれるボールは9分9厘相手を倒す。

試合は先ほどの僕たちと同じように3分ほどで終了した。試合後の

尺沢に次郎丸は歩み寄る。尺沢が首をかつきるジェスチャーをする。次郎丸に気付き、言った。

「え？ なんすか、神田林先生」

「おい、ようやくここまで来たみたいだな」

「え〜と……はい？」

正しい反応である。

「1組とかホント1分、いや2分……5分で片づけてやるよ!!」

最終的には最初の提案の5倍の時間になってしまったわけのわからない次郎丸の言葉に尺沢はこう返した。

「あ！ えっと……ふ、まずはあなたが決勝にこれるか、ですけどね」

なんてノリがいいんだ、尺沢。ここで変な反応をしていたら次郎丸にシスコンにでもされていたんではないだろうか。次郎丸が口から大量の歯磨き粉を飛ばしながら言った。

「マモル！」

「何ですか？ 神田林先生！」

「あいつらチヨケンチヨケンにしてやるっぜ！」

「次郎丸さん、ケチヨンケチヨンです。ていうかその擬音自体ドラ

えもんの中でしか聞いたこと無いんですけど」

マモルが言った。

「はい、先生！ ロンロンランランにしてやりましょう！」

「マモル！ なんだよ、何をどう間違えたらロンロンランランという擬態語が生まれるんだよ！ ていうかもうパンダだよそれ！ そして、さっきから何で何気に仲いいんだよあんたら！」

さて、いよいよ1組と対戦するような雰囲気だが今から僕たちは2回戦を控えている。まずは2組を倒さないといけない。

2組は1組ほどではないもののなかなかの人材がそろっている。僕達が準備運動代わりにバスケットボールで遊んでいると、2組の委員長がやってきた。

「ちよつと4組さあ、俺たちと試合もしてないのに1組に勝つ宣言とかウザいんですけど！」

マモルが3ポイントラインからシュートを決めて言った。

「ごめんな。でも目標は高い方がいいだろ？」

2回戦の始まりだ。

4組VS2組

ボールはこちら側からだ。まずはマモルの速球に驚いてもらおう。試合開始の笛が鳴った。マモルは2、3歩走り込みスナップを利か

せたい球を投げた。僕たちは相手クラスの文科系だけを先に倒す作戦を企てていた。そのボールは狙いどおり美術部の男子にあたった。マモルは大きくガッツポーズをして次の相手のボールに備えた。次郎丸が叫んだ。

「馬鹿、マモル！ 投げるときはテンポが大事だつて言ってるんだろうが！ アーン、ジョーン、ファンだ。アーン、ジョーン、ファンのテンポだ！」

「はい、先生！」

「ちょっと、それ！ 普通チャ・シューメンとかでしょ！ 何で韓国のエースなんですか！」

僕たちの会話を切り裂くように相手のボールが投げられた。僕のところだ！ スピードはマモル程ではない。だがそれでも僕を倒すには十分なスピードだ。僕は足を踏ん張り、両手を前に出した。1回戦での空気感をなくすためだ。

「ぶはっ！！」

顔面直撃。新しい四字熟語にどうでしょうか？ 所々から顔面セーフの声が上がっている。

「馬鹿野郎！ 顔面セーフなんてあるか！ 戦場じゃあな、顔面やられるってことは死ぬってことなんだよ！ んな甘いこと言ってるか！」

次郎丸である。確かに顔面だから大丈夫というルールは僕も前からおかしいと思っていたが、この男は中学校で何を教えようとして

いるのだ。戦場の心構えを伝えてどうしようというのだ。

「アツシ！ お前は外野から奴らを攻め立ててやれ！ 今お前に出来ることをするんだ！」

僕に出来ること……。次郎丸とマモルにボールを回すことぐらいだ。役立たず。僕は痛みが残る顔をさすりながら外野に出た。外野に出ると急にさっきまでの熱くなっていたものが落ち着いてくる。こうして自分のクラスを客観視していると次郎丸の元気の良さに気付く。

「馬鹿野郎！ だからチャーン、ドーン、ゴン！ だって言うてんだろー！！」

ウチのクラスはなかなかおもしろいクラスなのかもしれない。次郎丸がいるのもそうだが、何よりみんなが楽しそうだ。

いつの間にか2組の内野は1人になっていた。あの委員長だ。そしてボールは次郎丸が持っている。僕はあきらかに決まったスポーツ番組が好きではない。これがテレビなら僕はすでにチャンネルを変えているだろう。

僕は決勝へと駒を進めた。

いよいよ決勝、と言いたいところだが決勝は午後からである。

僕らは今給食中だ。次郎丸が牛乳を一气飲みしてから言った。

「おい、あんま食うなよ。腹六分くらいだぞ。ドッチボールの最中に腹痛くなっても知らねーぞ。」

女子生徒が言った。

「先生ー、木田君がバカ食いしてまーす。それにお箸を変えたから

だと思いますがチラチラそれを見せてをちょっと自慢げになってます」

次郎丸は自分の持っていた割り箸を持ったまま木田に近づき下からにらみあげた。

「す、すみません神田林先生。俺めちやくちやお腹減ってて。いや、でもお箸は違いますよ！ 確かにこれは新しいお箸ですけど、そんな見せつけたりしてませんか！ もしあの女子が見せつけてるって思ってるんならそれはきつと羨ましいんですよ！ 俺のお箸が！ なんてつたつてNEWお箸ですから！ いやーいいでしょ、これ？ こちら辺のデザインとかもつたまらんでしょ！？」

いやいや、最終的に見せつけてるぞ木田。それこの前ジャスコで売ってたやつだろ、チエック済みだよ。あと次郎丸！ ちょっと羨ましそうにお箸を見るんじゃない！ 今度買ってやるから。その時、一人の男子生徒が次郎丸に言った。

「先生、なんでそんなに優勝にこだわるんですか？」

そういえば疑問である。次郎丸は朝から無駄にテンションが高かった。マモルのテンションに合わせたとか、そんなことではないだろう。あいつは周りの空気に合わせてくれるような奴ではない。流行語でいえばKYというやつだ。次郎丸は自分の席に戻り給食を一口食べていった。

「いやな、俺1組の茶倉先生ちやくらと賭けしてんだよね。球技大会でどっちが優勝するか。負けた方は5000円ってルールで」

「あんた何、学年行事を賭博に利用してるんですか！」

マモルも続いて言った。

「ちよつと先生！ 俺らの友情は5000円で育まれたものだったんですか！？」

次郎丸は割り箸を皿の上に置き、微笑を浮かべた。

「何言つてんだマモル。俺たちの友情は永遠だ」

「せ…先生……」

「……………いやいやいや、おかしいよ！ そんな金八チツクな展開じゃないよ！ 何よりその人僕らを利用して賭博してんだよ！ ? そこつっこもつよ！」

僕の言葉を機に教室中の至る所から罵声が飛び始めた。そして次郎丸はボソボソと何かをつぶやき始める。……ベーコンか！！

「ちよ、次郎丸さん！ ずるいですよ！ それはダメですつて！
ベーコンは反則！」

いつもの淡い光が教室をやさしく包み込んだ。
さあ、みんなの元気が無理やり戻されたところで、いよいよ決勝である。小神は何でもありなのだ。

僕達が体育館に向かうと、すでに2組と3組の3位決定戦が行われているところだった。見ている限りさほど面白い試合でもない。当てるは当てられの、無駄に長い試合だった。運動靴を床にこすつた時の高い嫌な音が響いている。僕たちは先ほどと同じようにステ

ージの端に座った。マモルが少し興奮気味に言った。

「あゝ、いよいよだな、決勝！」

自分達がベーコンの歌で踊らされていることも知らずにとても楽しそうな顔をしている。まあ教師の勝手にいらだちながらドッジボールをするのも御免こうむるが。

ところで、なぜ次郎丸は最初からベーコンの歌で優勝しようとは思わなかったのだろうか。僕が小神ならまずそうする。その質問を直接次郎丸に聞いてみることにした。

「なんでインチキしないかって？ そんなん決まってるだろ。おもしろくないからだよ。もし負けたってそこでインチキすりゃ5000円払わなくて済むしな」

うゝん経済的な小神である。勝つたら5000円。負けても損害なし。そんな割のいいギャンブル聞いたことがない。こいつはただ暇を持って余していただけなのだ。無邪気なものである。

さて、そうこうしている間に2組が3位になっていた。3位であつてもうれしいのだろう。ガッツポーズをしていたり、万歳をしていたり、そんなの関係ねえをしていたり。

次はいよいよ僕たちの決勝である。最初に次は決勝である、と云つてからどれくらい引き延ばしたのかはわからないがいよいよなのである。ついにジャンプボール、という時に急に次郎丸がこんな提案をしてきた。

「待て！ せつかくの決勝だぞ。普通にドッジボールやったつてつまんねえだろうが。ここはひとつ特別ルールを付け加えねえか？」

「何ですか？ その特別ルールって」

次郎丸は自慢げに笑い言った。

「このドッジボールのボールを重いバスケットボールに変えた殺人ドッジだ！」

「……いやいや、殺人って言っちゃってるじゃないですか！ 殺す気なんですか！？ 殺される気なんですか！？」

「いける！ お前らの力を俺は信じてる」

「見誤ってます！ 僕らのこと見誤ってます！ それはやめまじょう！ 僕らの14年間の人生にここでピリオドを打たないためにも！」

次郎丸は非常に不服そうな顔をしている。そして何かをつぶやき始める。

「だからベーコンはズルいってえええ！！」

殺人ドッジボールの始まりである。

4組VS1組

主催の体育委員会の一人が大声で言った。

「決勝です！ 時間無制限！ 死んだら負け！！」

「それはさすがにまずいです！ 血いでたら負けにしましょう！」
僕は負けじと大声で言った。

「じゃあそれで！」

体育委員が肺胞がつぶれるんじゃないかという勢いで笛を吹いた。ジャンプボールは尺沢の長身で奪われてしまった。当たれば「痛い」では済まない命がけのドッチボールがついに始まったのだ！

尺沢はバスケットボールをその場でダンダンとつき始めた。背が高いのでドッチボールよりもずいぶん似合っている。次郎丸はおら来い！と挑発をかました。いいのか？当たったらタダじゃすまないぞ。

尺沢はステップを踏まずその場でボールを投げた。というよりは、高い位置からたたきつけたと言った方が正しいだろう。ボールは一人の男子生徒の顔面をとらえた。木田である。一瞬赤い水滴が見えた気がしたのは気のせいか。

「木田あああ！！！！」

僕は木田のもとへ駆け寄った。

「次郎丸さん！ 木田がなんかエグいことに！ ていうかこれ木田！？」

「安心しろ！ それはもはや木田ではない！ 虐殺の神・木田だ！」

「どこに安心できる要素が！？ イコール木田じゃないですか！！
なんだよそのダサイ座右の銘！」

最中先生も虐殺の神のもとへ歩み寄った。

「おい、元・木田！ 保健室行くか？ 元・木田！」

「先生もやめてください！ 木田は木田以外の何者でもありません！！！」

ボールを奪い取った次郎丸は僕らに向かって大声で言った。

「お前ら！ 負けた人間がされて一番つらいことは何だと思う！？ それはなあ、情けをかけられることなんだよ！ もうそいつにかまうな！ 俺たちはただそいつのために戦うことしかできねえんだよ！！！」

そうか、木田のことをなんとなく言っても、もうどうにもならないのだ。僕は戦う。これはもう次郎丸の5000円のためとかではない。木田の弔い合戦なのだ！戦争なのだ！

「次郎丸さん、ボール、僕に投げさせてください」

次郎丸はしばらく僕の目を見た。そしてボールをゆっくり僕にパスした。僕の胸にズッシリとした殺人ボールがある。今日1日で初めてボールを投げる僕は少し緊張していた。心臓の鼓動がやけに大きく聞こえる。僕はマモルの姿を思い出した。あの動きを形態模写しようと思ったのだ。できるだけマモルに近い動きをした。そして僕はボールを投げた。肘が壊れた。

「あ！ お前何やってんだよ！ 糞ボールじゃねえか！」

「うおおおお！！ 次郎丸さん！これ投げるのもキツイです！」
そうなのだ。このドッチボールは重いバスケットボールを使用しているため、肘に急激な負担がかかるのである。

試合が始まり5分が過ぎた。体育館の床に伸びている赤い液体はなんか最近異常気象だからということを経由にしておもうと思つ。もしくはトマトジュースを飲みすぎたのだ。そうであつてくれ。

こちらの生き残りは5人。僕、次郎丸、マモル、最中先生、留学生のモロミン君である。対して1組は6人。尺沢とそれ以外の元気な5人である。前に話していたアンダースローの男やらは早々にグツドナイト。現実はこのものだ。
さあ、ドッチボールもいよいよ終盤である。

ボールはこちら側にある。ここで一人倒せばお互いイーブンである。モロミン君があまりに興奮してそつちの方の言語で何かを叫んでいる。うるさい。次郎丸が言った。

「おい、モロミン！ 体育館でギャーギャー叫んでんじゃねえぞ！
何言つてんだ！？」

モロミン君は声がマンガの外国人のようなきれいすぎる片言である。片言にきれいも何もないだろうが、あまりにすばらしい片言なのだ。

「先生、今ワタシは母の名前を連呼してマシタ」

なんと外国らしいテンションの上げ方だ。きっと死に際も母の名前を叫びながら死ぬのだろう。

「マザコンか、てめえは！マモル、気にしないでさっさと投げちま

え！」

マメルはい、と返事をするといつもきれいなフォームでボールを投げた。球は見事に一人の生徒をとらえた。そしてなんと運のいいことにそのボールは4組の外野の元へ転がった。だが、外野に立っているものはいなかった。最初のルールを確認してほしいが、このドッジボールは「血が出たら負け」なので血が出るまで内野で闘わなくてはならない。何度も何度もしつこく当てられ本当に危なくなつたので自ら鼻に指を入れ鼻血を出しリタイアした者もいた。惨劇。先ほどのマメルは誰も取ることができず、結局1組側のボールになってしまった。尺沢はボールをモロミン君に向かって投げた。モロミン君は吐血した。いや、墳血と言った方が正しいか。

「おおおおおう！！ パパー……！！！！！！！！」

あ、そこは父親なんだ。

これで先ほどと同じ状況になってしまった。こちらが人数で一人分負けている。いったいどうしたものだろう。次郎丸はボールを片手で拾った。

「見とけ。これで逆転してやる」

次郎丸はそう言った。何だろう。この安心感は。何だろう。それと並行する恐怖感は。だが、僕は止めなかった。今回はそれでいい気がしたのだ。僕は、はいと返事をした。

次郎丸は自陣の中ほどから助走をつけた。放たれたボールはこちらの見る限りなんら変哲のないただのボールである。……いや、違う。回転がかかっている。今まで見たことのない回転である。そのボー

ルはまず一人の男子生徒の顔面をとらえた。そのボールはそのまま勢いよく床に落ち、そのままの勢いで跳ね上がった。そのボールはもう一人の男子生徒の鼻を突き上げ鼻血を出させた！僕はあまりに興奮した。

「ダブルアウト!!」

「見たかこの野郎!! 次郎丸特製、スーパーボールボール!!」

名前はダサイが確かにすごいボールである。この殺人ドッチならではの魔球だ。このスーパーボールボールで一気に風はこちらに向いた……と思っていた。

尺沢はそのボールを素早く処理すると、なんと次郎丸に対してボールを投げたのだ。これ位なら次郎丸はやられないはずだった。あの男がいなければ。次郎丸の隣にいた最中先生は捨てられたチワワのようにオロオロしていたのだ。次郎丸はボールを受けようとボール側に身を寄せていた。そこにオロオロ最中先生の大きな尻がヒット。体勢を崩した次郎丸の目の前には渋い柿色が広がっていたことだろう。次郎丸は口を切った。

僕は目を疑った。あの次郎丸がやられた。その事実が信じられなかったのだ。

「おおおい、こら最中!! 何お前!? あせってその場で暴れてんじゃねえよ!! 俺外野になっちゃったよ!? 頼みの綱外に放り出されちゃったよ!? とりあえずお前も死ねえええ!!」

最中先生リタイアである。その後マモルが相手を一人倒したが、まだ尺沢がいる。一度整理しておくが、この時点で2対2。こちらの生き残りが僕とマモル。相手は尺沢ともう一人少し小太りな男。た

しか山枚やままいとかいうやつだ。戦力的に負け、精神的にも次郎丸がやられたシヨックは大きい。こちらに不利な状況である。こちらにボールがあるうちに僕は靴を履きなおした。そしてマモルの耳元でささやいた。

「どうする？ 尺沢のほうを先に狙うか？」

マモルは少し唸った。よし、と一声あげて僕の耳元へ。

「尺沢は最後だ。山枚を先に倒そう。そっちの方がヒーローっぽい
だろ？」

「……任せるよ」

僕はマモルの意見を曲げる気はなかった。ただ考えなしに投げのをやめさせたかったのだ。僕は体の前に体重を乗せてマモルの投球を待った。

マモルは投げた。なぜバスケットボールであんな速球が放れるのか僕には理解ができない。その速球を顔面で受ける山枚。ドカベンだつてそんな勇氣はないだろう。マモルは確実に山枚をしとめた！
相手はあと一人。尺沢である。尺沢は隣で横たわっている山枚を無視し、ボールを拾った。外野から次郎丸が叫んだ。

「よっしゃ！ よくやったマモル！ ほんとお前はできる子だな！
！」

少し静かにできないものだろうか。今マモルは尺沢と真剣勝負をしているのだ。

「ありがとうございます、先生！」

その律儀なマモルのあいさつをやつは見逃さなかった。尺沢は伸ばしきったゴムを弾くように腕を振った。僕は考えた。ここでマモルがやられたとき自分があの冷蔵庫のようなやつに勝てるのかを。その間ゼロコンマ一秒。気がつく僕はマモルの盾になっていた。

「おい、アツシー!!」

マモルが言った。僕は自分の口が切れていることを確認し、そして言った。

「僕はドカベンより勇気があるみたいだよ」

僕は外野に一人で歩いて行った。マモルに頑張れ、と一言そえて。マモルの目が変わったのがわかった。僕は次郎丸の隣に座った。

「次郎丸さん。結局僕誰も当ててないんですよね」

次郎丸は親指で自分の口から出た血を拭って言った。

「……なんかさっきのドカベンがどうかいいうの……くさかったぞ」

「言わないでください。今になって後悔してるんですから」

僕は次郎丸と2人でマモルと尺沢の1対1の決戦を見守った。それはどんなスポーツ中継より面白い。きつといい視聴率がとれる。僕たちはマモルの笑顔をただ待つことにした。

「皆さん、今日の球技大会は楽しむことができましたか？僕は最初のほうで負けてしまったので正直つまらなかったです。あ、いや、

神田林先生は素晴らしかったです。先生、もう特別実習は結構です。え、優勝は4組という自分的には意外な結果で1組に賭けてた1000円がパーになってしまってもう踏んだり蹴ったりで、……ていうかりアルに踏んだり蹴ったりされて……あ、いや、冗談です……。え、とにかく今日の喜びを忘れず、またみなさん勉強にスポーツに頑張ってください。これで終わります」

あいつの笑顔はどんなやつより爽やかだった。

第2章 料理だ

暗闇の中、一つの光が見えた。

「目覚めよ…勇者よ……」

何だ？ 誰の声だ。

「魔王の復活だ。奴はパワーストーンの力で全ての人間をパワーロクんのキャラみたいない体系にしようとしている」

……それは嫌だな。

「お前の力が必要だ。お前のその魔道粉碎の力が必要なのだ」

マドウフンサイ？ 僕にそんな力はない……。

「……んだよ、ノリ悪いなあ。とりあえずイエスで答えとけよ」

……は？

「お前は勇者で、俺はそれを導く賢者って設定なんだよ」

はあ……イエス。

「……なんか興味ない感じだな。こっち気分悪くなんだけど」

じゃあどうしろと？

「お前の耳たぶを生贄に捧げる」

え？ ちょ、うわああああ！！

目が覚めた。僕は右手を耳にあてパンの生地にはピッタリの固さの部分があるかどうかを確かめた。立派な福耳。助かった。

そう思った直後、僕は今の状況があつてはならない状況であることを感じた。僕は布団に入っている。そして隣に小神である神田林次郎丸がたまに呼吸を止めながらいびきをかいていた。

「ちょ、次郎丸さん！ 何僕の隣で寝てるんですか！！」

次郎丸は一瞬白目をむいた。そして上体を起こし首を鳴らす。普段より少し高い声で言った。

「……おはよう、アツシ君」

「なんで君付けなんですか。怖いですよ。ていうか声気持ち悪いんですけど」

「なんだよ、そんな言葉の悪いツッコミがあるかよ。アンタッチャブルのツッコミだってもうちよつと優しいだろうが」

「あんな無理して高い声出してテンション上がったときの松本人志みたいでしたよ」

次郎丸は急に静かになった。ちょうどバグッたファミコンの様である。

「……なんで黙ってるんですか？」

バグモカセットに息を吹きかければ直るのだ。

「いや、それは気持ち悪いと言われても仕方ないなと思ってよ」

まったく変なところだけ素直な男である。僕は起きたばかりで働かない頭をフルに回転させた。なぜこいつがここにいるのか。そしてあの起こし方。僕は何かがあると踏んだ。

「何が目的ですか？」

「目的？ …… いやいや、俺はただお前の寝顔が見たくてな」

「彼女か、あんたは！」

次郎丸はわかったよ、と言い、僕の目を見ながら語り始めた。

「今日はな！ 日曜日だ！」

そんなことはわかっている。だからどうしようと言うのだ。

「俺も今日は仕事無いし、どこかへ遊びに行きたいわけだ！」

「はあ……じゃあダイソーでも行きますか？」

「いや、そうじゃない！ 俺は遊びに行きたいには行きたいがなんかダルい！」

さつきから何を言ってるんだこいつは。結局何が言いたいのかさっぱりわからない。遊びたいのにダルい？ なんだか段々腹が立って

きた。

「そこで俺は本日料理に挑戦することになりました！」

「なりましたってだれに決められたんですか」

次郎丸の目に光が差している。こいつがこうなるといつもロクなことがない。次郎丸は視線を僕から携帯電話へと向けた。

「友達を呼びたまえ、アツシ君！」

「何ですか？」

次郎丸は両手を広げて言った。言葉を強調させたいんだろう。

「料理に判定員は不可欠だ。よくやってるだろ？最近」

正直言って不服ではあるがこいつが一度言いだすと絶対にあきらめないことを僕は知っている。反発しても効果がない。僕は溜め息を吐き、電話を手にとった。

「じゃあ何人か声かけますから、待ってて下さい」

「おう！ よろしくな！！」

さっきから感じていたが今日の次郎丸はやけにテンションが高い。いつもなら朝起きた時は目が死んでおり、招き猫のような顔をしている。だが今日の次郎丸は電池を新しいものに変えたミニ四駆のようにながれが走り回っている。

僕は携帯電話を手に取り、電話帳のボタンを押した。

僕は自分の携帯の電話帳を各行から順番におくった。や行で指が止まる。「ユリちゃん」と表示された画面を見ながら僕は考えた。呼んでみるか、と。アドレスは知っているものの、まだ彼女にメールを打ったことはない。それに次郎丸の勝手に付き合わせるのはどうかと思う。いや、それでも。

僕はできるだけ紳士を気取ってメールを打った。緊張しすぎて内容は覚えていない。

僕が今年のうちで最高の心拍数を記録した後、マモルと木田にもメールを送った。男3人に女が1人というのはかわいそうなので、僕は他にも誰か女の子を誘うことにした。しばらく画面を眺め、僕は磯野いその 鮎あゆを誘うことにした。

こいつとは小学校の時から腐れ縁。男子に交じって缶けりとかしてたタイプ。今では随分女の子に戻っている。決してサ エさん一家の一員ではない。オリジナルの磯野である。

僕はその5人にメールを打ち終わると、1階に降りて朝食をとることにした。親父がパンツにシャツという不細工な姿で食パンをかじっていた。

「お、アツシおはよう。食パン焼いて食ってくれ」

「あ、今日は朝パンなんだ」

親父はパンを左手に持ち替え牛乳を飲んだ。

「ああ、味噌汁作ろうかと思ったら神田林さんがダメだって言うから」

「なんか今日ご飯作りたいんだって。いつもの気まぐれで」

僕はその場を軽く見まわした。

「で、その次郎丸さんは？」

親父はパンの粉がついた人差し指で台所を差した。料理の練習でもしてるんだろつか。僕は食

パンを取りに台所へと足を運んだ。紫がかった炎が見えた。

「うおおおお！！ 次郎丸さん何やってんですか！！」

フライパンから火柱をたてながら次郎丸は言った。

「え？ フランベだけど」

「ちょっと、次郎丸さん！ フランベは料理歴が1日にもみたない者がするテクニクじゃないですよ！！」

「いや、でも納豆のにおいをこれで消せるんじゃないかと思って。どう？ すごいアイデアじゃね？」

「納豆をフランベ！？ そんなこと息子の納豆嫌いを直すために奮闘する料理好きのフランス人でもやりませんよ！！」

次郎丸はそうか、と言って燃えたぎるフライパンを眺めてまた僕のほうを見た。

「なあ、アツシ。炎の勢いが増す一方で全然消える気しないんだけど」

「消化器持ってこおおおおい！！」

鎮火。

僕たちは3人でちゃぶ台を囲む形に座った。親父が言った。

「いやあ、お父さんまさか昔の彼女に買わされた一本60万の消化器が役に立つ時が来るなんて思いもしなかったなあ」

「ちよつと親父、そんな消したくても消せない過去を息子の前で堂々と暴露しないでくれる？」

次郎丸が悪びれない態度で言った。

「お、消せない過去の失敗でボヤを消したってことだな、お父さん」

「全然うまくないですよ。ていうかもうちよつと反省して下さい」

親父が部屋の隅で体を震わせている。

「おい、親父！ 何こつそりウケてるんだよ！！」

現在午前9時30分。みんなが来るまでにまだ2時間はある。今から断つても遅くはないんじゃないだろうか。

「次郎丸さん。今日の料理作るって言ったの、もうやめませんか？」

「何言ってるんだよ、お前。何が不服なんだよ。どの辺が不服なんだよ。」

僕は崩していた足を正座に組みなおした。

「朝っぱらからボヤ騒ぎ起こしといて何が不服なのか僕に聞く方がおかしくないですか？」

次郎丸も正座になった。

「大丈夫だ、フランベはもうやらない。俺もさすがにちょっとビツクリしたからな。あれは」

……信用ならん。フランベをやらないなら他のことで何かやらかすに決まっている。

「だめです。もう今日は中止にします」

「机の右下の引き出し」

「……さあ、みんなが来る前に準備でもしときましようか！ 次郎丸さん！！」

本日は良い料理日和である。

僕は次郎丸とともに消火器から出た化学物質を片づけることにした。今回は次郎丸も素直に従っている。もとはと言えばこの男の責任なわけだが。

消火器の後片付けなど初めての経験である。何から片付ければいいのかさっぱりわからない。僕たちはとりあえずあの粉っぽいのを勝手口から外にはき出し、雑巾で拭いた。掃除に1時間も要してしまつた。みんなが来るまであと1時間しかない。

僕は次郎丸と話し合うことに。

「次郎丸さん、もう料理をすることに關して否定はしません。でも僕が思うに、次郎丸さんの料理の腕前は金魚のフンです」

「やっぱお前って口悪いよな」

僕はコホンと間を置いた。

「そこで、次郎丸さん、今日作る料理は僕も手伝いましょう。僕こう見えて料理出来るんですよ」

「……嫌だよ」

何故だ。何故こちらから差し伸べた手をそんなに乱暴に払うできてしまうんだ。

「何ですか！ 僕も久しぶりに料理したいんですけど」

「何でって、お前よう。俺知ってただよ？お前がユリのこと好きなの」

何故知っている、今何の關係がある、そして何故呼び捨てだこの糞小神！！

「料理が出来るってことアピールしたいんだろ？ そうなんだろ？ 俺はそういうお前の浅はかな考えにいら立ちを覚えたんだ」

確かに多少そんな考えはあった。いや、ていうかそれしか頭になかった。ああ、そうさ！ 僕はアピールしたかったさ！ 今回のイベントであわよくばこれから遊ぶ時に誘っていこうみたいな考えがあ

「たさ！」

「……べ、別にいいじゃないですか！ 僕にもチャンス下さいよ！」

「あのなあ、俺は小神なんだよ。そういうことは恋のキューピッドにでも頼めって話だよ」

ここまでハッキリ言われると何も言い返せないのは僕の弱さなんだろうか。それにもかしたら神様の世界ではこういうストレスがあるのかもしれない。初詣で彼女ほしいです、とかつて頼むなよ！ キューピッドにでも頼めよ！ みたいな。

僕が神様の世界などという不思議なものについての考えを深めていると、携帯から流れる着信音¹。朝送ったメールの返信だ。

「あれ？ お前がメールなんてめずらしいな」

「朝早くだったし、ユリちゃんに電話するレベルまで僕はまだ達していませんからもうみんなメールにしようかと思っただんですよ」

いつの間にかユリちゃんのことをこんなにアブノーマルに口に出せるようになっていた。この男と話しているとどうでもよくなっている。

メールは磯野アユからであった。内容はこうだ。暇だからもう行くね、と。

「……次郎丸さん！ 急いで着替えましょう！ これ一番パジャマ姿見られたくない奴がやってきますよ！」

「お前誰呼んだんだよ」

僕は何も言わず携帯の画面を見せた。

「磯野アユ……3組の奴か！あのいい脚の！」

「次郎丸さん！ またちょっとロリコンの片鱗が見え隠れしてますよ」

僕たちは急いで着替えることにした。僕は2階の部屋へと走った。めんどろ臭いので適当なものにしようかと思っただが、ユリちゃんが来ることを思い出し、できる限り自然、かつなかなかのファッションセンスであるうものを選んだ。次郎丸は相変わらずジャージである。今日はアディダス。僕たちの準備が万端になった瞬間であった。家に昔ながらのブーツというタイプの呼び鈴があった。

昔から聞きなれたおじやまします、という声が聞こえた。僕は一人で玄関へ向かい、戸を引いた。

「来たぞ、アツシ」

「ウチに来てからの第一声ぐらいもうちよつと清楚にできないのか？」

アユはまるで男のような格好をしていた。ジーパンにTシャツ、その上にベスト。色の基調は黒だ。この前マメルもこんな格好していたように思う。遅れて次郎丸が玄関にやってきた。

「おお、アユ来たか」

アユは次郎丸に対しては妙に丁寧だった。

「おはようございます、神田林先生」

アユはこちらの都合など無視してやって来たが、他の3人が来るまではまだ時間がある。暇だからと言ってウチで何をしようというのだ、この女は。とりあえず僕はアユを居間に案内した。アユは元気に言った。

「みんなはまだ？」

僕はアユに座布団を手渡し言った。

「自分が早く来たただけだろ？なんで、みんな遅いよね？みたいな空気作ってるの」

「ちょ、失礼な、私のこと空気製造機みたいに言わないでよ」

「どんな製造機だよ。そんなもんNASAでも作れないよ」

僕たちの会話を聞いて親父が居間にやってきた。

「お、やっぱりアユちゃんか。この独特の会話聞くのも懐かしいなあ」

「あ、おじさん。おはようございます」

親父がアユと昔話を始めたので、僕は次郎丸のいる台所に向かった。次郎丸は椅子に座り、料理本を読んでいた。

「真面目に料理する気になっただんですか？」

次郎丸は本から目を離さないまま返した。

「なあ、アツシ。料理で大事なものはなんだと思う？」

「え？　そうですね……」

あまりにシンプルな質問ほど答えにくいものはない。僕はいくつも浮かんでくる答えの中から一つを絞り込んだ。

「料理の腕……ですかね？」

「そう！　そして今のおれにはそれが無いわけだ！　じゃあどうする？」

何も言えなかった。正直僕にはそれがわからない。

「アツシ、それはな……愛なんだよ」

「愛……ですか」

「そうだ。大体料理は『料理の腕』×『愛』で完成するんだよ」

その方程式だと次郎丸の料理の腕はゼロだから出来る料理は全部ゼロなんじゃないだろうか。

「つーことはだ！　愛が50なら俺の料理は100になるってわけだ！」

「あ、2はあると思ってるんですか」

「え？ 何が？」

「いえ、こつちの話です」

次郎丸は更に語調を強めて言った。

「だが今現在俺の愛は50に達していない」

だからどうした。聞いているこちらが馬鹿らしくなってくる。

「愛をくれ！ アツシー！！」

無理難題である。僕に何を求めているんだ。

「戻っていいですか？」

「お前なあ、さっきから俺がどんだけ暇してると思ってるんだ」

次郎丸は適度に遊んでやらねば機嫌が悪くなる、デリケートなうさぎみたいな神様なのだ。

「わかりましたよ。じゃあアユと親父4人でゲームでもやりましょ
う」

「ストリートファイターは無しな！ お前あれ強すぎなんだよ！」

「次郎丸さんがダルシムでヨガファイヤーしかないからじゃない
ですか。僕のチュンリーには到底かないませんよ」

僕と次郎丸は居間に向かった。親父がアユにアルバムを見せている。

「お、ほらアツシ！ これ見てみ！ お父さん若くね？ これふっさふさじゃね？」

アユが笑って言った。

「おじさん、もう過去には戻れないんだよ。そろそろ現実見たら？」

僕はテレビの下の台に入っている任天堂の某ゲーム機器を取り出した。

「赤い帽子のヒゲ男が車でレースするやつやりますか？ みんなで」

僕たちはみんなが来るまでゲームをすることにした。アユはこういうゲームが得意だ。昔からよく遊んでたから知っている。なんだかこうやって親父やアユとゲームをすると小学生の頃を思い出す。アユが6回目に1位になったときである。またもや鳴り響くチャイム。いよいよ料理の始まりである。

僕は玄関に向いアユが来た時と同じようにもてなした。3人のこんにちはというあいさつが重なって男女混声合唱のように聞こえる。いや、それは言い過ぎか。

僕は気持ちを切り替えた。今日はユリちゃんとの初お遊びなのだから、気合の入れ方が違う。木田が靴を脱ぎながら言った。

「今日は先生が料理してくれるんだろ？ もう朝からミートドリアしか食べてないからお腹ぺこぺこなんだよねえ」

「朝からドリアって、お前なかなか果敢な胃袋持ってるなあ」

次郎丸が洗った手をズボンで拭きながらやってきて言った。

「次郎丸さん、ズボンで拭いちゃダメだっていつも言ってるじゃないですか」

ユリちゃんがいい感じに微笑んでいる。ウチの家に好感を持ってくれたようだ。いっそ、休みの日に巫女のバイトにでも来てくれないだろうか。そんな叶いもしない理想を頭の隅にステイさせて、僕はみんなを居間に連れて行った。ウチの居間でまるで自分の家であるかのように過ごし、普段見たこともないくつろぎ様を見せたアユが言った。

「おお、諸君。ごきげんよう」

マモルは少し笑って返した。

「いつもテンション高いな、アユ」

「これだけが私の自慢できる所だよ」

みんな楽しそうに会話する中、一人ユリちゃんだけがあまりしゃべっていない。慣れない環境に戸惑っているのだろうか。僕は彼女の隣に行った。

「……ごめん。あんまり楽しくなかったかな……」

彼女ははっとした様子だった。そして天使のような笑顔を僕に向けた。

「ううん。みんな元気だからちょっと圧倒されてただけ。楽しいよ」
「ナイス笑顔だ。確かにこのメンバーは個性的なやつばかり。最近次郎丸という個性的すぎる男とばかり一緒にいるから、感覚がマヒしているのかもしれない。ユリちゃんはいたって普通の女の子である。」

「そっか。ならいいんだけど」

これほどホストクラブで修行したいと思っただけではない。もう少しうまい言い回しはないものだろうか。次郎丸が居間のふすまを開き、言った。

「よっしゃ。今から作ってやるから、お前ら期待して待つとけよ」

みんな楽しそうな顔をしている、僕ひとりを残して。僕は今朝のボヤ騒ぎをリアルタイムで体験しているのだ。期待のしようがない。

次郎丸が料理を作り終えるまで時間がある。せっかくユリちゃんを呼んだのに、ただ圧倒されっぱなしでは楽しさも半減してしまうだろう。僕はとにかく会話をしようと思った。

「ユリちゃんて普段の日曜日なんかは何してるの？」

「私？ 私は……友達と料理したり、妹の面倒見てたりしてるかな」

それはそれは、さぞかわいらしい妹なんだろうな。

「妹がいるんだ。ユリちゃんに似てるの？」

「顔はね。性格が全然似てないの」

アユが座布団を木田にぶつけて言った。

「あ、あれ？ イモリとヤモリみたいな感じ？」

「何で例えがは虫類？失礼だよ」

「ちょ、何で座布団を投げたの？そしてなぜ何事もなかったようにしてんの？」

木田のささやかな反論。その時、台所から大きな声が。

「アツシー！ 味の素どこだ！ 味の素！」

「ちょ、待っててください！ 今行きますから」

結局僕は手伝う羽目になりそうだ。一体何を作ってるんだろうか。

僕は台所で不思議な光景を見た。次郎丸が鍋をかき回している。その鍋にはネズミ色に近い茶色の液体。

「次郎丸さん……何を作っているんですか？」

僕はいやな予感がしていた。

「え？ 何ってこれ、『ちょぼ汁』に決まってるんだろ？」

僕の直感は正しかった。

「なんてものを作ってるんですか！ ちよば汁と云えば、兵庫県淡路島の郷土料理で毎年1月に一度だけ給食に出され、あらゆる生徒から反感を買い、最近ではある情報番組のロケで淡路島が紹介されたときに某お笑い芸人がそれを食べコメントに困り、スタジオにそれが運ばれた際にはコメンテーター全員を黙らせたしまった伝説の安産祈願のお吸い物じゃないですか！！」

「やけに詳しいな、お前」

「常識です」

次郎丸は鍋の中のおいをかいだ。

「よくこんな臭いのもん作るよな」

僕は次郎丸の言葉を無視して言った。

「次郎丸さん、あなたが何を作ろうと勝手ですけど、僕たちがそれを食べた時の顔を想像するようにしてください。そうすれば少しはマシな物ができるんじゃないですか？」

次郎丸は考え込んだ。そして彼は言った。

「あれか……塩じゃけとか」

「そうです、いい感じですよ！ その調子です！ ほら、ほかに何がありますか？」

次郎丸は再び考え込んだ。

「ベーコン?」

「え? 何で? 何でベーコン?」

「……コンベークンベークンベークン……」

みなさんはくれぐれもこの様なセリフを言わないようにしていただきたい。

「……いいじゃないですか、ちよぼ汁! さつそくみんなで食べましょう!」

居間に次郎丸の料理その1が運ばれた。異様な匂いに審査員一同みけんにしわをよせている。アユが小声で言った。

「ねえ、アツシ。なんで淡路島名物のちよぼ汁がでてくるの? 誰も出産予定はないよ?」

僕はわからなかった。さつき台所に行った時何故、彼を止めなかったのか。何故、逆にちよぼ汁に対してテンションを上げていたのか。

「……次郎丸さんに聞いてくれよ」

なぜか自信ありげな顔をした次郎丸は言った。

「さあ、どんどん食べ。淡路島名物の……」

マモルが言った。

「ちよぼ汁ですよね？」

「お、よく知ってんな」

「常識ですよ、先生」

木田は愛そう笑いさえしていない。そんな木田を見て次郎丸は言った。

「ほら、木田！ お前朝からドリアしか食ってねえって言ってただろ？ どうした？ 腹減ってんじゃないのか？」

木田は一瞬怯えた表情を見せた。

「い、いや。ほら、よく考えたら僕の胃袋そんな活発じゃなかったていうか、朝からドリアなんて食べたなら元気が出てないって言うか」

「それなら尚更食べないとな。ちよぼ汁は体にいいぞ」

その後の居間の空気は最悪であった。涙目にしながらちよぼ汁をすする木田。昔小学校で5時間目までトマトを食べてるやつがいる中で授業をしたことがないだろうか、それを思い出してほしい。まさにその状態である。

僕はみんなが食べたちよぼ汁の器を一人で洗った。次郎丸に後片付けをしると言ったら、私の辞書に後片付けという文字は無い、とかいう冬將軍の語源になった偉人みたいなことを言いだしたからだ。居間にはついさっき人を殺したんじゃないかという殺伐とした空気が流れている。みんなの顔にはそろって帰りたいと書いてあるのだ。そんなわかりやすい空気すら読めないウチの小神は僕のすぐ隣で料理その2に全力を注いでいた。1ヶ月1万円生活の濱口優でも乗り

移っているような元気のよさ。

「次郎丸さん、次は何作ってるんですか？ もう僕の中では雑誌、小学5年生のこイツには勝てるランキング1位の濱口優と同等の扱いですよ」

「馬鹿言え、俺に勝てる奴は少なくともこの世にはいねえよ」

「あんたはグラツ ラーバキですか」

次郎丸は何かを炒めているようだ。僕は手を拭き、居間に戻った。とにかくみんなを元気づけなければ。

「みんな……あの……ごめんなさい、いろいろ」

僕はみんなから怒られるような気でいたが、意外とみんな僕のことを慈悲の目で見てくれている。僕も被害者であることはわかってくれているようだ。いい友達。

次郎丸は居間の引き戸を勢い良く開いた。その左手にはおぼんが。

「よし、作ってきたぞ、ほら！ 味噌汁！」

彼の言う味噌汁というそれは青い。匂いは悪くないが、青色というのはどうしてこんなに食欲を無くさせるのだろう？ 今にも先程食べたちよぼ汁を吐き出してしまいそうだ。

「へえ、次郎丸さんの地元じゃ味噌汁は青いんですか……。ていうかさっき何か炒めてたじゃないですか、何だったんですか？ あれは何だったんですか？ ていうか2品続けて汁物っておかしい

でしょ!!」

僕は不満を簡潔に100文字以内でまとめた。次郎丸は訳がわからないといった顔を見せている。訳がわからないのはこっちの方だというのが。マモルは僕に続けて言った。

「先生！こんなに鮮やかな青を一体どんな食材から引き出したんですか？青と言うのは色の三原色の一つ、他の色を混ぜて出来るものではないはずですよ！」

「マモル、もつと他に気になることがあるはずだよ！そんな真の赤を求めていた有名画家みたいなこと言ってるときじゃないだよ！」

次郎丸は言った。

「……これが本当の青汁ってやつだな」

「うまくねえよ、下手すぎるよ！近所のおじさんだってもう少し良い返しますよ！」

青味噌汁を眺めていたアユが何かに気付いた。いきなり胸を張り、言った。

「先生、本当に料理の腕がまだまだ青いね」

「お前もうまくねえよ！なんだよ、ちよつと期待しちゃったよ！何かあるのかと思っちゃった僕が悪いんだよ！」

次郎丸はしばらく黙っていた。少しだけ考え込むような顔をしてから真面目な顔になった。

「アツシ……お前すげえな。思春期の割にまわりの目も気にしねえで。ちょっと尊敬するな」

その言葉で、僕は気付いた。少し前から周りを見ていなかったことを。僕は気付いた。今のこの状況、僕はかなりの変人であると。僕は気付いた。僕の背中ですりちゃんが今まで見たこともない悲しい顔でうつむいているのを。僕は気付いた。絶対おかしな子だと思われてるよ……!

「ユ、ユリちゃん？ え、ちょ……違うんだよ。いつもはほら、もつとこうダンディズムとかすごいから。もう溢れ出してるから」

「……」

彼女は長い間を置いた。それはもう息が止まるんじゃないかという長さであった。

「……うん……大丈夫……」

僕は目の前が真っ白になった。もう何も考えられない、死のう。僕が身を投げることを決意したとき、木田が言った。

「えっと……みんなもう……帰らない？」

そうだね、そうだな、そうしよう、元気出せって。僕の心に深く深く突き刺さる言葉という名のモリ。

僕は彼らを玄関で見送った。最後のユリちゃんの背中を見届け、僕は居間に一人戻った。親父が僕に話しかけようか、かけまいかを迷っているのがよくわかる。

「いいのかよ？」

次郎丸だった。僕は畳を眺めていた。

「何がですか？」

次郎丸は僕の額をつかみ無理やり自分と対面させた。

「俺はお前がこんなにモロイお子様だとは知らなかったなあ」

「そりゃ、僕と次郎丸さんはまだ出会って1ヶ月なんですから」

次郎丸の目にいつにない光が見えた。

「お前は どうしたい？ 何がしたい？ 俺にはお前がただ自分の考
える最悪の状況から目をそむけてるようにしか見えないんだけどな」

僕は語調を強くした。

「じゃあどうすればいいんですか！ イメージって作るの難しい
のに、壊れるのは一瞬なんですよ！」

「お前は自分自身にそんなに自信がねえのか？ お前そのものを認
めさせろよ。きれいに飾り付けたイメージに意味なんかねえんだ。
下ばっか向いてんじゃねえ。畳の節数える職人かテメーは。ただ前
だけ向いて、歩けばいい。よそ見してたら電柱に頭打つぞコノヤロ
ー」

僕は半分泣きそうな声で言った。

「でも……でもどうせ玉碎されるに決まっていますよ」

「悔いる前に恥の一つでもかいてみる。お前は自分が恥かくのと、このままおさらばとどっちがいいんだ？」

僕は何も言わなかった。次郎丸が続けた。

「そっぴゃ、ユリはウチ来るの初めてだよなあ。他の奴とは方向違うし、ちゃんと帰れんのかなあオイ。俺この前ファックスに挟まれた小指が痛くて動けねえや」

僕は次郎丸の腕を振り払い、急いで玄関に向かった。

僕は前を向くことに決めただ。

僕はサンダルを履いて石階段を駆け降りる。5月の温かい風が僕の心を落ち着けることはなかった。通りに出た時サンダルで出てきたことを後悔したが、僕はそれを気にせず小走りでユリちゃんの帰路をたどった。

その時である。僕の背後ににっらそうに呼吸する男が一人。

「はあっ忘れてた！ 忘れてた！ 俺お前と一緒にいなきゃ、はあっ」

次郎丸である。全力で走ってきたのだろう。煙草でほとんど使い物にならない彼の肺が悲鳴をあげている。

「ちよつと次郎丸さん！ さっきまでの雰囲気かぶち壊しじゃないですか！ 帰って下さい！」

「無茶言つなよ！ 俺だつて帰りたいよ！ でもなあ、世間にはどうにもならないことつてあるんだよ！ 消費税の値上がりしかり、モー娘の人気低迷しかり！」

次郎丸は社会派キャラクターである。そのまま彼は続けた。

「ていうか今思ったけど、何でユリはお前の家知らないのにお前はユリの家知つてんだよ！ ストーカーキングか？ ストーカーキングしてたのか！？」

「誰がストーカーですか！ ただ僕は恋に対して不器用なだけです！」

「否定するのそこかよ！ ストーカーキングはしてんのかよ！ ただの犯罪者じゃねーか、お前！ ていうか何でさっきから全力で走ってるの！？ さっきまでの余裕の小走りは何処へ！？」

「知りませんよ！ なんか次郎丸さん走ってきたからそのままのノリなんじゃないですか！」

僕らが内輪もめをしているときである。目測で50メートル程先にユリちゃんの姿をとらえた。彼女はあたりを見回している。やはり迷っているようだ。次郎丸が言った。

「よしっ！ 俺このままどっか隠れるからうまいことやれよ！ 馬鹿なことしたら電気アンマするからな！」

次郎丸は近くの家にダイブした。僕は電気アンマに怯えながら彼女に呼びかけた。

「ユ、ユリちゃん！」

彼女がこちらに振り向いた。黒い長髪がなびき、どんな芸術作品よりも美しく見えた。

「あれ？ アツシ君？」

「ユリちゃん、あの、さつきは」

僕が言いかけた時であった。彼女は優しく微笑みこう言った。

「さつきは楽しかったよ」

今まで見たことのない笑顔だった。僕は少し彼女に見とれた。

「え……本当に……？」

「うん。何かアツシ君で学校じゃもつと落ち着いた感じだから新鮮だったし」

「え？ じゃあ何であんな悲しそうな顔を？」

彼女は口に手を当てて小さな声で笑った。

「あの味噌汁がすごい味だったから、ちょっとビックリして」

全ては僕の取り越し苦労だったらしく、そのあとも僕は彼女と二人でおしゃべりをした。こんなこと前ならありえない光景である。気がつけばすでに彼女の自宅前。ユリちゃんが言った。

「そういえば今日アツシ君のところで食べるからって言ったから何も
ないんだ。結局ほとんど食べてないのに」

僕は一つの提案をした。

「！、じゃあ僕が何か作るよ」

「え？ アツシ君料理出来るの？」

僕はうん、と言ってうなずいた。

彼女の家はマンションの3階。ドアを開けると、きれいに並べられ
た靴が目に残る。僕は早速キッチンに案内してもらった。冷蔵庫
に卵があることを確認して、待っててと言った。

何が今日という日をこんなにも素晴らしいものに変えたのだろう。
僕はユリちゃんと初めてこんなにしゃべり、始めて家に訪問し、始
めて料理を披露する。あらゆることが初めてづくしだ。

「はい、オムライス」

僕はユリちゃんがオムライス好きであることを調査済みである。決
して知りたくて知ったわけではない。たまたまである。

「……おいしいね、これ！ アツシ君将来シェフになると良いよ」

「親戚の人にも言われるよ、それ」

今日のオムライスは格別のはずだ。何せ、次郎丸がこう言っていた

のだから。

料理は腕と愛情だ。料理はやはり愛情で決まるようだ。少なからず僕はそれで一人の女性を笑顔にできた。

僕がユリちゃんの家から出ると、玄関先の塀にもたれかかり、腕を組んだ次郎丸が僕を待っていた。

「どうだった？ 電気アンマは必要ないか？」

僕は抑えきれない笑顔で言った。

「はい」

「じゃあまあ、家帰ったらまた俺の料理食ってもらおうから」

僕の笑顔が苦笑いに変わる。恐る恐る聞いてみた。

「今度は何作るんですか？」

「そつだなあ」

次郎丸は続けた。

「お前にオムライスでも教えてもらおうかな」

「……覗きましたね？」

次郎丸は嫌な笑顔だった。ただその笑顔には好感が持てたんだ。不思議な話。

本日は良い料理日和である。

第3章 肉まんだ

目覚ましが鳴った。僕はそれを止めてもう一度寝た。

「遅刻！ 次郎丸さん、起きて下さい！ もう時間やばいです！」

僕は次郎丸の部屋にあがりこんで言った。実は今日親父が出かけていて、僕と次郎丸の二人だけなのだ。彼を起こすのは僕の日課である。

「お前朝から騒いでんじゃねーよ。とりあえず『今日のソコ』見るから」

「何か嫌なところに 入れないで下さい！ ていうかそれもう時間的に終わってます！」

次郎丸は6本の腕で頭をかいて遠くを見つめる。しばらくして頭が動きだしたのか、あわてた様子で言った。

「それ、やばくね!？」

僕と次郎丸さんは慌てて朝ごはんを食べる。

「ちょっと次郎丸さん、何ずっと納豆かき回してるんですか！ 早くしてください！」

次郎丸は4本の腕で納豆を支え、残り2本の腕で納豆をかきまぜている。

「無理だつて！ 俺100回以上かき回すの日課だよ！？日課は急にはやめれない！！」

「何その、車は急には止まれないみたいな言い方！？ とにかく急いで！！」

次郎丸は納豆を支えている方の手を1本動かして、テレビの電源を入れた。画面右上に7:00と出ている。

「アツシ！ これ見てみ！ まだ余裕っぽいぞ！ 間違っていたのは俺たちのほうかもしれないぞ！」

僕はテレビ画面、そして携帯電話を確認した。どちらもちょうど7時をお知らせしている。

「な、何だ。目覚ましがくるってたんだ」

「お前ビックリさせんじゃねえよっ！ 何かガラにもなく早起きしちゃったよ」

次郎丸が3本の腕で僕をこづいた。……あれ？ 何かさっきからとどこどころおかしくないか？

「次郎丸さん、なんか今日不自然じゃないですか？」

「何だお前、守護霊が見えますとか言うんじゃないかな？」

「いや、その…なんて言うか。腕…多くないですか？」

次郎丸は自分の腕を確認する。6本の立派な腕だ。

「えええええ！ 何これ、腕6本あるんですけど！？ 成長期！？」

「いやいや、違いますよ！ そんな神秘的な成長なかなかお目にかかれませんよ！ ていうかありえないですよ！」

次郎丸は頭を抱えた。もちろん腕6本で。

「おいおい、どうすんだよ……。こんなもんアシユラマンになるか、帽子をかけとくあれになるしか道がねえじゃねえか……」

「大丈夫ですよ！ 次郎丸さんの目の前に広がる道は無量大です！」

「うるせえ！ 慰めはいらねえよおおお！！」

次郎丸は僕の両腕、両足、腹をつかみ、そのまま空中へと舞い上がった。とおっ！、というかけ声と共に地面に急降下。その衝撃が僕に襲いかかる。

「アシユラバスター！！！！」

「いだだだだだ！ こかつ、股関節が……あああ！ 僕が僕じゃなくなる！ 何か得体の知れないものになる！！」

次郎丸ははっとした様子で僕を降ろすと、慌てたそぶりで行った。

「……あ、すまねえアツシ。…あれ、お前アツシか？ そんなあらゆる関節がはずれ切ってる奴見た事ねえよ」

「いいから……早く助……けて……」

僕はベーコンの歌に救われた。

「考えてみましょう、何でこういうことになってしまったのか」

僕は次郎丸と居間に座って話し合うことにした。幸い学校まで時間もある。次郎丸が言った。

「俺は別にこのままでもいいけどな。これから悪魔超人として生きていくから」

「何言ってるんですか。学校にも行かなきゃいけないんですから。そのままはちよつとまづいですよ」

僕達は次郎丸アシユラマン化現象について検討することにした。ちやぶ台を出し、そこに向かい合うように座る。

「次郎丸さん、昨日の夜の間何をしたかわかりますか？」

次郎丸は腕を組もうとしたが、6本腕でどうやって腕を組むのかわからず諦めた。

「昨日は……夜中に起きて冷凍肉まん食ったな。……！これが最近話題の農薬の効果か！」

「いや、それは違います。農薬一つで腕が6本になれば、逆に中国を尊敬します」

次郎丸は目をつぶって首をかしげた。みけんのしわが深く悩んでいることを感じさせる。次郎丸は何かに気付いたのか、目を大きく開

けた。

「……………肉まんの精？」

……………今聞こえたのは何だろうか？ 肉まんの精とか何とか。生き方に疑問でもあるのだろうか？ 相談なら乗るぞ。

「間違いねえよ！ 肉まんの精だ！」

「何言ってるんですか、次郎丸さん」

次郎丸は語り始めた。

「あのなあ…ちよつとこの後の文章読んでくれ」

「面倒くさがらないで下さいよ」

午前2時、俺は小腹がすいていた。もうなんか寝ようか、食べようか心の中で葛藤している。そんな俺を尿意が決心させ、俺はトイレに駆け込み小便をした。

急いでいたので気がつかなかったが、俺は便座を上げずに小便をしていた。いつもより小便の有効範囲が狭まった分、俺を今までに経験したことのないような緊張感が襲ったんだ。便座力バーが小便で濡れてしまえば、まず確実に俺は怒られてしまう。何としてもそれだけは避けたかった。

小便の勢いが弱まった時が勝負だ。段々と弱くなっていく小便に体のリズムを合わせ、腰を出していく。そして、最後に尿道に残った小便を出す瞬間、素早く腰を引く。これしかない。まさにインポッシブル。もし成功したならば、それは神業と呼ばれるだろう。いや、

第一俺は神だ。成功しないわけがない。いくぞ！

「あ……」

俺は何も気にせずトイレから出た。誰にでも失敗はある。その失敗を通じて、人はまた強くなるのだと言うことを俺は知っているからだ。

俺は台所でしばらく模索した。迷った拳匂、俺は冷凍肉まんを選択した。少量の水をかける。白い肉まんを流れる水は、さながら天使の涙。ラップをし、電子レンジをセットした。俺はしばらく椅子に座って待つことにした。その時、俺はうたた寝をしてしまったんだ。それが悲劇の始まりだったのかもしれない。

目を覚ますと、1時間が経過していた。俺は慌てて肉まんを見に行った。冷え切った肉まんのラップをはがす。それと同時にその肉まんが光り出したんだ。俺は訳のわからないまま光る肉まんを放り投げた。すると、その肉まんから一人の少女が現れた。恐らく年齢は10代半ば。目は淡いブルー、髪型はショートカット。大きめの黒い長そでのシャツの上に半袖の白いパーカを重ね、膝の少し下位の長さのズボンを履いている。肉まんのようなもちっとした肌、きれいというよりはかわいい系だ。

「あなた、私を見捨てたわね」

その少女は言った。俺はとっさに彼女が肉まんの精であることを悟った。

「寝てたんだよ、仕方ねえだろ？」

「そんなのいい訳じゃない！ 男っていつもそう！ 自分が困れば

こうだった、ああだったって!」

「な、お前何だその言い方!」

その女はぷい、と後ろを向いた。

「あ、逆ギレするんだ? もうあなたなんて知らない!」

「あ、ちょ…。んん……。かったよ」

「え? 何?」

「悪かったよ。俺が悪かった、謝るよ」

その女はとたんに笑顔になった。すると急にその場で泣き出した。

「ありがとう…。私今まで色々な男に出会ってきたけど、あなたみたいに素直に私を受け入れてくれる人なんていなかった……」

「肉まんの精……」

何と声をかけたらいいか、俺には分からなかった。

「お礼にあなたの願いを一つかなえてあげる」

正直俺は信用していなかった。こいつが別れの口実を作っているんだと、そう思った。しょせん俺と肉まんは交わってはいけない存在。禁断の恋。俺は適当に子供のころの夢を言った。

「悪魔超人に…なりてえ」

いつの間にか俺の目にも涙があふれていた。

「本当に…そんなのでいいの？」

「ああ…ああ……」

俺は泣いていることを悟られないために必死に声を殺した。俺達はそのまま抱き合った。

「ということがあったんだ」

「あんた夜中に何昼ドラみたいなことしてるの！？それが事実なら確実に原因それだよ！あんた悪魔超人にされたんだよ！！ていうか最初のトイレのくだり丸々いらさないよ！後、便座力バー何とかしろ！今頃すっかり臭くなってるから！」

鮮やかな無視。

次郎丸は納豆を食べながら鼻をほじり、耳かきで耳掃除までしている。存外不便でなさそうだ。むしろ使いこなしている。横着の象徴

「とにかくです、多分それを戻すにはその肉まんの精を探すしかないと思うんです」

次郎丸は何とも言えない表情で言った。

「いやでもお前、何か自分から悪魔超人にしてくれ、つつといて今更元に戻してくれとは言いつらいだろ。それに何か照れくさいし」

「そりゃ夜中に抱き合っただ見ず知らずの人（の姿の肉まん）に出会って照れるなと言う方が大変だと思いますけど」

ともかくにも、僕らはその肉まんの精を探すことにした。一番怪しいと感じている場所は冷蔵庫の中。冷凍部屋にはまだ冷凍肉まんが入っている。次郎丸はやっぱりやめとかね？と普段よりかなり内向的になっている。僕は冷凍部屋の取っ手を掴み、言った。

「ちゃんとケジメはつけなきゃいけませんよ。まだお別れが言えないんですよね？」

「いや、確かにそうだけだよ。ていうかストーキング野郎に言われたくないんだけど」

僕は問答無用で冷凍部屋を開けた。中には、そのわずかなスペースに体を無理やりねじ込んで、震えている少女がこちらを睨んでいた。

「うわあっ！！ 何この人！ 確かにかわいいけど！」

次郎丸の話に聞いていたように、確かにきれいな少女ではある。少女はグロテスクに冷凍部屋から這い出た。少女は僕に向かって言った。

「今の発言、告白と捉えるべき？ でも私には心に決めた人がいるの」

「いえ、違います」

僕は彼女の言葉から間を空けず否定した。そして肝心の次郎丸はと言うといつも大きな態度のくせして困惑している。少女はそんな次

郎丸に気が付いたようだ。

「あ…あなた……」

僕は次郎丸の話すタイミングを作るために言った。

「次郎丸さんから話があるらしいです」

次郎丸は小さく深呼吸した。

「…あの…あれだ。俺確かに悪魔超人になりたいって言ったんだけどさあ。その…やっぱり元に戻してくんねえか？」

「無理」

これで一件落ちちゃ…え？ 今この子なんて言った？

「あの、すみません。今無理って…」

「ええ、無理」

続く沈黙。僕らはひとまず居間に移動した。

ちゃぶ台を囲み座る3人。僕と次郎丸、そして肉まんの精である。僕はひとまず状況を整理することにした。

「え〜と、2人は仲が良いみたいですけど、お互いのことまだ知らないんですよね？」

少女がうなずいた。

「じゃあ、最初に自己紹介をしましょう。僕はこの神社の息子で、大平アツシっていいます」

「俺は、神田林次郎丸。神様だ」

少女は次郎丸の神様という言葉にほんの少し驚いた様子だ。だが、すぐ平静を取り戻し、言う。

「中万華あたりまんかです。肉まんの精霊を少々」

中万華……並べ替えたら中華ちゅうかまん万か。わかりやすいネーミング。すっかりお見合いのような雰囲気になってしまい、僕は「後は若いお二人に任せて」みたいな事を言っ出ていきたい気分だ。そんなことを考えていると、次郎丸が言った。

「おい、アツシ。ちょっと一緒に来てくれ」

立ち上がる次郎丸。僕は何が何だかわからないままついて行く。居間のふすまを閉め、僕達は台所の隅へ。

「何ですか次郎丸さん。出て行くなら僕一人で出て行きましたけど」

次郎丸は鋭い目つきで僕に言った。

「困った……」

何が困ったなんだ？ 何か問題でもあるのだろうか。

「さっきあいつ、心に決めた人がいるって言ってただろ」

「はい、次郎丸さんのことでしょうね」

次郎丸の目の色が変わる。

「それが困るって言ってんだよ！！」

「何ですか？ 次郎丸さんも回想シーンではまんざらでもない感じだったじゃないですか」

だからなあ、と言って次郎丸は続けた。

「俺にその気はねえんだよ」

「はい？」

「だから、俺が抱いたっていうのはあれ、なんかあいつが泣いてたから慰めの意味を込めてのハグだったわけだ。だから俺は別にあいつのこと好きでも何でもないんだよ」

次郎丸がそんな欧米風な理由であの少女、中万華をハグしたとは思わなかった。てっきりロリコンの衝動が抑えられなくなったのだと

「あれ？ でもさっき回想の時、禁断の恋とかなんとか言ってたじゃないですか」

「いや、なんか話してるうちにテンション上がったちゃって」

呆れた小神である。つまり彼女を誤解させてしまっているからどうにかしてくれ、と言っているわけだ。と言われても、僕自身恋愛経験は薄い。正直どうしていいかわからない。

「と、とりあえず戻りましょう。あんまり長いと不自然に思われま
す」

僕達は愛そう笑いをしながら居間に戻る。定位置へと座り、先ほど
と同じフォーメーションに。

「ずいぶん長かったね。えっと……次郎丸さん」

頬を赤らめている中万華を見て明らかに冷や汗ダラダラの次郎丸。
軽率な行動は控ようとつくづく思わされる。

「わ、悪いな…マン……マンカ」

「…初めて名前で呼んでくれたね……でもそれじゃダメ。メス豚っ
て呼んで」

いやいやいやいや、この子もかなり変わった子であることが判明。
僕の周りにまともな奴はいないのか。あ、ユリちゃんはすごいま
も。何ていうか聖母的な……何を考えてるんだ僕は。今はこっちだ。

「あの…マンカさん。さっき次郎丸さんを元に戻すのは無理って言
ってましたけど…」

「お前は何で名前で呼んでんだよ。キモイんだよ」

なにこの子。扱いが天と地の差なんですけど。何か怖い。かつあげ
されそう。次郎丸がそんな僕をフオローした。

「いや、あの…マンカ。そいつ良い奴だから。話くらい聞いてやっ

てくれよ」

何だか今日はすごく次郎丸が頼もしく見える。背中が大きい。

「次郎丸さんがそういうなら。……私が叶えた次郎丸さんの願い、悪魔超人にしてほしいは、今日の午前4時に実行されました。私たち精霊は一日に一つだけ願いを叶えることができます。ですが正確には、叶えると言っわけなく、一日だけ魔力を貸し与えるということなんです。次郎丸さんは昨日確かにこの契約を交わしたので、今日午前4時から24時間は悪魔超人になるという魔力が貸し与えられている状態なんです。貸し与えた魔力を途中で引き出すことはできません。だから明日の午前4時まで、次郎丸さんはそのままです」

長台詞で少しわかりづらいが、簡単にいえば今日一日次郎丸が元に戻ることはないということか。だが、逆に変に戻る方法を教えられて、面倒事に巻き込まれるよりは、戻る方法が無いとはつきり言われた方が諦めがつく。もう6本腕の件は諦めよう。今はこの少女だ。

ここまでで分かる事は、中万華が次郎丸のことを本気で愛しているということだ。次郎丸のアシユラマン化現象は明日には直るらしいので、深く考えなくても大丈夫だ。2年4組なら今日一日ぐらい次郎丸がアシユラマンでも何とも思わないだろう。

これからどのようにして次郎丸にその気がないことを伝えればいいんだろうか。普段の登校時間まであと30分。出来ればそれまでに解決したい。僕は中万華に向かって言った。

「あの〜マンカさん。もう次郎丸さんが元に戻ることに関しては諦めます。でも……ひとつだけ言わなくちゃいけないことがあるんです」

次郎丸のつばを飲む音が聞こえた。

「ん？何なの、少年A」

こいつにとって次郎丸以外の人間はエキストラでしかないらしい。僕は次郎丸を肘でこずく。それと同時に次郎丸の目の焦点がブレました。

「あのなあ、マンカ。そのくあれだよ。俺なあ、お前のこと別に好きじゃない…んだ」

言った！ 案外簡単に言った！ 次郎丸の快拳である。中万華がそれを聞いて、一瞬生気を失ったように感じた。だが次の瞬間にはまた頬を赤く染めた。……え？ 何で？

「またそんな冷たい態度とって。昨日の熱い夜のあなたはどこに行ったのかしら？」

僕は次郎丸に目で訴えた。

（次郎丸さん！ 何ですか、この感じ！昨日はお互いハグしあっただけじゃないんですか！？）

（え？ いや多分あれは夢だと思っただけ…。あれ？ マジで？ だってでもあれはあれだったし…。いやでも…あれ？）

馬鹿小神！ あれほど女には気をつけろと僕には言っているくせに。次郎丸が言った。

「アツシ…これはもう仕方ねえよ」

まさか次郎丸は…！

「マンカ、俺が責任をとろう。俺も男だ、ケジメはつけてやる」

別れのケジメをつけるはずが、違うケジメをつけてしまった。何と
いうことだ。次郎丸が結婚してしまう勢いだ。僕は言った。

「ちょ、ちょっと待って下さい！ 考えてみましょうよ！ 一夜限
りの関係だつて世の中にはあるわけだし…それにちょっと年の差が
気になりませんか？」

次郎丸は少し若くも見えるが人間年齢で20代後半であることは間
違いない。この少女、中万華は僕と同じ年くらいに見える。次郎丸
が言った。

「俺は478歳だけど。人間でいうと27歳くらい」

「私は284歳。人間でいうと16歳くらい」

あらまあ、ずいぶんと長生きなのね。

「ほら、11歳差ですよ！ これはきついんじゃないですか!？」

目の色を変えた中万華が言った。

「愛に年の差は関係ねえだろ、このカス。お前は一生女の尻追いか
けてるよ」

「な、何こいつ！ いい加減ムカついてきたよ！ 次郎丸さん、や

めた方がいいですって!!」

次郎丸は腕を組んでいる。組み方を編み出したようだ。

「いや、でも責任は責任だしな」

中万華は次郎丸の真ん中の腕に飛びついた。

「じゃあ早速婚約の手続きを! ……とりたいところなんだけど…」

ん? さっきまでの押せ押せの感じがどこかに消えてしまった。

「私…今借金とりに追われてるの…」

今まで反対してきたがこれはすこし事情が変わった。

「私の父がすごい遊び人でね、毎日毎日ギャンブルギャンブル。拳
句家の貯金を全て使い果たした上に、借金まで作って家を出て行っ
たの。私はその借金を肩代わりして、今まで返済してきたの。夜の
仕事だつてやったわ。でも…どうしても残り50万が払えなくて…」

中万華は非常にづらい人生を送っているようだ。僕は言った。

「次郎丸さん、何とかならないんですか?」

次郎丸は中万華見つめるだけで何も返さなかった。

「ちよつと次郎丸さん」

「え? ああ、何だ?」

次郎丸は意図的に無視をすることはあるが、このようなことは今まで無かった。それほど動揺しているということだろうか。僕はもう一度同じ質問をした。

「どうにか…ねえ。俺の有り金全部はたきやあ、準備できねえ額じやねえよ」

「じゃあ2人はもう結婚するんだし、出してあげればいいんじゃないですか？ どうせ次郎丸さん、ここに居候してて光熱費等一切払ってないんですから」

「お前今ここでそれ言う？」

中万華は花のような笑顔を見せた。

「良いんですか！ 次郎丸さん」

次郎丸は、ああ任せとけと返した。今日の次郎丸は本当に頼もしい。

僕と次郎丸は中万華を家に残し、家を出た。後ろからマモルが追いかけてきた。

「おはようアツシ！ おはようございます先せ…って先生！ 腕多いんですけど！ アシユラマンみたいになってますよ!？」

次郎丸は答えた。

「マモル、もうそのくだり朝のうちに一通りやったから」

「え！ マジですか！ ごめんなさい」

謝る必要はないぞマモル。それが普通の反応なのだから。

校門を抜けると辺りの生徒から大量の視線が。アユとユリちゃんがこちらへやって来た。アユが言った。

「先生、どうしたんですか！？ イメチェンですか？ コスプレですか？」

次郎丸はどこからともなく『1・5』と書かれた手持ち看板を出し言った。

「バージョンアップだ」

「あゝ、なるほど。バージョンアップですか」

今どの辺に納得できるポイントがあったんだ。1・5か。1・5に納得したのか。ユリちゃんも言う。

「格好良いですよ、先生」

仮面ライダーごっこを優しく見守る保母さんのような一言。またその微笑みがたまらない。僕の笑顔が気持ち悪いもの変わる。更にそこへ木田がやって来た。

「先生！ 何か今日アシユラマンみたいですね！」

「だ〜から！ 一通りやったって言うてんだろおおお！〜！」

木田の両腕、両足、腰を掴む次郎丸。これは今朝のあれだ。

「アシユラバスター!!!」

「ぎゃああああ!!!」

哀れな木田。白眼を向いて、口から変な色の液が出ている。ユリちやんがものすごく怯えているんだが。ベークンの歌で素早く治す次郎丸。このパターンが定番化してきた気がする。

その日の朝のうちは騒がれたものの、昼休みを過ぎる頃には誰も次郎丸の腕に関して何か言う者はいなくなっていた。(朝のうちに質問してきた者に片っ端からアシユラバスターをかけたので、誰も言えなくなっただと言るのが正しい)

時はすでに放課後。僕は次郎丸と一緒に下校した。

「何か今日の次郎丸さんの授業普通でしたね。どうしたんですか？」

僕が次郎丸に質問した。次郎丸は眠たげな眼で言った。

「……そうか？ 別に一緒だろ」

不自然だ。今日の次郎丸はとにかく不自然だ。何と云うか、覇気がない。今朝家を出てからだ。不自然でしようがない。

神社の石階段を上ろうとしたとき、次郎丸が僕の肩をつかんだ。

「何ですか、次郎丸さん」

次郎丸が封筒を僕に手渡して言った。

「ここにさつき下ろしてきた50万が入ってる。これをあいつに渡してきてくれ」

「え？次郎丸さんから渡せばいいじゃないですか」

次郎丸は早く行け、と言って僕の背中を押した。僕は仕方なく一人で石階段を上った。玄関から中万華の名前を呼びながら入る。彼女は居間でテレビもつけずに座っていた。

「マンカさん、これ次郎丸さんが渡しとけて」

僕は封筒を手渡した。彼女が言った。

「彼は？」

「なんかよく分かんないんですけど、石階段の下に」

彼女はそう、と言うと玄関へと向かった。僕は訳がわからないままその場につっ立っていた。

中万華は靴をはき、素早く玄関から飛び出した。石階段を確認すると、まっすぐそちらへ向かった。石階段の下には神田林次郎丸が立っている。彼女はゆっくりと石階段を降りた。次郎丸の横を通り過ぎようかというところで足を止めた。

「気付いてたんでしょ？」

中万華が言った。次郎丸はダルそうに頭をかいている。

「……何のことだ？」

「とぼけないですよ。私だってこんなことするの初めてじゃない。あなたの反応は……気付いた人間の反応だった。私が……詐欺師だつて」

次郎丸は何も言わなかった。中万華は携帯電話を取り出し、次郎丸に渡した。

「通報……して。警察じゃ駄目よ。精霊委員会に」

「何言つてんだ？ お前はまだ何も盗んじやいねえだろ？」

「今まさに盗むところ。現行犯よ」

次郎丸は小さくため息をついた。彼は言った。

「……人を疑うのに理由は要るぜ？ でもな、信じるのに理由は要らねえだろ？」

「え？ あなた何言つて……」

次郎丸は自分の携帯を取り出すと、彼女の携帯と赤外線通信で番号を交換した。そしてその携帯を彼女に返す。

「俺はお前がただの女だと思ってる。詐欺師でもねえ、俺の嫁でもねえ。ただお互いの勘違いだったって思ってた。で、今からは……」

次郎丸は自分の携帯に登録された中万華の番号を彼女に見せた。

「普通の知り合いだ。俺は普通の知り合いにそんな大金貸せねえ。だから返してくれ」

中万華は無言で封筒を返した。

「本当に……許してくれるの？このまま……友達でいてくれるの？」

「何を許すんだ？ お前は何もしちゃいない。ただ勘違いしてただけだ。まあ、何か謝りてえことがあるんならさっきの番号に連絡しろ。いつでも時間作ってやるよ、メス豚」

その場で泣きだした中万華に、次郎丸は気付かないふりをして石階段を上った。

僕は帰ってきた次郎丸に言った。

「あれ？ マンカさんはどうしたんですか？それにその封筒……」

次郎丸は小さな笑顔で言った。

「お互い勘違いだったのがわかったんだ。だからあいつは俺に金を返して、どっか行っちゃった」

「ああ、何だ勘違いだったんですか。良かったですね」

「……ああ、良かった」

そう言って立ち去る次郎丸の背中には、しわだらけの赤いプーマのプリントがあった。

翌日。僕は目覚ましを止めてもう一度寝た。

「遅刻！！ 次郎丸さん！ 起きて下さい！」

「何だようっせーなあ。朝くらい静かにできねえのかよ」

という次郎丸の姿は人ですらない、バネであった。

「次郎丸さん！ 今度はスプリングマンになってますよ！！」

「え？ マジで？」

僕たちは冷蔵庫に向かった。冷凍部屋を開けると、そこには淡いブルーの目を持った少女が関節を変な方向に曲げて入っていた。

「何やってんですか！ 昨日のは勘違いだったんでしょ！」

少女はグロテスクに冷蔵庫から這い出て言った。

「勘違いは勘違いだけど、私が次郎丸さんを愛していることに変わりはないの」

「おいおいふざけんなよ、メス豚。お前までストーキングか、おい」

「違うわ、ここに住むことにしたの」

僕は耳を疑った。

「は！？ 何言ってるんですかあんた！！」

「そーだよ、メス豚。帰りやがれ、このカス」

彼女は頬を赤く染めた。

「ふふふ、もつと罵りなさい。それが私の力になる！」

こうして僕の家には、また変な家族が一人。神様と肉まんが家に住み着いてるのは、世界中探し回ってもここしかないだろう。

その日の中万華の笑顔は、昨日よりも晴れ晴れとしていた。

第4章 林間学校だ

鮮やかに光り輝く緑の屋根。耳を澄ませばピーヒョロロ。都会に
疲れた僕らの体を優しい風が静かに癒してくれる。

「なあ、おい。山歩きとかめちやくちやだるいんだけど。参加しな
きゃだめなのこれ？ロープウェイあんだろ？歩くぐらいで自然と戯
れられたらそりゃ、楽なもんだよ。あのロビンフッドですらなあ、
山と友達になるのはこれ、大変だったらしいぞ？」

先ほどまでの安らかな気持ちはどうしてくれる。

「ちよつと次郎丸さん！せつかく林間学校来たんですからもつとこ
う、いい雰囲気を作りましょうよ。それじゃクラツシャーじゃない
ですか。雰囲気クラツシャーじゃないですか」

僕らは現在、林間学校にやってきている。2年生1学期の最大イ
ベントだ。中万華を家に残すのは非常に苦労した。次郎丸が、

「放置プレイだと思え」

と言うと、何とも簡単に静かになったが。普段のメンバーはもちろ
ん一緒である。今は組ごとに列をなして山を歩いているところだ。

「だってよお、この林間学校、なんか旅館泊まるらしいじゃねえか
どんな情操教育だよ。普通はほら、林間学校専用のキャビンとかあ
んだろ？何考えてんのこの学校」

次郎丸の言い分にも一理ある。というか、結構正しいことを言っ

ている。この中学校は私立のため、所々におかしな点があるのだ。
(私立という設定はこういうところに役に立つ)

僕は次郎丸の言葉に何も返さず、そのまま足を動かした。しばらく歩いてみるとまたまた自然の癒し。まるで心を撫でられているようだ。鳥のさえずり、草木のざわめき、しずかなエンジン音。・・・ん？

「こんな時のためにこれ持ってきといて正解だな。ベストアンサーだな」

そこには優雅にセグウェイを乗りこなす次郎丸が。

「何やってんですか！ていうかそれ何か前に小泉元首相が乗ってた変な乗り物じゃないですか！」

次郎丸は格好をつけてセグウェイから降り、それを担いで言った。

「変とはなんだお前！見てみ、すげえ軽いよ？これすげえ軽いよ？最近のガキはデザインに凝りすぎなんだよ。機能美って言葉を知らねえのか？」

「とりあえずもう乗らないで下さい。なんか真面目に歩いてるのがバカらしくなってます」

次郎丸はわかったと言って、セグウェイを片手で担ぐ。彼はそのままそれを振りかぶった。

「え、何？何でこっちを向くんですか？嫌だ、ちょっと待って、理由がわからない！そのまさか！投法をやめ……ぶふっ……！」

頭の中でおかしな音がした。世界で一番早い音。次郎丸は静かにベ
ーコンの歌を唱えた。次郎丸は林間学校というイベントでテンショ
ンがおかしいようだ。

多少乱れてきた列の中で、一人の男が僕のもとへやってきた。木
田である。

「アツシ、ちょっといいか？」

こいつとのツーショットは珍しい。大体いつもは間にマモルがいる。

「どうしたんだよ」

僕は足を止めずに言った。木田がほくそ笑んでいる。何かまたいら
ないことでも考えてるんじゃないだろうか。

「あおさ、11時頃に俺の部屋に来てほしいんだ」

11時と言えば、就寝時間の30分後である。

「何するんだよ、そんな時間に」

「いいから来いって、他の奴もみんな来るから」

不安が残るまま僕は承諾した。どうせ一人で部屋に居てもつまらな
い。

午後3時、2時間の登山を終え、ようやく旅館に到着である。そ
の名は語素露離宿。

「ゴスロリ宿：ですか」

最中先生がやって来て言った。

「ロシアを離れた人も素の自分で語れる宿、という意味だそうだ」

「いや、なんかもう意味わからないんですけど。単なる趣味でつけたけど、後々適当に意味つけ足しました感全開なんですけど」

ゴスロリ宿の自動ドアが開くとそこには普通の和服美人が立っていた。年齢は重ねてる方なんだろうが、とても美しく、何よりエレガントである。

「ようこそおいで下さいました。私、当旅館の女将、座右の銘は壁があるならぶち壊せ、山田清美ナンシーと申します」

「いや、振り仮名おかしいです」

僕が初対面の相手につっこむのは2回目である。1度目はもちろん次郎丸。後ろの方から木田が乗り出してきた。

「あの！俺も座右の銘あるんです！虐殺の神って言うんです！」

「ではお部屋のほうを確認させていただきます」

ナイスすかし芸。この女将はなかなかの強者だ。

僕は簡単にロビーを見渡した。そこそこ広く、中央に四つのソファーが向かい合うように並んでいる。そこには一般宿泊客の姿が見えた。どうやら今日ここに泊まるのは僕たちだけではないらしい。何

やら大きな声で話をしている。

「だから我々の祖国、ロシアは最高なんだよ！日本もいいけど、やっぱりロシアだねー！」

いや、本当に語素露離ゴスロシ！？後付けじゃなくマジで語素露離！？

僕はマモル、モロミン君と同室である。よくこんな数の部屋がとれたものだ。どこにそんな財源があるのか。部屋に荷物を置くと肩からどつと力が抜ける。

「今日ってこれからどうすんの？」

さわやかな汗が非常によく似合うマモルだ。何故か人より荷物が少ない。モロミン君が答えた。

「コレからご飯の時間デスよ」

夕食は和食だそう。僕たちは順番にトイレに入って夕食の準備をすることにした。トイレのドア越しにマモルが言った。

「なあ、アツシ！このトイレなんかエチケット機能ついてるよ！小川の音がする！」

「よかったな」

その時、部屋のドアをノックする音が聞こえた。僕らの部屋だ。

「おーい、タイムボカンシリーズ3人組。もう夕食だぞー」

次郎丸である。ていうか、誰がドロソジヨだ。

「あ、はい。もうすぐ行きます」

「なんか今回の林間学校、俺の影薄い気がするんだけど」

「知りませんよ」

食堂は上の階である。古いタイプなのか、エレベーターの横にP A Yカードの自販機があった。興味があるとかそういうわけではない。そういうわけではない。

食堂にはすでにほとんどの生徒が集まっていた。座敷にきれいに並べられたお料理。この前の次郎丸のものは大違いだ。その次郎丸はというと、その辺を歩き回ってあらゆる人物にエビの天ぷらをねだっている。子供か。

僕は出来るだけユリちゃんの近くへ。断じてストーカーではない。恋に目覚めた中学生なんてこんなものである。その僕の隣には例の小神が。

「ちよ、俺今刺身とかの気分じゃないんだけど。すいませ〜ん！チャーハン下さい！！今日チャーハンの気分なんだよね！！」

「どこのワガママ王様ですか。無理難題を人に押し付けないでください」

厨房のほうから一人のお年を召した女性がやってきた。

「ごめんね、お兄ちゃん。今、カイエンペッパー切らしててね」

「カイエンペツパーって、あなたもどんだけ本格的なチャーハン作るうとしてるんですか！いいですよ、そんなに頑張つて要求に答えて下さらなくても！」

次郎丸が優しい笑顔で言った。

「おばちゃん、ありがとな」

頬を赤らめ、恥ずかしそうにうつむくおばちゃん。

「え！何、この感じ！？二人の間に何があったの！？」

そこにエビの天ぷらを大量に持ったマモルがやってきた。

「先生！ほら、こんなにもらえましたよエビ天！！」

次郎丸は目を輝かせた。シャイニング・アイ。

「お、よくやったなマモル！やっぱり『エビって癌がんになるらしいよ作戦』は完璧だな！」

「ちよつとそれ！！作戦名だけでその全容が見えてきましたよ！！
確実に嘘でしょ！詐欺でしょ！」

次郎丸は小さなため息をついた。

「本当に……そう思うか？」

「え？ちよつ……。あ！、危ねえ！！危うくエビ天を捧げてしまうところだったよ！何だよ、こいつ！無駄に誘導うまいよ！」

結局夕食はほとんど口に出来なかった。

僕は一人部屋に戻ることにした。結局ユリちゃんとは全く話をしていないが大丈夫。林間学校は一日ではない。これから彼女との時間を思う存分楽しめばいい。ふふふふ。いけない、笑いがこらえられない。

部屋は思った以上に散らかっている。中学生男子の爆撃跡なのでから納得である。

僕はしばらくテレビでも見て二人を待つことにした。16インチの画面。上部にはPAYカードを入れる家では到底お目にかかることのない機器がある。何度も言うが興味があるとかそういうわけではない。現在他の生徒が食事中で、エレベーター前まで誰かとお会う確率が非常に低いなんてことに気付いてもいない。僕は自分の荷物の中から財布を取り出した。が、僕に野口英世を持って廊下を走る勇気はない。まして、帰りは野口英世がPAYカードに代わっているのだから、僕の小さな度胸で耐えられるはずもない。

「やめとこう。うん、やめとこう」

僕は声を出して欲望が度胸に勝利してしまうのを抑えた。理性というやつに仲介に入ってもらったのだ。

「何をやめとくの？」

僕は心臓が爆発しそうになった。2メートルほどすごいスピードで後ずさりする。

「マ、マモルか。驚かさないでくれよ…」

僕は息を整えた。

「まったく、ビックリしすぎだよ、アツシ。でも財布なんか見て何してたの？」

マモルがこういうことにうとい奴で助かった。これが木田だったら学校中に過剰に装飾された噂が広まっていただろう。

「いや、あの〜ほら。家へのお土産とか、明日買おうかな〜って」

「あ〜そうなんだ。俺はてっきりPAYカードでも買うのかと」

イエス、ユーアライト。見事な推理にかなり驚きだが、マモルがPAYカードの存在を知っていた

たことの方が驚きである。普段のキャラに惑わされてはいけない。男は皆こんなものである。

マモルが言った。

「PAYカード買ったらこのスーパーファミコン出来るんだよな」

疑ってすまなかった、マモル。本当にお前は純粹でいい子だ。

「マモルが僕の友達で良かったよ」

「何言ってるの？」

そんな会話をしていると、モロミン君が部屋に戻ってきた。

「二人とも見つめアツテ何してるデスカ？ハっ！！まさか二人はアツテはならナイ関係！？マ

マー！私八また一つ大人の階段ヲ上ったよおおお！」

「今すぐ降りろ！違う！まったくもって誤解だ！！！」

マモルは首をかしげている。多分あってはならない関係の意味が分かっていないんだろう。純真無垢とはまさにこのことである。僕は興奮気味に言った。

「僕らは断じてあってはならない関係じゃない！今だって僕はPA Yカー・・・あ」

「ママー！私はマターっ友人の秘密を知ってシマッタよおおお！」
つい興奮して自白してしまった探偵漫画の悪役ってこういう気分な
んだろうか。

「違う！今のはまた何か違う！逐一で母親に報告するのをやめろ！」

「ママー！私の友人八学校のイイツケに背いてスーファミやること
してるよおおお！！！」

「心が汚れてるの僕だけだったよ！お前何も悪くなかったよ！！ど
んどん報告してくれ！」

ではさっきのあってはならない関係とは一体何だったんだろうか。
なんか学校に黙って携帯持ってきてる共犯とか、そんなことを言い

たかつたんだらうか。いや、違うか。謎は謎を呼ぶ。

モロミン君は落ち着きを取り戻し、僕らは三人で自由時間を過ごす。こういう時のトランプは楽しいものだ。

午後9時、僕らは、お泊りの定番である大浴場へ向かった。これより20分間は4組の入浴タイムである。右手には下着と着替え、左手にはダイソーで揃えた入浴セット。

エレベーターで木田たちと一緒に上がった。木田と同室である具府君ぐふくと齒岸君はしがしが仲良さげにおしゃべりをしている。木田が言った。

「俺もみんなと同室が良かったよ。こいつらガンダムの話しかしないんだ。いい加減俺のWウイングだけの知識じゃ追いつかなくなってきてさ。しかもこいつらの今欲しいものなんだと思う?」

僕はしばらく唸って言った。

「でっかいプラモとか?」

「違うよ。あいつらに言わせればそれは素人の考え方なんだと。あいつらは集めたものをきれいに保管できる大きな倉庫が欲しいんだって」

僕らの話に具府が入ってきた。

「グフフフフ、みんなもそう思うだろう?僕の作った『アツガイの橋』のジオラマを保管するにはそれぐらいの巨大設備が必要だと思っただよ〜」

僕らは無視した。

思春期である中学2年生の同時入浴。これっていかがなものだろう。みんな何と云うか、成長途中なのだから。作者は嫌だそうだ。僕らはお互い気を使って周りを見ないように服を脱ぎ、タオルを腰に巻いた。

4組男子、総勢18名の入浴である。全員が自分のシャワー台を決め、体を洗い出した頃であった。

おもむろに開く戸。そこには腰にタオルを巻いていない次郎丸の姿があった。僕は頭の中を駆け巡るクエスチョンマークに従い言った。

「え？何で次郎丸さんが？ていうか次郎丸さん、僕らも思春期なんですから少しは股間のほうに気をまわしてくれると嬉しいんですが」

次郎丸は無視して言った。

「お前らちょっとシャワー止めて静かにしてみろ」

更に速度を増すクエスチョンマーク。僕らは言われたとおりにした。すると！

「き、聞こえる！」

木田が言った。確かにこれは…女子の話声である。え？これマジで？

「次郎丸さん、これはどこから…？」

次郎丸は壁の上部を指差した。そこにはなんとパラダイスへの入口が。木田が言った。

「先生！あれはまさか、漫画とかではよく見るけど、実際ではなかなか存在しないあれですか!？」

「そうだ、俺も意味も名前もわからねーけど、あれだ」

男子は奮起した。これは行くしかあるまいたな空気が作られる。マモルが僕に言った。

「アツシ、みんな何をあんなに楽しんでんだ？」

清廉潔白。

「何かあの・・・お約束をしようとしてるんだよ」

次郎丸は僕ら18人を6人ずつ、ABCの3つの班に分けた。僕は上空担当のB班。

「皆の者！今まさに戦いの火ぶたが切って落とされた！お前たちの欲するものは何だ、木田！！」

次郎丸の問いかけに木田は休めの体制で答えた。

「女子のあられもない姿であります、軍曹！！」

「違う！もつと具体的に答える！！」

明らかに木田の顔が青くなった。少し悩んで吹っ切れたのか、彼は言った。

「吉川さんの裸であります！！」

お前吉川さんが好きだったのか。そうか、でも僕もあそこを登りき

ればユリちゃんの……。これはまずくないか？僕が成功する時はそれすなわち他何名かも成功するということだ。もしそうなればユリちゃんの体がそいつらにも見られてしまう。

……。どうする。僕は正直言っただけだ。だが、他の男子にユリちゃんの姿を晒すのはなんかとんでもなく嫌である。僕は言った。

「あの〜軍曹。これ本当にやるんですか。女子かわいいそうじゃないですか？」

「甘えたことを言うな、大平二等兵！お前は何のために林間学校へやって来た！？力ヌー体験

か！？乳しぼり体験か！？否！そんなきれいごとは通じない！お前はこの林間学校に参加した

時点ですでに同志とみなされた！次にその様な弱気の発言をしてみろ！それは反逆とみなす！いいか！」

僕はあつけにとられた。

「あ…サー、イエツサー」

これは参加しなければ殺される。僕の危機察知能力が脳に直接教えてくれた。僕はマモルと共に非暴力を訴えたい。一応参加はするが、その中で訴えていこう。そうだ、僕には訴える術があるではないか。ツッコミという僕の専売特許が。今宣言しよう。ツッコミで世界は救われると。まず手始めにこの紛争を止めてやる。

水中担当A班、上空担当B班、参謀（場合によって上空）担当C班。これが僕らの隊図である。次郎丸はC班、木田はA班、先ほども言ったように僕とマモルはB班である。水中担当はお湯の共有のために湯船の内側に開いている最もリスクの低い共有口から、僕ら

B班は、先ほど次郎丸が指さしていたあそこから攻めるのだ。次郎丸達C班はその指揮をとる。次郎丸が言った。

「よし、まずはA班とB班同時に行くぞ。両班共に二人ずつ有志を出せ」

僕は最初は行かなかった。一度目というのは何かしらの問題で失敗するものだ。ここは心配することはないだろう。

「A班、やはり水中からは、肉眼で捉えることができません」

予想通りだ。僕たち素人に、完璧な風呂覗きが出来るわけがない。B班の男子生徒が小声で言った。

「軍曹、女子の姿を確認しました。ただ、湯気が多く、非常に見づらいで……ちよつと見えましたあ……！」

あれ！？なんか成功しちゃってるよ！しかもバレていない、パーフェクトだ。え、ちよつと待って！普通漫画とかだと結局成功しないで……みたいな感じじゃないか！何うまいこと覗けてるの！？

「よし、そのまま湯気が晴れるまで待機しろ。アツシ……あ、大平二等兵ちよつと来い」

「次郎丸さん、自分で決めたキャラ付け間違えないでください」

僕の間を見て素っ裸の神様は言った。

「俺を肩車しろ」

「無理です」

僕に次郎丸を肩車できる力はない。多分。

「いいからやれ、一番見たいのは俺なんだから。中学生の裸なんて滅多に見られないんだぞ？」

「やっぱあんたロリコンですか、とにかく僕は絶対やりませ……ぜひやらせて下さい次郎丸さん」

ベーコンの歌は効果抜群だ。

「ふんっ！！」

僕は勢いよく声を出した。次郎丸は想像していたよりずいぶん軽かったが、それでも僕にはつらい。

「よしっ！いい感じだぞ、アツシ！ほら、もっとよせろ！」

「次郎丸さん、首になんか変な感触が……」

次郎丸はほとんど関心がない様子で言った。

「気にすんな、みんな一緒だ」

「いや、でもなんか……気持ち悪いんですけど」

僕の謙虚な反撃。

「誰のが気持ち悪いだ、この野郎！これでも仲間の中では1、2を

争う……」

「いいです！もう言わなくて結構です！！」

僕は壁のほうに近づいた。その時である。次郎丸の重さについていっばいになっていった僕は周りが見えなくなっていた。足もとに落ちていた石鹸に気づかなかったのだ。

「うおっ！」

僕の右足はきれいに石鹸の上へ。限りなくゼロに近い摩擦力。僕はそのまま背中側から……。

「え！ちよっ、アツシっ！！これ死っ！？」

鉄球を床に落としたような音。次郎丸の断末魔は『これ死っ』であった。見事に僕のクッションになった次郎丸。マモルが近付いて言った。

「先生！聞こえますか！先生！！」

僕も続いて言った。

「次郎丸さん！大丈夫ですか！？」

息はしている。というか、神様は死ぬのだろうか？そこは疑問である。

「うっ……アツ……シ」

「何ですか？次郎丸さん！」

苦し紛れに伝える次郎丸。

「お前……死ねっ……うっ……」

「先生ええええ!!!」

マモルの叫びがこだまする。A班木田も急いでやってきた。

「くそっ、軍曹がやられるなんて……。一体これから誰がこの隊の指揮を……」

「やつべ、ちよつとこれ血イ出てんじゃねえの？なあ、誰か！後ろ見てくれ、これ」

おもむろに立ち上がる次郎丸。木田が言った。

「え？あ、ちよつと待って下さい……。あゝ出てます出てます、パツクリいってます」

「マジで？おいおい、頭から血なんて出たの初めての経験だよ。どうだ？血と一緒に何かもつと大事なもので垂れ流してねえか？ていうか記憶とかこれどころ行っちゃったんじゃない？アウエイしちゃったんじゃない？」

しばらく続く沈黙。

「次郎丸さん」

僕は呼びかけた。

「その…何でもないんですか？」

「何でもないんですかつて、血イ出てんだろーが、血」

いや、それはそうなんだが。何というか、何だろつ。この冷めきつた空気は。

「いやだつて、頭パツクリいつてるんですよ？普通もつと死にかけになるでしょ。そしてそのまま覗きは終了でしょ」

「いや、ほら。俺昔から打たれ強いから。世間の目とかにも」

またも沈黙。もうこれ、雰囲気ぶち壊しである。その沈黙の中聞こえてきたのは女子の声。

「ねえ、何かさつきから男子の方騒がしくない？」

「うん、私もそう思つて……きゃあ！！上に誰がいる！！覗きよ！！」

僕等が一斉に目をやると、先ほど次郎丸に待機を命じられた一生徒が。

「先生！見つかりました！ていうかなんか色々投げようとしてます！』うる星やら』みたいな展開になりそんな感じです！！」

その言葉が合図になったように、壁の上のなんかあいてる所から大量の物体が投げ込まれた。

だるま、ビリーバンド、三味線、ティラミス、USBアダプタ、四^不星球。^{シンチュウ}

「次郎丸さん！何か女風呂から現場に似つかわしくないものばかり飛んでくるんですけど！」

次郎丸はあたりを見回した。

「くそっ！こつちには手持ちがダウジングロッドしかない！！反撃できねえ！！！」

マモルが言った。

「先生！エビ天がまだちよっと余ってます！」

「よし、それだ！」

「それだじゃねーよ！！エビ天にどんな期待をかけてるんですか！
どんだけ好きなのエビ天！？」

僕らがエビ天を投げようとした、まさにその時。男風呂の戸が勢いよく開かれた。

「お前ら、うるさいわああああ！！他の客からものすごい苦情の嵐なんですけど！クレーム係の仕事がいかに大変なのか思い知らされ
たんですけど！！！」

黒光りするムキムキボディに見事な角刈り。体育の『ロドリゲス』
こと子持先生だ。この戦争は今終戦への道を歩み始めたのだ。

「ほんとお前らねっ！馬鹿なんじゃないの！？このご時世で女風呂の覗きするなんてほとんど天然記念物だよ！お前らコウノトリ！？違うよね？お前ら人間だよ？これからも順調に増え続けていく人間だよ？だつたら記念物きどりの行動やめてくんね！？なんかもう腹立たしいわ！どんな気分だつた！？見てどんな気分だつた！？ていうかどんな感じだつた！？反省文にもすごく詳しく図解入りで説明しろ！最近の中学生の成長を教育の一環として私に伝える！いいな！？」

僕たち4組の男子はロドリゲスからこっぴどく叱られてしまった。次郎丸はベーコンの歌で逃げ延びていたようだが。説教されてしおしおになってしまったマモルが言った。

「はあく、ロドリゲスの説教って何かの機能ついてるの？出川の声がする」

「それは機能じゃなくて、末期症状って言うんだぞ。大丈夫か？」

マモルが幻聴を聞くほどの説教であつたということに皆に理解してほしい。時間はすでに午後10時30分、学校側の決めた就寝時間である。ただ、これを守る者がほんのわずかであるということは、すでに常識である。僕は木田との約束を思い出していた。内容を詳しく聞いていないため、闇鍋気分。モロミン君が言った。

「アツシ君も木田君に誘われましたか？」

「あ、モロミン君も誘われてたんだ。じゃあマモルも？」

マモルは右手の親指を立てもちろん、と返事をした。他のみんなも

誘っているとは言っていたが、もしかしたら4組全員を部屋に集めるのかもしれない。18人も部屋に入るのだろうか？

午後11時、約束の時間である。僕らは先生達に見つからないように細心の注意を払った。幸い木田の部屋は近かったので、楽に突破できた。部屋の中には全部で10人。さすがに全員ではないようだ。僕はこの不思議な集まりの主催者である木田に質問した。

「木田、今から何するんだ？」

木田はデイズ二一映画の魔女のような不気味な笑顔で言った。

「ふふふ、これを見る！」

木田の高々と掲げられた右手には……。

「ペ、PAYカード!!?」

こいつ買ってきたのか！PAYカードを。さすがに僕より行動力があるようだ。木田が言った。

「木田、ということはまさか……!」

「そう、そのまさかだ」

そ、そうか。ついにこの時がやってきたのか。僕の鼓動は普段の3倍速くなる。鼻高々な木田は溜めて溜めて、言った。

「じゃあみんな!!早速スーファミ大会だ!!」

そのまさかじゃなかったああああ！！そうなのか！汚れているのは僕の心だけなのか！？
僕は煩惱を捨てようと決心した。

そのころ次郎丸は。

「チツクシヨ、なんでこれ1000円戻ってくんだよ。頑張れ漱石！お前なら行けるって！お前がダメだったらもう紫式部しかいねえんだよ。あいつには任せられねえよ」

エレベーター前でお札と格闘していた。

更にそのころロドリゲスは。

「……こいつらほんと、無駄に絵がリアルだな。けしからん。なんだ、こんな感じなのか？本当にこんな感じなのか？」

ロドリゲスの部屋のドアが開く。次郎丸である。

「ロドリゲス、買ってきたぞ……ってお前、こっちよりその図がいいのか？」

「いや、図が良いとかそんなんじゃないからね。これはあの、教育の一環だから。あなたも保健体育の教師なら勉強しといて損は無いんじゃない？」

次郎丸はPAYカードをテレビの上の変な機械に入れながら言った。

「いや、俺は今からこっちで大人のお勉強するから」

ゆっくりと何かをかみしめるようにうなずくロドリゲス。彼らはP
AYカードをスーファミの為に使うのではない。大人の勉強……い
や違う。大人の事情に使うのだった。

昔の偉い人は言いました。

PAYカードはその使い方によって善にも悪にも姿を変えると。

第5章 最終日だ

曇りない月だった。空には今まで見たことのない無数の光。そこに今まで存在していたんだろうが、僕らの目には届かなかった光。

今日は林間学校最後の夜である。キャンプファイヤーも終わり後は最後のイベントを残すのみ。案外むなしい、不思議な気持ちだった。3日間きちんと行事は楽しんだし、毎晩スーファミ大会にも参加した。こんな楽しい日が続いたのに、いざ終わろうというときにはさっぱりしている。

僕はキャンプファイヤーの片付けに参加していた。ほとんどの男子はサボっているが、ユリちゃんが参加していたからだ。彼女が頬を黒くしながら炭を片付けているのを見ると、なんかもう健気で健気で。

「アツシ、お前何ニヤニヤしてるんだ？」

僕は今ニヤついているらしい。

「いや、何でもなし。早く片付け済まそう、マモル」

僕たちが炭を指定された場所に投げ込んでいる間。あの男が男子を集めて何やら話をしている。

「いいか、お前らはまだ中学2年生だ。ひよつこだ。うんこだ。だからこそキチンとした性教育を受けなきゃいけねえ」

集められた男子生徒の中から一人が挙手して言った。

「先生、うんこは言いすぎです」

どうやら性教育を教え込んでいるらしい。まあ、次郎丸は保健体育の教師であるわけだから、ここは羊と触れ合うハイジ見守るおじいさんのような目で見守ることにしよう。

「最近のガキはよお、やれできちゃった婚だ、やれ14歳の母だの、キチンと性教育を受けてねえからこんなことになんだよ。いいか、このプリントをよく読めば、性の何たるかが分かるだろうから」

次郎丸は男子全員にあるプリントを配り始めた。暗くてよく見えな
いが……！！

「あああああああ！！」

僕は集団の中に走りこみ、プリントを急いで回収した。その瞬発力はバレーの大会でボールが落ちたところをタオルで拭く人にも劣らない。

「お前、何すんだよ！ 俺の作った（ピー）の（ピー）のプリント取んなよ！」

「何言ってますか！ こんなん中学生が見るもんじゃないでしょ！ モザイクいるよ、これ！」

次郎丸は自分の持っているプリントの原版を叩きながら言った。

「お前みてえに性情報を簡単に取り上げようとするから子供たちが反発するんだろが！ 思春期は天の邪鬼だよ！？ こつやって教えるところは教えるのが大人の役目だっつもの！」

僕も負けじと集めたプリントの束を叩く。

「その性情報がディーブすぎるんでしょうが！　何だよこれ！　こんな簡単に深いこと教える大人がいるから子供たちが性衝動駆り立てられてんでしょうが！」

まったく油断も隙もない。こういうお友達の子供たちからは支持されるが、親御さんからは嫌悪されるのだ。

清掃作業が終わり、僕たちは山の中腹、ゴスロリ語素露離宿前に集められた。次郎丸が前に出て、メガホン片手に大声で言った。

「ほんじゃ、今から林間学校お馴染み、肝試し大会を始める！」

体育座りですらりと並んでいる生徒の中から一本腕が伸びる。

「先生、今は5月ですよ。時期的におかしくないですか？」

「それはしょうがねえよ。本当はまくら投げでもやるうかと思っただけだ、それだと球技大会とかぶるだろうが、なんか。作者の考えに考え抜いた結果だ！」

「先生、今小説内の人物として出してはいけない言葉が聞こえたんですけど」

どうやらこれから本当に肝試しをやるようだ。僕はあまり乗り気ではない。考えてもらいたいが、5月半ば、それも山の夜。寒すぎる。自論だが、肝試しを夏にやる理由はお化け役が寒さに負けないようにするためであろう。

いや待て、これは実はチャンスではないだろうか。肝試しと言えば、ラブコメなんかでは欠かせないカップル成立行事。これで一気に主人公とヒロインが近づくなんていうのはもうお約束である。ていうか常識である。運よくユリちゃんとペアにでもなってみろ。

「きゃあつ、怖い！」

彼女が僕の左手に飛びつく。

「あつはっは。まったく、ユリちゃんは怖がりだなあ」

ふふ、ふふふふ。

「アツシ、またニヤニヤしてるけど」

妄想から現実へと引き戻すマモルの言葉。

「え！？ ああ……病気かなあ」

僕は目を隠し取り繕う。次郎丸が言う。

「そんで、4組！ 俺と一緒にお化け役だから、気い入れて脅かせよ！」

妄想はしよせん妄想。ユリちゃんとペアになるとか以前に、参加できないなんて。いやいや、だが落ち着いて考えてみる。ユリちゃんと同じクラスだ。お化け通しでいい感じになったりするかもしれない。

4組全員で山を少しばかり登る。しばらくしてからたくさん的小

道具が並べられた空地に辿り着いた。僕はマモルと一緒に傘お化けになることに。ユリちゃんは……なんて可愛らしいお岩さんだ。頭の三角のあれがもうなんか素晴らしく可愛く見える。何枚でも皿を数えて下さい。僕とマモルの元に汚い小豆洗いが。木田である。

「あ、お前らはジーザス武田の格好してるんだな」

右手をあげた小豆洗い。

「何そのバブル前後の若手芸人みたいな名前！？ 傘お化けだからね！」

マモルが続く。

「あれ？ 俺はジーザス武田のつもりだったんだけど」

「え！？ ちょ、マジで……？」

個性あふれるお化けたちの総大将。神田林次郎丸が前に出る。この男が何かをしゃべる時、決まって静かになる。不思議なパワー。

仁王立ちで立つ次郎丸は、体中が粘膜で覆われ、口から出てきたもう一つの口からデロデロと何かが垂れ出ている。そのデロデロは大地を溶かす。かぶり物をした次郎丸は言う。

「よっしゃー！ みんなお化けの準備出来てんな」

「次郎丸さん、あんたはお化けじゃなくてエイリアンです。それだと脅かすというよりも残虐的に誰かを殺してしまいます」

「何を言ってるんだ、お前。学校にエイリアンは欠かせないだろうが。」

昔の進研ゼミのCMにもエイリアンがでてただろ」

「そのネタを一体何割の人間が理解できるのか考えたことありますか？」

次郎丸はエイリアンのかぶり物を取った。

「んだよ、お前だってジーザス武田なんてわかりづらいお化けじゃねーか」

僕は眼をこれでもかというくらいひんむいた。

「さつきから何なんだよ、ジーザス武田！ この容姿のどこにジーザス要素が含まれてるの！？」

とにもかくにも、肝試しは始まった。配布されたお札を男女2人組で山の頂上にあるお寺に置いてくるといういかにもなルール。僕たち4組はそれを脅かすわけだ。

山の中は思っていたより寒くない。これなら風邪は引かないだろう。僕とマモルのダブルジーザスは2人そろってゴールである寺の近くに隠れることにした。実はここからこう、上手いこと体を持ち出すとユリちゃん演じる可愛いお岩さんが拝めるのだ。

「アツシ……。今になってジーザス武田じゃインパクト弱い気がするってきたんだけど」

マモルの真剣な目つき。

「大丈夫だよ。もし気になるなら、この辺の草とかで装飾したらいいんじゃないか？」

「それはダメだって！ ただの傘お化けになるし」

ジーザスの基準というのは想像以上に厳しいご様子。

そんな時であった。肝試し第1組の男女がやってきたのだ。早速身構える僕とマモル。……の前に、お岩さんの脅かし方を見物させてもらおう。ユリちゃんは友達と2人で呼吸を合わせている。口への字にして、体を前傾に。草むらから手を延ばし、男子の足首をつかみ、そのままめいっばい不気味な表情で叫んだ。

「こんじゃくものがたりいいいいいい！！」

「ぎゃあああああ！！」

なんて無駄にうまいんだ、ユリちゃん。こちらから見ても背筋が震えた。女子の方が、もう怖がりすぎだって、とケラケラ笑っている。いやいや、実際足首をつかまれてあれをされたら、嫌でも叫んでしまうだろう。

僕はマモルの肩をこづいて言った。

「僕たちもあれ位やってやるう」

マモルは当たり前だと言わんばかりに自分の胸を2回叩いた。最初のペアが近づく。6メートル、5メートル。ペアが僕達に近づくにつれて、僕の鼓動は早くなった。こんなことで緊張しているのか？ いや、これは武者震いというやつだろう。

「まんよつしゅつしゅつしゅつ！！」

僕たちは2人同時に飛びだした。男女も同時に叫ぶ。

「うわああああ！！ 傘お化けだああああ！！」

「違ええええ！！ ジーザス武田だああああ！！！！」

僕たちは他人には決して理解されることのない主張を叫んだ。

肝試しが始まりすでに30分が過ぎた。僕たち4組のお化けはなかなか評判がよいらしい。いくつか感想を頂いている。少しばかり紹介しよう。

ペンネーム、サザン大好きっ子さんからの感想。お岩さんかわいすぎる。

ペンネーム、ミスターはじっこさんからの感想。エイリアンってお化け？

ペンネーム、もっこりもこもこさんからの感想。お岩さん萌え。等等など、たくさんのお岩さんファンが誕生している様子。こいつらはあとで電気アンマ決定だ。ライバルは増やさん。

僕とマモルはこれから48組目のペアを脅かす。これまで、見てイライラするぐらいイチャイチャしてる奴らや、ちょキモイとか言ってる男子に近づかない女子なんかもいた。こういう時の女は強いものだ。というか、僕は今まで強い男と弱い女は見たことがない。

「おっう、お前ら。何人の男子の小便ちびらせた？」

次郎丸である。彼はエイリアンではなく、巨大ザメのきぐるみを着ている。

「次郎丸さん。エイリアンをやめようというその決意は認めますけど、それじゃお化けじゃなくてただの自然の驚異じゃないですか」

次郎丸は僕の元へ近づき、サメの鼻先を僕の額に当てた。

「いやいや、でもすげえ怖いだろ」

「ちょ、距離感！ きぐるみの距離感がつかめてないから鼻先当たってますって。後、確かに怖いですけど何かまた意味あい違うから」

次郎丸はきぐるみ越しに頭をかきながらマモルにむかって言う。

「マモル、連れシヨン行こうぜ」

マモルははい、と返事をしてジーザス武田の傘を外した。僕は言った。

「え、ちょっと待って。それじゃ僕1人じゃないですか」

次郎丸は黒い笑顔を見せた。

「何だお前、1人は怖いってか？ 情けねえなー」

という次郎丸はマモルの右手をしっかり掴んでいる。マモルが不思議そうな顔になる。

「先生、何でそんなに手汗かいてるんですか？」

僕は次郎丸の黒い笑顔に負けない表情に。

「あれ、次郎丸さん暑いんですか？ どちらかと言えば寒いぐらいですけどね」

「馬鹿野郎、俺はあれ。新陳代謝がすごいから。サウナとか5秒で脱水症状だから」

次郎丸はそう言うとそのままモルを連れて行ってしまった。

……それにしても静かだ。これなんか出るよ。僕は今お化けの侮辱みたいなことしてるわけだし。そ、そうだ！ ここからユリちゃんを眺めることでこの恐怖を少しでも和らげるんだ！

僕は隠れている草むらから身を乗り出した。すると、とんでもないことに気が付いてしまったのだ。なんとユリちゃんも今の僕と同じような状況に陥っていたのだ。一緒にいた友人はどこかに行ってしまったているのだろう。お岩さんコスプレのユリちゃんの表情が恐怖と寂しさでなんともいじらしい感じになっている。これは行くしかあるまい！ ていうか何か文章にできない状況になるという可能性だってある！ よし、行こう！

僕は緩やかな傾斜になっている道を下った。ユリちゃんに体2つつ分近づいたところで言う。

「あ、ユリちゃん」

「……え」

ゆっくり振り返る彼女。すると一瞬でその目に大粒の涙が。

「きゃあああああ！ ジーザス武田ああああ！」

彼女はどこからか取り出した音楽ファイルを僕の額に突き刺した。噴き出るA型の血。

「うおおおお！」

彼女ははつとした様子で僕の額に刺さったファイルから手を放した。

「あれ、もしかしてアツシ君！ ごめんなさい、私本当にお化けが出たのかと思って！」

「いやあ、全然大丈夫だよ。むしろ高血圧気味だしちょうど良いよ、あつはつはつは」

力いっぱい作った笑顔のまま、そのファイルを引き抜いた。

「大丈夫って……。なんか少し前の公園の水飲み場みたいになってるけど……」

「ああ、あの出が悪い感じ？」

「うん、小枝とかが詰まってて勢いが良くないような……。って、そんなこと言ってる場合じゃないよ！ 早く手当てしないと！」

彼女はまたまたどこからか救急セットを取り出した。まったくファイルといい、本当に準備が良い。何次元ポケットを持っているんだろう。

彼女は僕の頭に優しく包帯を巻いてくれた。僕は近くの石の上に座り小さなため息をつく。彼女はじつと下を向いたままこちらを見ようとしなない。無意味に流れる時間。何か嫌だな。僕は言った。空気を替えるために。

「あのさ、全然大丈夫だから。普段はあの人のせいでもっとひどい目にあってるし」

「いや……でも」

まずい。何かもうこれじゃコメディーとして成り立たないよ。暗いもの。暗すぎるんだもの。何だ、どうすればいい？ 誰か！ 誰か来て！

その時であった。誰もいないはずの僕とマモルがいた草むらからガサゴソと動く何か。背筋が凍る。

「ユ、ユリちゃん……、もう本当平気！ 何て言うか一刻も早くこの場を離れた方が良い気がするんだよね！」

「え……何で？」

草むらがガサゴソってなってるから、とは言えないよ！ ビビりだと思われるからね！

「何でって、もうね。ほら、あの〜あ、僕何か今熱っぽくてね！ すごいフラフラするんだよ！ これはいけないな。もう立つてられないな。さあ一旦どこかへ行こうか！」

頼む、騙されてくれ！

「え、でも……。あ、じゃあここで待ってて。私先生呼んでくるから」

「えー？ あ……確かにそうするのが一番だよ！ でも、でもね！」

もう駄目なのか！ もう呪い殺されてしまうのか！ すると、全てを解決する声が僕の耳に。

「おゝい、アツシ。どこ行つた？」

マモルの声である！ 来たよ！ これでもう大丈夫だよ！

「おゝい、アツ……うあああああ！」

予想外の事態である。マモルが何かガサゴソ動いていた草むらの中に引きずり込まれていったのだ！ ユリちゃんもそれに気づく。

「え！？ 何今の声、マモル君！？」

僕はとつさに彼女の手を引いた。

「逃げよう！ 呪われる前に！」

彼女は目を大きく見開いてうなづいた。

僕たちはしばらく2人で山を下った。冷静になればかなりおいしい状況なんだろうが、僕はそんなことも考えられないくらい怯えていた。今まで非科学的なものを信じていなかったためか、僕はこういうポルターガイストというやつが大の苦手なのだ。

「アツシ君、もう大丈夫じゃない？」

僕の理性を引き出したのは大野ユリの言葉であった。

「あ……そ、そうだね」

掴んでいた彼女の手を無意識に離していた。もったいないことをした。

僕は辺りを見渡す。暗くて分かりづらいが迷ってはいないようだ。

……待てよ、今のこの状況はこれ下手したら……。いやいや、何を
考えてるんだ僕は。落ち着け。

「でもびっくりしたなあ。アツシ君、急に走り出すし。ちょっと面
白かったけど」

ああ、そんな笑顔を向けるんじゃない！ 理性が吹っ飛ぶじゃな
いか。さっきは理性を取り戻した彼女の言葉も今は理性解体屋で
か？

僕の理性を次に取り戻させたのは、目の前の草むらのざわつきで
あつた！

「え！？ また！」

逃げるヒマもなく草むらから何かが飛び出した！

「ああああああ！」

彼女と僕の声が重なる。

「あれ、あなた……アツシ？」

僕の目の前に現れた人物、それは……。

「マンカさん！？ あんた何やってんですか！」

彼女は不満そうな顔で答えた。

「何って、追いかけて来たに決まってるじゃない。いくら放置プレ
イとはいえ、彼の姿を3日も見ないなんて耐えられないの。もう色

々無理なの」

「じゃあ何で僕たちを追ってきたんですか」

中万華はため息まじりに言った。

「道に迷ったから適当に誰か捕まえて彼の居場所を聞こうとしただけよ」

ユリちゃんが僕の裾を掴んで言った。

「アツシ君、この人は……」

「ああ、この人は中万華さん。ウチに最近居候し始めたんだ」

中万華が僕とユリちゃんを交互に見つめる。

「で、アツシは思春期特有の妄想で理性が吹っ飛びそうになっていたところかしら」

「ちょっとおおお！ 変な言いがかりは止めて下さいよ！」

何だよこいつ、心理学者か！

「理性解体屋とか意味の分かんないこと考えてたんじゃないの、この思春期は」

「なな、何なんですか、その憶測！」

何だよこいつ、打率10割じゃん！ ヒット量産機じゃん！

「とりあえず戻ろう。肝試しも途中で抜けちゃったし、きつと次郎丸さん怒ってるよ」

僕の提案に笑顔でうなづくマイハニー。中万華は興奮して言った。

「え、怒ってるの？ ふふふっ」

僕たち3人は肝試しの前に集まった広場へと向かった。そこにはすでに4組の面々が。

「おい、お前らどこ行ってたんだよ！ 俺の忠告を無視して不純異性交遊ですか、こら」

次郎丸は巨大ザメのきぐるみを脱ぎ、普段のジャージ姿であった。

「違いますよ。ちょっと色々あって、この人のせいで」

僕の後ろからヒョイと顔を出した中万華。目から光を失う次郎丸。開いた口が塞がらないとはまさにこのこと。

「ふふふっ、次郎丸さん見つけた」

中万華は次郎丸の目の前に南ちゃんっぽくピョンと移動した。

「おおい、整美係！ この女を捨ててこい！ 生ゴミとして処理できるところから！」

頬を赤らめる中万華。

「また私の反応を見て楽しんでるのね、いいわ。好きにきなさい」

「おおい、保健係！ この女の頭を治療してやれ！ それが無理なら捨ててこい！」

僕は2人の会話を無視して木田のもとへ向かい言った。

「木田、マモルはどこ行っただ？」

木田は眉間にしわを寄せた。

「え？ お前らと一緒にじゃなかったの？」

どういうことだ。あの草むらに入っていたのは中万華ではないのか？ ……いや、違う。もしそうならマモルを引きずり込む理由がわからない。ということはマモルは本当に……。その時であった。

「おゝい、みんな！ すごい捕まえたぞ！」

マモルが何かを右手にぶら下げて草むらから出てきたのだ。次郎丸がそれに気づいて言う。

「お前もどこ行ってたんだよ……っってお前何持ってたんだ！？」

4組全員がマモルの右手に注目する。彼の右手に握られていたそれは、猿とアルマジロ足して2で割り、尾を2本つけると出来上がり、みたいな生き物であった。僕は少し声を大きくして言った。

「マモル！ 何だよその生き物！？ 見たことないんだけど！」

「ん？ 何言つてんだよ、これジーザス武田だろ」

「ええええええ！？ これジーザス！？ 僕たちはこれの格好をしていたの！？ お化けじゃなかったの！？ この世に存在するものだったの！？」

4組全員からの冷たい目。小声で、え？ 普通じゃね？、あいつ今さら何言つてんの？、それでも日本人かよ、ジーザスって何だろう、と約1名を除いて僕を批判している。

「ほら、お前ら。いい加減、宿戻るぞ！」

「そうよ！ そして私と次郎丸さんは同じ部屋で、どうっ！」

スナップを利かせた次郎丸のはたき。厳しいな、次郎丸。

語素露離宿の前ではロドリゲスが仁王立ちで待ち構えていた。

「お前らああ！ 今の今まで何やってたの！？ 神田林先生！ あなたがついていながら何やってんですかもうっ！ ていうかその娘は誰ですかああ！？ 何ですか？ 神田林先生は生徒ほっぽらかしてそのちよつとロリの入った娘といちゃついてたんですか、ええ！？ どうなんですか！ どんな感じだったんですか！？ 今度ICレコーダーで音だけ録って、私に頂けないでしょうか！？」
次郎丸は大きいため息をつく。

「おい、みんな。保健体育教師として教えとく。こつという輩を『むつつりスケベ』という」

「ちよちよちよ、ちよつとおおお！ 何を教えてるんですか、何

を！ いや、もとより男という生き物は皆むつつりスケべなんではないだろうか！ 私はそうだと思うね！ そして、人間というものは……」

僕たちはロドリゲスを放置して宿に入り、それぞれの部屋に戻った。さあ、今日も元気にスーファミ大会だ。

翌朝、僕たちは帰りのバスへと乗り込む。何日かぶりのバスガイドが元気に朝のあいさつをする。

「みなさ〜ん、おはようございま〜す！」

3日間ですっかり疲れ切っている生徒達。無論、そのあいさつに対する返事はキリンの鳴き声の様。

「みなさ〜ん、右手をご覧ください。窓から飛び降りて死ねよ〜」

ああ、怒ってる怒ってる。

「おい、兄ちゃん。一人でバイクか？ このまま海に行くのか？ ドラマの見過ぎじゃねーか？」

窓を開けて隣を走るバイクの兄ちゃんに話しかける次郎丸。

「ちょっと次郎丸さん、迷惑ですよ。やめて下さい。ていうかまだここが高速道路であることを読者に伝えてないんですから、わかりづらいじゃないですか」

今言ったように、現在バスは高速道路の上である。次郎丸は窓際に座り、僕がその隣に座っている。比較的前の方の席。悲しいことに

ユリちゃんとは話せる距離ではない。途中参加の中万華はバス賃が無いため、バスの裏に張り付いているはずである（落ちていなければ）。

「お前なあ、きつとこのバイクの兄ちゃんだつて自分の大事な何かを探すためにバイク乗つてんだよ。俺はそんなバイクの兄ちゃんの心の隙間を少しでも埋めてやろうとだな」

「あなたにあのバイクの兄ちゃんの何がわかるんですか」

次郎丸はもう一度バイクの兄ちゃんを見る。そしてこちらへ振り向く。

「なあ、バイクの兄ちゃんってなんか長くね？」

「ああ〜そうですね。じゃあいつそのことバイちゃんということだ……って何を言わせるんですか！ 今関係ないでしょう！」

バイちゃんはヘルメット越しで聞こえにくい声を一生懸命張り上げて言った。

「あの〜すいません！ 僕今からバイトの面接あるんで行っていいですか？」

「ほら、聞きましたか次郎丸さん。大事な何かじゃなくて、仕事を探してるそつですよ。そつとしてあげないと」

次郎丸は眉間にしわを寄せ、口を尖らせ言う。

「お前なあ、仕事だつて大事な何かだろうが。なめてんのか？ 仕

事というものを、存在をなめきってんのか？」

「なめてませんよ、ただ僕は仕事をとて大事なものには思えないだけです。なんと書いても夢がない」

「バツカ、仕事つーのは夢のためにするんだろつが。仕事がなくなれば夢なんて見れねえんだよ、なあバイちゃん」

バイちゃんはバイクのハンドルを強く握りしめた。

「あんたらに夢の何がわかるんだ！俺だつてなあ、俺だつてなあ、この拳で世界チャンピオンになるはずだつたんだ！あいつさえ、あいつさえ居なけりゃ！」

おいしい！バイちゃんボクサーだつたよ！しかも夢半ばで諦めてしまい、これから職を探しに行くという一番嫌なタイミングだつたよ！

「おい、バイちゃん。自分が勝てないのを人のせいにするたあどういう了見だ？」

ええ！？こんな微妙なタイミングでこんな微妙な相手に説教モードですか！？

「ちょ、次郎丸さん。もうやめましょう。今高速ですから。そういう場所じゃないですから」

「バイちゃん、てめえ人と話してんだからヘルメットぐらいはせよ」

「ダメですよ！ 道交法にひっかかりますから！！」

次郎丸がいざ説教を始めようという時であった。電動でしか開かないはずのバスのドアが嫌な音を立てこじ開けられた。

「次郎丸さんの説教！！」

目を輝かせたその人物は中万華であった。バスガイドの女性が慌てて言う。

「ちょ、あなた何をやってるんですか！ これどうすんの！？」

「私は次郎丸さんの説教を生で見たいの！ 肌で感じたいの！」

次郎丸はそんなことを一切無視して説教を続ける。その後ろではバスガイドが中万華をドアのあった場所から突き落とそうとしている。車内はどよめき、僕はただ傍観する。僕たちの林間学校に安息の間は無いのである。そういう運命なのだ。あの男がいる限り。

「先生、何か気持ち悪いんですけど……」

木田が手を上げて言った。次郎丸はめんどくさそうに答える。

「うるせえな！ 今バイちゃんの人生が決まるかどうかの瞬間なんだよ！ その辺に吐け！」

「オボooooooooo！」

その場で勢いよく酸っぱい匂いのものを吐き出す木田。

「おいしいおいしい！ 木田、瞬間じゃないか！ もっと早めに言えよ！
なんでこんなギリギリで手を挙げたんだよ！」

僕達の林間学校に安息の時間は無い。もう一つ付け加えよう。僕
たちの林間学校に、つまらないなんて言葉は存在しない。

第6章 ヒーローだ

「決めた、俺バイトするわ」

朝食中、次郎丸の思いがけない一言。中万華が居間に座ることに違和感を感じなくなってから、どれくらい経つだろう。

「何言ってますか、教師はバイト禁止でしょ」

次郎丸は納豆をかき混ぜる手を止めず、大儀そうに言った。

「つつてもよお、教師の給料つてメチャクチャ安いんだよ。バイトでもやらねえとやってけねえよ」

生活費なんか出したこともないくせに何を言うか。中万華が右隣のジャーからご飯をよそう。

「アツシ、次郎丸さんの意見に口出ししないで。彼は絶対なの。裁判官なの」

次郎丸はあくびまじりに親父に確認する。

「別に問題ねえよな、お父さん」

親父はテレビを見ながら箸を止めている。

「あゝ、良いんじゃないですか」

「おいおい、この人次郎丸さんのバイトうんぬんより、星座占いに

興味しんしんだよ」

次郎丸は満足げに微笑むと、納豆に醤油をさした。

「んじゃ、さっそく今日からバイトだな」

親父の星座が第三位だと分かったところでようやく彼はこちらに向き直す。

「ふう、えつと。何の話だったっけ」

やはり聞いていなかったのか、このバカ親父は。中万華がフォロ―。

「次郎丸さんがバイトするかどうかですよ、お父さん」

「ええ、バイト!? そんなことパパは許さなぶるうわっは!」

次郎丸から放たれた正拳、飛び散る鮮血に混じってきらきらと輝くのはしょっぱい初恋の味。これに関してはあまり触れないでやろう。

「おおおお! 親父大丈夫か!」

親父は鼻を手で覆いながら言う。

「あ、ああ。大丈夫だ、ていうか赤は今日のラッキーカラーだからな。何か良いことあるんじゃないかこれ」

「いや、もうこの時点でアンラッキーだから」

次郎丸は混ぜるといふ行為の限界に挑むように納豆をかき混ぜ続け

ている。納豆の原型なんてあったものじゃない。

「じゃ、アツシ。飯食ったら行くぞ。ていうかこの納豆ピーナッツバターみたいになってる」

ということで僕たちは朝から有名ビデオレンタルショップ、MATEYAにやってきている。自動ドアを抜けると広告だらけの床が伸びている。その先には青い棚がずらり。入口に一番近い棚は新作ゲームコーナーと銘打たれている。休日ということもあり小学生が集団を作っていた。DVDは、新作は大々的に、旧作はひっそりとはあるが、その力を失わぬ輝きを持ちながらそこに存在している。邦画、洋画、ある意味ここは最も安全な多国籍国家と言える。

次郎丸は自動ドアから向かって左にあるレジへと歩いた。そこには店長と思しき人物がゲームコーナーに集まる小学生をただ傍観していた。

「あゝ、ここでバイトさして欲しいんすけど」

「いや、今うちバイトとかとってないから」

やはり彼は店長で間違いないようだ。光の速さで断られた次郎丸。

「いや、俺大型免許とか持ってますよ」

「いや、大型免許はDVDをレンタルする上で何のメリットも発生しないからね。何にもプラスにならないからね」

「いや、俺それに、前の職場じゃオツポコン作りの風雲児って呼ばれてたんすよ」

「いや、オツポコンて何だよ。そんな『どうだ』みたいな顔されても」

ここまで来れば勘のいい読者なら次郎丸の行動に察しがつくだろう。そう、ベーコンの歌だ。初対面の人間、ましてこれから働こうという店の店長によくそんなことが罪悪感なくできるものだ。この行動力にはいつも度肝を抜かれる。

「じゃ、ここのレジは任せるよ。私は裏で何かごによごによしてるから」

僕と次郎丸はMATEYAの制服に着替え、レジに立っていた。次郎丸がお客との応対。僕がその補助という形。僕も中学生なので、バイトは禁止されているのだが、次郎丸に任せつきりというのはとても恐ろしい。何が起るかわからないびっくり玉手箱である。それに、個人的にバイトには興味もあつたし、特に苦にもならない。

僕と次郎丸がレジについてから十分の後、小さい子供づれの男性が一昔前に流行った邦画のDVDを持って僕たちの前に立った。

「すみません、これ一週間レンタルで。あと、ドラマのガリレオのDVDってあります？」

僕はレジ内のパソコンでガリレオを検索した。どうやら全て貸し出されているらしい。僕はそのことを次郎丸に小声で伝えた。

「あゝ、今それ無いみたいっすわ。機関車に顔がついてるのならありますけど」

「いやそれガリレオじゃなくて森本レオでしょ。レオなら何でも良いわけじゃないから」

男性は軽く突っ込むと、しばらく空を見つめた。

「あゝ、じゃあ救命病棟二十四時のDVDはありますか？」

僕はまたすぐにパソコンを操作した。残念ながらこのDVDも貸し出し中だ。僕は次郎丸に向かって首を横に振った。

「お客さん、残念だ。これも無いみたいっすよ。どうします？ ジヤックバウアーにしますか？」

「いや、二十四時間なら良いとかそんなことはないから。病院であることが最も大事だから」

と男性。それを聞いた次郎丸は何かをひらめいたように裏から一枚のDVDを持ってきた。

「病院で二十四時間ならこれが良いんじゃないスか？」

男性はDVDを受け取り少し眺める。

「これ、何のDVDですか？」

「『淫乱ナースのHな二十四時間』です」

カーテンの向こう、秘密の園からやってきた亜種。男性は奇声を発しながらDVDをレジに叩きつけた。

「おいしい！ 見て俺、子供づれ！ まだまだ五歳の純粋な子供連れてんの！ ちょ、もうっ！」

不気味な笑顔が怒る男性のズボンを引つ張った。

「ふふふ。ねえ、パパー。インランってどういう意味なのー？ ふふふ、教えてよお、ねえ」

「おい、どうしてくれるんだよ！ アンタのせいで純粹だとばかり思ってた息子の本性を知ってしまったよ！ 親としてどう対処すればいいんだよ！」

その時、レジの裏からコンビニの窓際に置いてある大人の雑誌を片手に店長がやってきた。

「お客様、何か問題がございましたか？」

「お前らの性欲に問題があるわああ！ 何なの？ この店の店員は思春期みたいな脳の回転しか出来ないの？」

次郎丸と店長はその場にしゃがみこんでこそそそと話を始める。

「ちょっと、何であのお客さんあんなに怒ってんの？ 君は何をしたの？」

「いやいや、今のは店長がそんな失礼な雑誌片手に現れるからですよ」

「お前ら両方の責任だよ！ ていうかそついうのは聞こえないようにやってくれない！？ なんでこんなにイライラしなきゃいけないんだよ！」

このままでは収集がつかない。僕はすぐさまフォローに入ることにした。

「あ、あのすいません。お子さんの本性以外に関しては謝罪しますから」

「もう結構です！　こんな店二度と来ません！」

踵を返す男性、その後ろを「ねえパパー、ふふふ、インランってー？」と半笑いでついて行く少年。自動ドアをくぐった時の男性の目には、うつすら涙が溜まっていた。

「まあ今回は最初だから多めにみるけどね。次またこんなことがあったらちよつと危ないと思ってね」

店長から釘を刺された僕たち。反省の意をこめて、きちんと仕事をしようと思う。次郎丸のことは少し心配なのだが、まあ何とかなるだろう。

僕たちがレジについてから一時間が過ぎた。心配していた次郎丸のバイトっぷりだが、意外や意外、結構様になっていた。きちんと仕事は果たしている。失敗もあるが、ただちよつとDVDと間違えて清水焼を渡す程度だ。普段はまがいなりにも教師という職業をやっているわけだから、多少の常識は心得ているようである。

ただ、その平穩も長くは続かなかつた。彼女がやってきたのである。そう、中万華が。彼女は自動ドアが開くと、楽しげに足を弾ませ入店。とびきりの笑顔でレジの前まで移動。

「うふふ、次郎丸さんっ」

「当店では借りる物もない奴の相手をする暇はありません。即刻帰

つて下さい」

次郎丸は中万華と視線を合わせないように言う。

「大丈夫、借りる物ならあるから」

「だったらさっさと借りてさっさと帰ってさっさと寝て下さい。永遠の眠りについて下さい」

中万華は両手の指を交差させ、もじもじと体を左右に振る。

「それは、あ・な・た」

「もう帰れよ！ 何だよその言い回し、古いんだよ！ しかも俺を借りるってどういうこと！？ もう卑猥なことしか思いつかないんだけど！？」

ついにはずれたりミッター。次郎丸は覚醒するとツツコミにも転じることが出来るのだ！ というのは冗談で。これは単に中万華に対しての意見。次郎丸はさっきも言ったようにある程度常識は持っている男。元々ツツコミ側の人間なのかもしれない。

「もうっ、次郎丸さんったら本当に頭の中はそんなことばかり」

「お前だよ！ そんなことばっかりなのお前だよ！ うおおお、店長おおお！ 頭のおかしい客にはどう対応すればいいんだあああ！」

空を見上げ何かに逃避するように叫ぶ次郎丸。そして裏から我らが店長がものすごい形相でやってきた。

「だあああ！ もううるっせーよ、さつきから！ 周りのお客さんキョロッキョロしてんだろっが！ 何バイトが営業妨害してるの！？」

「違つんです店長！ この冷凍食品が！」

「冷凍食品！？ 何を言ってるの君は！」

ああ、冷凍食品とか言っちゃダメだろうが。僕はすぐさま大声で言う。

「あ、店長。あ、あのなんて言うか。彼女の生き様が冷凍食品の様なということですよ！」

「はい！？ そんな破天荒な弁明されても！」

僕たちは公園のベンチに座っていた。中央に噴水、その向こうにはいくつかの遊具があり、小さな子供たちが楽しそうに笑っている。その隣では彼らの母親である女性たちが世間話。暖かくなってきた陽光が噴水をより美しく見せる。次郎丸と僕の手の中には温かい缶コーヒ―。空を見上げ、雲の流れる姿をただ淡々と見つめる。僕たちはそう、クビになったのだ。人生において初のクビ、なかなか精神的ダメージが大きい。僕はとりあえず缶のタブを上げ、一口飲む。ん？ これよく見たら紅茶じゃないか。僕は思わず溜息が出た。

「おい、溜息なんかついてんじゃねーよ」

「ああ、いや。今のはあく紅茶かの溜息ですよ」

「いやいや、今のはおいおいクビかよの溜息だったよ」

言ってからしばらく静かになる次郎丸。本当に溜息をつきたいのは自分なんだろう。適当な動機ではあったが、最初はうまくいっていったものが壊れるのは、誰でも悲しいもの。

「そつえば、マンカさんはどうしたんです？」

「縛ってトラックに放り込んだ」

ま、彼女なら大丈夫だろう。それにしても、これからどうしたものが。

「あなたは、かしわモチモチマンですかあ！」

それは突然だった。ベンチに座る僕たちの目の前に現れた全身白タイツの男。首に『賀』と書かれた赤い垂れをつけている。頭は白く丸いものをかぶっていて、そこから顔だけがひょっこりと飛び出す。股間にはなぜだかミニ鏡餅が。年齢は四十代くらいだろうか。あまりの迫力に恐怖すら覚える。とりあえず僕は返事だけすることに。

「いえ、違います」

「やっぱりね！」

じゃあ何で聞いたんだ。

「私はこの街を陰ながら守るヒーロー、モチ、モチ、ムアンです！」

ヒーロー？ 町内会の町おこしの一環か何かだろうか。

「でも、ヒーローとしては結構お歳を召されてるような」

「人の人生に口を出さないでいただきたい！」

「あ、ごめんなさい」

反射的に謝罪の言葉が出る僕。

「いや、別にいいよ！」

別にいいのか。もうやだ、何かこの人怖い。次郎丸が珍しい動物を見るような目で頭をかいた。

「で、俺らに何の用が……」

言いかけて次郎丸は口を閉じた。モチモチマンという男の股間を見つめる次郎丸。

「次郎丸さん！ 確かにその鏡餅は気になるけど！ 遠巻きに見ればただの変態ですから！」

というか、本当の変態は目の前の全身白タイツの方なんだろうが。

「私はこの街を陰ながら守るヒーロー、モチ、モチ、ムアンです！」

「……え？ いやさっき自己紹介したよ！ 何の理由があつてのりターンズ！？」

僕が言うと、モチモチマンの頬からは熱が引き、全身の細胞が死ん

してしまったのではないかとくらいに真っ青になった。

「おい、めっちゃがっかりしてるよこの人！ 二回自己紹介してしまったことに対する嫌悪感が半端ないよ！」

次郎丸はモチモチマンとのやりとりに苛立ちを覚えたのか、一度不機嫌そうに喉を鳴らし、言った。

「で、結局あんた何しに来てんだよ」

「かしわモチモチマンにならないか？ 日給六千円で」

「よっしゃ、その話のつた」

……え？ 僕の耳に間違いがなければ、この男確かに「のつた」な
どと軽はずみな言葉を。

「ちょ、待って下さいよ次郎丸さん！ かしわモチモチマンですよ
！？ これと同類ですよ！」

僕は一生懸命にモチモチマンを指差す。しかし、次郎丸の目には迷
い一つある様子が無い。

「あのなあ、アツシ。チャンスの神様は前髪しかないって知ってる
か？ つかめる時につかんどかねえと、すぐどっかへ行っちまうん
だよ」

次郎丸の言い分が決して分からないわけではない。仕事に寄り好み
する気もない。ただ、ただ、かしわモチモチマンは勘弁して下さい
と、心の中で願うばかりだ。どうせ叶いっこない、無謀な願い。

僕たちモチモチ戦隊は公園の入口に立っていた。モチモチマンの左手には町が指定しているゴミ袋が持たれている。次郎丸は腕を組んだまま言う。

「なるほどな、公園の掃除をしようってわけか」

「先に人の話を聞きなはれ！ 我々、モチモチ戦隊は正義を守る集団。悪の組織と戦いたいけども、実際そんなのいないよね！ 正義は身近な所から！ よって、今からこの公園の掃除を実施する！」

「……いやおい、俺合ってんじゃねえか。 お前が俺の話聞けよ」

次郎丸がツツコミに回っているという異常な事態。それほどこの男、モチモチマンは曲者である。だが、その曲者も公園の掃除をしようというまともな提案ができるのだ。これには安心。僕たちは早速公園の掃除に取りかかることにした。

僕たちは中央の噴水を基準に公園を二分して掃除するという計画をたてた。僕が入口から向かって左側。遊具のある方だ。次郎丸とモチモチマンはその逆、ベンチ側である。比較的后者の方が敷地面積が広い。なので、二人。とはいってもまともに掃除をするのかは非常に不安である。

無駄な心配をしても仕方がない。僕はとりあえず自分の場所の掃除を終わらせることにした。遊具にはまだ子供たちが残っている。奥様方もそのまま。ベタな風景であるが故に、妙に不自然にも見える。しばらく公園を見渡したが、正直なところゴミが見当たらない。だが、それは上っ面の美しさ。ほんの少し草むらの中をのぞけば、破れたビニル袋だの、きれいに整頓されたように置かれた空き缶がちらほら。注意してみれば、目に見えない部分にはかなりのゴミ。人間の悪い部分を垣間見たような気がする。

しばらく掃除を続け、太陽が真南にやってきたころ。僕はいつぱ

いになったゴミ袋を持ち次郎丸たちの元へ向かった。自分の割り当ては大体終わった、後は次郎丸とモチモチマンの手伝いをしようと思っただのである、が。噴水の向こう側でしゃがみこむ二人組。

「ちよつと、何してんですか二人とも」

僕が声をかけると、次郎丸は慌てて何かを背中側に入れ込んだ。

「今何を隠したんですか？」

「あ？ 何も隠してねーよ。むしろさらけ出し過ぎてるくらいだよ」

僕は無理やり次郎丸の背中に手を回す。

「あ、ちよ！ やゝめゝろゝよゝ！」

「いいから見せて下さい！」

モチモチマンが僕の体を更に無理やり次郎丸から引きはがそうとする。

「おま、ちよ！ 次郎丸君嫌がってんだろ！」

「何かさつきからやりとりが中学生チックなんですけど！ そういう細かいボケはいいから！」

僕は次郎丸の手からある雑誌を奪い取った。それはまだ真新しい成人向け雑誌。

「あんたら何掃除サボってエロ本読んでるの！？ ていうか今日エ

口本ネタ二回目じゃん！　どんだけネタに困ってるんだよ！　それに何が美少女列伝だ、このロリコン共！」

次郎丸は先ほどまでの慌てぶりが嘘のような静かなたたまい。

「いや待て、アツシ。美少女列伝って名前だけでも、載ってるのは全部年増だぞ」

「どうでもいいよ、そんなの！　何に対するフォロー！？」

次郎丸は僕のツツコミを咳ばらいで誤魔化し、ベンチに腰を落とすた。

「まあまあ、いいじゃねえか。やることはやってんだからよ」

言われて僕はベンチの隣に置かれた次郎丸たちのゴミ袋を見た。中にはいっぱいゴミ。

「あ、本当だ。なんかすいません。でも周りに子供もいるんですから、そういう本は控えて下さいよ」

僕はモチモチマンに雑誌を手渡した。モチモチマンは頭のかぶりものの中に雑誌をしまいこむ。かぶりものが浮いて馬鹿みたいなんだが、もうつつこむのが面倒くさい。

僕たちは三人並んでベンチに座った。ちょうど木陰になっていて涼しい。モチモチマンというよく分からない奴の隣で僕はあくびをした。

「そついえば、モチモチマンさんは何でヒーローになろうと思ったんですか？」

何となくだった。モチモチマンを見ていれば、十人の内八人くらいは抱きそうな疑問。モチモチマンは背中に子供でも背負っているように腰を曲げ、感慨深そうに話し始めた。

「私は……昔いじめられていた。つねに周囲からははずれた存在で、私が触れる全てのものには私の菌がつくらしい」

驚愕。モチモチマンの曲がった背中に乗っているのは、子供なんかじゃないんだ。

「いつだったか、私はこの公園で石を投げられていた。いつものことだ。私はただ泣いて、ただ耐えていた。だが、何故かその日は私をかばってくれる人がいたんだ。その人は、ただ公園の掃除をしていたおじいさん。私はお礼に公園の掃除を手伝った。そしたら、彼は言ったんだ。『君は優しい子だね。普通なら、こんなジジイのことなんて誰も気にはしないよ』と。私は思ったんだ。このおじいさんは一人だったんだと。このおじいさんは一人で、みんなが汚した公園を掃除していたんだと。それが無性にかっこよくて、憧れた。私もこんな人間になろうと思った。だが、どうしていいのかも分からず、馬鹿な私にはこういうことしか思いつかなかったんだ」

モチモチマンが口を閉じると、しばらくの間風の音が聞こえた。黙って聞いていた次郎丸は一度舌を鳴らし、モチモチマンの背中をポンと叩く。そして彼はその場で立ち上がって言う。

「まあ、いいやな。でよおモチモチマン、ほれ」

次郎丸は右手を差し出した。それを不思議そうな顔で握るモチモチマン。

「何で握手だよ。いらねーよそんなもん」

次郎丸は右手の親指と人差し指で輪を作った。

「金だよ、金。日給六千円って言ってただろ」

「何を言ってるんだ、かしわモチモチマン。我々は正義の味方だぞ。そんなお金なんてゴモモモ！」

よく見えなかったが、恐らく左右左右のワン、ツー、スリー、フォ
ー。モチモチマンはすごい勢いで頬をさする。

「いや、あの。今はその、お金がなくて」

「だったら下ろしてこい、その銀行で！ 雇い主がそんなでどうす
んだ、ボケ！」

公園前にある銀行を指差しながら言う次郎丸。金の話は相当シビア
だ。僕たちのバイト代は半ばカツアゲのようにして手に入るようであ
る。

銀行は涼しかった。空調は最適な温度に保たれている。僕たちは
ATMを操作するモチモチマンの背中を見つめながら、並んで銀行
のソファアに座っていた。

「何か可哀そうにも思えてきましたよ、モチモチマンさん」

「んなことあるかよ、あいつが言い出したことだぜ？ それであ
いづが払わねえだの言ったら、俺たちは役所に駆け込まなきゃなら
ねえ」

次郎丸の言い分にも納得。まあ、しょうがない。僕はふと銀行のエンジントランスに目をやった。黒い大きなワゴン車が止まる。その中からぞろぞろと出てくる黒一色の不思議な格好の人々。顔を隠し、手には黒光りする銃火器っぽいもの。

「次郎丸さん、あの人たちは……」

次郎丸は膝を上下にがくがく震わせている。

「あれだろ、趣味だろ。森の中でモデルガン打ち合う人々だわ、あれ」

「いや、あのそれにしてはめっちゃくちゃ金属チックというか」

「……」

その場に倒れる次郎丸。

「いや、死んだふりは意味ないから！」

そう、彼らは銀行強盗である。

僕たちをはじめ、銀行にいた全ての人々がロビーの隅に固められた。強盗たちは銀行員に支持し、カバンに金を詰めさせている。人質の中には、泣きだす者もいれば、それを慰める者もいる。そしてこの街を陰ながら守るヒーローはというと、体育座りで膝と膝の間に顔を押しあて、静かに黙っているだけである。少し時間がたち、わずかながらに人質の小声が目立ってきた。それに気がついた強盗の一人は天井に向かってその銃を発砲する。

「じゅちゃんじゅちゃんうるさいぞ！ 黙ってる！」

破壊された平穏は、戦慄へとその姿を変える。次郎丸が僕の耳もとで言う。

「うるさいって、自分らが原因なのにな。理不尽な奴らだよ、マジで。体育教師か」

「おい、そこ聞こえてるぞ！ 何だその朝礼の臨む学生みたいな態度は！」

強盗が叫ぶと再びロビー内に静寂が訪れた。このままではまずい。下手を打てば命にも関わる。僕は次郎丸の耳もとで囁いた。

「次郎丸さん、この状況どうにかしましょう」

僕の言葉が届いているのか届いていないのか、次郎丸は何も言わず、ただ体育座りのモチモチマンを見つめている。

「次郎丸さん、あの人は役に立たないですよ。それより次郎丸さんのベーコンの歌で……」

僕が言いかけた時、次郎丸の右足がモチモチマンの小さな背中を蹴った。

「おい、出番だぞモチモチマン」

次郎丸は再び彼の背中を蹴る。だがモチモチマンはそれに気付いていないように、ただ震えている。

「お前、馬鹿だからこれしかないんじゃないのか？」

「し、しかし彼らは銃を持っている。勝てはしない……」

ようやく開かれたモチモチマンの口からは、震え、怯えきつた声が。

「勝てないなあ？ 戦おうとしてもねえ奴が何言ってるやがる。お前が憧れのじいさんみたいにただの優しい人間を目指してるっていうなら何も言わねえよ。でもなあ、お前はヒーローを選んだんだ。力がないなら、周りの人間を慰めるぐらいの小さな勇気を見せてみろよ。それを他人に任せて、自分は静かにしてりや安全ってか？ 笑えねえんだよ」

次郎丸は三度モチモチマンの背中を蹴る。

「てめえの正義も貫けねえ奴が、ヒーローなんざ語ってるじゃねえぞ！」

強盗が気付いたのかこちらに銃を向ける。

「おい、何を話して……」

群衆の中、一人の男が立ちあがった。全身白タイツの変態。顔は涙でグチャグチャで、足だって震えてる。だが、彼は立った。

「わ、私は……モチ、モチ、ムアンです！」

どんなにひ弱でもいい。彼が立ち上がったという行為自体が僕たちの心を癒し、安心させるのだ。人は、自分のために頑張ってくれる人がいるということを理解することで、心の底から歓喜する。

「何だお前は？」

「わ、私はこの街を陰ながら……」

彼の言葉を遮るように、強烈な音が耳をついた。国家の安全を守る、白と黒のカラーリングの正義の車。赤いパトランプが徐々に増えていき、銀行の周りを取り囲んでいた。

公園、先ほどのベンチ。僕を含めたモチモチ戦隊の三人がそこに座る。モチモチマンの手には缶コーヒーとくしゃくしゃの日本銀行券。彼は溜息とともに言う。

「結局……何も出来なかった」

次郎丸はモチモチマンの背中を軽く叩く。

「確かによ、お前は何も出来なかったかもしれない。でもなあ、立てたじゃねえか。顔は涙でぐちゃぐちゃだったけどな。格好良かったぜ、お前の背中」

モチモチマンはただ地面とにらみ合い、体を震わせている。そんなモチモチマンの手に自分の持っていた缶コーヒーを持たせると、次郎丸はゆっくり立ち上がった。

「そいつは礼だ。良いもん見せてもらったんだ。あ、でもこれじゃ足りねえか？ そうだな……缶コーヒーと六千円でどうだ？ なあアツシ」

僕は笑ってはい、と返事した。僕も自分の持っていた缶コーヒーをモチモチマンに無理やり持たせた。そのまま次郎丸と並んで歩く。

振り返らずに。

「私は！ この街を陰ながら守るヒーロー！ モチ、モチ、マンです！」

背中越しに聞こえたその声はがらがらで、わずかに震えていた。だが、とても勇敢で、凛々しい正義の味方の声だった。

第7章 泥棒だ

朝日を浴びると体に良いんだそうだ。僕は目が覚めると、とりあえずカーテンを開けることにしている。体に良いというのももちろんだが、ただ何となく一日のスタートダッシュがつけられるような気がするからだ。

今日も僕はいつものようにカーテンを開ける。温かい日の光を浴びて、全身の細胞が目覚めるのがわかる。眩しいな。目に対しては少し荒っぽすぎる起こし方だったか。今度はもっと優しく起こしてやろう。

毎度のことだが、二階にある部屋から階段を使って降りていると居間の方からきゃっきゃと声が聞こえだす。この数週間で二人も増えた家族の楽しそうな声。今日騒いでいるのは次郎丸か中万華か。僕はあくびをしながら居間のふすまを開ける。

「だから拙者は柚子胡椒が良いって言ってるでしょうがああ！」

荒っぽい目の起こし方で、目が反抗でもしているんだろうか。ちゃぶ台に座っている男性が麻の着物を纏い、背中にパンパンのミリタリーリュックを背負った知らない人に見える。いやいや、これ以上家族が増えるなんて家計崩壊だよ。ありえないよ。

「ちょっと利理岡さん！　ウチは柚子胡椒使わない家なんですつてばー！」

どうやら耳も反抗しているらしい。親父がこの人の名前らしきものを叫んだ気がする。大丈夫か僕？　悩みでもあるんじゃないか僕？

僕が自分を慰めようとしていると、次郎丸が後ろからやってきてポンと僕の肩を叩く。

「アツシ、紹介するよ」

「次郎丸さん、嘘だと言って下さい」

僕は覚悟を決めて畳に腰を下ろした。右隣には次郎丸。その次郎丸の隣にはパジャマ姿の中万華。次郎丸の左腕にニコニコしながら抱きついている。次郎丸も慣れきった様子で、どこぞの漫画の主人公のように頬を赤く染めることもせず、目のやり場に困るわけでもなく、ただただ無関心。昔こつという風船のやつが流行ったような気がする。そして、僕の正面には問題の着物にミリタリーリュックの男。ふちなし眼鏡をかけ、頭は天然パーマ。ボサボサでだらしがない。

「えっと、じゃあまずこの人を紹介していただけますか、次郎丸さん」

次郎丸はああ、と眠そうな声で言うと自分の半裸の写真を取り出し、それを後ろに放り投げる。それに飛びつく中万華。厄介払いか。

「え〜と、こいつは俺の同僚で利理岡権田勇^{りりおかこんだゆう}。毘沙門天とこの小神だ」

なるほど、次郎丸と同じ存在か。小神、最近は忘れかけていたが、次郎丸は次期神候補だったっけ。考えてみれば僕はものすごい奴と同居している。

「拙者、利理岡権田勇でござる。リリーと呼んでください」

「で、利理岡さんは何をしに来たんですか？」

利理岡権田勇は瞬間的に悲しい目をしたが、すぐに光を取り戻す。

「拙者、次郎丸のもとへ遊びに来たのでござる。それよりも、拙者のことはリリーと呼んでくだされ」

どうやらまた家族が増えるわけではないようだ、安堵。僕は次郎丸に向かってかるくうなづく。

「わかりました、今日は泊まっていられるんですか、利理岡さん？」

「あの、うん。そのつもりでござる。ていつかその、何かさっきから失礼なのに気付かないでござるか」

「ああ、利理岡さんをリリーと呼ばないことですか？」

利理岡権田勇はちゃぶ台に乗り出しながら僕を指差した。

「それえええ！ 分かっててやったのでござるか！？ 拙者が恥を捨てて二回も忠告したのにそれを無視したのでござるか！？」

僕はその場で利理岡権田勇を指差す。

「あ、ちゃぶ台に乗り出さないで下さい、壊れたらどつするんですか」

「あ、ごめんなさい……いや待って、今は拙者が怒ってるわけじゃないから」

利理岡権田勇が言いかけると、彼の右隣りから大きな赤い隕石。そ

の隕石は利理岡権田勇の頬を捉え、めり込みながら嫌な音を立てる。だがその被害者はその場からほんの少しも動かず、衝撃を首の筋肉で押し殺した。どうすればそんな状況になるんだ。神は未知の生き物であるをつくづく思わされる。そして、利理岡権田勇の右頬にめり込んだそれはまだ半目のだるまでであった。

「ごちゃごちゃうるせーよ、ビリー！ 呼ばれ方なんて気にしてんじゃねえ！」

次郎丸である。どうも利理岡権田勇の情けない姿にイライラしたらしい。涙目の利理岡権田勇はだるまを右わきに抱えながら立ち上がる。

「もう気になるようにわざとなのそれ！ ビリーじゃないでござる、リリーでござる！ 拙者どうみてもムキムキの黒人には見えないじやん！」

だるまをぶつけられたことより名前の方が大事なのか。何か思い入れでもあるんだろうか。次郎丸が立ちあがっている利理岡権田勇をふくらはぎを蹴る。

「ていうかお前何訳の分かんねー嘘ついてんだよ。俺に頼みがあるんだろ？ 何が遊びにきただ」

遊びに来たと言つのは嘘だったのか。確かに嘘をつく必要はなかったように思う。

「い、いや、拙者はあの……人との接し方とかよく分からなくて。あ、でも彼女はいるでござる」

「でもの意味が分らないです。言う必要ないでしょ、今は」

とは言うものの、彼に彼女がいるのは驚きだ。見た目のヲタクっぽさはかけ離れた現実。人は見かけによらないとはまさにこのこと。

「でもその彼女が引きこもりなんでござる……」

「え、どうしたんですか」

利理岡権田勇はくしゃくしゃの天然パーマを指でいじる。何だか気持ちよさそうだ。

「はあ、何故かパソコンの画面にずっと引きこもってるんでござる」

「……ていうかマジでヲタク!? それ違いますよ! 彼女は彼女でもそれはあなたの心の中だけの存在! その彼女が語りかけてくれる言葉は全て偽り!」

「嘘でござる! あやたんは拙者のこと好きって言うてくれるでござる!」

話を本題に戻すことにしよう。

朝食を食べ終わると、自分が息を切らしていることに気付いた。

先ほどの調子で会話を続けていたためだろう。いくら普段からの慣れっことはいえ、朝っぱらからこれでは身が持たない。自分に反省

せっかくの休日にもつたいないと思いつつ、僕たちは利理岡権田勇の話を聞くことにした。ちゃぶ台を端に寄せ、居間の中央に僕たち大平家の面々と利理岡権田勇が円を作る。中万華は相変わらず次郎丸にくっ付いている。背中から腰に腕をまわしてぴったりと。顔を次郎丸の背中に押し付けていて、傍から見るととても不自然で

ある。息がしづらそうだ。

「次郎丸、折り入って頼みがあるでござる。……あの、そちらのお嬢さんは何をしていますでござるか。下手すりゃ窒息するでござる」

「大丈夫だよ、こいつ肉まんだから」

何が大丈夫なんだろうか。気になるところだが、今しがたの朝食と
言い、一向に話が進まない。ここは僕がいつものように仕切り役
になるとしよう。きつと将来合コンなんかで損をするタイプだな、僕
は。

「で、利理岡さんは何をお願いしたいんですか？」

「おお、そうでござる。次郎丸」

利理岡は言っと、一直線に次郎丸を見つめる。

「その、大事な物が失くなったんでござる。それを探すのを手伝っ
てほしいのでござる。」

探し物か。それ位なら自分で探せそうなものだが。次郎丸は鼻をほ
じりながら答える。

「大事な物ってあれか、まともな感覚か？ 残念だが、そいつは取
り戻したくて取り戻せるもんじゃねえぞ」

利理岡権田勇は次郎丸に目線で対抗する。ただ、欠片もダメージも
ない。

「実は……毘沙門天様の宝塔が盗まれたでござる」

ホウトウ？ 何だそれ。ただ、とても大事なものだと言うのは分かる。次郎丸の眉がぴくりと動いていた。彼の動揺なんて滅多に見るもんじゃない。

「あの、ホウトウって何ですか？」

僕が訪ねると、利理岡権田勇は眼鏡をくいつと上げてからため息をつく。彼は足を崩しながら言った。

「宝塔、財宝の神とされる毘沙門天様の象徴とも言える代物。こつちの世界でも、毘沙門天は左手に宝塔を持つとされていたと思っでござる。そのものに特別な力などはないでござるが、とにかく高価で、皆が欲しがるもの。それが盗まれたでござる」

次郎丸は今日初めての真剣な表情になった。ただ僕には分からなかった。それ自体に大変な力が無いのなら、宝塔を盗まれたところで困るのはその毘沙門天本人だけ。次郎丸がたつたそれだけのために、まして、自分とは担当の違う神の話を実剣に聞くなんて考えられない。この宝塔が盗まれたことに、もっと重大な何かがあるのだろうか。

「権田勇、夜叉と羅刹はどうしてた？ まさかあの二人がやられたなんてこたあ……」

「あ、いや。あの二人はあれでござる。腹をくだしてたでござる」

大きく息をつき、眉間をしわ立たせる次郎丸。

「じゃあ何か？ あの二人は宝塔盗まれてる間うつんこしてたのか？
馬鹿じゃねーか、ただの」

気になることは多けれど、まったく話が見えてこない。僕はその場で拳手をした。

「あの、質問なんですけど。その宝塔が盗まれて、何がそんなに大変なんですか？」

利理岡権田勇は一度次郎丸の顔をのぞくと、何かを確かめるようにうなづき、僕の方を向いた。

「いいでござるか？ さつきも言ったように宝塔は毘沙門天様の象徴でござる。それが盗まれたということは、毘沙門天様の信用に関わるんでござる。信用が無くなってしまえば、毘沙門天様の天界での地位が危うくなる。そんなことになって神が交代にでもなったら、この世界を創っていた者が変わることになるでござる。そうなれば世界の一部が創りなおされる。君の存在だって無くなるかもしれないでござる」

大問題であることを理解。僕は何も口だししない方がいいだろう。世界の存亡なんてスケールが大きすぎて実感も湧かない。

「盗んだのは誰か分かってんのか？」

「ただのバカでござる。一応目星はついてるでござる」

利理岡権田勇は着物のふところから一枚の写真を取り出した。そこには色ツヤの良い茶色の毛を生やしたタヌキが木の上でどっしりと構えていた。

「この辺りで宝塔に目をつけていたのはこのタヌキぐらいでござる。変化能力を持っていて、簡単には見つからないんでござる。」

「え？ タヌキが盗んだんですか？」

「動物にも、神という存在はいるでござる。今回はタヌキの下級神の仕業でござる。」

なかなか興味深い話だ。こんなこと、人間で知っているのは数少ないんじゃないのか？

「こうなったら、小神の中でも指折りの能力を持つ、次郎丸に頼もうということになったんでござる。」

話の内容よりも、気になる話題が出来てしまった。次郎丸が小神の中で指折りの能力を持つとかどうか。僕は一旦その話は置いておこうと思ったが、たまらず言った。

「あの、次郎丸さんってそんなすごいんですか？」

僕の言葉に驚いたのか、利理岡権田勇は眼鏡の奥の目をまん丸にする。

「あたりまえでござる！ 小神が全員次郎丸みたいな万能能力を持っていたら危険でござる！ 次郎丸だからこそ信頼出来るんでござる。」

「ああ、そうだな。お前だったら確実に事件起こしてるだろうな。児童なんたらとか」

咳払いで話の道を元に戻す利理岡権田勇。

「とにかく、そんな大変なことになっているでござる。次郎丸の力をどうか貸してほしいでござる」

次郎丸は聞くと、一度舌打ちをした。これは何かムカついているわけではない。次郎丸が面倒くさいということ演技するときの癖である。演技かどうか定かではないが、大抵この舌打ちの後はいい仕事を。ような気がする。次郎丸はその場で立ちあがった。

「謝礼は高えぞ、ヲタ野郎」

ということ僕と次郎丸、中万華、そして利理岡権田勇というメンツでタヌキの気配を追って近くのコンビニにやってきた。次郎丸によると、この場所が一番臭うんだそうだ。まるでベテラン刑事のような口ぶりである。僕たちはコンビニの店員に話を聞くことにした。自動ドアを抜けると、目の前にはガンダムフェアの文字。こういうのをコンビニはよくやるな。次郎丸はレジであくびをしていた金髪の女性と面会した。肌はきれいとは言えない小麦色。古いタイプのギャルである。

「おい、姉ちゃん。最近レジ中に葉っぱが入ってたことはねえか？」

女性ははあ？ と生意気に言つと、次郎丸にガンたれた。

「おっさん何言ってるの？」

「誰がおっさんだこの野郎。うんこみてえな肌の色しやがって」

「うわ、超うざいんですけど、こいつ！」

「誰がうざいだこの野郎。クレンザーかけて真っ白にしてやるるか」

僕は二人の間に割り込んだ。いつまでたっても話が進まん。

「あ、あの、葉っぱはなかったんですか？」

女性は息を整える。次郎丸と初めて会話をすると、この上なくイライラするんだよな。何だか懐かしい。

「えつとく、なかったと思うけど？」

次郎丸は僕の頭一つ上から大声で言った。

「お前なあ、ちよつと考えてくれよ！ なかつたんなら『ない』でいいじゃん！ 無駄に行数使いやがって！ 今なあ！ 作者も困ってんだよ！ 利理岡権田勇が登場するところで行数使いすぎたって！」

「ちよ、そんな制作裏話はいいから！ この会話も作者困るから！」

僕たちが言い争っていると、後ろから聞き覚えのある声が。

「あれ？ アツシと先生？」

見ると、そこには僕の幼馴染、磯野鮎の姿があった。今日も相変わらず男物のTシャツ。下はジーパン、髪の毛ははねまくって、女らしさの欠片もない。認めたくはないが、ちよつとかわいい顔。き

ちんとすれば女らしさなんて飛び越えて、モテたりとかするんじゃないだろうか。

「うわあ、やっぱそうだ。後なんか知らない人もいるけど、アツシの家だんだん家族多くなってるない？ 何を目指してるの？ ゆくゆくはヴィッセル神戸？」

「いや、なんでヴィッセル限定？ 普通そういうときはサッカーチームとか、何かそんなアバウトな感じでいいから。しかもそれ子供たくさん産んで……みたいな新妻のセリフじゃん」

久々の登場にも関わらず、相変わらずのアユ。彼女は利理岡権田勇を見ると首をかしげる。

「で、あの人は誰なの？」

「え、あの……じ、次郎丸さんの親戚」

とっさに出てくる嘘なんてどれも似たようなもんだ。まあ、どうせ何を言っても磯野鮎には興味が無いだろうから嘘を付く必要もなかったかもしれない。

「へえ。まあ何でもいいけど」

やっぱり。アユは鼻をかきながら続ける。

「こんなとこで何してるの？」

僕は神に関する情報だけを伏せ、ほんの少し脚色した話をした。自分でもなかなかうまく話をまとめられたように思う。将来脚本家に

でもなるうかな。

「へえ、何かおもしろそう」

次郎丸が言う。

「じゃあお前も付いてくるか？」

「え！ いいんですか先生？」

目を輝かせるアユ。おもちゃ屋に入った子供みたい。

ということ、僕たちのパーティにアユが加わった。イメージとしては僕は僧侶、次郎丸は戦士、利理岡権田勇は行商人、アユは格闘家だな。中万華はまあ、マスコットで。

僕たちは歩いた。朝っぱらから歩き通し。これはきつと朝にカーテンを開けることよりも体に良いだろうな。でも普段あまり運動しない僕にとってはあまり適切といえない。

「ね、先生。本当にこの辺に犯人いるの？」

磯野鮎は普段から運動している方なんだが、さすがにダルそうだな。まあ、事の重大さを知らないんだから当然。こちらと世界の存亡がかかっているんだ。次郎丸があくびまじりに答える。

「あ、何かこの辺から感じるんだけどなあ」

「え？ 先生、何を感じるの？」

墓穴を掘った次郎丸。まあ何とか自分で処理するだろう。

「え、あのだから……オーラ」

「ええ！？ 先生オーラ見えるの!？」

「適当な会話だ、まったく。」

太陽がだんだんと高くなり、日差しが強くなってきた。夏も近く、まわりつくような熱気にいら立ちを覚える。朝の涼しさはどこへやら。宝塔を盗んだ犯人も見つからないまま、時間だけがただただ過ぎてゆく。アユのダルさも時間とともに増していった。ただ、中万華が次郎丸の腕に抱きついてるのは変わらない。すさまじく暑そうだ。最近何だかんだで次郎丸も嫌がらなくなってきた。慣れは怖い。利理岡権田勇がミリタリーリュックから何かを取り出した。

「はあ、あやたん。拙者もう疲れたでござる〜」

ピンクの髪の子と目を合わせる利理岡権田勇。女の子といっても手のひらサイズの合成樹脂かなんかで作られたやつ。

「利理岡さん、フィギュア持参してるんですか……」

「アツシ君、これはフィギュアじゃないでござる。拙者の嫁でござる」

全身の血が凍った。驚きを超え、そこには恐怖すら生まれる。アユが素晴らしい笑顔で言う。

「利理岡さんって夢が大きいんですね。でも夢は寝て見るものですよ」

前から思っていたが、アユは案外毒舌だ。昔は僕もよく馬鹿にされ

たものだ。今の利理岡権田勇のようにうつむいたまま歩くのなんてざらだった。

「いいでござる、いいでござる。きつとあやたんはどこかで拙者の帰りを待っているでござる」

起きてみる夢も、寝てみる夢も、人に話すと馬鹿にされるもんだ。僕が昔アユから学んだ教訓。

「……お！ いたぞ！」

それまでずっと黙っていた次郎丸が、それまでのうつぷんを晴らすかのような声で言った。利理岡権田勇もまた同じように叫ぶ。

「あやたんがいたでござるか！」

「違えよ！ あやたんはこの先お前の前に現れることはねえよ！ タヌキだタヌキ！」

利理岡権田勇は酢昆布を食べた犬のような顔になった。慰めてやりたいところだが、タヌキが居たつていうんだから、それどころじゃない。また後でフオローしてやろう。

次郎丸がタヌキの気配を感じ取ったのは公園。前に僕と次郎丸が掃除をしたところだ。中央の噴水が印象的。今日も遊具には子供たちが集まり、その親と思しき方々がベンチに腰を据えている。

「ねえ、アツシ。いよいよ犯人と対面？ 何かテンション上がってきちゃったよ、私！」

先刻までのアユとは打って変わって元気いっぱいだ。やっぱりこい

つはこつちの方がらしいな。

それはおいとして、ついに宝塔を盗んだ犯人であるタヌキの居場所を掴んだ次郎丸はさらにその位置をしぼりこむために集中する。目をつむり、深く息を吸い込んだ。彼は静かである場所を指差す。公園の右端、鮮やかな緑の大木。その根元だ。僕たちはすぐにそこへ走った。見ると、大木の根元には小さな穴が。小さいと言ってもタヌキが入るのには十分すぎる大きさだ。

「ここでござるか」

利理岡権田勇はその穴の中へ手を入れる。その瞬間、利理岡権田勇の腕をつたう黒い影。素早い。外に飛び出たそれは写真で見た鮮やかな茶毛。例のタヌキの神だ。こんな小さなナリで神様なんだから人を見かけで判断してはいけないなとつくづく思う（このタヌキは人ではないけれど）。

「おまんら、何者ぜよ!？」

タヌキがスケバン刑事口調で言った。次郎丸が答える。

「なんだチミはってか。そうです、わたすが変なおじさんです」

「絶対嘘だぜよ、それ! おまはんは人間年齢27歳の小神っぽいんだぜよ!」

「何で俺の身元割れてんだよ!」

タヌキはうるさいわいぜよ、と叫ぶとその場に跳ね上がった。その口から火の粉がこぼれる。

「芽羅増魔！」

次郎丸に向かってタヌキから火球が放たれた。ていうか今思いつきりドラ エの呪文が聞こえたような。次郎丸に轟々と迫まるドラクの呪文っぽい火球。このままでは次郎丸単体に大ダメージを与えられてしまう。せめて芽羅見くらいなら耐えられるだろうが、芽羅増魔はあれマジで別格だからな。それを悟ったのか次郎丸は体を右へさばく。紙一重で避けられた火球はそのまま吸い込まれるように利理岡権田勇の顔面へ。

「ぶあつっ！」

利理岡権田勇は体を浮かせ、そのまま先ほどの大木に衝突した。クシャクシャの天然パーマが触れれば崩れそうな物体に。いわゆるドリフ爆発後へアーである。

「あああああ！ 大丈夫ですか利理岡さん！」

右手の親指を立て、自らの無事を伝える利理岡権田勇。

「ねえちよつとアツシ！ あのタヌキ、メラゾーマ出したんだけど！ 何あれ！？」

興奮したアユが言う。ていうかさっきから何となく誤魔化したのにこの女メラゾーマって言いやがったよ！

「ちよ、アユ！ 僕の苦労を一瞬でブチ壊したよ！ 不自然かもしれないけど一応……」

僕が言いかけると、それを遮るようにタヌキが大声で言った。

「さつきからこの緊張感の無さは何なんだよぜよ！ 第7章にして
ようやく訪れたバトルシーンが台無しだよぜよ！」

タヌキに続いて次郎丸も大声で主張する。

「うるせー！ お前もさつきから微妙に『ぜよ』の使い方間違っ
てんだよ！ 氣イ抜けんだろうが！」

次郎丸は右手を真上に掲げ、ベーコンの歌をつぶやく。その掌中
にはタヌキの放ったそれとは比にならない超巨大かつ、高出力の火球。
さすがに小神の中でも指折りの能力を持つ奴だ。ゆっくりタヌキに
向かい歩を進める次郎丸。冷や汗ダラダラのタヌキ。

「あ、あの〜。それは反則だと思っただよぜよ」

「うるせー、嫌なら宝塔返しやがれ」

次郎丸がタヌキの目の前で静止した。徐々に下ろされる次郎丸の右
手。

「やめて！」

タヌキの隠れていた大木から何者かが叫んだ。高い、子供のような
声。

「三郎！ 出てくるなぜよ！」

宝塔を盗んだタヌキの言葉を無視して、大木の中から現れたのは一
匹の子ダヌキであった。子ダヌキはおぼつかない足取りで次郎丸に

向かって歩く。

「危ないぜよ、三郎！ いいから隠れてるんだぜよ！」

三郎という子ダヌキは状況的に見て、このタヌキの子供だろう。小さい体を震わせながら次郎丸を見上げた。

「父ちゃんは悪くないんだ！ 全部俺が悪いんだ！」

次郎丸は子ダヌキの言葉を聞くと、しばらくして火球を消した。彼はその場にじやがみこみ子ダヌキの頭をひと撫でした。

「聞こうじゃねえか、お前の父ちゃんの話」

子ダヌキは張り詰めていたものを解き放つようにため息をついた。よほど怖かったんだろう。次郎丸の態度に安堵したようだ。子ダヌキはもう一度ため息をついてから口を開いた。

「俺、友達にいじめられてんだ。バカだ、ノロマだつって。そしてらさ、あいつら今度は父ちゃんまで悪く言ったもんだから……。俺くやしくて、父ちゃんはすごいんだって言い返したんだ。だったら証明してみるよつて、あいつらが言うから……。俺父ちゃんに無理なこと言っちゃって」

「なんて言っただんだ？」

「神様の持つてるものを一つ取ってきてくれて……」

で、あのタヌキは宝塔を盗んだわけか。最初はただの子供の喧嘩だったものが、こんな大事にまで発展するなんて。分からない世の中。

次郎丸はもう一度子ダヌキの頭を撫でた。

「お父さんよお。親バカは悪いことじゃねえが、犯罪に手を染めるつてのは納得できねえなあ」

タヌキは隠すように顔を前足で覆う。

「分かっているぜよお、自分がいかに馬鹿なことしてるかくらいは。でも、でもねえ……」

声が震えていた。タヌキは背を向けて続ける。

「子供の前くらい、格好つけたかったんぜよ……。子供が、私が悪く言われたのに反論してくれたんだぜよ？ こんな嬉しいこと、他にないぜよ。だから私も、その期待に答えたかった……」

「馬鹿、違っただろお父さん」

タヌキの言い切る前に次郎丸が口をはさんだ。

「お前はよお、子供に教えなきゃいけないことが二つある。まずはいじめられたら自分でやり返すこと。父ちゃんを巻きこむなってな。自分のことぐらい自分で解決しな。二つ目は、父ちゃんの背中を見ることがだ。父ちゃんがどんだけ頑張ってるか、どんだけ苦労してるか、背中を見てりゃわかるもんよ」

次郎丸は子ダヌキを抱き抱えると、すつくと立ち上がる。

「そんでな、父ちゃんはただどっしり構えてりゃいいんだ。背中だけ見せてりゃいいんだ。それだけで伝えられるほど、立派に生きり

やいいんだ。子供の前で格好つけるなんてなあ、それこそ格好悪いお父さんだぜ？ 一生懸命な姿見せてりゃ、自然とガキも一生懸命にならあ」

次郎丸は子ダヌキの耳もとで何かをつぶやいた。子ダヌキは次郎丸の胸から飛び降りると、大木に向かって走り出した。先ほどの穴に素早く潜り込むと、金色に輝く宝塔を啜えて、再び次郎丸の元へ。

「こいつは返してもらおうぜ？」

「あの、私はどう罪を償えば……」

タヌキが言うと、次郎丸は微笑み、タヌキの背中をポンと叩いた。

「てめえの償いは、このガキに見せられるような立派な背中を持つことだ。今度はこんな馬鹿なことすんじゃねえ。ガキが真っ直ぐ育つような、真っ直ぐな背中を持ってよ、お父さん」

次郎丸はタヌキの涙を背に僕たちの元へ。黒くこげた顔を拭いながら利理岡権田勇が立ちあがった。利理岡権田勇は次郎丸と対面。

「お前らしいでござるな、次郎丸。でも、情けをかけすぎると、今度は自分が不幸になるでござる。あの時だつて……」

「ふんっ」

あの時？ 一体何の話だろうか。僕は少し気になったが、問うのをやめた。というか、何か雰囲氣的に聞けなかったというのが本音だ。中万華が再び次郎丸の腕に抱きつく。今回の件はこれで終了だ。僕は何となくアユを見た。こんな滅茶苦茶な光景を見せてしまったん

だ。何かしら動揺してるかもしれない。ところが、アユは動揺するどころか、タヌキの親子に対して微笑んでいた。

「ん、アユ？」

「良いお父さんだったね」

僕はああと相槌を打った。普段よりアユがおしとやかに見えた。こんな奴だったか？ とにかく、僕たちの長い朝はこうして終わりを告げた。

利理岡権田勇はその日のうちに毘沙門天のところへ帰った。泊まるとかなんとか言っていたが、あれも適当に答えていた様子。

「次郎丸さん、あのタヌキの親子どうなったんですかね？」

僕は夕食をつまみながら言った。左腕に中万華を装備した次郎丸は大きくあくびをする。

「さあな。でもよ、俺のことは尊敬してくれてるみたいだぜ？」

「どういう意味ですか？」

「そのうち分かる」

その夜、我が家の玄関にはたくさんの実が盛られていた。

第8章 美術祭だ

未完成なものでも美しいものは存在する。ミロのヴィーナスなんてのはその代表。あれは腕が無いからこそ芸術なのだ。もしも腕が存在していたら、あの像の美術的価値は今とは大違いだろう、悪い意味で。時に作品は完成しない方が良いこともあるのである。身近なところで例えるなら、写生会を思い出してほしい。下書きの段階なら納得出来ていても、色を塗ると自分が嫌になることがあるだろう。ああいうのは本当に勘弁してほしい。

僕は朝から第二美術室の片隅で本を眺めていた。並べられた石膏の目線を横目に、ただ眺めている。読んでいるわけじゃない。何故かと言えば、今日は我が中学校の伝統行事、美術祭だからだ。これは、その日一日を生徒、又は教師の芸術作品創作に費やそうというもの。最近の子供は創作意欲だのなんだのが欠如しているそう。前校長が提案したそう。生徒の身分としては授業がなくて万々歳なのだが、普通こういうのは秋にやるべきじゃなからうか。現在、時系列的には夏休み前という設定なのだが……。作者は「私立」というのを魔法の言葉か何かと勘違いしている様子。

まあそういうわけで、僕は朝から真面目に作品づくりに勤しんでいるわけだ。とは言っても、何を作るうかも決まらず、ただいたずらに時間が過ぎていくだけである。このままでは何も作品が出来ないだろう。僕は魔が差し、もといアイデアを求め、他のみんなの状況をうかがうことにした。これが後の後悔の原因になるとも知らず。僕はまず四組に向かうことにした。あそこなら誰かがいるだろう。僕は四組のドアを静かに引いた。教室では生徒が黙々と作業している。個人でひたすら作業に没頭する者もいれば、何人かで集まっておしゃべりだけ楽しむ者もいる。そんな中、教室中央には人の熱気を感じなかった。そこにあるのは黒い塊。僕はゆっくりとそれに近づいた。表面はざらついているように見える。そして気付いたのだ。

それはおそろく、う　こさんであると。

「おいしいい！　まさかの一発目からの下ネタ！？　リアルすぎるよ！」

そう、そこに存在するう　こはそりゃもうリアルであった。色合い、質感、形、どれをとってもまるで健康児のう　こである。

「おー、アツシ。俺の作品に目を止めたみてえだな」

巨大なう　この陰から身を乗り出したのは居候、神田林次郎丸であった。

「あんたか、これ作ったの！　何で朝っぱらからこんな下ネタに走るかなあ、本当！」

次郎丸ははあ？　と頭をボリボリかいた。

「誰の作品が下ネタだつて？　これか？　俺の作ったこれがう　こに見えたのか？　おいおい、アツシ、マジだったらちよっと引くんだけど。お前小学生？」

「え、あ、違うんですか？」

「違うんですかって、当たり前だろ、これ。俺もう結構おっさんだよ？　う　こなんか作るわけねえだろ」

どうやら恥ずかしい間違いをしてしまったようだ。確かに次郎丸もいい大人。う　こというのはあまりに馬鹿馬鹿すぎる。

「えっと、じゃあこれ何なんですか？」

次郎丸は胸を二回叩くと、自慢げに答えた。

「あれだよ、暗黒物質コーモンカラデルヤツライト鉱石だよ」

「おい待てえ！ 今明らかに肛門からでるやつって言ったよ！ 何だよコーモンカラデルヤツライト鉱石って！ ちよっとマカライト鉱石チックに言っちなよ！」

次郎丸はまたまたはあ？ と頭をかいた。

「お前知らねえの？ まあ暗黒物質だしな、知らなくて当然かもな。まああれだよ、この作品のタイトル見ればお前も理解するだろ」

「え、タイトル？ 何なんですか、一体？」

タイトルだけで理解できるとは思わないのだが、一応聞いてみることに。

「じゃ、発表しまーす。タイトルは……『今朝』だ」

「あんたそれ今朝のうこでしょうがああああ！ ああ理解したよ！ その物体が完全にうこであるということ僕の見解がまとまったよ！」

次郎丸は聞くと、不満げに目を細めた。そして何か思いついたように口を開く。

「お前、俺の作品をどうこう言う前に他の奴のを見てみるよ。愛の

かけらもねえじゃねーか」

「次郎丸さんの作品にも愛は感じませんよ。むしろ日頃のストレスをぶつけているようにしか見えないです。みんなはもっとまともなの作ってますしね」

次郎丸は腕を組み、目を細めた。まるで悪だくみをする悪人のようなツラ。

「ほう、そこまで言うなら見て回ろっじゃねえか。他の奴の作品をよ？」

次郎丸の一言により、僕のこれからの予定が決まった。次郎丸と共に、僕の言葉の真偽のほどを確かめようツアーだ。どうせ周りの作品を見て回るつもりだったし、誰と一緒にでも問題はない。

ということで僕たちは二階廊下を歩いている。普段ならこの廊下は上級生の私有地のように扱われているが、美術祭に限っては公共の場へとその姿を変えている。僕と次郎丸は学校中で自由に創作活動をする生徒達を見て回っていた。

「ほら、次郎丸さん見て下さいよ。みんな真面目でしょ？」

「う……まあ確かにそうかもな」

今回は僕の言い分が正しいようで。久しぶりに次郎丸を言い負かした。何となく優越感。

「次郎丸さんっ！」

と、いきなり僕たちの目の前に飛び出るセーラー服。驚きに目を焼

かれながらも、必死に相手を確認する。そこに立っていたのは肉まんの精霊、中万華であった。

「ちょ、マンカさん！　ウチの制服着て何をしてるんですか！」

そう、中万華の来ているセーラー服は我が中学校のもの。普段スカートを履いてるのを見たことが無かったから目新しい。

「何してるって、私もこの美術祭に参加してるんじゃない」

してるんじゃない、などという事を言われても僕の頭の中はwhy?でいっぱいである。

「へ〜。で、何作ってた？」

次郎丸が聞くと彼女は頬を赤らめ恥じらいながらカメラを取り出した。

「一応、写真なんだけど。だから次郎丸さん、脱いでつぶは！」

次郎丸は一瞬何かの恐怖を感じたのか中万華の額に掌底。その場で彼女は息を荒げている。

「いや、意味分かんねーよ。今の接続詞はおかしいだろ。ていうか俺に攻撃されて息を荒げるな」

「ふふふ、荒げるなだなんて。そんな風に言っただけの私の反応を見て楽しんでるのね。いいわ、存分に楽しんで。むしろもつと言っただけ！」

僕たちは中万華を放置することにした。

「おい、アツシ。あいつはどうなるんだ？ あれはまともな作品、いや、まともな神経なのか？」

「あ、あの人は前から変ですから、例外です」

僕たちが次にやってきたのは宿直室である。次郎丸に、同じ教師の作品を見てもらおうと思いつての選択。本当はマモルの作品でも見せたいんだが、マモルはあいにく野球の試合が重なり今日はいない。なので教師。誰が今日の宿直なのかはわからないが、いくら最近の教師が犯罪よく起こしてると言っても、基本的には真面目な人間の職業のはずだ。きつと真面目な作品をつくっていることだろう。僕は宿直室のドアを失礼しますの一言を添えてゆっくり引いた。

「あ、神田林先生と大平君。悪いけど先生今から美術鑑賞だからね、邪魔しないでくれる？」

と、宿直室であぐらをかき、DVD数枚とにらめっこしていたのは体育教師子持先生、通称ロドリゲス。ガタイの良さより顔の大きさの方が気になる、一般女子生徒から気持ち悪いと言われるタイプだ。

「あ、すみません。何のDVDですか、それ」

「え？ 何ってこれほら。あれ、芸術作品。もうそれ以外の何ものでもない」

次郎丸はずかすかと宿直室にあがり、ロドリゲスの持っていたDVDを覗きこむ。

「お、これ新作じゃん」

僕は宿直室の入口から次郎丸に問いかけた。

「何の新作ですか？」

「『お隣さんは痴女シリーズ』の新作」

お隣さんは痴女？ それってただの……。

「大人のDVDでしょうがああ！ 何が芸術鑑賞！？」

「いや、待て大平君！ 先生は決して卑猥な気持ちで見ようとしたんじゃないぞー！ 本当もう、芸術として見るから。先生の中じゃそれは芸術だからね！」

「いや、お隣さんが痴女であることを芸術という概念の枠組みに放り込んでいることがもう卑猥ですよ！ ていうか朝からなんかこんなネタばつかだよ！ 作者の意図が分からん！」

僕は正直つらかった。僕の周りにはこんなのしかないのかと。

「ねえ、次郎丸さん！ やっぱり私放置プレイは耐えられない！」

僕の後ろから頭を突き出すのは中万華。別に放置プレイをしてたわけではないんだが。自分自身で放置プレイだと思いきみ、それに耐えられずやってくる。自分をいじめているのか楽しんでいるのか、自分自身に嘘を付いているのか、なんなのか。謎は深まるばかりである。

「おう、ちょっと待ってる。今行くから。それとロドリゲス、宿直

室の使い方をもう一度よく考えた方がいいぞ？ 結構人来んだから、場所考えろよ」

「ちょ、私はマジそんなんじゃないからね！ お隣さんになんて何の期待もしてないからね！」

叫ぶロドリゲスを背に、僕たちは宿直室を後にした。

新たに中万華を加え、再び他人の作品を鑑賞しようツアーは始まった。先ほどからだのツッコミツアーになっているが、本番はこれからである。今度こそまともな作品を鑑賞するのだ。その決意を胸に次にやってきたのは二組の教室。我が四組から一つ教室をまたいだ所。日当たりが他の教室よりも良いので、休み時間になるとたくさんの生徒がここに集まる。明かりを求めるのは人間の本能なのだ。

ふと教室中央を見ると、留学生モロミン君が紙に何かを熱心に書いていた。モロミン君はおかしいところもあるが、基本的にピュアで真面目な子である。モロミン君の作品を見せれば、次郎丸との対立も収まるだろう。

「モロミン君、何書いてるの？」

僕は次郎丸と中万華よりも一歩前に出て言った。モロミン君は顔を上げ、真っ赤になった眼で僕を見つめる。

「ワタシは今戦地の父二送ル手紙を書いてイマス」

……お、重い！ 重すぎる！ 何で泣いてるのモロミン君！？ お父さんに何があったの！？

「で、モロミン。その手紙の横に描いてるのはなんだ？」

次郎丸が手紙の端を指差した。モロミン君はほんの少し微笑む。

「コレは……、父の似顔絵デス。下手デしょう?」

モロミン君んんん！ やめて！ 微笑まないで！ その眼にたま
った涙を気にしながら微笑まないで！

「そ、そつか。じゃあ、頑張つて書いてね。行きましよう、次郎丸
さん、マンカさん」

「あ？ まだ他の奴の見てねーだろうが」

「いいから、早く!」

僕は次郎丸の手を引いて二組のドアを引いた。

「はあ、なんかさつきから一向にまともな美術作品作ってる人がい
ない……」

僕たちは三階廊下を歩いていった。僕は愚痴とため息を同時に漏す。

「やつぱお前、いねーんだつて。みんな思春期だから。頭ん中じゃ
なんやかんやでいつぱいなんだよ」

「そうよ、現にここに次郎丸さんとなんやかんやすること頭がい
っぱいの女がいるわ」

お前はだまつてると言わんばかりに中万華の側頭部にげんこつを押
し付ける次郎丸。微笑む中万華。

「でも、きつとここならいるはずですよ。僕は信じています」

僕が立ち止まったのは美術室。最終手段ではあるがここにまともな作品を作っている者がいなければ、もうこの学校には光が無いと言つても過言ではない。そもそも、普通ならこんなところに来る必要さえないはずなのだ。

「じゃ、行きますよ」

僕が振り返ると、こくりとうなづく次郎丸と中万華。僕は背筋を伸ばし、ドアを開けた。

「あ、次郎丸。おはようでござる」

藍色の着物にミリタリーリュック、そしてフチなし眼鏡。美術室の中央に座っていたのは次郎丸と同じ小神、利理岡権田勇だ。

「利理岡さん！？ 何やってんですか、こんなところで！」

「なにって、美術祭に参加してるだけでござる。それ以外になにか理由が必要でござるか？」

「いや、参加してる理由は結構必要だと思います」

利理岡権田勇はしばらく考えるフリをして頭をかいた。

「それはそうと、一体何の用でござるか。拙者は作品づくりで忙しいでござる」

「悪いな、ちよいと他の奴のを見て回っててよ。お前は何作ってた？」

次郎丸が問いかけると、利理岡権田勇は不敵な笑みを浮かべ持っていた筆を僕らの方へ向けた。

「ふっふっふ、拙者の作品は並大抵の人間には理解できないでござるよ」

そして利理岡権田勇は右手に持った自らの作品を僕らの前にかざした。

「そ、それは……」

ひらひらとした質感を損なわぬよう丁寧に削られたビニル樹脂製のセーラー服。実際じゃあまずお目にかかることない短すぎるスカート、そして太ももまであるハイソックス。どんなモデルでも得ることのできない抜群のスタイル。最も着眼される点はその瞳の大きさ。顔面の三分の一はある。そしてこれらの情報から導き出される答えは。

「校内で美少女フィギュアを制作!？」

利理岡権田勇は満面の笑みで胸を張る。

「どつでござるか、このリアリティ。まさに拙者の嫁としてふさわしいでござらうん!」

次郎丸が無言で額チヨップ。

「うわ、次郎丸さんいきなりですね」

「いや、何かめっちゃビックリした。友人ながらめっちゃビックリした」

利理岡権田勇はダメージを受けた額に手を当て、半泣きで言った。

「ちょっ！ 何でござるか、美少女フィギュアを作ることがそんなにいけないでござるか！ 冒とくでござる！ 全てのヲタクに対する冒とくでござるー！」

「いや、別に悪いとは言わねえよ。でもほら、ビックリしたから」

次郎丸の言う通り、悪いことではない。趣味に没頭することはいいことである。だが、校内で美少女フィギュアを作るという行為はマネしないだね。

「でも次郎丸さん、私は彼と同じ恋に生きる人間として共感できる部分はあるわ」

「わーお、マンカちゃんは優しいでござるー！」

「ちょ、やめて。セクハラだから」

「ええ！ 話しかけることがセクハラ!? 拙者の存在ってなんなの!? あやた〜ん、みんながいじめるでござるー！」

お手製のフィギュアに話しかける利理岡権田勇。もう彼のことは放っておいてここを離れようと思うのだが、読者の皆さんに異論はないだろうか。ていうか、もう離れることにする。

僕は思う。この学校にはもうまともな作品づくりをしている人間などいないのではないか。しばらく次郎丸、中万華と校内を歩き回ったのだが、中学生らしい行動をしている奴なんて一人もいないのだ。

保健室に行けば、木田が吉川さんの写真（盗撮）を花で飾り付け、木工室へ行けば具府君や齒岸君がガンダムのジオラマを制作。アユに至っては校舎裏で気の棒を振り回し「月牙天衝！」と叫ぶ始末。出ると思ってるのか、おい。

僕たちは歩いた。最後の希望に賭けて。この小説のキャラはもうほぼ出揃っている。残るは一人。そう、ユリちゃんだ。

「きつとユリちゃんなら大丈夫です。きつとまともなものを作ってます」

僕は廊下を歩きながら言った。次郎丸は少し疲れたようで、溜息まじりにこう返す。

「お前よお、ちよつとユリを美化しすぎじゃねえか？ いざ何かあったとき幻滅するぞ」

「大丈夫です。僕の妄想の中のユリちゃんはドジっ子ですから」

「何が大丈夫なんだよ。少なくともお前の頭は全然大丈夫じゃねえよ」

次郎丸の言葉にわずかに傷つきながらも、僕は真つ直ぐ歩を進めた。見据えるのは屋上への階段。ユリちゃんが友達と屋上に出ているらしいという情報を手に入れたからだ。階段を上る時間が非常に長く感じられる。きつと大丈夫だという保証はどこにもない。これはあ

くまで僕の願い。もしかしたら……。そんな矛盾した思いが僕の胸を突き刺す。

屋上へ出るドアの前で一旦足を止めた。何が起きても驚かないように準備が必要である。僕はゆっくりとドアノブへ手をかけた。

そこには確かにユリちゃんの姿があった。何をしているのだろうか。ユリちゃんの友達が本体を抑え、ユリちゃん本人がドライバーでその……。僕は何も言わずドアを閉める。

「おい、アツシどうしたんだよ。ユリはいたのか？」

「そうよ、いきなり閉めるなんて。顔を合わせるのも恥ずかしいの、この思春期は」

次郎丸達は後ろからよく見えなかったようだ。いやいや、僕だってよく見えなかった。でも明らかにおかしい光景ではあったのだ。まずユリちゃんが美術祭でドライバーを持ち出していることがもうおかしいのである。

「いや、もう今日はやめにしません？　なんていうか、ほら。もう僕が悪かったってことで良いですから」

「いやでもユリが何してるのか気になるじゃねえか」

「だってあの。ほら、女の子には知られたくないことの一つや二つあるだろうし」

中万華が間に入る。

「私は次郎丸さんに何を知られてもいいわ。ちなみに今日は私、女の子の日なの」

「こつちが知りたくねーよ、そんなこと」

次郎丸は中万華にツツコミを入れると、僕の体を押しつけ無理やりドアノブに手をかけた。

「あ、ちょ！ ダメ！」

僕が声をかけるも虚しく、すでに薄暗い階段にはドアから漏れた一筋の光が伸びていた。

「あ、先生にアツシ君。マンカさんも」

「何をやってんだ、お前ら」

ユリちゃん達はドライバー片手に掃除機を分解していた。

「えっと、日立のサイクロン掃除機はどんな構造になってるのかなあって」

「で、分解してたのか」

「はい、分解してました」

天使のような笑顔から放たれる強烈な言葉。ロングコートチワワ型テポドン発射装置と比喻させて頂く。

「あれ、みんなに言ってなかったっけ。私ね、電化製品が好きな」

覚悟は決まった。そんな一面も含めて、僕は彼女を好きになろう。

個性を認めずして何が人間か。ていうかこの小説で普通の人間を求めること自体間違っているのだ。そう、これはきつと萌え要素だ。そつに違いない。あれ？ 何か熱いものが頬をつたってる。

「あ、あのユリちゃん。邪魔してごめんね。存分に掃除機を分解していいから」

次郎丸が不思議そうな顔で僕を見る。

「おい、アツシ。どうしたんだよ、こんな絶好のツッコミタイミングを見逃すなんて。お前らしくないぞ。いつもなら『どのヤマダ電気職員！？』とか言ってるぞ？」

中万華も続く。

「そつよ。アツシの唯一の取り柄でしょ。これがなかったらあなたの存在価値なんて無に等しいのよ？」

存在価値がない。十四年間生きてきて、初めて言われた台詞かもしれない。

「うるせえええ！ 何だよそれ！ 僕の存在の主成分ツッコミ！？ 僕って一体何なんだよ！ あと次郎丸さんは僕のモノマネ下手！」

ツッコミの最中、僕は思った。そつだ、僕は変態になるんだ。変態はこの程度で幻滅したりしない。むしろ興奮してもおかしくないくらいだ、と。

「それで、ユリちゃん……」

僕は彼女の目を見る。そして、一つの壁を超える。

「どこのヤマダ電気職員くん!?」

ここに川平慈衛がいたならば間違いなく大声で実況するだろう。僕、大平アツシという人間が、始めて好きな女の子にツッコミを入れたのだから。そうだ、今回の事を機に、これから僕は彼女にツッコミを入れていこう。それこそが、今の僕が出来る精一杯の愛情表現なのだ。

「アツシ君……」

少しドスをきかせたような声でユリちゃんが言う。さり気にツッコミしていこう作戦は失敗だったか？ ちよ、もうやだ！ 今ここで嫌われるのかすごい嫌だ！

「日立のサイクロン掃除機はヤマダ電気以外でも売ってるんだから！ そんな風に言ったらヤマダ電気の専売特許みたいになるよ！」

「あ、ごめんなさい！」

なんか大丈夫みたいだが、思わず謝ってしまった。だがツッコミというのは端的にボケを指摘するものであるからして、そういうことを言われてしまうとどうしようもないんだが。ていうかユリちゃんって実はものすごいツッコミどころ満載なんじゃないか？ 今の今までそれが、ユリちゃんというだけでツッコミはしなかった。だが、これは間違っていたのかもしれない。そう、僕はこの世界に欠かすことの出来ないツッコミ。その役割をまっとうするのに、誰がボケであろうと関係はないのだ。僕の頭に少し大きい手が乗った。

「やっと、気付いたみてえだな」

次郎丸の目は、優しさ、許容、その他もろもろ色んなものが混じった優しい光を放っていた。

「次郎丸さん……。僕、頑張ります！」

僕はまた一つ大人の階段を上った。

僕たちは四組の教室へ戻っていた。何だか一向に事態が好転する気配がないからだ。頼みの綱、ユリちゃんでさえあれだもの。驚いたもの。僕たちはそれぞれ椅子に座って向かい合った。次郎丸は椅子の前後を逆にして座っている。

「とりあえず今日の結果だけだよ。俺の勝ちだろ」

次郎丸の言葉に僕は何も言い返せなかった。全員真面目は真面目なんだろう。それは分かる。ただそこに常識というものが抜け落ちていただけ。この小説に常識を求めるのは駄目だったのかもしれない。僕はため息をついてから言う。

「……そうかもしれませんね」

今回は次郎丸の言い分が正しいわけで。他の学校なら分からないが、うちはこうなんだ。ふと窓から校庭を見る。モチモチマンが餅をついている。ああ、ボケて待ってたんだな。なんか悪い気がするが、もう疲れたから行かないぞ。

「これからどうします?」

僕は座ったまま背伸びをする。今日は一日ツッコミっぱなしだった

から肩が凝った。次郎丸と中万華が唸る。すると、ふいに開く教室のドア。

「おっす、アツシ。先生」

そこに立っていたのは野球の試合に行っているはずのマモル。

「あれ？ 何でここにいるんだ、マモル？」

僕はすぐに疑問を言葉に乗せた。マモルはああ、と相槌をうつ。

「思ったより試合が早く終わったからさ、学校に寄ったんだ。一応今日は美術祭だし」

マモルは言つと教室の隅にある次郎丸の作品、『今朝』に目を止めた。

「あれ？ これコーモンカラデルヤツライト鉱石じゃないですか。すげークオリティ」

「ええ！？ 現存するのその物体！？ 誰が命名したんだよ、その暗黒物質！」

次郎丸は力の抜けた声で言う。

「説明してねーもんな。あれだよ、それはな。かの有名なジーザス武田の肛門から出るといわれる暗黒物質なんだよ」

「またジーザス！？ ていうか肛門から出る時点でやっぱりそれはう こだよ！ 暗黒物質でも何でもないよー！」

マモルがコーモンカラデルヤツライト鉱石の上に手を置いた。

「でもさ、アツシ。これ石油に代わる新エネルギーとして注目されてるんだぞ」

「こんな汚いものに未来がかかっているの!? 汚物で救われるのなんて嫌だよ! 抵抗感じるって!」

マモルは少し笑うと、辺りを見回した。

「どうした、マモル」

「いや、アツシはどれ作ったのになって」

どれを作った? 僕が? さて、一体何を作ったんだったか。思い出せない。ていうか僕作ったか? あれ? そもそも何でみんなの作品を見て回ったんだ。自分の参考にするためだったじゃないか!

「やばい! 忘れてた!」

おいおい、どうするんだよ美術の点数! いや、待て。落ちついて考える。マモルのように美術祭に参加していない生徒だっているんだ。もしかしたらこれ美術の点数に入らないんじゃないか……。

「あ、マモルはどうするの? 作品作らないの?」

「いや、野球部は後日でいいって言われてるから。これ結構、配点高いらしいよ」

わずかな希望消滅！ どうしたらいいんだ、もう時間が無い。僕は頭を抱えて悩んだ。だが何も考えつかない。ほんの少しの時間で作りあげられる作品。何を作ればいいんだ。僕が諦めかけたその時、頭に再び置かれた大きめの手。

「分けてやろうか？ 俺の作品を」

次郎丸の手には本体からちぎり取られたコーモンカラデルヤツライト鉱石。僕は無意識に手を差し出していた。

コーモンカラデルヤツライト鉱石は、決して汚くなんか無い。本当に汚いのは僕の心だったんだ。

未完成なものでも美しいものは存在する。ミロのヴェーナスなんてのはその代表。あれは腕が無いからこそ芸術なのだ。もしも腕が存在していたら、あの像の美術的価値は今とは大違いだろう、悪い意味で。時に作品は完成しない方が良く、こともあるのである。

今回の冒頭、これに準ずるのが僕の作品。『コーモンカラデルヤツライト鉱石の欠片』。未完成なフォルム。人として未完成な作者。全てが未完成。だが、それが芸術。僕の作品は金賞を取った。

第9章 神の世界だ

七月二十日、終わりの日であり、始まりの日でもあるこの日。僕達二年四組はイライラの中、文句も言わず列をなしていた。イライラの原因は様々だ。体にスライムのようにまとわりつく熱気。校長の永遠とも思える程長い話。中にはそれに耐えられない奴もいたりする。さつきも普段は目立たない奴が、学校中の注目を集めながら保健室へ抱えられて行った。こんな極限状態の中、思春期の少年少女が校歌なんてまともに歌うわけないだろう。学校側も勉強するべきだ。

ようやく終わった形式だけの終業式。いつもと対して変わらない通知簿ももらったし、後は担任の言葉を待つだけである。最中先生はコホンと一瞬間の間を置き、汗のじむ額を腕で拭いながら口を開いた。

「じゃ、みんな夏休み明けにな」

その瞬間訪れる歓喜。絶頂。ただ教室の中は静かだ。みんな心の中だけでその嬉しさを噛みしめる。委員長のやる気のない号令と共に、いつもより五時間も早く学校が終わった。

僕は暑さにやられた居候と帰路についていた。本当はみんなと帰りたかったのだが、部活やら塾やらが重なってたまたま僕たち二人だけになったのだ。セミの鳴き声により体感温度を増長させる中、次郎丸が言った。

「そついや言っただけだ。俺この夏休みに一回帰らなきゃいけないんだわ」

「帰るって、どこにです？」

答えに何となく目星はついている。いくら暑くてしんどくても、相槌を忘れてはいけないものだ。

「そりやお前、あれだろ」

次郎丸は空に向かって指をさす。

「あゝ、あれですか。天界とか、そんな感じですか」

次郎丸は眉間にしわを寄せ、意味が分からないといった表情で首を傾げる。

「あ、天界？ ああ、そーいやこっちではそんな呼び方もあったなあ」

僕は察した。僕たちの想像する神の世界には、キチンとした呼び名が存在しているという事を。前に利理岡権田勇が『天界』という言葉葉を使っていたように思うが、恐らく僕に分かりやすく説明しようとしていたのだろう。

「呼び方違うんですね。なんて言うんですか？」

僕が言うと次郎丸は腕を組み、少し考えるような態度でこつ返した。

「普通はオーサ・ダハルだけだな」

「王貞治……ですか？ あの野球選手の」

「は？ 違いよ。偶然だろ、どうせ」

世界は不思議がいっぱいである。僕たちが今まで天界とか、神の社、なんて認識していた神様の世界の名前が偉大な野球選手の名前と同じだったなんて。これは将来合コンなんかで使うことにしよう。次郎丸は続ける。

「まあ別名がいくつかあってなあ。例えばカズシゲ・ノ・チチとか」

「いやいや、それは違うでしょ。それは長嶋茂雄じゃないですか」

「知らねーよ、そんなもん。偶然だろうが。他にはラーメン・ツケメン・ボク・イケメンとか」

「ええ！？　今までの野球偉人シリーズはどこに行ってしまったんですか！」

という僕のツッコミも無下に扱われ、その後僕と次郎丸はただオーサ・ダルルへと向かう予定を立てたのである。

夏休みという夢の一ヶ月と十日間が始まって、早くも太陽が東から西へと三回移動した。僕と次郎丸は空っぽの旅行カバンを居間に置き、向かい合って話をする。

「えーと、向こうには何をしに戻るんですか？」

僕はもっと早いうちに聞いておくべきだった質問をほんの少し後悔しながら問うた。

「こっちに来てからの報告だな。他にも色々ちよいと顔出しに」

言いながら旅行カバンに手錠と鞭と口ウソクを詰める次郎丸。

「いやいや、どこにちよいと顔を出しに行くつもりだよ。次郎丸さん、いかがわしい感丸出しじゃないですか」

「はあ？ 違えよ、丸出しにすんのは俺じゃなくて相手のほ……」

「さあ！ さつさと準備をしましょうか！」

僕はダイソーとジャスコで揃えた旅行セットを片っ端からカバンに詰め込んだ。そこそこと親父がやってきて言う。

「そうか、旅行か。お父さん楽しみだよ、本当。それもカズシゲ・ノ・チチに行けるなんてもう、神主としては夢だよ。天使とかってかわいらしいのかなあ」

「何かかわいいじゃなくて、かわいらしいっていうところが何となくロリコンを思わせるぞ、親父」

元々は僕と次郎丸だけで行く予定だった次郎丸の里帰り。中万華は次郎丸と離れたくないというし、親父は神主として一度はカズシゲ・ノ・チチに行きたいということで、結局は家族旅行ということになった。家族で神様の世界に行くなんてウチだけだろうな。

で、次の日である。展開の早さについていけない読者はいったん紅茶を飲んで気を静めて頂きたい。コーヒーでも可。

僕たち大平家プラスよく分かんない二人は少なめの荷物を持って市内で一番大きい橋の下にやってきていた。腰まである高い草が生い茂っている。橋のちょうど真下は草が無く、開けた空地になっていた。隣で流れる川の音を尻目に、次郎丸が言った。

「橋の下ってのはな、異世界につながってたんだ。霊なんかもこっか

ら成仏する。今から俺があっちへの道を開けっから、ちょっと待ってろよ」

次郎丸は荷物をその場に置くと大きく深呼吸をした。呪文を唱えて道を出すようだ。案外ベタである。

「開け、オチン チン！」

「ええ！？ 呪文、かつこ悪！ ていうか伏せ字の意味ねーよ！」

思わずつつこんでしまった僕。ていうかこのネタはさすがに読者引くんじゃないだろうか。次郎丸のためらいの無さに拍手である。次郎丸の唱えた卑猥な呪文で橋の下に二メートル四方ほどの異空間への入口が開いた。覗くと、中は目が痛くなるような鮮やかな世界であった。赤ともいえる、黄色ともいえる、緑ともいえる。そんな色彩の美しい通り道。それは永遠に続いているように見える。

「ほんじゃ、行くか。ここを進めばすぐだからよ」

その後、光の道を通った記憶はほとんどない。

オーサ・ダハル。神の住む世界。天国、地獄に通じる唯一のターミナル。次郎丸の説明ではそういうことらしかった。僕は正直不安であった。異世界ということとは、常識も、生活も、すべてがオリジナル。僕たちの世界とは全くの別物。僕は外国へ行くことに足踏みするタイプなんだ。

ところがどっこい。オーサ・ダハルの入口に立った僕は思わずこっぴど言った。

「何か……浅草？」

そうなのだ。オーサ・ダハルは何かこう、どこか浅草っぽかったのだ。僕たち家族は次郎丸を先頭に大きな道を歩いた。人通りが多い道だ。道の両端には活気あふれる店が立ち並ぶ。地面はきつちり舗装されているし、ここはメインストリートか何かかもしれない。気温に関してはここも僕たちの世界と同じように暑かった。ただ、日本の蒸し暑さとは違う、からつとした暑さだ。

「あれ？ 次郎丸さん帰ってきてたのかい？」

突然声をかけてきたのはどこぞの店の主人であった。次郎丸と知り合いのようだ。

「おう、久しぶりだな。ちょっと聞きたいんだけどよ、最近こっちではあれは起きたか？」

店の主人は何故か僕の方をちらりと見た。すると両手を広げ顔の横に。

「全然だねえ。逆に不気味なくらいだよ」

「そうか、分かった。サンキューな」

次郎丸はそう言って簡単に別れをすませると、また大通りを歩き始めた。一体何の話をしていたのだろうか。少々気になったが、何となく聞かないでいた。

しばらく歩いて、先ほどの大通りの突き当りに、僕たちは見た。それは巨大な城。周りを掘りに囲まれ、高い壁が並ぶ。城自体の大きさはまず僕たちの世界ではお目にかかることのないサイズ。雲を突き刺す天守閣なんて見たことが無い。初めて六本木ヒルズを訪れた時の感動に似た気分だ。

「ここはオーサ・ダハルの最高機関、『神政会』だ。上級の神がここでオーサ・ダハル、天国、地獄、あと現世のバランスを保ってる」
「バランスを保つ？」

僕は首を傾げながら言った。次郎丸はああ、と一呼吸入れる。

「四つの世界のどれが力を持ち過ぎてもしいけねえんだ。俺たち神の仕事するのは政治じゃねえ。バランス取りなんだよ」

次郎丸の言葉で長年考えていた僕の疑問が解けた。何故次郎丸のよくな神が事実存在していながら、僕たちの世界では戦争や貧困、エネルギー不足なんかの問題がなくなるのか、という疑問だ。バランスを取るための存在である神はそこまで干渉しないのであろう。

「何か初めて次郎丸さんを神様なんだなあって思いました」

「あ？ そうか？」

頬を赤らめた中万華が恥じらいながら続く。

「私は前々から、次郎丸さんのことを運命の人なんだなあって思っていました」

「そうか、俺は前々からお前のこと怖いなあって思ってたよ」

何かに耐えきれなくなったのか、勢いよく次郎丸の左手にからみつく中万華。人になついた猫みたい。そしてそれに無反応な次郎丸。なんだかんだで仲は良いのだ、この二人。次郎丸がどう想っている

のかは、誰も知らない。

次郎丸が門兵に小声で何かを告げると、神政会の持つ巨大な門が重苦しい音をたてながらゆっくり開いた。

「悪いが、ここからは俺とアツシだけだ。マンカとお父さんはこの門兵について行ってくれ」

何故か僕だけはこの大きなお城に入れるようだ。嫌がる中万華の耳もとに次郎丸が優しく息を吹きかけると、彼女はよだれをたらしながら気を失った。その中万華を支えながら親父を誘導する門兵に軽く手を振り、僕と次郎丸は神政会に足を踏み入れた。

中は空調設備が整っているのか、ひんやりと涼しい適度な温度。急激な温度変化に、大気の壁といふかなんというか、そういうものを実感する。僕は次郎丸と長い廊下を歩いていた。

「あの、何で僕だけに入れるんですか？」

このオーサ・ダハルへ来る前に次郎丸から聞いていたのだ。ここでは一時的に僕と次郎丸の契約は解消されるということを。それに關わらず僕は次郎丸という。変な話だ。僕が質問をすると、次郎丸は実に不機嫌そうに頭をかいた。何となくだが、僕はそれを見てもう聞かないでおくことを決めた。

しばらく歩くと、目の前に大きな門が現れた。室内にこれほど大きな門がある理由は気になるが、何故かオーサ・ダハルにやって来てから不機嫌そうな次郎丸には何も聞くことが出来ない。僕は結構な小心者なのだ。次郎丸は門を片手で力強く押した。開かなかつたので今度は引いた。僕はそこに神を見ることになる。

広い畳部屋。その奥には段違いで、十センチほど高くなった、お偉いさんの座る場所があった。大河ドラマなんかのシーンを思い出していただければ容易に想像できると思う。そこにはあぐらをかき、

頬づえをついた豪華な衣装に身を包む大きな男。耳の下からあごまでUの字を描くように生えた髭。口周りに生えたそれときれいに繋がりが、まったく汚さは感じない。顔の堀が深く、ダンディーな良い男といったイメージだ。男は次郎丸を突き上げるように睨むと、その場に立ちあがり両手を大きく広げた。

「お帰り、次郎丸ちゃん！」

無理に喉から絞り出した甲高い声で髭の男が言い、次郎丸に向かって駆け出した。それを冷静に右の蹴りで制圧する次郎丸。髭の男は空中で顔面に次郎丸の足をめり込ませる。

「気持ち悪いんだよ、じじい。ていうか抱きつく圧力が半端ねーだろうが。そんな殺傷力抜群のハグ見たことねーよ」

次郎丸の蹴りによって顔面を腫れあがらせた髭の男。

「じじいなんて呼ばないで。私には恵比寿という美しい名前が……」

「そんな汚ねえ顔面でそういうこと言わないでくれる？」

僕は啞然とした。目の前でいきなり繰り広げられた野獣VS野獣。恵比寿と名乗る謎のおっさん。僕の頭の中で疑問がぐるぐると駆け巡る。

「あの、次郎丸さん。こちらの方は……？」

次郎丸は顔だけこちらを向き、ひょうひょうとした態度で答えた。

「このじじいは恵比寿。俺の担当する神で、性同一性障害のおっさ

んだ」

僕はまたも啞然とした。

僕と次郎丸はその場に並んで座った。僕は正座、次郎丸はあくらである。その前にはどっしりと構える恵比寿。恵比寿は僕をまじまじと見つめる。

「へえ、この子が大平アツシね。なかなかかわいい顔をしているわ」

鳥肌、立つ。

「まあ、これが今回の報告だ」

次郎丸は座ったまま言った。何の資料や会話もしていないのに報告？ 僕は不思議に思ったが、神様のことなど何も分からないので、きつとお互いにだけ通じる何かをしたのだろうと勝手に納得した。

「うん、まだ大丈夫みたいね。本当、今回のことがなければ食べちゃいたいわ」

僕に向かってウインクをする恵比寿。冷や汗、たれる。次郎丸はそんな恵比寿の髭に右手を伸ばし、鷲掴みにする。

「だまれ、じじい。そんな感想いらねーんだよ」

「ちょ、じろ、次郎丸！ 怖いっ！ 胸倉を掴まれるとかより数倍怖いっ！」

次郎丸は怯えきった恵比寿の言葉をゴミ箱にポイするように、掴んだ髭を引きちぎった。アイターツと叫びその場に倒れこむ恵比寿。

彼の口元がわなわな震えている。

「ちょ、ちょ、ちょっとおお！ 私のチャームポイントを何でそんな惜しげもなく引きちぎることができるの!？」

「痛っ。髭が指に刺さった。どうしてくれんだよ」

「いやいや、こっちのセリフよ！ どうしてくれんの、私のチャームポイント！ キャラ付けが今のところ髭と性同一性障害であること以外なにもないのよ！ 早くもキャラが薄くなるようなことしてんじゃないわよ！」

次郎丸はこつちでも何も変わらないんだな。僕は一部髭の欠けてしまった恵比寿と次郎丸のやりとりに自分と似たものを感じた。そして、何だかすごい居心地の悪さも感じていた。たまらなくやるせないんだが。

「あ、あの次郎丸さん。僕がここにいる必要ってあったんですかね……?」

今聞くべきではないんだろうが、ついつい空気に耐えられなかったのだ。ご勘弁。次郎丸は顔はこちらに向けるものの、目は僕と合わせようとしない。

「あ？ いや、別になかったかも……」

僕は腹が立った。今日の次郎丸はいつもと違う。こんな伏し目がちなおっさんは、次郎丸じゃない。

「何なんですか、それは！ ていうか今日次郎丸さん、何かおかし

いですよ！ 僕なんか怒らせるようなことしましたか！？」

「何言つてんだよ。別に変じゃねーよ、俺は」

そう言っている間も次郎丸は僕と目を合わせることはなかった。

良い天気だった。ここに来てすぐには気がつかなかったが、ここは空がきれいだ。見つめているとなんだか吸い込まれそうになる。

僕らの住む世界の濁った空なんかとは比べモノにならない。

僕は神政会という大きな城の周りを一人で散歩している。

いつもなら隣にプーマのジャージを着た男がいるのだけれど、不思議と違和感はない。元々一人が好きだった男だ。今さら、といった感じである。で、そのジャージ男はというと。僕に、もう用は済んだから好きにしてい、と言って城の中で昼寝を始めてしまった。それを見て、僕はただ一人になりたいと思ったのだ。そして現在に至る。

ほとんど同じようなことを考えながら歩き、気がつけば僕は城を離れ、薄暗い森の前にやってきていた。振り返ると、先ほど通ったメインストリートが百メートルほど先に見える。ここは日本という郊外のような所なのだろうか。僕は気分と興味の二つの力で、森の中へと足を踏み入れた。

森の中は先ほどまでのからつとした暑さとは無縁の、冷たく、じめじめとした世界だった。すべての生氣はその鼓動を止め、ただ大気の流れにその身を任せている。僕は神の世界にもこういうところがあるのだと知り、思わず感嘆の声を漏らした。そんな仮死状態の世界をしばらく進むと、僕は大きな洞窟を発見した。

洞窟を見て、僕はなんだか気分が高揚した。小さい頃にこんな秘密の場所みたいなのを見つけると嬉しいと思う。今でもこんなに楽しい気分なんだ。間違いない。すぐに落ち着く僕の感情に気付いた。僕は上っ面だけは楽しそうに、自分に嘘をついているのかもしれない。もう、帰ろう。そう思い立ち、僕はその場で踵を返した。

すると、どこからか僕の耳に届く不思議な口笛の音。聞いたことのないメロディだが、何故だかとても懐かしく、僕は思わず歩を止めた。

「お前、この歌を知ってるのか？」

知らない声だった。僕は声の主を探し、その場をきよろきよろと見渡す。

「ここだ」

声は洞窟の中からだった。光が少なく、陰に埋もれて姿が確認できない。声のトーンから男であることだけが推測される。

「お前、もしかして大平アツシか？」

「え……そうですけど」

僕は頭をフル回転させた。その男は僕を知っている。ならば僕も彼を知っているのか？ 確かに懐かしさは感じるのだ。あの口笛に。だが、何故僕の知り合いがここにいる。分からない。彼は誰だ。

「悩んでるみたいだが、お前は俺のことを知らない。それは確実だ」

僕はただ黙って聞いた。じめじめとした空気が僕と服の密着度を高め、とても不愉快な気分だ。

「神田林次郎丸が、お前と契約を結んだよな？」

「どうしてそれを」

「神になるためとか、そんな感じの理由か？」

僕はまた黙ることにした。この男は何を知っている。僕の何を。

「一つだけ教えといてやるよ。それあ、嘘だ。奴は神にはなれねえ、絶対にな。真の理由は別にある」

次郎丸が、神になれない？ 真の理由？ 何を言ってるんだ、この男は。僕に何を伝えようとしているんだ。僕は思わず声を出した。

「何ですか、それ。真の理由って……」

ほんの少し間が空いた。僕は何となく、彼が笑っていることを悟った。

「簡単に言えばそうだなあ。お前が危険な存在だから。お前という存在が災厄であるからって感じか」

「災厄……？」

「血つてのは、案外正直なもんなんだよ」

言葉の節々に感じる力。誰かに似ていると思った。それが誰ともわからず、僕の胸の中で彼の言った言葉が反響を続ける。男がもう一言、何かを言おうとした、そのとき。

「アツシ！ 誰と話してんだ！」

僕が振り向くと、そこには走ってこちらへやってくる次郎丸がいた。

息を切らしながら、僕の肩に手を置く。

「あ、いや何か、その洞窟の中にいる人と」

僕は言いながら気がついた。洞窟の中に、先ほどまでであった気配が消えていることに。

「何を、何を話したんだ？」

次郎丸はいつになく真剣な眼差しだった。この時、初めて手のひらに大量の汗をかいていたことを知る。

「あ、あの。別に、何も……」

僕は彼の目を見ることが出来なかった。

僕は次郎丸に連れられて、というよりは、後ろをついて行き最初にやってきたメインストリートへとやってきた。そこに一つ、古い造りのカフェが。長い月日で薄汚れた木造建築。その正面には大きなガラス窓があり、中の様子がうかがえる。親父と不機嫌そうな中万華が二人で気まずそうにコーヒーを飲んでいる姿が見えた。二人の会話が窓越しに聞こえる。

「あ、あのマンカちゃん。そんなに気を落とさないで。神田林さんだって好きでこうしてるわけじゃないんだから」

親父が、次郎丸に放っておかれた中万華をなだめている。

「前なら、放置プレイだと思って楽しめたわ。でもね、お父さん。最近気がついたんだけど、私はいじめられるのが好きで、放置されることはあまり好きじゃないみたいなの」

「こらこら、マンカちゃん。年頃の女の子が公共の場でいじめられるのが好きとか言わないの。お父さんはそついうの厳しくいくから」
何だか本物の親子みたいだ。僕と次郎丸がカフェに入ると、それに気付いた中万華が勢いよく立ち上がる。

「次郎丸さんっ！ あ……ひ、ひどいじゃない！ あたしを気絶させてまで遠ざけたかったの！？ あたしは邪魔な存在なの！？」

次郎丸は中万華の言葉を聞くと、彼女の頭にポンと手を置き、言った。

「ああ、いや悪かったよ。今度は目が覚めなくらいに気絶させるから」

「ちょ、そんな言い方って……。どれだけ私のツボを心得ているのよ！ 興奮するじゃない！」

相変わらずだった。僕の家族はいつも通りで、安心した。あの男の言っていたことはどういう意味だったのか。僕はこれから、どうすればいいのか。そんな悩みが、家族を見ると、ほんの少しだけどすつきりする。僕の家族には他人が二人まじっているが、僕らは確かに何かでつながっていて、僕らは確かに家族なんだ。次郎丸がこちらを向き、中万華と同じように僕の頭に手を置いた。

「今日機嫌が悪かったのは謝るよ。後、お前が何を言われたのか、もう聞かねえ。でもよ、これだけは信じてくれ」

今日初めて次郎丸と目が合った。

「俺は、お前の味方だから」

自分の目頭が熱くなるのを感じた。不安や疑問が全て吹き飛んだ。不純なものが消え去った僕の頭の中には、その代わりに温かいものが生まれていた。それはひどく大きく、重いが、不思議と嫌な気はしない。そうだ、僕はもうあんな言葉に振り回されない。次郎丸は次郎丸で、僕は僕だ。

「あれ、どうしたアツシ。目が赤いぞ」

親父が僕を見て言う。僕はほんの少し微笑んで、目にゴミが入ったと返した。

オーサ・ダル滞在二日目である。今日は家族で観光。案内役は次郎丸だ。僕たちは昨日通ったメインストリートを次郎丸を先頭に練り歩いている。

「昨日は言っ てなかつ たけどな。この大通りはオーサ・ダル最大の繁華街になつてゐる。名前は『フィリップ・トルシエ』だ」

「今度はサッカーですか。何かもう神様の世界ふざけてるとしか思えないんですけど」

次郎丸はいきなりその歩みを止め、僕たちの方を向いた。

「そうだ、こっちでは日曜日の朝に必ずやる儀式があるんだけどよ。今日はちょうど日曜日だし、やっとくか」

神様の世界の儀式。とても興味深い。好奇心が跳ね回る。親父が次郎丸に質問する。

「その儀式っていうのはどういうことをするんですか、神田林さん」

「おう、ちょっとついてきてくれ」

次郎丸に連れられてやってきたのは怪しい、怪しい洋館。黒を基調としたカラーリングで不気味な雰囲気をかもし出している。入口の両側には明かりの点いた灯籠。洋館なのに、灯籠。そこから何か嗅いだことのない匂いがする。決して悪い匂いではないものの、不気味でしようがない。

「次郎丸さん。ここでやるんですか？」

「そうだ」

僕たち大平家はゆっくりとそのドアを開けた。中は暗く、いくつか部屋がある。それぞれの部屋のドアに、『使用中』又は、『空き部屋』と書かれたプレートが。次郎丸は空き部屋の中から適当に一部屋選んでドアを開けた。僕たちが全員入ったことを確認すると、次郎丸はドアを閉めた。

「暗いですね……。こんなとこでどんな儀式をするんですか」

僕は少し不安げに聞いた。

「おう。儀式の名は『モウ・ヤメテクダサイ』。ここでな、家族の長なる者がパンツ一丁になって手錠をつけた状態で、家族が鞭と口ウソクでいたぶるんだ」

「おいしいい！ 何だそれ、深夜の歌舞伎町！？ あの荷物はこの

ためだったのかよ！ ていうかその名前単なる感想じゃねーか！
何なんだよオーサ・ダハル！ ただの変態ワールド！？」

親父が内ももすり合わせながら、体をビクつかせる。

「ちよちよちよ、ちよつとおおお。家族の長つて私だよな？ 本当に、本当に？」

中万華が拳手する。

「待つて！ 私立候補します！ いたぶつて下さい！」

僕は大声でこの空気を断ち切りにかかった。

「ちよつと待つて大平家！ おかしいから！ 冷静に考えよう！
これは所詮オーサ・ダハルのしきたりなわけだから！ 僕たちが絶
対にやらなければいけないかって言ったら違うよ！？」

親父が僕の肩に手を置いた。親父の震えが僕の肩を通して伝わる。

「ま、待てアツシ。これやっぱ私たちはオーサ・ダハルに来ている
わけだし。郷に入っては郷に従えという言葉もあるわけだし」

「それこそ待つて親父！ 真面目なのは分かるけど、誇りを捨てる
ことはやめて！ 一番悲しむのは実の息子である僕だから！」

中万華が次郎丸の右手を両手で握りこみ、懇願する。

「次郎丸さんお願い！ 私にチャンスを！」

「いや、でもこれがしきたりだからなあ。なあ、お父さん」

僕の肩に乗っていた手に力が入る。

「アツシ、きつと死んだ母さんも応援してると思うんだ」

「いやいやいや！ ほぼ確実に母さんはアンチだよ！ アンチモウ・ヤメテクダサイだよ、きつと！ 次郎丸さんも親父を誘導するのはやめて！」

親父が真剣な目つきで僕を見つめる。

「アツシ……部屋の外に出ていなさい」

「ちよつとおおお！ 覚悟決めちゃったよ、この人！」

親父は僕を力づくで部屋の外に押し出そうとする。必死で抵抗するものの、親父の体重は僕の倍以上ある。僕の体は徐々に引きずられ、ついに部屋の外へ。

「お、親父いいいい！」

「アツシ、お父さんは負けん」

そう小声で僕に伝えると、僕を突き飛ばし部屋のドアを勢いよく閉めた。カチャリという鍵のかかる音。僕は少しの間放心状態に陥った。一分程間をあげ、ドア越しに聞こえた。

「あ、ちよつと熱っ！ もう、きゃっ！ いつ、これ！ 変なものに目覚めそう！」

僕は耳をふさいで大声で『翼をください』を歌った。

僕たちのオーサ・ダハルの旅はこうして幕を閉じた。今回はゆっくり出来なかったので、また時間を作ってオーサ・ダハルへ来ることを次郎丸と約束し、僕たちは光の道を通る。次郎丸はもう恵比寿に別れは言つてあるとのこと。

僕はここで、次郎丸の話聞いた。ただ、今の僕にはその意味が分からない。いつかその時が来た時に、僕はもう一度彼の言葉を思い出すのだ。そして次郎丸に確かめる。親父の醜態は忘れる。僕はこの二つを胸に、現世へと帰還した。

第10章 海水浴だ

海である。心地の良い波音に聞き入りながら、僕たちは浜辺で海と戯れている。次郎丸や中万華はもちろん、マモル、ユリちゃん、アユも一緒だ。木田は旅行に行ったんだとか。まあ、どうでもいいけど。

さて、冒頭からいきなり海であるといわれたところで、読者の方々を置いてけぼりにするだけだろう。まずはそのいきさつを聞いてほしい。

暑い。『オーサ・ダハル』から帰ってから、僕や次郎丸は存外平凡な日常を過ごしていた。神様や精霊と共に生活をしていても、非凡な毎日が送れるかといえばそうではない。僕が今まで体験した出来事なんて、普通の生活に少しスパイスを利かせた程度のものなのだ。とかく、今回に至ってはそのスパイスもない、無味乾燥な感じなのだが。

宿題は終わらせた。あとは遊ぶだけ。そのはずなのに、どうも良い計画が浮かばない。いつもテレビの前でうなだれるだけだ。それは次郎丸にも言えること。彼は朝から夏休みアニメ劇場内で再放送される人気幼稚園児アニメを見て、そのまま昼までグータラする。中万華はそんな次郎丸の横でにこにこ笑いながら体育座りである。彼女は彼の隣にいてだけで満足なようだ。

ある日の昼。僕は家族で昼食を食べていた。地味に納豆が好きな次郎丸はいつものようにそれを百回かきまぜている。一日三パックは常人からしては多い。だがキャラクターの個性としては激しく微妙な量である。

「何かよう、最近俺ら何もしてねーよな」

次郎丸がため息まじりにそう言った。納豆をかきませる手は止まっている。

「確かにそうですねえ。何だか家にこもりつきりって感じで」

僕も昼食の箸を止める。次郎丸も僕と同じように退屈を感じていたようだ。中万華はホカホカと湯気の上がるカレーまんを一口ほおばった。

「私は次郎丸さんの隣にいただけで幸せ」

膨らんだ頬が赤みをおびる。次郎丸が言う。

「ていうかマンカ。それは肉まんの精霊としてどうなんだ？ 共食いみたいな感じか？」

「何言ってるの次郎丸さんっ。これはカレーまんよ？ 何の問題もないわ」

当たり前でしょ、という空気をかもす中万華。そういえば精霊の話はまだあまり聞いたことが無い。また今度聞いてみることにしよう。

「まあ、それはそれとしてですよ。どこか行きませんか？ このまま家に引きこもるのもどうかと思いますし」

僕は特にアウトドア派というわけではないが、やはり何日も外に出なければ外の空気が吸いたい、くらいは感じる。次郎丸は唸りながら納豆にたれを入れた。

「やっぱあれだよな。肝試しは早々とやっちまったし。他に夏らしいのって言ったら……」

中万華が言う。

「夏と言えば……セミ！ セミ園なんて夏らしい気がする！」

「いやいやマンカさん。そこでハッスル出来る自信はありますか？」

僕が言うところらに分かるように大きく舌打ち。本当もっ何か泣きそう。次郎丸も続く。

「お前、セミなんてうるさいだけだろうが。裏側キモイし。ハッスルするならソープレランドしかねえだろ」

「どんなハッスルをする気ですか！ しかも夏関係ないし！」

次郎丸は腕を組み、上からをもの言う。

「俺のハートが夏の暑さのように燃え上がる」

「知らねーよ、あんたの胸の高ぶりなんて！」

僕が言うと次郎丸はテレビに目をやった。その右手では納豆を無意識にかき混ぜているようだ。段々と早くなる箸の回転速度。彼は何かをひらめいたのか、その箸に急ブレーキをかけた。

「そうだ、海行こう！ ていうかなんか臭っ！ 今まで気にも止めなかったのに納豆が不意に臭っ！」

いきなり騒ぎだした次郎丸に対して、親父は味噌汁をすすりながらなだめるように左手を差し出した。何故だか声の震える親父。

「ま、まあ落ち着いて下さい神田林さん。海ですか、それもいいけれど、やっぱりソ、ソーブランドでいいんじゃないだろうか」

「いや、行きたかったのかよ親父！ ていうか声震えるほど恥ずかしいなら意見するなよ！ 息子の前でそんなみだらな部分見せるなよ！」

次郎丸は僕と親父のやりとりを冷然と眺め、納豆を一口食べた。

「まあ、それはそれとしてだな。良いじゃねえか海。最近体もなまってるんだ。泳いで、水着の女見て、その辺鍛え直さねえとな」

「いや、水着の女の子を見ることで鍛えられるものって何なんですか。それただの心の黒い部分でしょうが」

「まあまあ、いいじゃねえか。何と言おうとも俺は海に行くぞ」

次郎丸の行くところ僕在り、といった感じ。彼には結局のところベークソンの歌というものがあるわけで、僕の意見なんて参考ていどにしかないわけで。

僕はみんなに連絡をした。海に行くのに誰も誘わないなんて、遊び盛りの中学生には不可能な話なのだ。

さあ、海である。ここは去年の夏、アユが見つけた人のいない、いわばプライベートビーチだ。波に反射した太陽の光がゆらゆらと何度も姿を変えている。海岸の周りを腰の高さ程度の崖に囲まれて

いて、そこには草木が生い茂る。大人に見つからない最高の遊び場だ。

さて、ここからは僕の独断と偏見の入り混じった水着審査と行こう。

女子チームの水着姿で一際大きな輝きを放つユリちゃん。白いフリルのついたセパレート。その姿はまさに天使。背中に大きな翼でもあれば絵になる。いつもより呼吸が深くなる僕。とりあえず心の中でガッツポーズだ。アユは何だか子供っぽい柄もの一体型。可憐とかいうよりは、元気いっぱいってな感じである。中万華は何故だかスクール水着だ。正直僕自身こっちの趣味はないのであまり触れないでおく。あえて一つ言うなら、若干引いた。男子チームはというと……。僕とマモルは普通のひざ丈海パン。次郎丸はそこにTシャツを着ている。そのTシャツには大きく『海の男』と書かれていて、今日ぐらいしか着るときが無いんだろかなと思わされる。水着審査、優勝は無言わずユリちゃん。はじめから分かりきったことなんだろが、一応だ。

「心地良い、潮風。涼やかなメロディを奏でる波の音。ほらな、やっぱり海に来て正解じゃねえか」

と次郎丸は女子グループを凝視する。

「そんなポエミーな言い訳いいですから。やっぱり次郎丸さんは口リコンだったんですね」

「何を言っただアツシ。男は皆その生涯をかけて運命の女に愛を語るポエマーなんだよ」

「いや、もう本当そういうのいいから。次郎丸さんは自分を一体どうしたいんですか。どういうキャラを目指してるんですか」

僕たちはビーチボールをしたり、水を掛け合ったりとなんだかんだ楽しく過ごしていた。久しぶりにみんなとはしゃぐのはやはり良いものだ。そして何より、僕はユリちゃんを眺めてるだけで結構嬉しいのだけど。あゝやばい、何かテンション上がったきた。

一時間経って、少し疲れたのでしばらく浜辺でぴちゃぴちゃとじゃれていると、次郎丸が不意に言った。

「よし、男子チームで泳ぎ勝負すつか。あのブイにタッチして先に戻ってきた奴が勝ちだ」

「あ、それおもしろそうっすね、先生」

次郎丸の提案にマモルは賛成した。僕も同様だ。女子チームの黄色い応援を背に、僕たちは海に足を入れる。中万華のよいいどんというかけ声で僕たちは一斉にスタートした。

結果 一位 マモル。二位 アツシ。三位 次郎丸。

少しの時間、誰も言葉を発さなかった。次郎丸は一人沖の方を向いて体育座り。その背中にあるのは哀愁なんて格好良いものじゃない。僕は次郎丸の背中越しに言った。

「あ、あの……次郎丸さん」

「え？ 何？ 別に俺泣いてないけど。言いだしっぺがビリとか最悪、みたいなこと一切思っていないし」

「いや、すさみ方がすごいよ。大丈夫ですから、そんな高かが遊びで」

次郎丸がえらく小さく見える。

「うつせーな、ほつとけよ。マモルはともかくお前にまで負けたんだぞ。もう絶対笑われてるわ。もう気とか使わないでいいから、高笑いしろよ。甲高い声でみじめな俺を笑えよ。ハーハッハッハ！」

「ちよ、己で高笑いはやめましょ。自分を否定しちゃ駄目」

気を使ったのか、次郎丸の周りにみんながやってきた。

「で、でも先生も速かったですよ！」

「すごいなあ！ 私はあんなに速く泳げないよ！」

「先生つてマジで格好良いから泳ぎとか不要だよね！」

「そんなギャップが更にそそるわ！」

「……でも、空気を乱した」

次郎丸が勢いよく立ちあがりこちらに向き直った。目と鼻にかけて何となく赤みが。

「今なんか本音言った奴がいたああ！ やっぱもう俺ダメじゃん！ 誰だよ！ 今俺をカオスへと導いたのはどこのどいつだよ！」

私、と声が聞こえた。次郎丸がきよろきよろと辺りを見回す。僕たちもつられてそうしたが、どこにも姿が見当たらない。

「1111」

僕はその声を追って、次郎丸の足元を見た。そこには、身長が彼の腰ほどにしかない幼い少女が立っていた。

「はじめまして。私、ヒナタ」

淡々と述べられた彼女の名を聞いて、僕たちは一斉につぶやいた。

「……………どこのお子さん？」

ヒナタと名乗った少女は何かにも着たような面構えだった。というか、金銭面に不服がありそうだ。彼女はどこかの小学校の指定ジャージを身にまとっている。カーキ色のそれに、同色のひざ丈すらい半ズボン。胸には大きく『3 - 2』と書かれた白いワツペンが。ジャージのサイズが少し大きいらしく、袖からは指がほんの少しのぞく程度しか出ていない。腰まである長い髪は、無造作にはねまくっている。ひどく痛んでいるようで、光が当たると赤く反射した。前髪はもう目にかかりそうだ。で、その目は何だか眠たげな感じ。実際には大きい目なんだろうけど、それを半分しか開いていないのだ。やる気がないのか、何なのか。靴も履いていない裸足スタイル。とにかく、一回落ちぶれてしまった感が抜群の少女だったのだ。

「えっと……………ヒナタちゃん。お父さんやお母さんはどうしたのかな？」

ユリちゃんはしゃがんで、少女と目線を合わせると優しい笑顔で言った。少女は表情を一切くずすことなく答える。

「……………両親は、いない。でもお兄ちゃんがいる」

とにかく不思議な子だ。その真実だけを伝える淡々とした口調。子供ならもう少し感情的になってもおかしくないと思うのだが。僕はユリちゃんと同じようにヒナタちゃんと目線を合わせた。

「じゃあそのお兄さんはどこにいるの？」

「私が怖いから、どこかに行っちゃった」

怖い？ こんな小さい女の子を放っておいてなんてまだ。次郎丸が頭をぽりぽりとかく。

「迷子か。しゃあねえ。おい、ヒナタ。お前の兄貴探してやるよ。んで、俺達んとこに二度と来んな。これ以上俺の傷口を広げるな」

「分かった、北島康介さん」

「……おい、何かこの子気い使ってくれてるんだけど。何か自分がすごく大人げないんだけど」

次郎丸の提案により、僕たちはこの子のお兄さんを探すこととなった。まあ、ただ遊ぶよりはおもしろいかな。

僕たちはヒナタちゃんの歩く速さに合わせて、ゆっくりと砂浜に足跡をつけていった。履いていたビーチサンダルの中に嫌な感触の砂が入りこむ。そういえば、ヒナタちゃんは裸足だったっけ。

「ヒナタちゃん、足、何も履かなくていいの？」

僕は彼女の少し前から首だけ振り返って言った。彼女はしばらく僕の目をじっと見つめ、口を開く。その時も彼女が表情を変えることはない。

「私は裸足が好き」

何だかあっさりとした回答だと思った。彼女はそう言ってから一度地面を見て、こう続ける。

「……だって、大地からのオーラを直接受け取れるから」

何だか電波を放っている回答だと思った。

「オ、オーラ？ ヒナタちゃんはオーラを受け取ってるの？」

ヒナタちゃんの顔に暗い影が浮かび、ひそりと口元をゆらす。

「私だけじゃない。あなたも、他の人も。みんな色んなものからオーラを受け取ってる」

どうしよう。何だかこの子が怖くなってきた。僕は何も聞かなかつたことにして前だけ向くことにした。ヒナタちゃんのお兄さんが早く見つかりますように。

「おい、ヒナタ」

僕が前を向くことだけ決めた時、次郎丸がヒナタちゃんを見下げながら言った。

「何？ マイケル・フェルペスさん」

「うん、何かそんな純粹な優しさに触れたら俺泣きそうになるから。いや、そうじゃなくてな。何でまた兄貴がお前のことを怖いなんて

言ってたんだ？」

次郎丸が率直に聞く。何となく怖い理由というのが分かってしまう自分がいるのだが、というか現在進行形で僕自身彼女に恐怖を抱いているのだが。

「私が……変な力を持つてるから」

彼女は小さな歩幅で歩きながらそう答えた。『変な力』と呼ばれる力には今までに触れたことがある。次郎丸のベーコンの歌なんかがそうだ。だから、もう変な力なんて聞いても驚かない。次郎丸のように全知全能な能力以上のそれがあるとは思えないからだ。

「で、どんな力なんだ？」

と次郎丸。あくび混じりに放たれたその問いかけに、ヒナタちゃんはまたも一切表情を変えることはない。

「……人間の心が読める」

僕と次郎丸以外のみんなは絶句していた。アユに関しては次郎丸が特殊な能力を持っていることを知っているはずなのだが、馴染みの薄さということなんだろうか。とはいえ、次郎丸のように神ではないこのヒナタちゃんに、本当にそんな力があるのか疑問である。マモルが困った表情でヒナタちゃんに目を向ける。

「そ、それってどういうこと？ どうやって心なんか読むの？」

ヒナタちゃんはその歩みを一向に止める気配が無い。

「……日本にいる人の考えてることが分かるの」

ヒナタちゃんの述べるその口調は子供にしてはあまりに単調で、嘘をついているようには見えなかった。いや、そんなことより……。

「日本にいる人！？ 範囲広っ！ ヒナタちゃん、それは嘘だよね！？ いくらなんでもそんな広域プライベート流出事件はありえないよね！？」

僕は全開でシャウトした。ヒナタちゃんはそれにまったく動じない。

「間違えた。全部は分からない。私が噛んだ人の心が分かる」

次郎丸がサンダルにたまった砂を落としながら言う。

「噛んだ人？ つーことは、もしヒナタがアツシを噛んだら、アツシの考えてることが分かるのか」

「分かる」

そこまで聞くと、次郎丸は僕の方を見てほくそ笑んだ。嫌な笑顔だ。

「い、いやちょっと。僕は嫌ですよ。そんな、心を読まれるなんて……」

「何だ？ お前はつねにいかがわしいこと考えてるってことか？ まあ、そうなら仕方ねえけどよぉ」

なんてム力つく笑顔なんだ。今すぐぶん殴りたい。あんな万年いかがわしいことで頭がいっぱいの男にこんなことを言われるなんて。

「……分かりましたよ。噛まれりゃいいんでしょ、噛まれりゃ」

次郎丸はヒナタちゃんに僕の心を読むように説明する。他のみんなはそんな様子をサーカスでも見るように意気揚揚と眺めるだけだ。マモルくらいは止めてくれるかと思っただが。みんな心が読めるということ自体を信用していないみたいだ。子供の遊びに付き合う僕を、暖かく見守っているということか。

「よし、いいよヒナタちゃん」

僕はしゃがんで、右腕を彼女の眼前に突き出した。彼女は僕の右腕をまじまじと見つめる。そして、人差し指だけを選び、それをくわえるように噛みついた。傍から見ると最低のロリコン野郎に見えたりするかもしれない。断言しておくが、僕はどちらかと言えば年上好きだ。

「わひゃっひゃ」

僕の人差し指をくわえたまま、ヒナタちゃんは言った。そのセリフが『分かった』と言っていたということに、少ししてから気がつく。

「で、アツシは何を考えてたんだ？」

次郎丸は今にも吹き出しそうな笑いをこらえている。ヒナタちゃんは口を僕の指から離れた。

「この人は……年上好きで、髪フェチ。あと、芸能人では伊東美咲が好きで、少しマゾ」

何てことだ、当たっている。当たっているけど。

「何で性癖限定いいいい!? 心を読むって言うかそれ僕の性癖を言い当ててるだけじゃん! 何これ! ものっすごい恥ずかしいんだけど!」

僕を中心に爆笑が巻き起こった(主に次郎丸と中万華)。中万華がヒナタちゃんの肩に両手を乗せて言う。

「ねえ、ヒナタちゃんっ。今度は私を噛んで。出来るだけ強く」

「いや、あんたは己のマゾ欲を満たしたいだけでしょ! ていうかマンカさんの性癖なんて誰でも知ってるよ! 今さらだよ!」

中万華が僕を勢いよく指さした。

「何よ! あんたも同じマゾヒストとして共感しなさいよ!」

「何ヒナタちゃんから得たデータをもとにデイベートしてるの!? 僕とあんたじゃ格が違うからね! 悪い意味で!」

中万華の攻撃に小さな勇気で対抗する僕。何とも器の小さい戦いだこと。もうこの件については触れないでおこう、そう考えてた時であった。僕の性癖診断を見て、ユリちゃんやアユ、マモルがヒナタちゃんの正面に列をなして並んでいるのだ。順番待ちとは、えらい人気の性癖診断である。いや、それはどうでもいい。まずはアユがヒナタちゃんに右手を差し出した。

「さ、噛んで噛んで。もうばっちり言っちゃってよ」

ヒナタちゃんは聞くと、無言でアユの人差し指に噛みついた。ゆっくりと口を指から離し、彼女は言う。

「あなたは筋肉が好き。自分にも欲しいと思ってるくらい」

「わ、当たってるよ。すごいねヒナタちゃん。その白い歯は清潔感たっぷりだよ」

「……そこを褒められたのは初めて」

続いてヒナタちゃんはマモルの指を噛んだ。だが、彼にはまだ性癖というものが存在していないようで、見えない、の一言で片づいてしまった。真正正銘のピュアボーイである。で、次は気になるユリちゃんの番。僕は目線だけをそこにやり、腕を組んで、え？ 別に興味ありませんけど？ 的な態度で立っていた。僕の神経という神経は全て彼女に向いている。

「ヒナタちゃん、お願い」

ユリちゃんはそう言って右手を出す。こくりとうなづいて、彼女の指に噛みつくヒナタちゃん。僕は心に何が来ても破れない、強固な壁を作っていた。どんな砲撃にも耐えてみせる、むしろ受け止めよう。さあ、来い！

「何でだろう……ドラム式洗濯機しか分からない」

音をたて崩れ落ちる壁。ユリちゃんは目をまん丸くしてつぶやく。

「……やっぱり」

「待ってユリちゃん！ 何でちょっと納得してるの、ドラム式洗濯機だよ！？ それが性癖なんだよ！？」

壁の残骸はツツコミにその姿を変えて僕の口から射出された。

「うん……でもねアツシ君。私は家電製品好きだし。あり得るよ」

僕は口ごもってしまった。そんな真顔であり得るよなんて言われてしまったら何も言えないじゃないか。黙り込んだ僕の周りでは、そんな僕とは正反対にわいわいと楽しそうな声をあげている。何だか居心地が良くない。

「あ、あの、僕ちょっとトイレ行ってきます。みんなはヒナタちゃんのお兄さんを探してあげて下さい」

僕は次郎丸にそう言うと、彼の返事も聞かないまま海岸を囲む森へと駆けた。

僕はもともと下の話が好きではない。教室の隅で固まって国語辞典を開いている男子なんかを見るとため息さえ出るのだ。そんな僕の周りで始まってしまった性癖談義。荷が重いつたらしょうがない。ただ、楽しんでいるみんなの空気を乱すのも嫌だ。だからトイレなどという嘘をついた。方便として捉えて頂けると有難い。

僕はしばらく木陰に身を隠すことにした。潮風で葉の育ちが悪い、小さな木だ。僕がこうしている間に話の流れが変わっていることを祈る。僕は安堵だか、何だかため息をついた。すると、何故だかそのため息が二重になって聞こえてきた。僕はとっさに近くに人がいることを悟ったのだ。そして、その気配は僕のもたれかかるこの小さい木の反対側にあることが感じ取れた。僕はほんの少しの好奇心に身を任せ、木の裏を覗きこむ。

「はあはあ、ヒナタあ。なんて愛らしいんだヒナタあ」

ほんの少しの好奇心は、大きな恐怖へと姿を変えた。

「変態だあああ！」

僕はいつものクセでついつい大きな声を出してしまった。僕の指さす先には、ヒナタちゃんの写った写真を見て息を荒げる男がいた。その姿は、ブリーフ一丁に、上は字ランという場合によっては、否場合によらなくても即逮捕されるような格好であったのである。

「え？　ちょ、誰が変態なの！　吾輩！？」

「うわああ。一人称が吾輩なんて変態以外の何者でもないよ絶対！」

「き、君！　落ち着きたまえ！　吾輩という一人称が変態ならば、デーモン小暮さんはどうなるんだ！　あの人は見た目はあんなだけど、相撲協会の重役だぞ！」

僕は彼の言葉で正気を取り戻した。何より、デーモン小暮さんを否定してしまった自分を反省である。

「す、すいません。普段は滅多なことでは驚かないんですけど、その格好に第一声があんなのだったんで」

今思ったが、僕が変態だと叫んだことは間違いではなかったんじゃないだろうか。彼の服装は変態と呼ぶにふさわしいものだと感じるし、息を荒げながらなんて愛らしいんだヒナタ、なんて言っていれば、僕でなくても驚くはずである。ん？　ヒナタ？

「あ、あのすいません。もしかしてあなた、ヒナタちゃんのお知り合いですか？」

ブリーフ学ラン男は満面の笑みで答えた。

「ええ！ 吾輩、ヒナタの兄、さんしゃんたいよう三車院太陽と申します！」

名前も容姿も、僕に喧嘩を売っているんだと思った。

僕は目の前に現れたヒナタちゃんの兄を名乗る男に困惑していた。何が彼をこっさせたのだろう。僕は額に浮き出る汗に不快感を覚える中、彼に話を聞くことにした。

「あ、あの。あなたがヒナタちゃんのお兄さんだとして、どうして彼女のところへ行ってあげないんですか？ ていうか何があつたらそんな格好になってしまふんでしょうか」

三車院太陽は先ほどまでの笑みを消し、うつむいた。何やら暗いカラーを身にまとい、全身から反省の念をかもしだしている。

「吾輩たち兄妹は、ほんの少し前まで日本三大財閥が一つ、三車院家の跡取りとして幸せな生活を送っていた」

僕は驚愕した。そう言えば、テレビなんかで何度か聞いたことがあったのだ。日本三大財閥、現代日本において国内の総資産の約十分の一を保持するとされる三家。その力は絶大であり、裏社会のまとめ役とも言われている。その一つ、三車院家。

「ちよつと待って下さい！ 信用できないですよ、そんなこと急に言われたって」

彼は学ランのポケットから紙切れを取り出した。新聞の切り抜きのようである。そこには、『日本三大財閥 三車院家没する』という見出しに、一枚の家族写真が載っていた。そこに写っているのは、今よりも随分と着飾られたヒナタちゃんと、目の前の男、そしてその両親と思しき人物である。僕は信用せざるを得なかった。

「吾輩たちの家は、日本三大財閥である王^{おーしゃん}志楊家と、真^{まうんてん}雲天家に八められた。彼らは吾輩たちが邪魔だったんだ。詳しい事情は聞かされていないけどね」

僕はただ聞いているだけだった。彼の言葉から憎しみは感じない。

「両親は失踪、残された吾輩とヒナタは家をなくしてしまった。いわゆるホームレスというやつだ」

頭の中で合点がいった。ヒナタちゃんや、この男の服装なんかのとだ。

「一か月前、そんな吾輩たちの前に不思議な奴が現れた。何でも、プレンヨーグルトの精霊とかいう奴で、そいつはヒナタに一つの能力を与えた。それが、あの他人の性癖を読み取る能力だ」

精霊という言葉に僕は驚いたが、顔には出さず、そのまま話を聞いた。

「あの、能力が吾輩たちの生活を狂わせたのだ。それまではまがいなりに、この海岸で楽しく過ごしていた。だがいつか、私が実はヒナタのことが大好きで、ていうかもう好きすぎてヒナタの下着をなんやかんやしているのがバレてしまうんじゃないか、そんな恐怖に囚われて……」

「おい待てえええ！」

僕は今まで黙っていた分を一気に爆発させた。

「今まで素直に聞いてやってたのに何だそれ！ 精霊とか聞き流してやったのに何だそれ！」

「い、いやだつて！ 吾輩嫌われたくないし！ 妹のこと超好きだし！」

自分のシスコンがたたつて、妹に近づけなくなるとは。何とも馬鹿馬鹿しい状況である。滑稽という言葉がよく似合う。

「そりゃあ、吾輩だつてヒナタのギュってしたいよ。でも前々からヒナタには噛み癖があったから、いつ噛まれるか分かったものじゃないんだ。もし噛まれてもしたら、吾輩は兄としてどう接すれば…」

僕は彼の言葉を聞くうちに、静かな怒りが込み上げていくのが分かった。妹が怖いから近づけない。噛まれたらどうする。ふざけるな。

「三車院さん。あんたは兄貴失格だ」

「え？」

「あんたは自分がかわいいだけだ。本当にヒナタちゃんのことを思ってるなら、自分が嫌われたって彼女を救おうとします。家族が崩壊した今、ヒナタちゃんにはあんたしか頼れる人がいないんだ。唯一の光が、太陽が顔を出さないで、どこに日向が生まれるんですか。」

あんな小さい子を一人放っておいて、兄貴面なんてしないで下さい！」

僕が言うと、彼は眼を泳がせながら僕の両肩を掴んだ。

「そ、そんなことはない！ 吾輩はヒナタを愛してるんだ。これからの人生で、兄である吾輩がヒナタを護る。吾輩はヒナタのことを本当に大事に思っている！」

「……だったら、もうあなたには答えが見えてるはずだ。これから、兄としてどうするべきなのか」

三車院太陽は僕の言葉をしばらく理解できない様子で立ちつくし、やがてその目に涙を浮かべた。その場にくずれ落ち、頭を抱える。僕は三車院太陽に肩を貸した。

僕のいない間も、次郎丸達はひたすらにヒナタちゃんの兄を探しているようだった。僕が彼らの後ろ姿を見つけたのは、もといた場所から十分ほど歩いたところだ。僕は手を振りながら大声で彼らを振り向かせた。僕の隣にいるブリーフ学ラン男に驚きながらも、ゆっくりと僕らの方へ近づいてきた。

「おい、アツシ。誰だそいつ？ 電話するか、警察？」

「こちらは、ヒナタちゃんのお兄さんで、三車院太陽さんです」

マモルがこれでもかというくらいに驚き、言う。

「ええ！？ 三車院って確か……」

「うん、説明する」

僕は三車院太陽とヒナタちゃんに起こった出来事を簡潔に伝えた。ただ、三車院太陽がヒナタちゃんのことを怖がっているとか、そういうのは抜きにして。

「ヒナタ、ごめんな。お兄ちゃんはぐれちゃって」

「別に怒ってない……」

そういうヒナタちゃんの頬はかすかに赤づいていた。静かな表情の裏で、喜びをあふれさせているのが良く分かる。三車院太陽は、しやがみこみヒナタちゃんを優しく抱いた。

「ヒナタ……お兄ちゃんが何考えてるか分かるか？」

ヒナタちゃんが小さくうなづいた。今の三車院太陽の思いは、ヒナタちゃんが嘸みつくなんてことをしなくても、誰もが理解できたのだ。『ヒナタを愛してる』僕たちが思いを伝えるのに、心を読む力なんてものはない。ただ、強くそう思えば、それは確かに相手に伝わるのだ。僕たちはそんな二人をはにかみながら眺めていた。

第11章 狩りだ

人は狩りをする生き物だ。男女問わず、昔から本能でそう定められている。それは批判、もちろん否定も出来ない。絶対の自然。だからこそ、某オンラインゲームの人気があるのだ。狩りには僕たちの心を、底から高ぶらせる何かがあるんだと思う。

コンビニエンスとは、便利なものとか、好都合なんて意味がある。コンビニエンスストアという名前を考えたのはどこの誰なんだろう。なんて絶妙なネーミングだと感心する。二十四時間営業、おいしいお弁当、たまにいる可愛い店員さん。ここは僕のようなお金がない中学生にとっての憩いの場なのである。

「アツシ。からあげちゃん買おうぜ、からあげちゃん」

僕がレジで精算をしていると、背中から次郎丸が言った。

「今次郎丸さんのコロッケを買ってるのに、感謝の言葉より先に何故追加注文が出るのか不思議でしょうがないんですけど。駄目です、僕だってお金ないのに」

今日は八月三十一日。明日から学校という何とも憂鬱な日だ。次郎丸も給料日直前の金欠状態でかなり憂鬱なご様子。僕にコンビニでおやつをねだるほどに、だ。

「すいませ〜ん、ポイントカード使えますか？ 私と次郎丸さんとの恋のポイントはもう溜まりきってるんですけど」

と、店員に意味不明な質問をするのは中万華。最近思うが、彼女はいつも笑顔で楽しそうだ。好きな人と一緒にいることというのがど

んなに幸せなことなのか、分からないでもないけれど。

「それにしても、明日から学校で何か変な気分ですよね」

コンビニから出て、僕はまずそう言った。店舗のすぐ横に移動し、次郎丸にコロツケを渡す。彼は笑顔で受け取ると、それを一口かじった。

「だよな、俺も昨日から何か無性にムラムラして……」

「いや、そつちの変な気分じゃないですからね。もっと中学生らしい気分ですからね」

いつものように次郎丸の腕に飛びついた中万華。彼の腕の感触を存分に楽しみながら言う。

「きつとあれよ、次郎丸さん。クイズミリオネアで、五十万円に挑戦するも微妙にドロツプアウトもしたのかな、みたいな気分っ」

「いやいや、分かりにくいですよ。ていうかそんだけ出来てりゃ僕なら満足だよ。もっと満ち足りてるよ」

僕は自分のやけに美しいキューティクルを指でいじりながら、頭の中を整理した。

「何か、今年の夏休みは色々ありましたからね。神様の世界にいたり、性癖暴かれたり」

割り込む次郎丸。

「二次元萌えを開拓したり」

「開拓してないですよ、ねつ造しないで！……ええ、まあ色々あったじゃないですか。だから、それが終わるっていうのが何か、寂しいような、よく分かんないんですけど」

そう、不思議な気分だったのだ。お祭りが終わった後なんか似ている。暗闇の中に一人だけポツンと残されてしまったような。温かいものが知らないところへ行ってしまうような。

「本当良く分かんねー奴だな。ま、思春期なんてそういう意味の分かんねえ悩みの塊みたいなものだからな」

次郎丸がコロツケを食べ終える。さてこれからどうしようか、という時。不意にコンビニの自動ドアが開く。

見覚えのある顔、というか姿であった。中から現れたのは全身白タイツ。股間にそびえるミニ鏡餅。そう、モチモチマンだ。

「おお、かしわモチモチマン久しぶり！ わたすは、モチ、モチ、ムアンです！」

僕達に向かって仁王立ちでそう言う姿は、いつかの姿と同じだった。先ほどまで同じコンビニに居たのにまったく気がつかなかった。トイレにでも入っていたのだろうか。

「ねえ、この変態誰なの？」

中万華が不思議そうに尋ねた。そういえば、彼女はモチモチマンと面識がない。

「えっと、この人はモチモチマンさんっていつて、町内を守ってるらしいですよ。一度一緒に公園の掃除をしたことがあるんです。で、僕たちはかしわモチモチマンという要らない称号を与えられたわけです」

「八つ橋マン達！　こんなところで会うなんて奇遇だなあ、八つ橋マン達！」

「相変わらずセリフ回しが滅茶苦茶ですね。あとかしわモチモチマンの称号を要らないって言った途端、称号を変えないで下さい」

僕が呆れ気味にそう言つと、またも自動ドアが開く。そこから伸びる手は何故だかモチモチマンの肩を叩いた。

「お客さん、お金払ってないよね？」

何故だか一つもビックリしなかったのは、モチモチマンの格好がなんとなくそれっぽかったからだ。

暗い個室である。中央に置かれた長机と、両端のロッカーで狭く感じる。その長机を挟むように座るモチモチマンとコンビニ店員。そして、何故だかそれを見守っている僕たち大平さん一家。何ともシユールな画である。

「これで取ったもの全部です」

モチモチマンは長机にみたらし団子と三色団子を置いた。

「また、君はそんな格好なのにお餅は取らないんだね。中途半端に団子を取ったんだね」

コンビニ店員は静かにため息をついた。何故僕たちがここにいるかといえはだ。モチモチマンがこの個室に連行される際に、助けてかしわモチモチマン達等と戯言を発したせいである。ああ保護者さんですか、なんて誤解をするコンビニ側も問題ありなのだが。次郎丸が近くにパイプ椅子に座る。

「モチモチマン、お前よお。てめえでヒーローを語つといて万引きするなんざ、ヒーローなめてるとしか思えねえよ、おい」

モチモチマンは困り果てた表情で、頭を白いかぶり物の上からさすった。

「い、いや。私も何故こんなことをしたんだか。何故だか、心が。

『欲しいものは己で狩り取れ』という謎の言葉を発したのだ。……

そうだ！ 店員さん、私はその狩り精神を貫き通しただけなのだ！

罪は無い！」

「いや、ばつちり有罪だよ！ 何その狩り精神って！？ 狩り精神を貫き通す前に商品をレジに通せよ！ 馬鹿だろ、あんた！」

店員が机に乗り出しながらそう叫ぶと、背後のドアが静かに開く。

そしてメガネをかけた弱々しそうな男が部屋に入った。どうやらこのコンビニの店長のようだ。

「どう、バイト君。万引き犯の人は」

「あ、店長聞いて下さいよ。この人なんか狩り精神を貫き通したとかわけの分かんない事言ってるんです。狩り精神貫き通す前に、商品をレジに通せって話ですよねえ」

「ああ、君さつきもそれ言ってたでしょ。大きい声だから聞こえてたよ。何？ 自分でうまいとか思っちゃったんだ。気に入って、ついてもう一回言っちゃったんだ」

「え？ ……ちょ、恥ずかしっ！ 万引き犯を問い詰めてただけなのに恥ずかしっ！」

僕は何だか口をあんどりと開けていた気分だった。たまたま遭遇した万引き事件。それもその犯人が知り合いだったのだ。僕には驚き以外の感情を持ち合わせられない。

「まあ、いいか。じゃ、もう警察に連絡するからね」

店長はそう言うと、自分の携帯を取り出して電話をかけようとした。その時である。

「その電話、待たれい！」

再び開かれた薄いドア。そこに立っていたのは白衣を身にまとった男。丸眼鏡に白ひげを蓄え、漫画なんかに出てくる科学者みたいな風貌だ。その男は現れるなり、モチモチマンの背中に戻る。彼の背中をさすると、その男は眉間にしわを寄せた。

「やっぱりか……」

僕は急激な速さで訪れる展開についていくのでやっとの思いだった。普段もなかなかの急展開な人生を送っているが、今回は特にそうだ。

「あ、あの……すみません。僕たちはその変態の知り合いなんですけど、あなたは一体……」

白ひげの男はもう一度モチモチマンの背中を眺め、そしてゆっくり頷いた。

「すまない、紹介が遅れたね。私は世界のキノコを研究している、
木野小次郎きのこじろうという者だ」

「で、そのキノコの研究してるおっさんが何でこんなところにいるんだよ」

パイプ椅子に大きく足を開いて座っている次郎丸が言った。木野小次郎と名乗った男はその白衣をなびかせながら部屋の中をぐるぐると歩く。

「さつきも言ったように、私はキノコの研究をしている。君たちは冬虫夏草とうぢゅうかそうという種類のキノコを知っているかな？」

聞いたことがある。確か蛾の幼虫に寄生して、その養分を利用して成長するキノコだ。

「はい、何となく知ってます。何か、虫に寄生するみたいなの……」

「そのとおり。冬虫夏草とは文字通り、冬は虫の姿、夏には草を生やすというキノコだ。実は、今その冬虫夏草の新種が日本の。いや、世界中で増殖している。そのキノコは虫ではなく、人に寄生するのだ。そして、寄生した人間のある感情を異常なまでに高ぶらせる」

「ある感情？ それって一体」

木野小次郎は立ち止まり、静かに息を吐いた。

「狩る、という本能だよ」

僕は理解した。モチモチマンの謎の行動。それは全てそのキノコのせいだった、ということか。

「ここ数日でそれは世界中に広まっている。報道規制によってあまり知られてはいないがね」

「あれ？ そんな報道規制になっていること、僕達に簡単に言っていないんですか？」

僕が訪ねると、木野小次郎は微笑み、次郎丸の方を見る。

「君たちに、というよりは、その神田林君に伝えているんだがね」

次郎丸は一瞬限界までその眼光を鋭くした。そして、何かに気づいたように目を閉じる。

「なるほどな。てめえは……」

次郎丸はそこまで言うところまで立ち上がる。僕と中万華に目で合図を送り、部屋のドアを開けた。

「行くぞお前ら。キノコ狩りだ」

僕たちはモチモチマンをコンビニに残し、一度家に帰っていた。もちろん、木野小次郎も一緒だ。僕は彼を居間に案内した。次郎丸と木野小次郎が向かい合わせに座り、僕と中万華もその隣へ。

「で、どこのどいつが犯人だ？」

次郎丸が唐突に話し始めた。まったく意味が分からない。

「現世の人間にここまで技術があるとは思えない。私は、地獄、もしくはオーサ・ダハルの誰かだと踏んでいる」

木野小次郎の口から飛び出た地獄やらオーサ・ダハル発言に僕は耳を疑った。彼はそんな僕に気付いた様子だったが、気にせず続ける。

「まあ、あの男の可能性がないとは言えない。だから君に頼みたいんだ」

「あいつ……か」

次郎丸が遠くを見ながらつぶやいた。

「ちょ、ちょっと待って下さい！ まったく事態が飲み込めないんですけど！」

僕はその場で挙手。次郎丸が静かに口を開いた。

「こいつ、木野小次郎はよ。神政会しんせかいの役人だ」

その一言で僕は、全てを理解した。神政会といえば、以前訪れた三つの世界のバランスを保つ機関である。現世、天国、地獄の補正役。その役人である木野小次郎の発言。

「それってつまり、今回のキノコ事件が現世以外の人の仕業で、こ

の世界を滅茶苦茶にしようとしてるってことですか？」

木野小次郎が頷く。

「物分かりが良いじゃないか。私は馬鹿は嫌いだが、そうやって飲み込みの早い人間は大好きだ」

次郎丸は木野小次郎の方へ向き直り、言う。

「フーかよお、キノコ博士。んなもんどうやって犯人捜すんだよ。このキノコは放つときゃ勝手に広まってくんだろ？ だったらもうわざわざ姿さらすわけねえじゃねえか」

「大丈夫だ。私はすでにこのキノコに対する抗剤を精製している。君たちがキノコを狩っていけば、犯人は自分たちの行動を邪魔する奴を見逃さないだろう。必ず君たちと間接的にでも接触してくる」

何だかとんでもない話である。つまりは、次郎丸に人間に寄生するキノコを根絶やしにして欲しいわけだ。ということは、必然的に僕は彼について行くことになる。中万華も次郎丸から離れないだろう。僕たち三人に現世を守れと、そう言っているのだ、この男は。

「待つて下さいキノコさん！ 何で僕たち三人だけなんですか！？ そんな大変なことなら、もっとたくさんの人手を……」

「君は知らないだろうけど。今回のようなケースは稀ではない。別世界を攻撃してその主導権を奪おうとする輩は少なくないのだ。神政会に参加する者全ては、日夜何かの任務に身を投じている。今回、この事件の担当がたまたま神田林君になっただけの話だ」

木野小次郎はそう言うと、人差し指で空間に切れ目を作り、そこから金属製のスーツケースを取り出した。

「この中に抗剤が入っている。これをこの町の中心で散布してほしい」

次郎丸はスーツケースを受け取ると、小さくため息をついた。

「分かった。あとは任せてくれ」

「うん、健闘を祈るよ。神田林次郎丸君」

木野小次郎はそう言葉を残し、先ほど開いた空間の中へと飛び込んでしまった。居間にほんの少しの沈黙が続いた。

「えっと、じゃあ早く行きましょう。町の中心って言ったらどこになるんですかね？」

僕は沈黙に耐えきれず、早口でそう言った。次郎丸はスーツケースを肩に背負うようにして持ち、気だるそうに立ち上がる。

「俺達の学校だよ」

僕たちは普段の通学路を歩いていた。いつも見なれた風景も、目的が変われば何か世界が違う色に見える。今日の色は決しているものじゃない。いつの間にか小さくなったセミの鳴き声は、晩夏における気温の高さと反比例。今年は特にそれが顕著だ。確かに暑いのに、夏という雰囲気は薄れている。

「何か今日やけに静かじゃないですか？」

僕はそう言って、辺りを見回した。今日は何故だか人の気配がない。中万華が次郎丸の体の影から顔だけひょっこり現わして言う。

「あれじゃない？ 夏休みも終わりだし、みんな家で一人晩夏の句でも詠んでるんですよ」

「すばらしいことだけど、全員が全員それだとさすがにこの町の将来が心配になりますよ」

次郎丸も続く。

「じゃあ答えは一つだ。みんな家で一人初秋の句を詠んでるんだろ
うよ」

「いや何でさっきから俳句限定なんだよ！ みんなもつとやることあるよ！ いつからそんな文学を大事にする設定が付いたの！？
聞いてないよ！」

「くどすぎる お前のツッコミ 長すぎだ」

「五・七・五でツッコミのダメだしすんな！ 何か腹立つ！」

僕たちがいつものポケットツッコミを繰り広げていると、いつのまにか先ほどのコンビニのすぐ近くにやって来ていた。すると、そこから自動ドアを走り抜ける青年の姿が。それを追って店員も走る。

「待て、万引き犯！」

「違うんだ、俺は狩り精神を貫き通したただけだ！」

「狩り精神貫き通す前に商品をレジに通せこの野郎！」

どうやらキノコの被害は思った以上に広がっているようだ。そしてあの店員はまだあの言い回しを気に入ってるようだ。

「次郎丸さん、急いだ方がよさそうですね」

「みてえだな」

僕たちは、急ぐと言っても気持ち早足になる程度で、そこまでの緊張感を持っていなかった。笑顔さえこぼれるほどだ。ほんの五分までは。

僕たちは走っていた。余裕ぶっていたのもつかの間、キノコは異常なまでの繁殖を繰り返し、街全体は僕たちの敵になっていたのである。

「次郎丸さあああん！ もう無理！ 中学生の体力ではもう無理！
これ以上走れない！」

「甘えてんじゃねえよ、馬鹿！ 後ろ見てみる、少しは元気にならあ！」

僕は振り返る。そこには老若男女、様々な狩人。道幅を覆い尽くし、雪崩のように僕たちに向かってくる人の塊。どの人々もどこぞにキノコを生やしている。

「もう嫌だこんな現実！ 何このリアルバイオ・ハザード！」

中万華は息をはずませながら言う。

「ねえ、こんな時に何だけど……興奮するっ！」

「いや、本当に何だよ！ どこまでマゾ体質！？ ていうかもう息をはずませながら、のところで予想ついてたよ！ そんな感じの事言だろっなあって！」

次郎丸は細い脇道を指差し、大声で叫ぶ。

「学校から遠くなっけど、あそこに逃げ込むぞ！」

僕と中万華は頷き、その脇道に飛び込んだ。背中のキノコゾンビ達はその多さゆえに、その入口でつかえてその連携が崩落した。どたどたと音をたてて崩れる人の山を僕は見届けることなく走り抜けた。

休息の意味で、僕たちはそのまま路地裏の暗いところに身を潜めていた。夏ということもあり生臭いのが気になるが、今は文句も言つてられない。わずかに注ぐ日光に目を細めながら、僕は息を整える。

「こ、これ大丈夫なんですかね？ 生きて帰れるんですかね？」

「馬鹿、こういう時の一番の敵は己の弱き心なんだよ。強い心を持って、お前は強者だ。霸王を名乗れ」

僕は次郎丸の言葉を頭の中で何度か復唱しする。僕は霸王だ、僕は霸王だ。

「つかよお、マンカてめえ生きてんのか？」

と次郎丸。中万華を見てみると、ぼろ雑巾のように横たわっていた。やはり女の子だし、一番体力が無いのかもしれない。彼女の荒い息遣いだけが狭い空間に響き渡る。すると、彼女は身を引きずるようにして次郎丸の元へ。右手を次郎丸の足に置くと、真っ赤な顔をあげた。

「じ、次郎丸さん……私は、もう」

言って次郎丸のジャージのファスナーを下げ始める。

「ええ！？ ちょ、待っ……」

しばらくあたふたした後、身を任せる次郎丸。

「いや駄目でしょおおお！」

僕は叫びながら中万華にとび蹴り。体を浮かせて吹き飛ばす中万華。

「何してんですか次郎丸さん！ 何で今わずかに受け入れたの！」

目をまん丸にした次郎丸が首を横に振りながら言う。

「い、いや。何か今までと違う感じだったから。いつもより積極的だったから」

「あんた案外勢いに流されやすいタイプだな。見たことないくらいテンパってますよ」

僕は言って、吹き飛んだ中万華を恐る恐る見る。そして気付いたの

だ。彼女の腰の辺りに生える小さいキノコに。

「次郎丸さん、マンカさんの腰のところ見て下さい！」

「え？ うつわ、お前なんて事してんだよ！ あんな思いつきり蹴るから、あいつの体から大事な何かが飛び出てるじゃねーか」

「違いますよ！ キノコだよ、あれ！ そう簡単に大事な何かは飛び出ねーよ！」

ゆつくりと、体をふらつかせながら立ち上がる中万華。漏れた日差しが彼女を照らし、色の白いその肌を艶めかせ、鋭い狂気を立ち上らせる。その瞳はまさに狩る者の目。こちらが目を離す事が出来な
い程の威圧感、今までに出会ったキノコゾンビのそれとは明らかに違う。僕は手のひらがじわりじわりと湿っていくのに合わせて、ゆつくりと後ずさり。

「わ、私は狩人。……そう、愛の狩人！」

愛の狩人、中万華はそう叫ぶと、ただ自らの獲物（次郎丸）だけに照準を定め走りこむ。いや、正確には獲物の股間へ。

「いやちよつと待て！ やっぱ心の準備って必要だと思う！」

「いや、リアルな返答しなくてもいいよ！ 何でもいいから早く逃げましょう！」

恐らく普段から愛の狩人として次郎丸を慕っている中万華にキノコが寄生したことで、その効果が通常の何倍にも膨れ上がったのだから。愛の狩人としての中万華の戦闘能力はスカウターが壊れるほど

だ。

僕たちは再び逃げ惑っていた。もう苦しいとも言っていられない。逃げなければやられるのだ。学校まで行けば。僕と次郎丸の目にはもうそれしか映っていない。ただ、町中が僕たちの敵となった今、学校まで登校するのさえもままならない状況である。

「次郎丸さん！ あの角を曲がれば学校の目の前ですよ！」

僕は五十メートルほど先に見える曲がり角を指差し、興奮気味に言った。

「油断すんなよ、いつまたゾンビが来るか……」

次郎丸が言いかけると、僕の指さす曲がり角から現れるキノコゾンビ。

「おおい！ 何だよ、何でマジで出てくんだよ！ 俺ももう、これはいけたな、とか思ってたのに！」

ピチピチの白い清潔感ある服を身にまとった、ハゲ頭の男がこちらへやってくる。その右手には電動バリカンが。

「うおおおう！ 男は角刈りにしろおおお！」

僕たちは全速力のダッシュから急ブレーキをかける。そして、予定より一つ手前の路地へと入った。それを追ってくるハゲ頭。

「男なら丸刈りか、角刈りにしろおおお！ アシンメトリーって何だあああ！」

「次郎丸さん！ どうやらあの人は理髪店の人らしいです！ 最近の流行についていけなくて、結果お客さんの年齢層が上がってきてしまった感じですよ！」

「お前なあ、おっさんの日常を詮索してやるなよ！ おっさんも頑張ってるの！ 若かりしときにとったハサミはまだ衰えちゃいねーの！ ただ時代がおっさんを認めないだけで……」

ハゲ頭は叫び続ける。

「こちとらアシンメトリーにするほど髪なんてねーんだよ！ ふっさふっさの髪の毛スプレーで固めてみてーよ、チクシヨー！ みんな角刈りでいーじゃん！ みんなで角刈りになろうよ！」

「次郎丸さん！ ただのひがみでした！ 他人の髪の毛を羨んでいるだけでした！」

「お前なあ、例え心にはなくともこついう時は時代の責任にしてやれ！ おっさんは悪くないんだよ、慰めてやれ！ そうしときや大体のおっさんは良い気分になるから！」

次郎丸が言い終わったところで、ハゲ頭は足元のごみ箱を引っかけて頭頂部から勢いよくコンクリートの地面に打ちつけた。勢いのままに擦り切れる彼の頭のわずかな希望。

「おっさん！ 俺はあんたみたいな人生間違っと思ってないと思う！」

次郎丸はおっさんの一層寂しくなった頭に向かって叫んだ。

僕たちは辿り着いた。幾多の困難を乗り越え、その眼で学校を確認できるところまで、ついにやってきたのだ。僕たちは立ち止まり、

息を整える。やっと見えたゴールを前に、はやる気持ちを落ち着けているのだ。

「やっとですね、次郎丸さん」

「ああ、もうこんなのは勘弁だ」

僕と次郎丸は対面し、お互い頷いた。ここまでの殊勲を称えあおう。僕は正面に向き直る。目の前を通り過ぎる人影。デジカメを山ほど抱えていい笑顔で走るユリちゃん。あれ？ 何か涙出てきた。

「次郎丸さん、本当頑張りましょうね」

「うん。ていうか気持ちは分かるけど泣くな、本当に悲しむのはあいつの親なんだから」

僕たちは走る、学校に向け全速力で。後ろからやってくる大量のキノコゾンビにひるむことなく、だ。校門前には中万華が亀甲縛りで待ち構えている。

「次郎丸さん、自分で出来たよ！ 好きでしょ！？」

「いらねーよ、んな配慮！ ていうかそれ自分でやったんだ！ 何か尊敬する！」

言って次郎丸は閉まっている校門を軽々と飛び越える。僕もそれに続いて飛び越え……：られない！ ええ、ちよつと待って！

「うおおお！ 次郎丸さああん！」

「アツシ！ アディオス！」

僕の上のしかかる大量のキノコゾンビ。鼻をさす汗のにおい、身ぐるみを剥がされる僕。いよいよ生まれたままの姿になったとき、僕は見た。スーツケースから取り出した光を、構える次郎丸。地面に叩きつけられたそれはまばゆい輝きを放ち、それは僕たちの世界を覆う。光は空、大地、全てを包み込んだ。

まばゆい光に目を焼かれた僕は、しばらくそれを開くことが出来なかった。しばらくして、ゆっくりと世界が生まれていく。次郎丸が校庭に一人ポツンとつつ立っている。僕を囲むようにして倒れている人々は、すでにキノコから解放されたようだ。僕は校門をゆっくりとよじ登り、次郎丸の元へ走った。

「次郎丸さん、もう大丈夫なんですか？」

「ああ、多分な……。つーかお前何で裸なの？」

僕はとつさに隠すべきところを手で覆う。

「いや、あの、僕もよく分かんないうちに脱がされてたんですけど……。本当何で僕だけ脱がされるの？ みんな何を狩るつもりだったの？」

僕と次郎丸が鼻息まじりに言っていると、後ろから何やら聞き覚えのある声が。

「おっほほ、次郎丸、アツシ君〜！」

もじゃもじゃ頭にフチなし眼鏡。着物にミリタリーリュックというアンバランススタイル、そう、利理岡権田勇である。次郎丸がそれ

を見てああ？ としゃくりを入れる。

「てめ、何しに来たんだよ。今さらじゃねーか」

利理岡権田勇は大きな声で笑いながら言う。

「いやあ、拙者もびっくりでござる〜。まさか自分で作った特製栄養ドリンクをこぼしたら、みんなが襲ってくるんでござるよ。半端なくあせったでござる〜」

しばらく理解できないでいた。そして、僕は次郎丸と顔を合わせ、お互いの感情を一つにする。

「あのお、利理岡さん。それっていうとあれですか、今回の件は利理岡さんの栄養ドリンクのせいだと」

「ま、そういうことでござるな！ まさかこんな薬が出来上がるなんてビックリでござる。ま、大きい事件にならなくて本当良かったでござるばななむるゆっけ！」

僕と次郎丸は利理岡権田勇を狩った。

人は狩りをする生き物である。それと同時に、何かを護る生き物である。護るべきものがない狩りは、本能とはいわない。物欲のそれと同じである。人は狩ることで満足する。これは二次的欲求であり、自我の目覚めた僕たちに存在する、歪みともいえる感情。そんな気持ちをコントロールできることこそが、僕たちが大人になるための第一歩なのだ。

というような文章を書きくわえて、僕の今年の課題作文は完成した。

第12章 二学期だ

まだまだ夏の終わりというにはほど遠く、じわりと垂れる汗をぬぐいながら僕は一ヶ月半ぶりに登校していた。夏休みにまだまだ未練は残るものの、重たい足を義務であるかのように運ぶ。実際半分は義務のようなものだ。この歳になって学校なんて行きたくない、とは言えないし。

何だか色素が薄くなったように見える町並みは、夏休み前と何も変わらない。キノコ騒動から一夜明けた世界には、その余韻を一切残さないいさぎの良さがある。まあ、逆に何の余韻もないって言うのはどうなんだろうか。多少騒ぐところだと僕は思う。

「うわあ、もうめっさ学校めんどくせーよ。誤魔化し、誤魔化しで夏休み一回も通勤してねーのに」

で、僕の隣で未練たらたらな男は小神、神田林次郎丸。今日もいつものようにプーマジャージを身にまとい、気だるそうな態度で文句を垂らしている。

「日本人は働き過ぎだとか言われてますけど、次郎丸さんはもう少し働いて下さい。ひどすぎますよ、その勤務態度は」

「いや、俺はあれだから。O型だから」

「いや全国のO型の方々に失礼ですよ。何その出来悪い血液型占い」
次郎丸は手をうちわ代わりにして、パタパタと仰ぎながら言う。

「違ーよ。俺が言ってるO型ってのは、あれだよ。O（大人になり

たくない)型」

「次郎丸さん四百年以上生きてて、ピーターパンシンドローム!? 人間出来てないにもほどがあるよ、目を背けちゃいけないものつてあるからね!」

と、二学期も僕と次郎丸の関係は変わらないようだ。僕たちは学校の校門で別れ、次郎丸は職員室へ、僕は教室へとそれぞれ向かった。久しぶりに開く教室のドアはやけに神秘的に見えた。少し顔を伏せるようにして、黒板側のドアを引く。教室は今まで歩いてきた廊下なんかよりも、ずいぶんと熱気がこもっていた。温かい日の光がいつぱいに注ぎ込まれている。後ろの連絡版に貼られた一学期の頃の自己紹介カードなんてものを見るのもずいぶんと楽しい。教室の中央で一つの机を囲んで話をする数人のうち、マモルと目が合った。

「お、アツシおはよう!」

右手を軽くあげてそう言うマモル。マモルと話していたのは木田とモロミン君のようだ。マモルのそれに反応してか、彼らも同じように手をあげる。

「おはよう。三人で集まって何してんの?」

僕は三人の輪の中に顔をつっこんだ。机の上にはよく分からない記号と五十音、アルファベットの書かれた紙、そして十円玉が一枚。僕は少しばかり名前を忘れていたが、すぐさま思い出す。

「これって……こつくりさん?」

僕が言うと、それに気付いたのか教室のみんなが何だ、何だと集ま

ってきた。野次馬気分で作ってきた二年四組の面々に囲まれながら、木田が司会を始める。

「よし、せっかくだからみんなでやろう。呪われたって当局は一切の責任を負いません」

まずマモルとモロミン君が十円玉の上にそれぞれの人差し指を置いた。二人は声をそろえて言う。

「こつくりさん、こつくりさん。この教室の担任は誰ですか？」

十円玉がゆっくりと動き出す。

迷いなく‘も’に向かうそれを見て、僕は何だか冷めきった感情だった。こういうのは霊的なものでも何でもない、そんなことを皆薄々理解しているにも関わらず騒ぐ感じが、僕にはいまいち理解できなかつたからだ。担任の名前は最中先生もなか。この教室の人間なら誰でも分かるわけだし、マモルたちを疑うわけではないけれど、どうも信用に欠ける。

そのまま十円玉は動き続け、順に読み上げられる。‘る’‘だ’‘し’。

「ええ！？ 何だよモロ出して！ 最中先生でしょ、これえ！」

木田が言う。

「何かさ、さっきからこのこつくりさん微妙に間違ってたよね」

「いや、微妙とか言うレベルじゃないだろ、これ！ こつくりさんは何なの！？ ウチの担任を単なる露出狂だと思ってるの！？」

その様子を見ていた女子の一人が、私もやってみたいと手を挙げた。恥ずかしそうにする友達の手を引いて、輪の中心に。マメルとモロミン君が席を譲り、二人は定位置へ着く。先ほど手を挙げた方の女子が言う。

「こつくりさん、こつくりさん。この女の子が好きな男の子の今欲しいものは何ですか？」

どうやらもう一方の女の子には好きな男子がいるようだ。その子に一体どんなプレゼントを贈ろうか、そんなことをこつくりさんに尋ねたいらしい。十円玉が存外あっさりとそれを示す。びじよのぱんてい。

「ウーロンじゃねーかああああ！好きな男の子じゃなくて、ウーロンの欲しいもんだろが、これ！ていうか結構早い段階でウーロン手に入れたよ！もういいんだよ！」

女の子が涙を浮かべて立ち上がる。

「……！モロミン君がそんな男の子だったなんてえええ！」

そして好きな男の子ってモロミン君かよ！そのまま彼女は教室のドアを勢いよく開け、どこかへ走り去ってしまう。

「ちょ、モロミン君！どうすんのあの子！」

椅子に座っていたモロミン君は少し微笑みながらゆっくり腰をあげた。

「ふ、まったく。世話のヤケル子猫ちゃんだ」

そう言っただけで彼女を追うモロミン君。みんなぼかんとしていたが、しばらくして心の整理が済んだらしい。

「つ、次が誰がやる？」

木田が希望者を募っていると、モロミン君が開けていったドアから一人の男が面倒くさそうにやってきて、僕たちに言った。

「おい、お前らもうすぐ始業式始まるぞ……って、何やってんだお前ら」

次郎丸だ。両手をズボンに直接つつこんで、何ともない表情をしている。

「いや、こっくりさんやってたんですけど」

僕は代表してそう答えた。それを聞いた次郎丸はとんでもなく良い笑顔を見せた後、楽しげにこちらに近づいてきた。

「そういうことを俺無しでやってんじゃねえ。混ぜろ」

「ちょっと、始業式はどうすんですか。もう始まるんですよ」

僕は一応真面目に指摘する。何となく無駄なのは分かっているが。

「いいんだよ、そんなもん。人間なあ、スタートするのは人それぞれなの。始業式なんてやらなくてもみんな走り出すときゃ走り出すもんさ」

と、よく分からない言い分で我を通し、彼はこっくりさんに参加するため席に着いた。そして、誰とこっくりさんをしようか品定めをしている時である。激しいガラスの割れる音と共に一人の少女が教室へと飛び込んできた。彼女はくるりと前回り受身をとると、その力強い瞳をこちらに向ける。

「どうぞ私とこっくりプレイを！」

セーラー服姿の中万華がそこに居た。そんな彼女を見て、女子生徒が拳手。

「先生、不法侵入者です」

中万華が次郎丸に近づいてゆく。

「ちょっと待つて。今不法侵入って言ったでしょ？ でもね、あなたも私と次郎丸さんの間に割り込んだ、愛の不法侵入者なのよ！」

「いやいや、だとしても法的に裁かれるのはあんだだよ！ 何してんのマンカさん！？ 窓とか滅茶苦茶じゃないですか！」

中万華は僕の言葉をふぶん、という自慢げな笑顔ではね返し、特に動じる様子もない次郎丸の隣に座る。

「私は運命に従っているだけ。私と次郎丸さんはつねに赤い糸で結ばれているのよ」

と、中万華は額から流れる血を指差す。

「それただの流血でしょうが！ さっき窓からつつこんで切れたん

でしょ！」

「もういいでしょ別に、そういうのは。さ、次郎丸さんっ。こっくりプレイを」

次郎丸の手をとり、十円硬貨の上に指を乗せる中万華。

「お前、これ終わったら帰れよ。窓のことは何とかしとくから」

念を押す次郎丸に体を擦りつけながら中万華は頷いた。彼女はこっくりさん、こっくりさんと唱える。

「私の一番大事な人は誰でっすか！」

中万華の元気な問いかけに対してびくりとも動かない十円。しばらく沈黙が続く。

「あ、あれ？ さっきまではまがいなりにも動いてたんですけど……」

僕は中万華の顔を覗きこんだ。顔を真っ赤にし、うつろな目をする彼女。

「……ちよ、まさかこっくりさんに焦らしプレイをされるなんてもうここまで来るとっつこむ気も失せるものである。こっくりさんなんて居るわけではない、と信じたのだが、あくまでこれは希望。家に神様と精霊が住み着いている僕としては、これ以上自分の積み上げた常識を覆されたくないという小さな意地のようなものが存在するのだ。」

「マンカさん、別に焦らしとかそういうんじゃないですって。多分こっくりさんなんてただの都市伝説なんですよ。今までのを信じる方が不自然に感じるし」

そう、別に最中先生は露出狂ではないはずだし、モロミン君だって確実にウーロンではない。これはこっくりさんというよりは、誰かのいたずら、もしくはこっくりさんをやった当人達のおふざけがまたま続いた、と考えた方が自然だ。

「お前、夢のないこと言ってるじゃねーよ。中学二年生だろ？ こういうの大好きなはずだろ？」

次郎丸が僕のつまらない反応に片目を細めながら言った。全国の中学二年生を何だと思っているんだこいつは。

「もういいじゃないですか、始業式も始まるし。こっくりさんが本当かそうじゃないか考えるのもいいと思いますけど」

「は？ 本当かそうじゃないかって……居るじゃねーか」

次郎丸は僕の背後を指差していた。彼の言葉にほんの少しの恐怖を感じた僕は、自分の呼吸と心拍が荒くなるのを理解しながらゆっくりと振り向く。

笑顔でその小さな手を振る白い着物の少女が、若干宙に浮いていた。

「塩だ、塩をかけるおおお！」

木田が叫ぶ。その瞬間イエッサーと言わんばかりに皆は懐から台所

なんかにある食塩を取り出した。着物の小女を取り囲み、鬼の形相でそれを振りかける。

「ちょ、痛っ、しみる！ やめて！ 何でこんな用意周到なの、ここは陰陽師養成学校！？」

顔をしわくちやにして言う小女をかばったのは、意外や意外。プーマジヤージの男であった。

「こら、落ち着けお前ら。こういう不思議な存在には優しくすんのがフィクションってもんだろ」

『コカミはフィクションです。実際の人物・団体等は一切関係ありません』なのである。皆は妙に納得した様子で、食塩をしまう。次郎丸は引き続き、着物の小女に言った。

「で、お前はやっぱりあれか。こっくりさんなのか？ それともただ宙に浮くエキストラさんか？」

塩を振りかけられすぎて瀕死の状態にある少女は耳から血をたれ流し、目の焦点をぶるぶる震わせている。

「え、何？ 鼓膜破れて聞こえない……」

僕たち二年四組一同は、始業式があることも忘れたフリをし、瀕死のこっくりさんを保護することにした。とはいっても、実体のないこっくりさんを僕たちは特にどうすることも出来ず、彼女を中心に取り巻きを作って見守ることが精一杯であった。

「あの、あなたは本物のこっくりさんなんですか？」

木田が恐る恐るそう尋ねる。こつくりさんは驚異的回復力を持つよう
うで、もう充分話が出来るほどになっていた。

「まあ、似たようなもんね。幽霊だし」

皆は驚きを隠せない様子で、お互い顔を見合わせる。普段から神様
に保健体育を教えてもらっていたと知ったらどんな顔をするのだろ
うか。興味は湧く。

「ていうかあんたらねえ」

こつくりさんが誰かの机に座り、先の方が透けている足を組んだ。
眉間にしわを寄せ、睨みをきかせる。

「こつくりさんにものを尋ねようっていうのに、捧げものが何もな
いってどうということなの。あんたらあたしが微妙に間違ってるとか
言うけどもね、こつちだってお人好しじゃないんだから。何の対価
もなしに、ロクな答えが得られるなんて甘っちょろいこと考えてん
じゃないわよ」

何だかごもつともである。神社に参拝する人だってお賽銭を払うわ
けだから、こつくりさんに無償で占ってもらおうなんて甘い話だ。
僕は一步前に出て、軽く頭を下げた。

「あ、何かすいませんでした。そうですね、今度から気をつけま
す」

「本当よ。今度は何かほら。お米とか、お醤油とか。あ、カップ麺
でもいいや」

「何か一人暮らしの女性的意見ですね」

「何よそれ、あたしは幽霊よ？ そんなものよりもっと高尚な存在なの。まあ今度からはそういうのを仕送り……捧げなさい」

もう仕送りって言うっちゃってるこのこっくりさんは、見た目は同い年くらいなのにずいぶんと強い女性に見えた。癒し系なんかとは真逆。言葉の節々に何か自信みたいなものを感じ、見た目も綺麗だし、女性に好かれる女性といった感じである。そんなことを考えていると、耳元にある悪友の声が。

「な、なあアツシ。あのこっくりさん良くね？ 何かもう、大人の雰囲気っていうか」

木田である。こいつは以前図書委員の吉川さんが好きだと言っていたと記憶しているのだが。

「お前、吉川さんはどうするんだよ」

「アツシ、恋は突然訪れるもんだって先生が授業で言ってただろ」

そういえば次郎丸がいつかの授業で言っていたような気がする。いつもこんな意味不明なことしか教えないのだ。そして、そんな意味不明なことを素直に受け止める木田もまた良く分からない男だ。

「いや、まあ別にいいけど」

僕はユリちゃん一筋だ。こっくり姉さんは足を組んだままさらに続ける。

「あ、そうだ。せっかくだから今練習してみましょ。こう、捧げも
のとかのセンス見るから」

自分で良いことを思いついたとうなづくこっくり姉さん。木田はそ
れを聞いて、すごい勢いで飛び跳ねた。

「はい！　じゃあ俺やります！」

「うん、じゃあ何を捧げてくれるの？」

木田は自分のカバンをこそごとと漁り始め、しばらくしてから実に
良い笑顔でイワシの切り身を差し出した。

「どうですか、新鮮ですよ！」

「ちょ、臭っ。なんでカバンにイワシの切り身入ってるのよ、あん
た。イワシ単体ならオツケーけど、その普段からカバンに入っ
てるって感じがキモイからアウトよ、それ。失格！」

木田はイワシをギュツと抱きしめニタリと笑みを浮かべる。

「もつと言つて下さい……」

「え、何こいつ！？　そういう感じの人なの！？　嫌だ、マジでキ
モイ！　ちょ、もうあんた近づかないでね！」

その罵倒に更に快樂の扉を開く木田を僕は後ろから捕まえ、こっく
り姉さんの前から退けた。

「おい、木田！ お前の恋愛の仕方はどこか歪んでるぞ！ 何で初対面でいきなりM奴隷と化してんだよ！」

「いや、昔おばあちゃんが、好きな人には素の自分をさらけ出しなさいって」

「とんだおばあちゃん子だな、お前！ おばあちゃん泣いてるよ！」

ほんの少し青ざめた表情のこっくり姉さんは、一度深呼吸で気を落ち着ける。

「ほ、他にはないの？」

すると、二本の腕が並んで伸びた。見ると、具府君と齒岸君のガンダムコンビである。

「で、あなた達は何を捧げてくれるの？」

「あの〜、正直これを渡すって言うのはちょっと抵抗あるんですけどね〜。いやでもやっぱりせっかくこっくりさんに捧げるものなわけだし〜」

齒岸君はそう言って体をくねくねさせている。とんでもなく気持ち悪い。

「うん。で、何くれるの？」

具府君は一冊の本を彼女に手渡し、言う。

「これは、僕たちが描いたガンダムの同人誌なんだけども」

「うわ、至極いらねー。ていうか良くこんな所で披露できたわね、あんた達。ちょっとどこの抵抗じゃないでしょ、もっと抵抗しなさいよ」

齒岸君も続く。

「でもね、これ女性向けに描いたからきつとこっくりさんにも楽しめると思う」

「女性向けって、本当良く披露出来たなあんた達。その度胸をもっと別で活かさないよ。レスラーになりなさいよ」

こっくり姉さんがそう言った瞬間、不意に教室のドアが開く。

「今度は私が挑戦シマーす」

そこには、先ほど女子を追いかけていったモロミン君。その女子の首につないだ鎖を右手に悠々とした態度で立っている。

「いや、この短時間でどんな調教してんだよ！」

しばらくツッコミをこっくり姉さんに任せっきりだった僕も思わず声を出してしまった。モロミン君は絶えず爽やかな笑顔を振りまいている。

「アツシ君、私は彼女ノ幸せにイチ早く気付イタだけでース。私は何もシテいません」

と言う彼の左手には鞭が握られている。

「明らかに何かしてんだろっつがああああ！ 何だよそれ！ そんなもん持つって何でそんな堂々と何もしてないって言えるんだよ！」

「こ、コレは……父ノ形見でース」

「嘘をつけええええ！ 今回はいくらなんでもそのノリ無理があるから！」

と、僕が力いっぱい叫んでいるときであった。全速力で走ってきたのであるう、汗だくで荒息をたてる黒光りマツチヨの男が教室のドアから飛び込んできた。

「おおお、お前らああああ！ 何をやってんの、始業式！ 二年四組の列だけポカンと空いてるんですけど！ 校長涙目なんですけど！」

むっつり体育教師、ロドリゲスである。どうやらいつになっても始業式に現れない僕たちを呼びに来たようだ。木田が彼に向かって叫ぶ。

「すんまつそーん、すぐ行きます！」

その言葉で火ぶたを切られたように、一斉に勢いよく移動を始める二年四組。ロドリゲスが口をとんがらせて言う。

「ちょ、お前らもうちょっと怒らせて！ 何でここだけそんなに素直なの！」

「すんまつそーん！」

「さつきから何なの、そのすんまっそーん！　すごい腹立つんですけどー！」

「らぶっそーん！」

「誰だ、今流暢な発音でラブソングって言ったの！？　もう謝ってすらないじゃん！」

何とも振り回される運命にあるようだ、あの体育教師は。神様も残酷な運命を背負わせるもんだ、アーメン。僕もすんまっそーん部隊に参加し、教室を出ようとす。が、後ろから何者かに引かれた右手にそれを阻止されてしまった。僕は瞬間的に沸騰する細胞に胸をしめられ、ゆっくりと掴まれた腕の先を確認する。

「な、何するんですか次郎丸さん。本当にびっくりしたじゃないですか」

僕の足を止めたのはジャージ小神だった。一瞬の驚きに何となく恥ずかしさを感じながら、僕はやけに優しい目つきの次郎丸の左隣に立った。右側には中万華が立つ。次郎丸が言う。

「なあおい、こっくり姉さん。この後どうすんだ、お前成仏したくても出来ねーんだろ？」

「そうね、何がいけなかったのかはよく分からないけど。あたしは成仏ってことが出来ないみたい」

うつむいた彼女の口元はわずかに微笑みながらも、目は笑っていなかった。

「あたしはね、やっぱりこの世界にあつちやいけない身なのよ。人間にも交われない、かといって成仏することも出来ない。どちらにも属せないの。自分が何なのか、自分で理解することも出来ない。自分が進む道さえ見つけることが出来ない。知らない場所を意味なく飛び回るだけで、止まり木を見つけることも出来ない。あたしはただふわふわ浮いているだけなの。あたしはただそこにあるだけの」

そういう彼女の瞳はやけに曇っていて、そこから密かに小さな雨粒を落としているように見えた。人の熱気がなくなつた教室のカーテンが、割れた窓のすきま風でふわりと揺れる。日は厚い積乱雲に飲み込まれ、教室にはもうほとんど日は差していなかった。しばらく静かな時が流れて、不意に次郎丸が話し始めた。

「なあ、こつくり姉さん。俺が何だか分かるか？」

「何だか……？ 何って、普通の先生じゃないの」

「そう、俺は先生だ。ただ、普通って部分がちよいと間違ってる。俺はな、てめーが成仏する予定だつた極楽浄土の管理人、神様だ」

「え？ 何を言ってるの」

雲の隙間から差した柔らかな光が、次郎丸の顔を照らす。

「てめえはどこにも属せねえって言った。んじゃ聞くが、それは誰に決められたんだ？ そんなもん、最初っから自分を小さく見て、立ち止まってるだけじゃねえか。居場所なんてのはそこに用意されてるもんじゃねえ。自分で作るもんだ。そりゃあとんでもなく難しいことかもしれねーけど、仕方ねーんだ。現に俺は人間じゃねーけ

ど、ここにこうしている。毎日楽しくやってる。自分で無理だっ
思ってる奴に、誰も居場所なんざ提供してくれねーぞ」

こっくり姉さんは目をまん丸にして、しばらく動かなかった。太陽
を覆っていた積乱雲が流れて、また強い日差しが教室に差し込んだ
時、彼女はつぶやいた。

「あたし……居場所が欲しい。またここに……来てもいい？」

次郎丸はその場でぐるりと背を向け、歩き出す。

「週五で来い。とりあえず今から始業式だ」

この後すぐ、二年四組にはある都市伝説が生まれる。四十人の
生徒しかいないはずのこのクラスに、自己紹介カードが四十一枚存
在しているということが、色んなクラスで噂され始めるのだ。確か
に、二年四組には生徒は四十人しか存在しない。ただ最近、一人仲
間が増えたのだ。僕に次いでツツコミ上手な女の子が。

今日も二年四組は、楽しい時間を過ごしてる。

第13章 過去だ 1

時はさかのぼり三年前。

『お父さんの仕事』 五年二組 大平敦

ぼくのお父さんは神社の神主をしています。神社の庭を掃除したり、参拝客の人に何だか神社特有のよく分からないものを売ったりします。そして、一か月に一度、深夜に神様の使いが来て何やら仕事をしています。その神様の使いはいつも女の人です。警察官の格好だったり、看護婦さんの格好だったりします。お父さんはその神様の使いに、「チエンジ」と言うと、その神様の使いは帰って行きます。それから別の神様の使いがやってきます。お父さんがその時どんな仕事をしているのかは分からないけど、ぼくはお父さんを尊敬しています。

昨日、この作文を参観日で発表すると、親父は涙目で「気絶したい！」と言いながらロッカーの角に頭を何度もぶつけていた。

僕の名前は大平アツシ、十一歳。何ともない公立小学校に通うごく普通の少年だ。小説やドラマなんかだと、自分でごく普通なんていう奴に限って普通じゃなかったりするけれど、僕の場合は信用してほしい。少し人と違うのは、ツッコミのテンションが高いこと。通知簿の所見欄なんかには、担任にツッコミが素晴らしいなんて書かれるほどだ。自分ではあまり意識していないんだけど、人から褒められるのに悪い気はしない。

今日はうちの家族三人と、友達の瀬田マモルの家族と一緒に隣の小学校で開かれるフリーマーケットに出かける予定だ。朝からきちんと着替えをして、洗面台で顔を洗う。鏡に写る一つの寝ぐせもない髪を見て、前々から少しねたんでいた自分の髪質も、こういう

時はラッキーだなと感じる。

僕は母にも羨ましがられるさらさらヘアーを持つているのだ。髪は結構短く切っているのに、へたんとしなってしまう。なんとも歯がゆい。中学生になったらもう少し髪を伸ばそうと思う。

さて、僕の容姿の話などはどうでもいい。どうせ気にかける読者などいないだろう。

僕は家族より一足早く靴を玄関に出ていた。家族で出かけるのは久しぶりだったし、マモルのことは一番の友達だと思っているからだ。楽しみでしようがない。

しばらく外でそわそわしていると、両親がゆっくりとやって来た。父は少し太っていて大柄だが、その眼はいやにキラキラとしている。純粋な人だ。髪量は年々減ってきているが、その眼の輝きは増している。普通の親父に、少女漫画の瞳を組み合わせるとこんな感じだろう。

で、母である。僕は息子ながらうちの母親はなかなか綺麗だと思っている。たまにマザコンを疑われたりするが、断じて違う。客観的に見て確かにそうなのだ。僕の遺伝の原因となった艶めく長い髪を上部でまとめ、化粧も忘れない。元が綺麗というか、綺麗にしていると言った方が正しいだろう。普段からニコニコ笑顔を絶やさない人だ。だが、生活の中でその笑顔が崩れる瞬間がある。

「ママ、私の帽子どう、これ？ 似合ってる、これ？ この前ジャスコで買ったんだけども」

と親父は頭に活きダコを絡ませながら言う。

「パパああああ！ 何でジャスコの海産物コーナーへ！？ 帽子コーナーに行かなきゃ駄目じゃない！ ていうかまだ全然元気なタコじゃないの！ 目をパチクリさせてるじゃないの！」

母が後ずさりしながらシャウトした。庭でちゅんちゅんと鳴いていた小鳥が一斉に飛び立つ。

「いやね、ママ。これ店員さんの勧められたの。髪の毛が増えたように見えるんだって」

「タコスミよそれ、黒いのタコスミ！ もう顔面からダラダラ垂れてる！ 髪の毛が増えたように言うか、ただの化け物にしか見えないわよ！」

僕が受け継いだのはサラサラヘアーだけではないらしい。

僕たち家族は、マモル達との待ち合わせ場所であるコンビニに向かっていた。このコンビニを境に、僕とマモルの家は等距離にあるのである。

コンビニでしばらく待っていると、瀬田さん一家が小走りで行ってきた。

「すみません、待ちましたか？」

マモルのお父さんが白い歯をちらつかせながら、爽やかな汗を流す。瀬田さん一家三人は皆、爽やかを絵に描いたような家族なのだ。

「あ、いや全然待つてないですよ」

母さんがいつものように笑顔で優しく返した。親父も続く。

「ええ、本当十五分二十二秒しか待つてませんよ」

「パパ！ 何その余計な添付ファイル！ 何で秒単位で計測してるの！？ 妻でありながら恐怖を覚えるわ！」

瀬田夫婦は顔を見合わせくすくすと笑う。

「相変わらずですね、お二人は。ウチなんてもう、そんな会話が乏しくて」

にんまりと微笑みながらマモルのお父さんが言った。この家族はウチの様にボケツッコミでコミュニケーションをとっているのではない。多分家族で体を動かすことが、彼らの絆を深めているんじゃないだろうかと推測する。マモルのお母さんが、旦那である瀬田勝せだまさるの名前を呼び、後に続いた。

「あら、勝さん。私たちいつも語り合ってるじゃない。拳で」

「いや、思った以上にハードなコミュニケーションとってたあああぁ！ スポーツ好きだとは聞いてましたけど、何で夫婦で格闘技！？ 悟空とチチでもそんな生活送らないよ！」

僕はいつもの癖で自然にツッコんでいた。母から受け継いだ性。しばらくやりとりを見つめていたマモルが言う。

「そうなんだよ。いつもお母さんが勝ってるの。お父さんはいつもベッドの上で顔を真っ赤にしてお尻を蹴られ……」

「やめてマモルうううう！ 違うよ、あれは！ あれは亀作戦だから！ 相手のスタミナが無くなるのを待ってるだけだから！」

マモルの父、瀬田勝は全力で叫ぶ。そんな彼の肩に僕の父はトンと手を置き、笑顔&ウインク。

「ちょ、やめて下さい！ その安心しろよ、みたいな感じやめて下さい！ ものっそい恥ずかしい！」

母は場の空気を取り繕うように大きくハンドジェスチャーを交えながら言っ。

「ほら、もうこの話は終わりにしましょう！ フリーマーケット始まっちゃっし。Mおんさんも元気出して」

「今あなた『M』でまさるって読んだでしょおおお！ 明らかに元気出させる気ないですよね！？ もう私を陥れることしか考えてないですよね!?!」

「え、いや！ そんなことないですよ！ 私はMマントさんのことなんとも思っていないですから」

「いや、もうマゾヒストって言うてる！ 剥き出し！ オブラートどっかいつちやってる！」

マモルのお父さんは半泣きで叫んでいる。僕とマモルは会話の内容についていけず、二人先頭を切る形でフリーマーケットに向かった。後ろからついてくる大人たちには大変そうだなあという感想を送る。フリーマーケットは隣の小学校で開かれる。その児童や、その親が出店しているのだ。この行事に参加するのは初めてで、僕もマモルも楽しみにしていた。

さて、普段1話完結の形をとっているわけだが、あまりに作者の筆が進まないの今回ばかりはここまでなのである。呪うなら作者を呪ってほしい。では、続きます。

第13章 過去だ 2

マモルと話しながらしばらく歩くと、綺麗な煉瓦造りの校門が見えてきた。隣町の小学校は、比較的新しい小学校で、校舎のデザインもどこかの有名デザイナーがしたらしい。詳しくは知らないけれど。

ただ、何だか特別な学校なんだろうなというのは、僕にもよくわかる。校庭が芝に覆われていて、そこに様々な家族がシートを敷き、多種多様の商品を並べる。そこに溢れる活気は、普通の学校のそれとは根本から違うのだ。

「この学校は小中高一貫の私立校だから、何だか普通とは違うんだよなあ」

僕の心の声を聞いていたかのように親父が言った。同調とかいう表現で合ってるんだろうか。不思議な感覚だ。母さんが付け足すように言う。

「アツシは学校の成績的に、先生に勧められてるんでしょ？ この学校の中等部」

「マモルもだよ。でも僕は正直受験してまで入るのはどうかなって思うんだ。そこまでして将来どうするのかって言われたら何も言えないし。何せお金もかかるから」

「マセた考え方ね、アツシ。小五の発言とは思えないわよ」

「何言ってるんだよ。僕は真正銘小学五年生だよ。決して以前の中学生のノリを作者が捨てきれないとかそういうことではないよ」

そうである。決してそんなことはないのである。

僕とマモルの家族、合わせて六人で芝生に足を入れる。何だかピクニックにでも来た気分だ。

フリーマーケットは校庭だけで行われており、混雑を避けるため通路指定がされていた。特に何が欲しい、というのもなくだったのでとりあえず順に見ていくことにした。

校庭に入っすぐ、右を見ると東南アジア系の父子がブルーシートの上に大量の木彫りの何かを置いていた。この学校にはこんな外国人さんもいるのか。

「あの〜すみません。その木彫りは……お守りか何かですか？」

マモルの父、Mマモルさんは言った。もとい、勝さんは言った。何だか不思議な紋様が掘られたそれは、どこかで見たことがあるようなないような。東南アジア系の父子のうち、子供の方が何となしに答えた。

「オーう、コレはお守りではアリマセーン。嫌イナ相手を呪い殺すタメの道具を入れるタッパー的なアレでース」

「うん、絶対需要ないですよ、その商品！ しかも何ですかそのアバウトな商品説明！ タッパー的なアレって売る気ないですよ、それ！」

瀬田勝は先ほどから見せている見事なツツコミをここでも発揮した。東南アジア系父子の、今度は父親の方があっはっはと笑いながら大きな身振り手振りで言う。

「まったク、ジョークが好きダナあ、モロミンは！ パパのツボ心得テルなあ、お前は！ 本当はコレあれだろウ？ 取れタテのホウ

レンソウ入れるタツパー的なアレだろう？」

「アツハツは！ パーパのジョークも最高だヨー！」

「いやいや、親子でネタかぶってますから！ 結局タツパー的なアレで収まっちゃってますから！ 何で内輪だけで楽しんでるんですか！ 結局何なんですかこれ！」

何だ、この親子。この学校は私立だからもつところ、頭の良さそうな雰囲気も予想していたんだが。と、僕はここで気がついた。彼らの売っているものが一体何なのかを。

「あの、ごめん。これってもしかして……昔つる たけしがウルト マンダ ナに変身するときに使ってたあれ？」

僕が問いかけると、父親の方が少し驚いたように答える。

「オーう、パパの趣味心得テルなあ、君は！ そうデース！ コレはあのう、ウルト マンに変身スル時使っテイた……タツパー的なアレデース！」

「アツはっは！ またタツパー！ 出たヨ、パーパのカブセ芸！」

「いやもう、あんたら面倒くさいな！ かぶせ芸なんて言葉どこで覚えたんだよ！ ていうか何でウルト マンのアレを木彫り！？ どっちにしる需要ねーよ！ 何の目的でフリマ参加してんだよ！」

僕の限界いっぱいシャウトに母さんが待ったをかける。

「落ち着いて、アツシ！ 何だか本当に母さんの鏡のようで怖い！」

「ここは退きましよう！ まだあなたの手に負えるポケではないわ
！ 三年後くらいにまた挑戦しましょ！」

まるで未来を見据えられたような母さんの意見にうつすら納得し、
僕は深呼吸。気を落ちつけた。瀬田夫婦が言う。

「さ、もう先に行こう。他に何か素敵な買い物しよう」

「そうね、スポーツ用品とかあるかもしれないし！」

全員の意見が一致、僕らは東南アジア父子のもとから去ることにし
た。いつか彼らのポケに完璧なまでのツッコミをしてやろうと決心
を固めて。

何だかフリーマーケットに参加してすぐにヒットポイントを大幅
に消費してしまった僕は、強い日差しと相まってかめったりとした
足取りで歩く。そんな様子に気づいたのか、母さんが言った。

「アツシ大丈夫？ 少し日陰にでも入ってきたら？」

大丈夫だと答えようとも思ったが、実際ひどく疲れていたので少し
だけ日陰という名のオアシスに心惹かれた。

「じゃあ……少しだけ日陰に入ってくるよ。みんなはフリマ見てて。
すぐ行くから」

「一人で大丈夫？」

母さんが心配そうに尋ねてきた。僕も小学五年生。地域の皆様から
は、「神社のしっかりした子」で名が通っている。この小学校の地
理をまったく知らないわけではないし、子供ながら小さな自信が

あつた。

「大丈夫だよ。校舎の裏側に回れば涼しいよね。ちょっと行ってくる」

僕は母さんの気をつけてねという言葉にこれまたぬつたりとした足取りで歩いた。

迷った。行数にして一行とかからず迷った。小学校だとたかをくくっていた僕なわけだが、さすが私立の新設校である。校舎裏に回っただけなのに、まるでドアーガの塔のごとく複雑に入り組んだその道に僕は方向感覚を破壊され、今も日の当らない場所であるおろしているのだ。こうして冷静に自分の状況を綴っているわけだけでも、これは僕のどうしようもないという時にやってくる冷静さであつて、何か希望があつての冷静さとかではないのだ。

もう何か自分でも何を言ってるのかわからなくなってきた。すでにそれくらい追い詰められているということなのだ。

とにかく僕は歩いてみることにした。迷子になったらその場で動かない方が良くはよく聞くけれど、母親に大丈夫だと言ってしまった以上、プライドというものがある。さつきから何度も迷ったと言っているが、実際まだ僕は迷子だと誰かに言われたわけでもない。もしかしたらただちよつとそう、ゆっくり帰っているだけかもしれない。無意識に。

この学校の校舎裏は自然に溢れていた。新しい、近未来的デザイン
の校舎とは違う世界のように、樹木が立ち並び、木漏れ日が大地に降り注ぐ。澄んだ空気にさわやかな風。とつても気分は良いんだけれど、この危機的状況が僕に余裕を失わせる。僕はどうなるんだろうか。

とにもかくにも、僕は「神社のしつかりした子」として、何とかフリーマーケットに復帰しようと考えた。ありきたりな戦法ながら、人に道を尋ねるといのが一番の近道だろうと思う。

僕は辺りを見渡す。葉の擦れる音が世界を覆う中、一か所だけ、空気の違うところがあった。

後ろ姿でも十分彼女は美しいんだと理解できた。

長い黒髪をなびかせながら木漏れ日を浴びるその姿に目を奪われる。凜とたたずむその少女に、僕はなぜだかゆっくりとした足取りで近づいた。

「あの、すみません……」

声をかけると、彼女は少し驚いた様子でこちらに振り返った。大きな黒目がちの瞳に吸い込まれるように、僕は彼女を見つめていた。

「えっと、ごめん。道を、聞きたくて」

声が裏返っていなかっただろうか。目の前の少女に不覚にも緊張している。多分同じ年くらいなんだろうけど、自分の周りにいる女の子とは一線をかくす容姿だった。

僕には幼馴染のアユって女の子がいるんだけど、あいつにしても、その周りの友達にしても、ここまで完成された存在を見たことがない。

目の前の少女はにっこりとほほ笑んだ。

「あ、うん。どこに行きたいの？」

多分いきなり声をかけられて驚いただろう、ただそれを悟られまいと柔らかな笑顔で対応するこの少女に、何だか母と似たものを感じた。

「えっと、フリマの会場に……いや、ここは校舎裏なんだから回ればいいっていうのは分かってるんだけど、何だか通路みたいなのに

沿って歩いてたらよく分かんなくなっちゃったっていうか」

僕は何故だか早口で弁明し、彼女からとっさに目をそらした。

「ああ、ここって何だか変に入り組んでて分かりにくいよね。あのね、そっちの遊具の方に行って……」

彼女の丁寧な説明に、僕は耳を傾けた。いや、というよりは、彼女の声を聞いていたのかもしれない。何だかすごく落ち着く声だったのだ。

「あ、ありがとう。これで戻れそうだよ。あの、えっと……」

僕は少しだけ勇気を絞る。

「名前、教えてくれる？」

彼女はまたにっこりとほほ笑んだ。風が流れ、木漏れ日が揺れる。

「大野、大野ユリ」

「僕は、大平アツシっていうんだ。ここの学校なの？」

「うん、五年生」

「あ、じゃあ僕と一緒にだ。僕も五年生」

しばらく立ち尽くした。ただお互い、何かを確かめ合うように、立ち尽くした。

何故だか後ろにさがろうとする足を無理やり引き止めながら、僕

は言った。

「あの、ありがとう」

彼女が頷いたのを確認して、僕は逃げるようにその場を離れた。

彼女に教えられた通りに歩いていくと、いつの間にか太陽の下にいた。バザーの指定通路を追っていくと、大平、瀬田一家を発見。僕は安堵のため息をつき、小走りで家族のもとへ駆け寄った。

「アツシ遅かったなあ。パパとっても心配してたんだぞ」

という親父の両手はフリーマーケットの買い物袋でいっぱいだった。

「うん、親父ばっちり楽しんでるよな。心配してたんじゃないの
かよ」

「その心配をはねのけるくらい、良いものがいっぱい売ってたんだ
よ」

「はねのけられちゃ駄目じゃん！ それはつまり心配してないじゃ
ん！」

迷子から生還し、すぐさまポケに対応する。何だか自分のプロ根性
を感じてしまう。別にプロを語ってるわけじゃないけど。

「あれ、アツシ何か顔赤くないか？ 熱でもあるんじゃないのか？」

「えっ……」

とっさに頭に浮かんだ黒髪の少女を、むりやりどこかにしまいこむ。

「別に何でもないよ」

そこからフリーマーケットを楽しんだわけなんだけど、今思い出せば、校舎裏の出来事しか印象に残っていない。

その夜。本日の戦利品を居間に広げ、一つ一つにコメントをつけていく親父と母さん。何だかすごく幸せそうだ。

「ほらママ、見てこれ。神社のおみくじをいれるタツパー的なアレだよ」

「ちよ、結局タツパー的なアレ買ったの!? ていうかおみくじをタツパー的なアレに入れるのってどうなの!?」

「あと、ほら。これはお刺身を入れるタツパー的なアレで」

「パパ、もうジャスコにタツパーを買いに行きましょう。タツパー的なアレじゃなくて、リアルタツパーを買いましょう」

見てて恥ずかしいなまったく。

僕は自分の部屋で布団の上に横になっていた。天井を見つめながら、一つの決心をしていたのだ。実に単純で、馬鹿らしく、それでいて大きな決心だ。目をつむったり開いたり、口を閉じたり開いたり、つねに顔の表情を変化させながら。決心していた。

「アツシ、ちよっというい?」

母さんの声だった。障子越しに聞こえたそれに、僕は簡単にうんと、返事をする。そして、ゆっくりと障子が開いた。

「どうかした？」

「うん、何だか今日のアツシは変だったなって。何かあった？」

母さんはやっぱり僕の母さんなのだと思った。

「いやあ、なんていうか。その……。中学校なんだけども」

「ああ、私立受験？ したら良いんじゃない？」

ああ、したら良いそうだな。

「……え！？ 何これ？ 僕の決意がどうとかいづくだりが驚くほど無意味に！」

「無意味って。そんなことはないでしょ」

母さんにはっこりと笑って、畳の上に座る。

「あのね、母さんは思うの。よくドラマなんかで、親の敷いたレールがどうたらこうたらみたいなの多いじゃない」

「ああ、そうかな」

「私はね。レールの上を進む必要はもろん無いと思うし、それ以上に、レールを敷く意味が分からないの。だから、行き先を示すことはするけど、そこまでの道のりなんてどうだっていいと思う」

「じゃあ母さんは、僕に示したい行き先っていうのがあるの？」

母さんはしばらく唸って、何かを見つけたように頷く。

「そうだな、とりあえず楽しく生きてほしいから。『楽しく』って
というのが母さんの示す行き先かな。最終そこに行き着いてくれたら、
途中のことは好きにして」

僕は思わず嘖き出して、こらえながら言う。

「何だよそれ。結構無責任だなあ」

「子供はね、自分の生き方を考えた時、親のことを気にしちゃいけない。親に顔向けできない、とか考えなくていいの。とりあえず夢があるなら追えばいいし、それをやめるならやめたらいい。ただ、やめる理由に親を出さないでほしいな。私はあなたが親に変に振り回される人生送ってほしくないし」

分かるような分からないような。完璧な正解じゃない、でも間違っ
てはいない考え方だと思った。

「でも母さん、僕が中学受験したい理由はまじめなものじゃないよ。
お金だってかかるのに、そういうのって」

「ほら、お金かかるってまた親のこと考えてる。いいつて言ってる
でしょ。それにね、動機なんてものは何でもいいの。会社の面接な
んかではね、何でこの会社を選んだんですかって理由をよく聞かれ
るものなの。知ってるかな？ で、これって動機の内容を聞きたい
わけじゃないと思うの。これは、もう聞かれるって分かっていること
だから、半分会社からの宿題なわけ。実際にそう思ってなくても、
いかにきちんと動機を話せるか、それに対しての質問に答えられる
かってというのが大事だと思うの」

「まあ、そうなのかな」

「だから、理由がまじめじゃないなんて考えなくていい。理由なんてどうであれ、進みたいなら進めばいいと思う。別に母さんは会社の面接してるわけじゃないから、私にはきちんとした理由なんていらないよ」

母さんの笑顔を見てみると、何だかとても心が和らいだ。僕のやりたいことを何でもやらせてくれるそうさ。僕が性格が悪くて、性根が腐ってる最低の人間だったらどうするんだ、まったく。そんな理論はあんたに育てられた僕にしか通用しない。

「母さん、ありがとう」

「うん、パパにも言っとくね」

母さんは立ち上がり、ふすまを開く。そして、廊下に一步踏み出してから言う。

「アツシ、『楽しく』生きるってこと忘れちゃ駄目よ？　これだけ守れば、後は好きにしてい」

母さんが振り向き、またやさしい笑顔を見せる。僕もつられて笑顔に。

「息子が素直な良い子でよかったね。その考え方は、息子に引きこもりでもOKって言ってるようなもんだよ」

「あれ？　そうかな？　それは母さん困るなあ」

「大丈夫。僕は僕なりに、自分の人生『楽しく』生活してみるから」
「本当しつかりした子で母さん嬉しい。本当小学五年生とは思えないわ」

「だから中学生のノリが捨てきれてない、なんてことはないからね」
母さんは何だか嬉しそうにふすまを閉めた。

この会話から一週間後、母さんは交通事故でこの世を去った。

線香の匂いが辺りを埋め尽くす。心に巡る様々な記憶をまとめながら、僕は一枚の遺影に手を合わせる。今日は母の三回忌だった。三年前の母との約束。それを忘れたことはない。

「アツシ、お前さ、自分の母ちゃんに会いたいって思った事ねえか。俺はそういうことに関しては結構役に立てるかもしれねえよ？」

僕の隣で神様がそうおっしゃっている。僕は小さく首を横に振った。

「僕が無理言って母さんに会つのは、何だか母さんも望んでない気がするんで」

「そうか。まあ、間違っちゃいねえかもな。なんか遺言とかはあるのか？」

「そうですねえ。……まあ、良いじゃないですか。今日は学校忌引きしちゃったし、勉強しないと」

「おいおい、結構ドライなこと言っじゃねーかお前。母ちゃんの三回忌だろ？」

僕はうつすら痺れる足を持ち上げ、遺影を一度ちらりと見る。

「次郎丸さん、これからもよろしくお願いします」

「あ？ なんだよいきなり。分けわかんねー奴だな」

母さん、僕はそれなりに『楽しく』過ごせそうです。

第14章 船の旅だ（前書き）

4ヶ月間の沈黙をついに破りました、一次関数です。

放置していたわけでは無かったです、本当に小説にあてることのできる時間が減ってきています。

何だか知らぬ間に小説家になるつもりニューアルされているし。驚きを通り越してもう、恐怖でした。「僕の知ってる小説家になるうじゃない！」って思いました。

これからも不定期更新で読者様には申し訳ないのですが、気が向いた時にちよろつとのぞいていただけ、そんな小説を目指したいと思います。

第14章 船の旅だ

人は夢を追う。大なり小なり、人は夢を追う。

そして僕は今、夢を掴むためその神経を全てそれに注ぐ。汗ばむ手で取つてを握りしめ、期待と緊張に胸膨らませ、僕は歓喜の瞬間を待つ。夢への架け橋は回り出し、僕らに与える夢を選別。そして、夢の一つが、光を浴びる。

「一等賞うとうう！ 豪華クルーザーの旅、家族でご招待です！」

僕の両こぶしが天を仰いだ。

「で、お前は福引でお船の旅行をゲットしたわけだな」

夕食も終わり、いざ家族での団らんという午後八時。居間で神様兼居候である神田林次郎丸がもの珍しそうに、僕が福引で手に入れたチケットを眺める。僕がたまたま頼まれた買い物を終え、たまたま手に入れた福引券。そのたまたまが、更に金の玉々を生んだのだ。何というたまたまデーであろうか。

「お船の旅行って言うとかかちやちいですけど……。まあそうなんですよ！ ガラガラから金の玉が出てきたときのあの興奮、みんなにも見せたかったですよ。道行く人から拍手とかもらっちゃったりして」

「まあ、あんたが拍手もらったっていうよりは、金玉が出たことに対しての拍手でしょ、それ」

肉まんの精霊、中万華がいつものように次郎丸の腕に抱きつきなが

ら言っ。

「いや、マンカさん。何か冷めること言わないで下さいよ。後、女の子が金玉とか言っちゃダメ」

台所からエプロンをつけた親父が、洗い物を終えてやってくる。

「いやでも良かったよ、アツシい。クルーザーの旅なんて滅多にいけないもんじゃないよ、これ？ アツシの金玉最高だよ、本当。パパテンション上がったやうな」

「いや、だから親父もやめて。アツシの金玉とか言っのやめて。アツシの金玉でテンション上がらないで」

次郎丸が気だるそうな態度で続く。

「いやいや、つってもアツシの金玉は立派だよ。家族旅行にご招待するなんてよ。数年前からは考えられねえ成長っぷり。おみそれしましたっ。これが成長期ってやつなのかねえ」

「いや、もう次郎丸さん途中からリアルアツシの金玉の話してるよね？ おみそれしましたとか滅茶苦茶ムカつくんですけど。何であんたが数年前のアツシの金玉知ってたんだよ。いい加減にしろよ。アツシの金玉じゃないから。アツシが出した金玉だから」

お食事中の読者の方々には全力で謝罪しようと思う。

学校は二学期が始まり、もうすぐ体育祭ということで盛り上がりを見せている。そんな中手に入れてしまった豪華クルーザーの旅。タイミングの良いのやら悪いのやら。

今回手に入れたのは、『ラフォオウウ号で行く、三日間のドキド

キツアー』という、発音が難しすぎるクルーザーの旅である。このご時世にドキドキツアーというネーミング。本当に『豪華』クルーザーの旅なのかが怪しいところ。

体育祭の準備で忙しいだろうが、まあ三日間ぐらい僕がいなくても何の支障もないだろう。僕は対してクラスに貢献していないし。次郎丸の場合、居れば居るだけ「応援旗が中二臭い」だの、「リレー系は全部マモルに任せよう」だの、「やる気だけで勝てるわけねえだろ、本当に勝ちたいなら精神と時の部屋で修業してこい」だの、面倒くさいこと極まりないので学校側もラッキーだと思う。

一応マモルにもこのことは連絡しておいたし、これで何の気兼ねもなく家族旅行を楽しめるといふものだ。旅行は明後日。今から準備でもするとしよう。

で、出発の朝である。電光石火のような展開だがこれがコカミス・テータスなのだ。よく晴れた旅行日和、港に勢ぞろいした大平一家の面前にはゴジラの三倍はありそうなラフォオウウ号である。ちなみに昭和ゴジラである。

僕たち以外のトラベラーも集結し、ラフォオウウ号の扉が開くのを今か今かと待っている。すると、クルーザーの艦長と思しき渋いおじさん（c.v.大塚明夫）がデッキに出てきた。そして、僕らに向かって一礼。拡声器を使ってあいさつを始める。

「ええこの度は、ラホ。……ラフォオオ。……ラフォオオウウ号のドキドキツアーにご参加頂き誠にありぎやと……ええい！ めっちゃ囃む！ 何この船の名前！ 誰だよ名前つけた奴！ こういう奴が自分の子供にすごい名前つけたよ、もう！ 洒^{ジャニー}亜仁居とかつけないだよ、もう！ ……誠にありがとうございます。まもなく出航ということになりますので、どうか皆様足元に気をつけてご乗船ください」

この船旅がとんでもなく不安なのは僕だけだろうか。とりあえず足元に気をつけて乗船することにした。

帳簿に名前を書き終えると、まず僕たちはこれから三日間過ごすことになる部屋に案内された。オートロック式のドアを開くと、優雅できらびやかな内装が視界に咲き乱れる。開いた口を閉じることさえ忘れてしまうほどだ。部屋の中央には華美な装飾が施されたテーブル、ソファ。その隣には何かもう飾り付けりや良いと思ってるの？ と感想を漏らしてしまいそうなベッドが三つ。

「何かすごいですね、これ。商店街は福引にどんだけ賭けてるんでしょうか」

僕が呆気にとられていると、場にそぐわないジャージ姿の次郎丸が顔をゆがめた。

「おい、ちょっと待てよ。どういうこと？ 何でベッド三つ？ うちは四人のはずだろ」

そういえばそうである。僕、次郎丸、中万華、親父。うちは四人家族なわけで、ベッドが一つ足りない。中万華が顔を真っ赤にして、両手を頬に。

「そつかあゝ。ベッド一つ足りないんだあゝ。じゃあこの中で二人が同じベッドを使わないと……」

「アツシ、大至急ベッドを用意するよう言ってきてくれ。もしくは猛獣用の檻だ。繁殖期のモンスターでも簡単に動きを封じられるよ。うなやつを」

「そ、そんな次郎丸さん。監禁プレイだなんて……」

「アツシ、大至急猟銃を用意するよう言ってきたくれ。古龍種でも一撃で倒せるようなヘビィボウガンを」

とりあえず僕は普通にベッドを用意してもらったことにした。

僕は一人クルーザー内の通路を歩き、係員を探していた。もう次郎丸と二十四時間一緒にいるだとかいう制約は曖昧なものになってしまっている。最近は割と自由だ。一度このまましばらく離れているとどうなってしまうのか実験してみたいものである。

家族三人を部屋に残し、ベッドを用意してもらいに頼みに行く十四歳の中学生。何だか自分でもすごく不自然だと思う。と、僕が考えていると、慣性の法則に従って僕の体がぐらりと芯から揺れた。どうやらクルーザーが出航したようだ。

「あれ？ 今ちよつと揺れなかった？ え？ マジ出発しちゃった！？ ちよ、吾輩達帰れないじゃん！」

聞き覚えのある声が響いてきた。もう一人称が吾輩なんて僕の知り合いで一人しかないわけだけど、一応僕は声のする方へ足を進める。

動力施設のドアの前に、確かにあの兄妹がいた。過去、日本三大財閥の一つであった三車院家の子息であり、現在元気にホームレス生活を送る三車院太陽、そしてヒナタちゃんである。その場にうずくまって頭を抱える兄、太陽と、その隣でいつものように目を半開かせている妹、ヒナタちゃん。

「まさかもしや何か食糧にありつけるんじゃないかと潜り込んだクルーザーで迷い、拳銃出航してしまつて無断乗船が確定してしまうなんてー！ 吾輩達立派な犯罪者になつてしまつたー！」

やけに説明口調で三車院太陽が叫ぶ。相変わらずの学ランブリーフ、以前より全体的に小汚くなっていた。ブリーフも何か黄色くなっている。関わり合いにならざるを得ないのだろうか。というか、そうなる運命なのだろう。そういう星の下に僕は生れたのだ。

「あの、何やってんですか」

少々あきれ気味に聞いた。演技なんじゃないかと疑いたくなるリアクションで驚く兄と、僕の存在に閉じていた口をナノサイズに開くという電子顕微鏡でもなければ感じ取ることができないリアクションで驚く妹。でかいリアクションの方が言う。

「どひゃー！ き、君はアツシ君！ 以前吾輩達と戯れ、そして吾輩と妹に真の愛を気づかせてくれたアツシ君じゃないか！」

「さつきから何でそんな説明口調なんですか。新規の読者に向けて媚売るのがやめてもらえませんかね」

続いて小さいリアクション。

「……お久しぶりです、九歳の私にいきなり海で声をかけてきたアツシさん」

「いやヒナタちゃんは説明不足だから。法廷でそこまでの証言なら僕は裁かれるから」

「……ごめんなさい、でもそれ以外ならソフトMってことしか印象が」

僕のガラスのハートはビキビキである。

「ていうか、何をしてるんですか本当に。……まあ、大体事情は聞こえてましたけど」

三車院兄妹はいつもこんなことをしているんだろうか。だとしたら一刻も早く縁を切ってしまいたい。

「いやはや、やっちまったなあだよ。吾輩もびっくり。本当反省してる」

「反省の色が見えないんですよ。色づいていたとしても限りなく白に近いベージュですよ」

「お、ちょうど吾輩の履いてるブリーフみたいな色だね！」

「いえ、あなたのブリーフは限りなく黄色に近いウ　コ色です」

と言う僕の服の裾を掴み、存在をアピールするヒナタちゃん。

「……私も黄色」

「ヒナタちゃんん！　お兄ちゃんに感化されてるよ、もう！　羞恥心を大切にしてい！」

三車院太陽は頬を染めて、全身で喜びを表現するようにヒナタちゃんのもとに飛び寄り、僕の顔をにっこりとした表情で見る。

「アツシ君、アツシ君。……奇跡のペアルック！」

「うるせーよ！　奇跡でも何でもねーよ、悲劇だよ！　あなたの妹

があんたと同じ道に進もうとしてんだぞ！」

「いいかいアツシ君。兄として妹の進む道を否定することは罪なのだよ」

「その道創ったのはあんたでしょうが！ あんたの存在が罪でしょうが！」

「はっはっは、どう言おうがヒナタの選んだ道なのだから。ほら、ヒナタ。良い機会だ、ペアルック姿を見せてやろう」

そう言っただけでヒナタちゃんにズボン脱いじゃえというエロ課長的なノリを見せる三車院太陽。こいつ本当に駄目だ。

「あ……でも私……」

何だか恥ずかしがるのとは違う罪悪感いっぱい顔を見せるヒナタちゃん。普段無表情だから余計に気になった。

「ま、まさかヒナタちゃん……！」

僕は気づいてしまったのだ。ヒナタちゃんのパンツは黄色に近いウロコ色なんかではなく……。

「お兄ちゃんに気を使って嘘を！」

三車院太陽がとたんにしどろもどろになる。

「え？ 何を言ってるんだ、アツシ君、君は。ヒナタが……」

ヒナタちゃんがいつもの無表情に戻って淡々と言う。

「私は……私のパンツは黄色いよ」

すごく良い子だああああ！ ごめんね、羞恥心がどうとか言っ

思いやりが僕たちの心を豊かにするよ！

などと一人の少女の成長に感動しているうちに、どこからともなく人の駆けてくる足音が。

「ややっ、誰か来る！ アツシ君、悪いが吾輩達は一度トンスラさせていただくよ！」

「あなたは七十年代のアニメのキャラクターか何かですか。まあ、いいです。早く逃げた方が良いでしょう」

「すまないね、では！」

「私のパンツは……黄色だから」

と、三車院兄妹は早足で駆けて行った。なんとも対照的な二人である。

「あの、申し訳ありませんがお客さま」

後ろから声をかけられた。振り向くと、そこには先ほどまで僕が探していたこのクルーザーの男性乗員が。なぜか剣呑な目つきで僕をじっと見ていた。

「あ、はい何ですか？」

「お電話で『部屋の外からパンツが黄色いと叫ぶ奴がいる』と申されるお客様がいたのですが」

「えー!? あ、いや! 違うんです! それはその……」

一瞬三車院兄妹の顔が頭に浮かんだが、彼らの名前を出すわけにはいかない。一応知り合いではあるし、無断乗船の旨を伝えては二人が大ピンチである。

「えっと……僕のパンツ……黄色いんです」

僕はなんて良い奴なんだろうと思った。

僕は一人重い足取りで部屋に戻っていた。何故だかわからないが、ほんの数分で僕のパンツが黄色いという噂がクルーザー中に広まり、出会う人出会う人、若干僕を避けている。こここの情報伝達率は中学校以上だ。三車院兄妹と出会ったばかりに僕の豪華クルーザーの旅が、僕の福引での輝かしい成績が、見るも無残に崩れ去っていく。泣きそうである。

そもそも、考えてみればベッドを用意してほしいのだった。ルームサービスの電話で済ませればよかったのだ。僕は何のためにあんなことをしたのだろうか。何のためにパンツが黄色い噂を立てられねばならないのだろうか。

もう一つ言うなら、今さっきの僕が黄色いパンツを履いていると思っている彼に伝えればよかった。もうそれ以上に一旦、一人になりたかったのが本音のだけだ。僕の心は弱い。

砕け散ったガラスのハートを丁寧に拾い集めながら、僕は部屋へと戻る。

すると、何だか部屋から賑わしい声が。……というか悲鳴?

「ちよ、どうしたんですか?」

僕は言いながらあわててドアを開けた。

「おお、アツシ！ ようやく戻ってきたか！」

と何故だか鼻がテカテカの次郎丸がこちらに振り向き言った。

「えっと……状況が全く理解できないんですけど」

「アツシい、神田林さん大変だったんだぞ」

親父がほつと胸をなでおろすように言っている。何故僕のせい、みたいな口調なのだ。僕は今まで一人でベッドを……一人で？ まさか僕と次郎丸が長時間離れていたせいで何かのペナルティを受けていたとでも言うのだろうか。何て今更なんだ。

「いや、俺もまさかこんなことになるとは思わなかったんだけどよ
お」

次郎丸がティッシュで鼻をこすりながら言う。緊張で手汗がにじむ。あそこまで悲鳴をあげるほどだ、きつと何か大変なことが。

「俺さあ、お前と長時間離れてると、鼻の脂がすごいことになるみたいなんだわ」

「……しよぼ！ ペナルティしよぼ！ 何だよその女子高生には大ダメージのペナルティ！ あんたおっさんでしょ！？ ペナルティでも何でもないわ、そんなもん！ 前々から思ってたけど神様って頭おかしい集団なんですか！？」

「いや、お前なめてるって。今まで鼻の脂が滴り落ちてる様子を見たことあんのか？」

「滴り落ちる！？ 怖っ！ 正直なめてました、すみません！ ていうか、そんなことが浅香あき恵さん以外で可能なんですか！？」

中万華が次郎丸の丸めたティッシュを受け取り、自分のポケットにしまいこむ。

「次郎丸さん、あれは滴り落ちるなんてレベルじゃなかったわ。噴き出してたわ。レーザービームのようだったわ」

「レーザービーム！？ 何なんですか、それ！ もうホラーじゃん！ コメディの域越えてるじゃん！」

「ええ、私もあまりに興奮して、ついシャワーのように浴びてしまっただわ」

「いや何してんだよ！ 浴びてしまったわ、じゃないよ！ 良く見たら顔テラッテラじゃないですか！ あと何うっすらティッシュをポケットに忍ばせてんだよ！ 見てたからな！ 本当どれだけ守備範囲広いんですかあんたは、往年の谷選手か！」

と叫ぶ僕に親父がまあまあとなだめる形で僕の肩に手を置く。

「もう解決したからいいじゃないか。マンカちゃんのこれは分かり切ってることだし」

そんなことを言われては、もう僕のツッコミという役割が意味をなさないうな。親父はその辺りを理解しているのだろうか。

「それよりも、アツシ。ベッドのことは伝えてきたのかあ？」

「あ、いやそれなただけどさ。考えてみたら部屋に電話があるじゃないかって……」

思ったのだが。そこには、妙にテラッテラの電話が。脂が滴り落ちており、もう電話として意味を成し得るのか非常に難しいところである。

「……次郎丸さん、一緒にベッドのことを言いに行きましょう」

「あ？ 何で俺も行かなきゃなんねーんだよ」

「これ以上部屋を脂まみれにたくないからです」

「……何かこんなに罪悪感いっぱいなの初めてだよ」

僕と次郎丸は脂まみれになった部屋の掃除を親父と中万華に任せ、とりあえず部屋を後にしたのであった。

何だか豪華クルーザーの旅と銘打ちながらも、未だにベッドがある、ないという話しかしていない僕たちってどうなんだろうか。メタフィクショナル的発言で申し訳ないのだが、全編通しての展開の早さと比べて、こういうどうでもいいところの展開が遅すぎやしないだろうか。というか、くどすぎやしないだろうか。いい加減、クルーザーからの景色だとか、そういうものを読者に伝えたいのだけだ。

いや、そんなちよつと真剣な悩みを読者に打ちあけてもしょうがないと思う。ごめんねっ！

話を戻し、僕と次郎丸はとりあえず誰かが必ずいるであろう、帳

簿に名前を書いた部屋を目指す。その途中に誰かがいればそれでいいだろう、そんな軽い感じで目指す。

ところがどっこい（僕も三車院太陽のベタリアクションに影響されてしまったのだろうか、ところがどっこいって……）、さっきからこの船内でまったく乗員を見かけない。一体どうなっているのだ。本当に色々適当なんだよな、この豪華クルーザーの旅。

「やべー、もう何かこれから俺どう家族と接すればいいんだよ。大平さん一家はこれから俺の鼻の脂ビームの恐怖と闘いながら生活するんのかよ」

次郎丸が嘆く。何だかどうしようもない気がするのだけど、一応フオローくらい入れておいてやろう。

「大丈夫ですよ、僕と離れなきゃいいだけだし」

今までどうりなら問題ないですよ、と僕は続けた。

「ちつくしよ、何だこの気持ち。何かお前にフオローを入れられるとは思わなかったぜ」

次郎丸の皮肉まじりの言葉に僕は、はいはいと頷いた。最近次郎丸の常識外れの行動が少なくなったので、どうも彼にツッコミを入れる機会が減っているように思う。次郎丸もこちらの生活になじんだということだ。

僕と次郎丸が歩きに歩いて、いつの間にやら操舵室のドアの前までやってきていた。本当どこまで人件費を削ってるんだ、このクルーザーは。何人で運航してるんだよ。

「まあ、操舵室には誰かいるでしょ」

「黒田アーサーとか？」

「いるわけではないでしょ」

軽くつつこんで操舵室のドアに手をかけたその時である。

クルーザーがとんでもなく大きな音を立て、ロデオマシンの如く揺れ始めたのだ。倒れないように体のバランスを保つことに必死になる。次郎丸も同様だ。しばらくして揺れが収まると、僕は次郎丸と何かを確認するように頷きあい、操舵室のドアを開けた。

「ちよちよちよちよ！ 何なの今の揺れは！ びっくりして漏らしそうになっただけけど！」

旅の初めにグダグダなあいさつをしていたこの船の艦長らしき男が叫ぶ。船の運転を任されていたクルーがそれに応じて大声で返事する。

「艦長！ 予定航路上に巨大な氷山を発見しました！ なので航路を変更したのです！」

「この日本近海に氷山！？ この小説の地域設定どうなってんの！ いやいや、それにしても独断で航路変更するってどうなの！？ 艦長に何一つ意見を求めないってどうなの！？」

「我々クルーは艦長をただのウジ虫程度にしか認識していません！」

「え……ちよ！ びっくりしたあ！ 信頼しきっていたクルーに手のひら返されたあ！」

いやいや、そんなやりとりを繰り返している場合なのだろうか。氷山で船の航路を変更？ これって結構大変なことなんじゃないのか。僕は何だかうまく状況がつかめず、困惑をそのまま吐き出した。

「あ、あの……航路変更って大丈夫なんですか？」

「あ、お客様！ どうしてこんなところに！」

ウジ虫艦長が目をまんまるにして言った。まあごもつともな意見である。次郎丸が言う。

「すみません、ここ本当に黒田アーサーいないんですか？」

全然ごもつともでない意見である。

次郎丸の発言は無視することにして、僕はそのまますジ虫艦長に言う。

「いやあの、ちょっと乗員の方を探していたらここにたどり着いたというか。ていうか、氷山って大丈夫なんですか？」

「ああ、まあ一応航路は変更したようだし」

とウジ虫艦長が言うと、クルーが答える。

「艦長のパンツはもう手遅れですけどね」

「おいおい、僕のパンツがいつ手遅れになったって？ 漏らしそうになっただけだから、微塵もパンツ汚れてな……。あ、いやちよつとしか汚れてないから。ちよつとだけだから。全部出そうになったのを引っ込めたときにさきつちよが少しだけヒットアンドアウェイ

しただけだから」

「え？ マジで汚れてんの艦長。おーい、みんなあ！ 糞豚野郎が文字通り糞漏らしてんぞー！」

「ちょ、やめて！ 正直に言った僕、馬鹿みたい！ ていうか普段僕のこと糞豚野郎って呼んでるの！？ さっきまでの微妙な敬意がまったく失われてるし！」

僕のパンツ黄色い疑惑が艦長になすりつけられそうである。というか、艦長のパンツは確かに黄色くなってしまったのだけだ。

「いやあの、大丈夫ならそれでいいんですけど。ていうか、他のお客様にこのこと報告しなくていいんですか？ いろいろ予定も狂ってくるでしょうし」

僕が言うと艦長はお見苦しいところを見せてしまったとでも言いたげに、かぶっていた帽子を深くする。

「ああ、すぐに連絡しますよ。おい君」

「何だ、ウジ虫」

「よし、後で八つ裂きにしてやる。お客様にルート変更と氷山の旨を伝えるんだ」

「なるほど。氷山に衝突したので、今すぐ非難するように伝えればいいわけですね」

「何を言ってるんだ。氷山はもう避けたんだろっ？」

「航路を変更したとは言いましたが、衝突を避けたとは言っていない
せん」

場の空気が凍りついた。それはもう氷山の如く。

ラフォオウ号沈没のピンチである！ どうやら避けそこなつた
氷山が船底に穴を開けたらしい。僕は艦長達と協力し、乗客に避難
するよう訴えた。何故だかラフォオウ号のすぐそばを救助船が走
っており、九死に一生といった感じである。

「よかったですね、艦長。救助船がすぐそばにいて」

「いやあ、自信ないからずっと後ろについてもらったんだが、ま
さか本当に救助されることになるとはな」

「自信なかったんですか！？ 自転車の練習気分で救助船使うなよ
！」

とはいえ、艦長の自信のなさが乗客の皆さんを救つたのだ。すで
に乗客の九割は救助船に乗り込んでいる。僕は次郎丸とラフォオオ
ウ号からその様子を確認しつつ、自分たちの順番を待っているのだ。

「まさか豪華クルーザーの旅がこんなことになるなんて」

「まあ気にすんなよ。いくらお前の金玉のせいで巻き込まれたから
つてお前が責任を感じる必要はねえんだからよ。それにしてもなかなか
かしょぼい金玉だったな。金玉のくせに。アツシの金玉なんてしょ
せんこんなもんなんだな」

「勘弁してください。男としての自信をなくしそうです」

まあ、今回はグッドエンドというわけじゃなさそうだけど、誰も犠牲者が出なかったのだから良かったではないか。何か忘れているような気がするのだけれど、何かベッドがどうか、そんなことだろう。もう僕は家に帰ってすぐに眠りたい。たった二時間のクルーザーの旅だったけれど、その密度はこれ以上ないほど濃い。

僕は疲れと何か達成感のようなものを感じつつ、空を見上げる。すぐそばの海に負け地を取らず、真っ青な空間が僕らを覆っていた。雲一つない、まさに蒼。ああ、太陽が眩しい。太陽が……。太陽？

「あああああ！」

僕は目をひんむいて叫んだ。すっかり忘れていたのだ。考えてみればこのクルーザーに乗っていた三車院兄妹、名簿に名前がないわけだから、確実に忘れられているでは無いか。あの兄のことだ、きつとこの船のどこかで大きいリアクションをとっているに違いない。あの二人が器用に乗船に紛れ込んで、この船から脱出できるわけがないのだ。間違いない。

「どうしたんだよ、アツシ。急に叫びやがって、お前はジェロニモか」

「い、いやあのですね。あんまり大きい声じゃいえないんですけど……」

僕は三車院兄妹のことを次郎丸に説明する。

「おいおい、何か馬鹿らしすぎるだろ。色々と」

という次郎丸の気持ちは痛いほどよく分かるのだけど、だからと言

って彼らを見殺しにするわけにはいかない。

僕と次郎丸は救助船に十分間その場で留まってもらうよう説得、うまうまいかなかったのでベークソンの歌。僕たちは徐々に海に飲み込まれるクルーザーに戻った。

僕たちは通路を並んで走った。三車院太陽、そしてヒナタちゃんの名前を叫びながらだ。

「何か次郎丸さんのベークソンの歌使ったの久しぶりでしたね」

「まあ、何でもありません。案外制約も多いから。現世以外じゃ使えねーし」

何だかさり気に大事な設定が飛び出したような気がした。それについて、僕がもう少し踏み込んだ質問をしようとした、その時である。動力室と書かれたプレートが貼ってあるとても頑丈そうなドア。そのドア越しに聞こえたのだ。一人の男の叫び声。本当はもう一名、幼い女の子の声も聞こえなやいけないのだけど、あの子に大声で助けを求めるなんて無理なんだろうな。

「次郎丸さん、ここです！ きつとこの中に二人が」

言いながら僕はその重いドアを引いた。

悲惨な現状であった。

氷山が衝突したのはおそらくこの部屋だったのだろう。

すでに大部分が浸水しており、動力室の半分は、そこが元々海であったように海水で埋め尽くされている。奥を見ると、今も水が大量に噴き出ている衝突跡があった。で、その浸水が生み出した小さな海のご真ん中に彼はいた。崩れた動力室の外壁が、孤島のごとく浮かび、その上で涙と鼻水をぐちゃぐちゃにする三車院太陽。そして、ぎりぎり浸水から逃れた部屋の一角で直立不動のヒナタちゃん。

「へーい！ ヘルプミー！ このままじゃ吾輩は海水で肌が荒れてしまっ！」

「……お兄ちゃん、頑張れ。私も助け……呼んでるから。誰か！ 助けて！」

「ヒナタ！ もっと気合い入れないと！ トーン一切変わってない！ 軽く死を受け入れたがごときトーンの低さ！」

やっぱり助けるのが馬鹿馬鹿しくなってきた。本当に危ない状況なのに。僕が悪いのだろうか。僕がただ非情なだけなのだろうか。

「おいこら馬鹿兄妹！ ていうか馬鹿兄！ おい馬鹿兄！ 助けに来たぞ！」

次郎丸が叫んだ。とたん目を輝かす三車院太陽、そして特に目の輝きが変わらないヒナタちゃん。

「おお！ 君は確か次郎丸君じゃないか！ 良かった！ もう吾輩死ぬかと思ってた！ 考えてみたら友達、君等だけだし！ 他に助けてくれる人いないし！」

「ていうか、そこから泳げるんじゃないんですか？ 十メートルくらいでしょ？」

僕は言った。いくら冰山近くで海の水が冷たいとはいえ、その方が明らかに生還率は高まるだろうに。

「いやいや、アツシ君。驚くかもしれないが、見てくれ。そこにク
ラゲの群れ、シャチ、巨大ザメ、大王イカ、ズゴッグ、ポセイドン
がいるんだ」

「海の脅威大集合してる！ 何だよその状況！ 何でそんなに引き
寄せるんだよ！ あんた実は海の神様なんじゃないだろうな！」

「え！？ 吾輩は海の神様だったのか！ 太陽なのに！ ぶふっ、
面白い！ アツシ君うまい！」

「うるせーよ！ 対してうまいこと言っていないでしようが僕！ 何
かそこまでツボにハマられると逆に恥ずかしくなってくるわ！」

とにかくこの状況を何とかしなければならぬ。僕は周辺をざっと
見渡した。彼を助けるのに有効だと思われるものは……ない！ 本
当にない！ どうしよう！

「おい、アツシ」

何だか意地の悪そうな声が聞こえた。半分真剣で、もう半分はおも
しろがってるような。そんな意地の悪そうな声だ。振り向くと、十
メートルほど僕から距離をとってアキレス腱をのばす神田林次郎丸
がいた。次郎丸はそのままクラウチングスタートの態勢をとる。こ
いつ、まさか。

「ジャンプ台に、なりきってる」

その一言をスタートの合図に、次郎丸は僕に向かって全速力で駆け
だした。

「ええ！？ ジャンプ台！？ 無茶でしょ、それは！ ちょちょちよ！」

目の前が真っ暗になった。直前の映像はこうだ。

走る次郎丸。跳ぶ次郎丸。僕の顔面を踏みつける次郎丸。

気がつくと、僕は空を見上げていた。蒼い蒼い空だ。いや、蒼井そらじゃなくて。上体をゆっくり起こし、ここが救助船の上であることを悟った。何とか、助かったんだろうか。そういえば三車院兄妹はどうなったのだろう。家族が僕の復活を「おはよう」と一言で済ませ、何事もなかったかのように救助船は日本へ向かう。

で、後日談である。三車院兄妹はその後、次郎丸によって救助船のロツカーに無理やり詰め込まれ事なきを得たらしい。その辺はベーカーの歌を使用できる次郎丸の十八番だ。そもそも、僕をジャンプ台にしたあとどう助かったかといえばだ。次郎丸によると、三車院太陽を浸水の及んでいないところへ石ころのように投げ飛ばし、自分は海の脅威達に闘いを挑んだらしい。多分海の脅威に闘いを挑んだのは嘘だと思うが、それ以外に何も語らないのもう聞かないことにした。まったく面倒な男である。

えらく短い旅行になってしまったわけで、僕は結局体育祭の準備に付き合わされる羽目になった。雑用ならお手の物、と胸を張って言える。

もうすぐ体育祭である。

第15章 体育祭、午前の部だ（前書き）

お久しぶりです。1年ぶりです。

受験を終え帰ってまいりました、一次関数です。

今後どのくらいのペースで更新出来るか分かりませんが、楽しい小説を提供できるよう頑張りたいと思います。

よろしく願います。

第15章 体育祭、午前の部だ

晴天である。空には太陽光を邪魔するものは何もなく、水色のドームに大きな照明が一つぶら下がっている印象だ。もう九月も後半なのだけれど、太陽も夏休み気分が抜けきらないのか、今日も彼は燦々と輝く。そろそろ季節は秋なんだと、誰か教えてやってくれ空の住人。

今日は我が中学校の体育祭である。先ほど開会式で『第四百十回』と銘打たれているのを聞いた。なかなか深い歴史ある体育祭だ、と僕は感心してしまう。

去年、僕が中学一年生であった時はそれほど体育祭を楽しもうとした記憶はないのだけれど、今回は違う。僕は今年の体育祭には嫌と言う程準備に携わったのだ。

理由の一つが、友達が中学一年の後半から増えたこと。もう三学期になっていただろうか。それまで昔からの親友と初恋の相手ぐらいいしか話さなかったのだが何故だか三学期、僕は木田というクラスのお調子者と遠足の班を組み、そこでその木田を通して友人の輪が広がったのである。

そしてもう一つの理由。それは僕の予定表が真っ白になっていたことだ。色々と予定が詰まっていたはずなのだけれど、新聞の一面になるようなトラブルに巻き込まれ、予定が逃げ出してしまったのである。マスコミに取材されるのは、予定さんも勘弁らしい。

僕は自分のクラスの応援席で、テントの陰に感謝していた。ブルーシートの上に体育座りして、自分の出る競技の順番を待っている僕。今日は一段と日差しが強い。日射病には気をつけなければ。

「アツシい、水」

気だるそうな声で、眉間にしわを寄せた小神が言った。青ざめた顔、

死にかけの目で僕を見つめ、腕をしんどそうにこちらに伸ばしている。実は昨日、彼は体育祭前哨戦だ、と言い全身の水分がアルコールに取って代わるのではないかという程酒びたしになったのである。僕はそれを傍観し、親父はそれに付き合い、中万華は酒を注ぎ彼の勢いを助長した。

「次郎丸さん、一応あなたは先生なんですから。体育祭はもっとこう万全の体調で臨むべきだと思っんですけど」

「うるせー、後の祭りだ馬鹿野郎。過去を振り返る暇があったらどうやって未来を生きるか考えろ」

どこかで聞いたことがあるような台詞。しわくちやのジャージが余計に彼から生気を奪っているように見える。まあ彼はそこまで体育祭を楽しみにしていたわけではないのだけれど。次郎丸は何かが懸かっている時は本気を見せるが、それ以外だからつきしやる気を見せないのだ。僕は足元の水筒を次郎丸に手渡した。

「お茶ですけど、いいですか？」

「おう、アルコール抜けりゃ何でもいい。もう本当気分悪い。魂抜けそう」

「アルコール抜いてもいいですけど、魂は抜けないで下さいね」

ここまで元気のない次郎丸を僕はかつて見たことが無い。何だか少し心配になってきた。

と、ここで校舎のスピーカーからキーンという耳鳴り音が聞こえたかと思うと、続けて我がクラスーのお調子者が喋り始めた。木田は放送部に所属しているのだ。

「え、プログラム一番、開会式が終了しました。続きまして、プログラム二番、クラス対抗女子選抜コスプレリレーです」

次郎丸が元気になった。

僕はこのコスプレリレーなる我が校の伝統行事にあまり興味が無い。僕にコスプレ趣味はないし、どちらかと言えば年上好きの僕にとって、中学生のコスプレなんぞ見る価値はないに等しいのである。まあ、それでも一応入場行進ぐらいは見ておいてやろう。大人のマナーとしてそれぐらいは当然である。別に彼女たちのコスプレを見たくて何にも思わないけど。本当、何にも思わないけど。一切の期待もしてないけど。

木田のアナウンスが響く。

「では入場して頂きましょう。まず一年一組坂田さん、カップのコスプレです」

「何でああああ！ カッパってお前、ふざんけんなよ！ 期待してた全ての人々に謝れバツキャロー！」

気が付いたら叫んでいた。ふざけているのも、期待していたのも、バツキャローも、僕だった。

次郎丸が僕の肩に手を置いた。

「気持ちは、分かるぜ」

やっぱり次郎丸は大人である。こういう場面でまったく取り乱さないのだから。ふと、彼の手元を見る。デジカメがこれでもかというくらいフラッシュをたいていた。

「全然気持ち分かってねーだろ、あんた！ ていうかカツパも守備範囲！？ 次郎丸さん、マンカさんのこと馬鹿に出来無いじゃん！ あんたも十分変態性癖の持ち主だよ！」

「馬鹿か、てめーは。カツパなんざどうでもいい。俺は中学生が公衆の面前でカツパの格好をしているという事実を楽しんでるだけだろっが」

「いや、当たり前のように言ってますけど、結果得たものはあんたがやっぱりロリコンだったという事実だけだからね！ もう知り合つて半年になるけど、ようやくその疑念に確信が持てただけだからね！ もう、何だよあんた！ 二日酔いで寝てるよ！」

「まあそう言つてやるなでござる、アツシ君」

もう一人の小神、利理岡権田勇が当たり前のように僕らのテントに陣取つて、当たり前のように一眼レフを構えていた。傍らには寝袋と十分な食料。

「何で前乗りしてんだああああ！ ていうかあんたは二次元にしか興味なかったんじゃないんですか！？ そーいう設定だったじゃないですか！」

「アツシ君、拙者もその設定を受け入れる気だったんでござる。でもいざ明日、中学生の体育祭があります、と聞かされて動かない男なんていないんでござる」

「なるほど、これがキャラクターが作者の手を離れて勝手に動き出すってやつか！ なんてマイナス方向に動いてんですか、あんた！ ていうか体育祭と聞いても動かない男いっぱいいるよ！ 普通は

興味も湧かぬーよ！」

何だ、神様というのはみんな変態なのか。変態が神様になれるのか。あながち間違っていないような気がするけども、深く考えないでおう。そういえば、一つ気になる点がある。

「あれ？ ていうか利理岡さん、前乗りするにしたってどうやって学校に入ったんですか？ この学校はセキュリティがしっかりしてるから、忍び込むなんて出来ないはずじゃ」

「あ、その辺は大丈夫でござる。この学校には同志がいたでござる」と利理岡権田勇は役員席の方を指さす。努力・友情・勝利ではなく、黒光りマツチヨ・むつつりスケベ・体育教師の三本柱を掲げるロドリゲスが、その焼けた肌と綺麗な対比になっている白い歯を見せる。小さなガッツポーズをしているようだ。そうだ、よくよく考えてみれば、僕の身の回りにはまともな大人なんていないじゃないか。変態が神様になれるとか、そういうことじゃない。僕の知り合いがみんな変態だったのだ。

何だか自分の将来が心配になってきた。そんなことを考えていると、ふいに後ろから声が聞こえた。

「体育祭、楽しんでる？」

振り返ると、そこには白装束の幽霊が。こっくり姉さんだ。いつの間にかこの学校、というか、うちのクラスに住み着いたお化け。見た目は僕たちと遜色ないくらいの幼さなのだけど、纏うオーラは頼りになるお姉さんだ。僕の後ろでふわふわと宙に浮いている。

「こっくり姉さん、おはようございます。これから楽しみたいって

感じですかね。競技自体は今からが本番ですし」

僕は普段学校で会う時と同じようにあいさつした。とは言っても、学校でこっくり姉さんに会うのはなかなか珍しいことである。

「あら、そう。あたしはもうね、さすがにそういうの楽しむ歳でもないし。こっく見えてあんた達の何倍も生きてるのよ。何か正直疲れるっていうか。こっくいうのって若い子が楽しむものだしね」

と、こっくり姉さんはナイキのエアーマックスの紐を丹念に結ぶ。

「いや、こっくり姉さん走る気満々じゃないですか。エアーマックスって。今の子分かるんですか」

「いや、違うから。あたしこれ、普段から履いてるしこの靴。白装束にエアーマックスってもうトレンドなんだから、こっくの世界では」

それがトレンドなら、もう僕は世の中の流行なんて一切気にしないぞ。

何だか競技前から疲れてしまっているのだけれど、だらけているわけにはいかない。クラス対抗の体育祭、我が二年四組は一致団結して優勝を取ろうとやる気に満ち溢れているのである。とにかく、自分の競技までは時間があるのだし、他のみんなを応援することにしよう。

コスプレリレーでの二年四組の成績は全体で四位。何気に元気な奴らが集まっているだけのことはある。小学生の頃はバレーやってきました、みたいな女子が多いからな、うちのクラスは。

ここでまたも木田のアナウンスが響く。

「以上、コスプレリレーでした。続いてプログラム三番、クラス対抗男子リレー予選です」

僕には縁のない競技、男子リレー。我が中学校では午前中の予選で午後から本選出場する六クラスをしぼるのだ。うちのクラスからは言わずもがな、マモルを筆頭とした六人のちよいモテ男子が出場する。マモルが出場しているということもあって、応援しないわけにはいかない。

「アツシ、ちよつといい？」

不意だった。意識が完全に男子リレーに向いていたから、というのももちろんだ。いやそれより何より、まさかこいつから僕に、それもこんな普通の女の子みたいな口調と態度で話しかけてくるなんてことは僕の十四年の人生において初めてだったからだ。不意を突かれた。藪から棒。こんな空気は初めてだった。

「ど、どうしたんだよ、アユ」

半そで半パン、いつでも走れます、跳べます、投げれます状態の磯野アユがそこにいた。思わず声が震えてしまった理由は僕にもよく分からない。

「いや、あのさ。アツシに聞きたいことがあって」

「何だよ」

「子供は男の子と女の子、どっちがいい？」

「いきなり何だよ、新妻かお前は」

「どーせ女の子だよな」

「どーせって何だ、どーせって！ 幼馴染の僕を何だと思ってるんだ！」

まったく理解できない。いや、ついていけないのは前からなのだけども。いきなりの訳の分からない質問、正直戸惑ってしまう。……あれ？ まさかこれ、あれ？

よく漫画を読む。バトル漫画、スポーツ漫画、ラブコメ。ジャンル問わず、僕はよく漫画を読む。そして、そんな漫画の主人公にありがちなのが幼馴染の女の子だ。彼女達は皆例外なく美人で、そして多くの場合主人公に好意を寄せる。幼馴染、友達として仲良く接してきたが、いつの間にかそれが恋愛感情に発展していた、というパターンである。

まさかそれなのか。僕らの日常において適当、粗雑に扱われてきた恋愛要素というものが、ここにきて動き出そうというのか。

初めてアユを女性として認識する。まずい、ドキドキしてきた。僕はユリちゃん一筋であって、そういうところは自分でもきっちりしようという信念がある。とは言え、目の前の女の子が自分に好意を寄せているのでないか、という疑念を抱いてしまったら最後。多少のブレはどうすることもできない。

黙っていれば可愛い、というのが一般男子によるアユへの認知であって、僕もそれには納得している。こいつは言動で損をしている。何だか『まったく、こいつの面倒は幼馴染である僕しか見れないよな』みたいな感情が芽生え始めている。何故上から視線だ、僕！ 何故モテ男気どりだ、僕！

僕の心の葛藤を無視して、アユは話を続ける。

「あのさ、アツシなら大丈夫かなあって思ったんだけど」

アユが視線を落とし何かを促すようにほら、と呟いた。
頭をぐるぐる回っていた思考の嵐がぷつんと途切れた。今までの
憶測を全て覆し、新規の憶測が生まれる。

「誰だよ、その子」

これしかない、という台詞だった。少女は言う。

「黙れ、無個性！」

何故か怒られた。しかも刺殺される勢いの鋭い一言で。

今までアユの背中であぐらをかいていたのだろう、彼女の合図でその少女は僕にその姿を見せた。アユの体を盾にするようにして、ひよいと頭をのぞかせる。眩い太陽光を負けじと反射し艶めく、肩まで伸びた黒髪。それと対比されるような白い肌の少女。年齢はちょうどヒナタちゃんくらいだろうか。ただ小学生くらいの女の子は年齢判断が難しいので、はつきりとは分からない。ただ確実に小学生であることは間違いない。この女の子の来ている制服が、うちの中学校の小等部のものだったからだ。そして、この少女。これは僕の勘違いかも知れないが、何だかどこかで会っているような気がする。知り合いか、もしくはデジャヴか。

いやそんなことよりも開口一番『黙れ、無個性！』と罵られて、少女の容姿を冷静に分析している自分の今後が心配だ！ 周囲の影響が大きいとしか考えられない！

「何この人の傷口をピンポイントで貫く精度！？ 連載当初から気にしてるのに！」

「だったら目立つ髪型とか、武器とか、服装とか、何でもいいから

努力すればいいじゃん！ 語り部だろ！ お前の個性はお前が作れ
！」

「うおおおお的を得た意見だチクショー！ 何も言い返せねえチク
ショー！」

アユは僕と少女の会話の流れを無視してマイペースに話し続ける。

「アツシ、この子の面倒見てあげてくれない？ ユリに頼まれちゃ
った」

はっと我に帰る。が、アユの言うことがよく理解できない。むしろ
この流れ全体が把握しかねる。体育祭、小等部の少女、面倒を見る、
ユリの頼み、繋がるように繋がらない僕の思考回路。

「ユリって……ユリちゃん？ 何でユリちゃんがそんなことを頼む
……あ」

引っかかりがあった。いや、見つけた。思い出したのだ、もうずい
ぶんと前の話を。ユリちゃんが僕の家に来て来たあの日、彼女が
言っていたことを。そしてそれが概ね確信に変わる。絶妙のタイミ
ングでアユから答え合わせ。

「この子ね、ユリの妹で大野紅葉ちゃんおおのもみじ」

大野紅葉、彼女の憎たらしげで攻撃的な視線に、僕は苦笑いで答え
た。

大野由利、僕の初恋の相手にして可憐・清楚・快活・善美・艶麗
のステータスを持つ少女である。電化製品への異常なこだわりを除
けば、ひたすらに完璧な彼女。出会えたことに感謝する。

そんなユリちゃんには妹がいる。ということも僕は本人から聞いていた。正直なところその瞬間、僕はユリちゃんとお話をしているという状況下に興奮しきっていたために聞き流していたのだが、今こうして彼女の妹と対面して何故この件について深く言及しなかったのかと激しく後悔している。

「……………」

大野紅葉は無言。僕、大平敦に対して人見知りしているとか、大野紅葉自身がクールビューティーな個性を發揮しているわけではない。敵意、警戒である。

僕と言う人間に警戒し、睨みをきかせているのである。理由は分からない。ユリちゃんをそのまま幼くしたような彼女の威圧的視線に若干のニヤケ面をする僕に対して、何故警戒を抱く必要があるだろうか。

「いや、そりゃ警戒するに決まってるじゃねーか。むしろ変質者に対して警戒する良く出来たガキだろ」

次郎丸は言った。

「次郎丸さん、地の文を読みとらないで下さいよ」

僕は紅葉ちゃんを二年四組の応援テントに招き入れていた。この強い日差しの下に女の子を放置するわけにはいかない。アユは男子リレーのあとに続く女子リレーへ出場するためそちらへ向かった。

アユが言うにはこうだ。

「あのさ、さつきユリと紅葉ちゃんが一緒にいて、それでユリが校舎に忘れ物取りに行きたかったらしくてお守りを任されたんだけど」

「女子リレーがあることを忘れててすぐ行かなきゃいけないから、次は僕にお願いしようってことか？」

「そういうことだとしたら？」

「あ、何だこいつイラっとする」

と、そんなやりとりがあつて、今現在こうしているわけである。知らぬ間に男子リレーは終わつていて、うちのクラスは予選を突破したらしい。そして何故だか分からないが次の競技の準備やら何やらが奇跡の重複を見せ、二年四組のテントには僕と次郎丸、そして不法侵入者の利理岡権田勇というおおよそ子供の世話には向いていないであろう輩が大野紅葉と時間を共にしている。そして先ほどの場面へ続く。

「さっきからじろじろ見るな！ 気持ち悪い！」

大野紅葉は耐えかねたように叫んだ。さっきからどうも嫌われてしまっている。完全に僕のことを敵とみなした目つきである。爪をたて、牙をちらつかせながら威嚇する猫のようだ。触れたら怪我をしそう。

「あの、紅葉ちゃん。じろじろ見てたことはごめんね、だけど安心してほしいんだ。僕は君のお姉さんのユリちゃんの友達だから」

「友達やめろ！ 今すぐやめろ！ 殺すぞ」

「そんなやめろって……いやいやいや今殺すぞって言わなかった！
？ そんなことより殺すぞって言わなかった今！？」

「お姉ちゃん是我的憧れ！ 完璧な美の象徴！ お前は近づくな、無個性が移る！ 刺すぞ」

「あ、も、ちよ……反論したいのに最後の一言が強烈すぎて触れられない！ 無個性が移るわけないとか、そんなことより刺すぞが気になる！」

「さつきからうるさい！ 自分のツツコミに酔ってるのか！ そうだろ！ 落とすぞ」

「どこに！？」

「私の魅力に」

「小学生に軽く落とせる宣言されたああ！ もう立ち直れないかも！」

ただユリちゃんこの少女、大野紅葉は余りに顔の造形が似通っているのです、落とされるわけがないとも断言し難い。何と言う意思の弱さだ、僕。

ブルーシートの上で胡座をかいた次郎丸がこちらを向く。

「お前相変わらず子供になめられる性格してるな。大平さん一家の恥だぞ、まったく」

「別に大平さん一家は代々子供に好かれる家系でもなんでもないので、恥ではないでしょ恥では」

「何言ってるんだよ、お父さんなら子供になめられたらベロベロ舐め

返すくらいの度胸を持つてるぜ？」

「持ってねーよ！ あんたいい加減に親父がロリコンだっていう共通認識持たせようとするのやめろよ！ それガセだから！ もとはと言えばあんたのせいだから！」

紅葉ちゃんがこの流れに乗る。

「ロリコンの息子なのかお前！ 絶対近づくな！ 干切るぞ」

「いやいや紅葉ちゃん、僕の親父は別にロリコンじゃ……ああくそ！ やっぱり最後が気になる！ 何を干切られるっていうんだ、僕は！ やばいよ、ここアウエーにもほどがあるよ！」

一旦深呼吸をさせて頂きたい。このままでは今章、僕がひたすら罵られ終わる可能性がある。冷静に、沈着に。紅葉ちゃんとの接し方を考えなければならない。

と、僕の心を読んだのかなんなのか、次郎丸が唐突に紅葉ちゃんに話しかけた。

「つかよお、お前は何でそんなにアツシを毛嫌いしてんだ？」

紅葉ちゃん是不機嫌そうな顔で一旦僕を睨みつけると、すぐに目をそらし答えた。

「……お姉ちゃんは私の自慢なの。それなのに、こいつが。こいつの話が……、ああもう本当ムカつく！ いい加減いつ死ぬのかはつきりしろ！」

「死期を自分で定めるなんて暴挙できるわけないじゃん！ 紅葉ち

やん、本当に何でそんなに僕のこと……」

「うっさい！ お前が嫌いなんだから嫌いなんだ！」

本当に訳が分からない。何か理由がありそうな感じではあったのだけれど。

お姉ちゃんは私の自慢……。

何かユリちゃんに、関係があること？ 僕のユリちゃんとの関係？ その関係性は……。

「あっはっは、アツシ君は子供に嫌われるんでござるなあ！ アツシ君、見ているでござる」

と言って利理岡権田勇は、普段から背負っているミリタリーリュックのチャックを開け、中を漁りだした。中から二体の美少女フィギュアを取り出す。

ミリタリーリュックなんだから、もっとミリタリーなもの入れろよ。

「アツシ君、女の子というのはお人形遊びが好きなものでござる。このようにつねに遊び道具を持ち歩くというのが、子供に好かれる第一歩でござるよ。では、紅葉ちゃんとやら、拙者が唯の役で、君が漕の役を」

紅葉ちゃんはそこまで聞くと近くにあった水筒（誰かが忘れて行ったのだろう）を手に取り素早く外蓋、内蓋を外すと、その中身を利理岡権田勇の顔面に無言でぶつけた。レモンの良い香り。どうやら水筒にはレモンティーが入っていたみたいだ。冷や汗と涙とレモンティーが利理岡権田勇の頬をぬらす。

「拙者まで嫌われているでござるか。ていつか最近拙者こんなのは
っかり、もうやだ」

大野紅葉は依然としてこちらに心を開く気配がない。ただこれまでの
の素振りから、この警戒心には何らかの理由があるのは間違いないさ
そうだ。今まで彼女の存在さえ頭の片隅に追いやっていたというの
に、僕が何をしたと言っただろうか。結構な理不尽さである。

いや、だからこそなのだろうか。

「あ、紅葉！」

口内によだれが溢れた。

聞き覚えのある。聞きがいのある。聞けば嬉々とする。大野由利
の、柔らかくも僕を驚掴む声が。僕の背後をそっと包んだ。

「あ、ユリちゃん！」

僕はキャスター付きの椅子に座っているかのように、その場でくる
りと体を回転させた。

その瞬間。

脳が揺れた。視界がにじむ。そして理解する。後頭部を強く殴打
されたのだ。とっさに視線を頭ごと上げる。ユリちゃんを目標に綺
麗なフォームで宙を舞う大野紅葉が、紅葉のような赤みを頬に帯び
た大野紅葉が、この衝撃の正体。以前にもこんなことがあった気が
する。僕は、ジャンプ台にされたのだ。

「おっねいすあまあああ！」

じゃれる子猫のように、大野紅葉は姉の胸に飛び込んだ。

「寂しかったですお姉さまあああ！ 言いつけを守って良い子に
してました！ 撫でて下さい！ 舐めて下さい！ なじって下さい
！ もうあれです！ 脱ぎます！ 今ここで脱ぎます！」

「いや、あの。分かった、撫でるから。それはするから。あとは
無しね」

姉としての微笑みを浮かべたユリちゃんが、大野紅葉の頭を優しく
撫でた。

映像無しでは伝えきれない衝撃である。

「ゆ、ユリちゃん……。あの、えっと……。その、紅葉ちゃん……」

「アユから聞いたよアツシ君。妹の面倒見てくれてたんだよね。あ
りがとう」

「あの、うん。それは別にいいんだ。全然気にしてないし」

そうまったく気にはしていない。いくら罵声を浴びせられたところ
でそれは子供のしたことであるし、僕も人生の先輩としてそれを寛
大に受け止めるべきであろう。

「お姉様、もう会えないかと思いました。またこうしてお姉様
と同じ空気を感じ、パンツの色を予想できるだなんて感無量ですっ」

「パンツの色は予想しないでね、紅葉」

どんなに口が悪いとしても、それはこれから大野紅葉という少女が
成長する過程で洗練されていくものである。ユリちゃんほどとは言
わないが、きつと素敵な女性になってくれるだろう。

「ほら、ちゃんと面倒見てくれてたアツシ君や先生にお礼言っつて」

「アツシさん、私のような不肖な者に優しく接して頂いて誠にありがとうございました。このご恩は一生を賭けてでもお返し致します……」

「誰だ、この子おおおお！」

僕は叫んだ。

この短い時間ではあるが接してきた僕の知る大野紅葉は、姉のステータスを可憐・清楚・快活・善美・艶麗とするなら、可憐・残虐・暴言・嫌忌・厚顔のステータスである（可愛いのは認める）。しかし、世の中には僕らが信じがたいような超常現象というものが存在する。大野紅葉を、シスコン・シスコン・シスコン・シスコン・シスコンのステータスに。変えてしまうような。もはや別人である。

「ギャップなんてもんじゃないよ、これ！ 訳分かんねーよ！」

そんな僕の叫びに、うふふとセレブ的な笑みを浮かべた大野紅葉。

「何をおっしゃっているのやらさっぱりです、アツシさん。うんこかけるぞ。あ、間違えた」

「いや結構早い段階でちょっと本性出たよ！ 意外とおつちよこちよいだよ、この子……」

僕はそこでユリちゃんの様子を即座に確認した。すると、彼女は大野紅葉の問題発言に気づいていないようで、胸に抱えた白い円盤型の何かに集中していた。

「え、あれ？ ユリちゃん？ えっと、その持つてるの……何？」

「あ、これね！ 教室に忘れてたんだけどね、さっき取ってきたの！ 自動掃除機ロボットのルンバ！」

「あちゃー！ 恐れてたことが、あちゃー！」

もうどこからどうツッコんでいいのか分からなくなってきた。仕事が多すぎる。タスク処理が間に合わない。

「お、マジかユリ。俺それすげー気になってたんだよ。ちょっと触らせてくれ」

と、横になっていた次郎丸がむつくと立ち上がる。ユリちゃんがいいですよ、とルンバを差し出し、彼は物珍しそうにルンバを眺めた。

「これすげーな、本当に自動でゴミ取ってくれんのか？ おれのゴミみてーな過去の失敗も全部掃除してくれんのか？」

「動かしてみましようか」

と、ユリちゃんはルンバの電源を入れた。ブルーシートの上をまるで生きているように動き回るルンバ。

「あ、やっべーな、ルンバ。俺ボーナズで買おうかな、ルンバ」

しばらく動き回った後、ルンバを一瞬動きを止めた。そして獲物を見つけたかの如く急激のそのスピードをあげる。利理岡権田勇、彼の足もとにぶつかっては退き、ぶつかっては退きを繰り返した。鈍い衝突音が響く。

「いやルンバ完全に拙者のことゴミ扱いしてるんですけどおおおお！ やっぱり最近拙者の扱いこんなんばっか！」

もういい。面倒くさい。利理岡権田勇に関してはもうこういいう境遇でいい。

話の中心はそう、大野姉妹である。

姉、大野由利の登場によって完全にキャラを一変させた妹、大野紅葉。ユリちゃんの慣れたあしらい方を見るに、姉の前ではいつもこうなのであるうか。だとすると彼女は稀代のトランスフォーマーである。

「ねえねえアツシさん、ちょっとこっち来て」

と、僕を手招く大野紅葉。刹那の躊躇、僕は思い切っしてしゃがみこみ、彼女の囁きに耳を傾ける。

「……………ばらしたら、埋めるぞ」

体育祭、午前の部の出来事である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6275d/>

コカミ

2011年8月16日00時11分発行